

# 平城宮発掘調査報告 X



良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所学報第39冊

# 平城宮発掘調査報告Ⅹ

古墳時代Ⅰ

奈良国立文化財研究所

1980

## 序

明年は奈良国立文化財研究所が設立されて満三十周年をむかえる。平城宮跡の発掘調査を当研究所が継続して実施するようになってからでも二十二年をこえたことになる。このように長期間にわたり事業を遂行できるのも、文化庁をはじめとする関係諸機関はもとより、地域住民の方々、さらには平城宮跡をおとずれる全国の人々のあたたかいご鞭撻、ご協力のたまものと、感謝にたえないところである。発掘調査は現在宮跡のほぼ四分の一を終了したところであるが、宮跡の全容を明らかにするにはまだ前途遠く、また内裏、一次・二次の大極殿・朝堂院の問題をはじめ、官衙遺構の究明など調査課題は山積みしている。

調査が終了した地域について、遺構のまとまりを考慮して順次報告書を作成しているが、今回の報告書をもって十冊目を数えることになった。報告書の作成は研究所の活動のなかでも最も重要なものと位置づけており、今後とも所員一同鋭意努力を傾けていきたいと考える。

今回の報告書は平城宮跡の調査によって検出された古墳時代の遺構・遺物を抽出してとりあげたものである。従来それらは奈良時代の遺構に先行するものとして、別冊でとりあつかうことはなかったが、良質で多量の遺物が出土したこともあって、今回初めて古墳時代篇の報告書を作成したしだいである。弥生時代あるいは古墳時代など平城宮跡に先行する遺構であるまとまりをもつものに関しては、今後ともこのような取扱いがなされることになろう。

国民共有の財産として、平城宮跡が将来ともに保存活用さ

れるためには、史跡整備を進める必要があり、文化庁の指導をうけながら、当研究所としても努力を傾けているところであるが、史跡整備の基本は発掘調査の成果を十分に生かすことにある。そのためにも、将来に齟齬をきたさない発掘調査をおこなっていくべく、所員一同気をひきしめてあたっていくきたいと思う。

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員の先生方には日頃なにかとご指導いただいていることにあらためて感謝申し上げ、本報告書作成にさいしてご指導、ご協力いただいた各位に厚く御礼申しあげる次第である。

最後に、内容その他全般にわたって忌憚のない御批判と御鞭撻をたまわれば幸いである。

昭和56年3月

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

# 目 次

第Ⅰ章 序 言	1
第Ⅱ章 調査経過	4
1 調査概要	4
2 調査日誌	7
第Ⅲ章 遺 跡	10
1 遺跡の概観	10
2 朝集殿下層遺構(6AAW・X区)	11
A 古墳時代大溝・SD6030	12
B 埴輪門筒棺・SX6035	13
C その他の遺構	14
3 佐紀池下層遺構(6ACA区)	14
A 古墳時代溝・SD8520	14
B 古墳時代溝・SD8521	15
C 塚・SX8523	15
D 塚・SX8524	15
第Ⅳ章 遺 物	16
1 土 器	16
A SD6030 下層出土土器	18
B SD6030 上層出土土器	28
C SD8520 出土土器	39
2 埴 輪	44

3 木 製 品	47
---------	----

A SD6030 出土木器	47
---------------	----

B SD8520 出土木器	62
---------------	----

4 金 属 器	65
---------	----

第V章 考 察	66
---------	----

1 旧地形と平城宮造営前の遺跡	66
-----------------	----

A 平城宮造営前の地形と表層地質	66
------------------	----

B 平城宮造営前の遺跡	72
-------------	----

2 土 器	76
-------	----

A 土器の出土分布と器種構成	76
----------------	----

B 下層土器群と上層土器群の比較分析	79
--------------------	----

3 木 製 品	82
---------	----

A SD6030 出土木製品の検討	82
-------------------	----

B 古墳時代農耕具の問題点	93
---------------	----

C PEG による出土木材の保存処理方法と問題点	95
--------------------------	----

4 結 語	98
-------	----

別 表	103
-----	-----

英 文 要 旨	111
---------	-----

図 面	
-----	--

図 版	
-----	--

## 図 面

- PLAN 1 平城宮跡周辺の地形図  
2 6AAW・X 区遺構実測図  
3 SD6030 北区遺構実測図  
4 SD6030 南区遺構実測図  
5 SX6035, SK6037 実測図  
6 6ACA 区実測図  
7 SD8520 木製品出土状況実測図

## 図 版

- PL. 1 平城宮跡周辺
- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| 2 6AAW-B・6AAX-A 区 | 1 東朝集殿 SB6000 全景 南から   |
|                   | 2 同 全景 北から             |
| 3 SD6030          | 1 溝 南半部遺物出土状況 北から      |
|                   | 2 溝 南半部遺物出土状況 南から      |
| 4 SD6030          | 1 溝 南半部部材・蓋形埴輪出土状況 東から |
|                   | 2 溝 南半部盾形・人物埴輪出土状況 東から |
|                   | 3 溝 南半部盾形・人物埴輪出土状況 南から |
| 5 SD6030          | 1 南半部下層梯子出土状況 南から      |
|                   | 2 南半部下層梯子出土状況 北から      |
| 6 SD6030          | 1 南半部完掘状況 北から          |
|                   | 2 南半部完掘状況 南から          |
| 7 SD6030          | 1 北半部完掘状況 北から          |
|                   | 2 北半部完掘状況 南から          |
|                   | 3 北半部完掘状況 西から          |
| 8 SD6030          | 1 Lライン断面土層 北から         |
|                   | 2 Cライン断面土層 南から         |
|                   | 3 Rライン断面土層 北から         |
| 9 SX6035・埴輪円筒棺    | 1 SA5985 築地帯全景 北から     |
|                   | 2 埴輪円筒棺出土状況 北から        |
| 10 SX6085・埴輪円筒棺   | 1 埴輪円筒棺細部 南から          |
|                   | 2 埴輪円筒棺細部 西から          |
| 11 6ACA-S・W 区     | 1 全景 北から               |

- 12 SD8520
  - 2 全景 東南から
  - 1 園池 SG8500 と汀線 東から
  - 2 SD8520 木製品出土状況 北から
- 13 SD8520
  - 1 自然木出土状況 南から
  - 2 鋤・梯子出土状況 南から
  - 3 完掘状況 南から
- 14 SD8520
  - 1 SX8523・塚 東北から
  - 2 SX8523・塚 西北から
  - 3 SX8524・塚 東北から
- 15 SD6030 出土土師器・下層
- 16 SD6030 出土土師器・下層
- 17 SD6030 出土土師器・下層
- 18 SD6030 出土土師器・下層
- 19 SD6030 出土土師器・上層
- 20 SD6030 出土土師器・上層
- 21 SD6030 出土土師器・上層
- 22 SD6030 出土土師器・上層
- 23 SD6030 出土土師器・上層
- 24 SD6030 出土土師器・上層
- 25 SD8520 出土土師器
- 26 SD8520 出土土師器
- 27 土器の製作技法
- 28 SD6030 出土埴輪
- 29 SD6030, SX6035, SK6037 出土埴輪
- 30 SD6030 出土木製品・木工具
- 31 SD6030 出土木製品・農具
- 32 SD6030 出土木製品・農具
- 33 SD6030 出土木製品・農具
- 34 SD6030 出土木製品・農具
- 35 SD6030 出土木製品・什器
- 36 SD6030 出土木製品・建築部材
- 37 SD6030 出土木製品・建築部材
- 38 SD6030 出土木製品・建築部材
- 39 SD6030 出土木製品・建築部材
- 40 SD6030 出土木製品・その他
- 41 SD6030 出土木製品・その他



42 SD8520 出土木製品

43 SD8520 出土木製品

44 SD8520 出土木製品

## 別 表

1 出土土器一覧表	103
2 古墳時代遺構・遺物一覧表	109
3 出土土器器種表	110・111

## 挿 図

1 調査位置図	5
2 第48次調査地域地区割	7
3 第101次調査地域地区割	9
4 古墳時代遺構面の土質	10
5 東朝集殿基壇とSD6030との関係	11
6 SD6030 北区土層図	12
7 SD6030 南区土層図	13
8 SX6035 復原組合せ	13
9 SD8520 北端土層図	14
10 SX8523 塚	15
11 SX8524 塚	15
12 SD6030 下層出土の小型丸底壺	18
13 SD6030 下層出土の器台	19
14 SD6030 下層出土の碗	20
15 SD6030 下層出土の把手付碗・蓋・高杯	21
16 SD6030 下層出土の壺	23
17 SD6030 下層出土の甕A法量	24
18 SD6030 下層出土の甕A口縁部法量	25
19 SD6030 下層出土の甕-1	25
20 SD6030 下層出土の甕-2	26
21 SD6030 上層出土の小型丸底壺・碗・器台形土器	28
22 SD6030 上層出土の高杯	30
23 SD6030 上層出土の壺	34
24 SD6030 上層出土の甕A・B法量比較	36

25	SD6030 上層出土の甕—1	36
26	SD6030 上層出土の甕—2	37
27	SD6030 上層出土の須恵器・甕	38
28	SD8520 出土の小型丸底壺・高杯・鉢・壺	40
29	SD8520 出土の甕	41
30	縄文式土器拓影	43
31	SK6037 出土盾形埴輪	46
32	SG8500 出土家形埴輪	46
33	SD6030 出土板材実測図	57
34	SD6030 出土刀鞘実測図	61
35	SD8520 出土板・鉢製品実測図	64
36	小型素文鏡実測図	65
37	平城宮の現地地形図	67
38	第二次朝堂院・内裏地区の南北高低差模式図	68
39	平城宮造営前の旧地形復原図	68
40	平城宮の表層地質図	69
41	平城宮の地質柱状図	70
42	平城宮の旧地形図	71
43	平城宮の表層地質と造営前の遺跡立地	72
44	第14次調査弥生時代の遺構	73
45	第39・43次調査古墳時代の遺構	74
46	SD6030 下層土器出土分布図	76
47	SD6030 上層土器出土分布図	76
48	SD6030 上層高杯B・C出土分布図	77
49	SD6030 下層壺・甕類口縁部法量	78
50	SD6030 上層壺・甕類口縁部法量	78
51	SD6030 下層小型丸底壺Aa法量—1	79
52	SD6030 下層小型丸底壺法量—2	79
53	SD6030 下層小型丸底壺法量—3	79
54	東大寺山古墳出土の石製小型丸底壺	81
55	縦斧模式図	83
56	横斧模式図	83
57	両刃と片刃の鉄斧	84
58	鎌柄鍬と鎌柄股鍬模式図	85
59	北部九州の股鍬模式図	87
60	鋤・フォーク状木器模式図	88
61	鍬・エブリ模式図	91
62	PEGの薬因形態とPEGを含む木材の密度	96

# 表

1	調査期間と調査面積	6
2	SD6030 土師器地区別個体数	16
3	SD6030 下層出土壺Aの体部調整技法	22
4	SD8520 出土土器個体数	39
5	SD6030 木製品小地区別出土点数	47
6	斧柄の寸法	48
7	枕の寸法	58
8	木鐺の寸法	58
9	楔の寸法	58
10	棒状部材の寸法	59
11	細板小片の寸法	59
12	背負梯丁の寸法	60
13	加工のある木片寸法	61
14	SD8520 出土棒状木器寸法	65
15	SD6030 出土土器個体数	77
16	メスリ山古墳出土の斧頭計測表	82
17	藤柄股鐙の長・幅の比較	86

# 平城宮発掘調査報告Ⅹ

古墳時代Ⅰ

1980

# 第I章 序 言

この報告は奈良国立文化財研究所が昭和34年以来継続して発掘調査を実施している奈良市佐紀町の特別史跡「平城宮跡」の発掘調査報告の一つとして編集したものである。今回は、昭和43年度に実施した第二次朝堂院の東朝集殿地域の発掘調査において、朝集殿遺構の下層で検出した古墳時代の遺構・遺物をとくにとりあげて報告することにした<sup>1)</sup>。なおこれに関連して同時代の同種の遺構・遺物を、昭和51年度に平城宮跡の西北方に位置する佐紀池の発掘調査で検出したのであわせてここに収録することにした<sup>2)</sup>。

従来からも『平城宮報告』のなかで古墳時代の遺構・遺物をとりあげた例は多い。以下簡単にそれについてふれておきたい。平城宮及びその周辺の発掘調査で普遍的にみられる古墳時代の遺物は埴輪である。これが平城宮の背後にある、奈良県の三大古墳群の一つである佐紀盾列古墳群とかかわる遺物であることは多言を要さないであろう。実際内裏北で検出した市庭古墳は、現状は後円部のみが遺っているが、元は前方後円墳であり、平城宮の造営によって宮内にはいる前方部は削平され、周濠は埋め立てられたことが判明した。また内裏から大極殿付近で検出した神明野古墳は、その全てが平城宮の造営によって削りとられたものであることが数回にわたる発掘調査で判った。これによって、佐紀盾列古墳群はもとは現状よりはさらに南に下って存在し、内裏・朝堂院の所在する台地の少くとも北半部に広がるものであることが明らかになった。これは『日本紀』和銅2年に平城京造営中の「もし彼の墳塚発き掘らるれば、随て即ち埋みおさめて普く祭時を加えて幽魂を慰せよ」とある記事に照応するものであろう。

最近ではまた、市庭古墳後円部の西北部を調査する機会があったが、その結果は予想外にも、同古墳が二重の濠をめぐらすものであることがわかり、さらに、奈良時代には埴丘の一部を削り、内濠を埋め立て、外濠を濠池に利用していることが判明した<sup>3)</sup>。周濠の葺石を濠池に利用することは、平城京内の住宅遺構にも数例ある。なお平城宮内の古墳時代の遺構としては、東院地区の西辺寄りで方形周溝墓が1基検出されていることをつけ加えておこう<sup>4)</sup>。

つぎに平城京の古墳時代の遺構としては、平城京東一坊大路の調査で新たに検出した2基の古墳があり、そのさいウツナベ古墳外堤部もあわせて調査した。ウツナベ古墳は奈良県でも有数の規模を誇る古墳の一つであるが、その東側の外堤が明らかになり、外堤内側の葺石や堤上の2列の円筒埴輪列が良く遺存していて、外堤の旧状をほぼ復原することができたことは大き

1) 「平城宮跡第48次調査」『奈良国立文化財研究所年報 1969』pp. 40-44。以下「年報」と略称する。  
2) 平城宮跡第101次調査「年報1977」pp. 28-30。  
3) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅵ—内裏北外郭の調査—」奈良国立文化財研究所学報第26冊, 1976。以下「平城宮報告

Ⅵ」と略称する。p. 53。

4) 「平城宮報告Ⅰ」1961, p. 12, 「平城宮報告Ⅲ」1963, p. 20, 「年報 1972」p. 31, 「年報 1979」p. 1

5) 「年報1981」p. 22, 奈良国立文化財研究所「平城宮北辺地域発掘調査報告書」1981。

6) 「年報1968」p. 38。

## 第1章 序 言

な収穫であった。新たに検出した2基の古墳は、ウツナベ古墳の陪塚に比せられるもので、平城京の建設に際してそれらを大部分は削平しながらも、葺石のある前方部を一部圍池に利用して住宅施設の一つにとりいれている。<sup>1)</sup>

以上のようなものが、従来平城宮及び平城京の発掘調査で検出した古墳時代の遺構・遺物の主なものであるが、それらは平城京の造営によって削平及び変形させられた墳墓であった。したがって、これまでの『平城宮報告』では、それらの遺構は、平城宮及び京の前史遺構としてとり扱い、敢て別冊をたてることはしなかった。

しかしながら、今回ここに報告するものは、古墳時代の溝中から検出した多量の生活遺物であり、住居跡は未出ではあるが、生活遺跡にかかわる遺物である。同時代人がこの付近で営んだ生活をうかがわせる格好の資料であり、古墳時代研究の良好な一括資料といつてよいであろう。従って今回報告のものは敢て平城宮の遺構を全くはずして、この資料だけで一冊を編集することにした。題して古墳時代Ⅰとしたのは今後とも同時代の遺構が新たに見出される可能性が高いからであり、その際には同様の取扱いをしていきたいと考えている。昭和38年度の平城宮西南隅の発掘調査において、時代は異なるが、弥生時代の大規模な集落遺跡を検出しており、堅穴住居群をとりまく周濠等から出土した遺物も重要なものであるので、これもまた別冊で『平城宮報告』の弥生時代編として報告を予定している。<sup>2)</sup>

平城宮内で検出した弥生時代や古墳時代の遺構・遺物の調査研究は、単に平城宮の前史を明らかにしてくれるだけでなく、平城宮造営前の地形復元に直接役立つ資料でもある。前述したように、奈良盆地の最北端に位置する佐紀の土地は、少なくとも弥生時代以来の人間の生活の営みによって、かなりの地形の変更をうけたわけで、従って、弥生・古墳時代の地形地物が復元されることによって平城宮を造営するための整地事業がどの程度おこなわれたかを知る手掛りが得られるのである。

今回報告する古墳時代の遺物のなかでもっとも多いのは木製品であるが、木製遺物の保存には困難な問題が多い。奈良国立文化財研究所では、発掘事業をはじめ当初からその問題の解決に努力をしてきたつもりであり、東京国立文化財研究所の協力を得つつ、その科学的な保存処理法の確立のために種々の試みを実施してきた。そして現在、水溶性の合成樹脂（PEG）を木製遺物に含浸させる方法によって、その保存処理を実用化することができるようになった。本報告書収載の木製遺物についても、その保存処理の方法と結果を報告することにしたのは、今後の同種遺物の保存に資するためのものである。

最後に本報告収載の古墳時代資料は、いまから15年以上も前の発掘調査で出土したものであるが、その後奈良県はもとより近畿の各府県における発掘調査の進展に伴い、古墳時代の同種遺物の出土例が増加するようになった。いまになってはそれらとの比較研究をおこなうことが必要であり、若干の考察を後段でおこなったが、詳細は他日を期すことにし、ここでは二、三の問題を指摘するにとどめた。

1) 『平城宮報告Ⅴ』1974, p. 109.

2) 『年報1964』p. 39, 『年報1965』pp. 30-32.

発掘調査関係者は次のとおりである。

## 1968年度（第48次調査）

調査責任者	奈良国立文化財研究所長 小林 剛		平城宮跡発掘調査部長 坪井 清足	
第一調査室	沢村 仁	宮沢 智士	猪熊 兼勝	高島 忠平
	阿部 義平	小笠原好彦	宮本長二郎	木下 正史
第二調査室	田中 琢	牛川 喜幸	本村 彰章	三輪 憲六
	石井 則孝	横田 義章	村上 諒一	
第三調査室	狩野 久	佐原 真	松下 正司	藤原 武二
	伊東 太作	石松 好雄	安達 厚三	
第四調査室	坪井 清足	八襲 晋	細見 啓三	工業 善通
	森 郁夫	西谷 正	栗原 和彦	田中 哲雄
保存整理室	横山 浩一	河原 純之	町田 章	佐藤 興治
	山沢 義貴	八幡 扶桑	佃 幹雄	
史料調査室	田中 稔	横田 拓実	鬼頭 清明	加藤 優
	真鍋 俊照			

## 1977年度（第101次調査）

調査責任者	奈良国立文化財研究所長 坪井 清足		平城宮跡発掘調査部長 狩野 久	
考古第一調査室	町田 章	沢田 正昭	菅原 正明	土肥 孝
	小林 謙一	中村 友博	八幡 扶桑	佃 幹雄
考古第二調査室	佐藤 興治	吉田 恵二	須藤 隆	安田龍太郎
	井上 和人			
考古第三調査室	森 郁夫	岡本 東三	毛利光俊彦	巽 淳一郎
遺構調査室	宮沢 智士	中村 泰治	清水 真一	宮本長二郎
計測修景調査室	原原 啓示	田中 晋雄	光谷 拓実	加藤 允彦
	森 薫 (調査員)			
史料調査室	横田 拓実	今泉 隆雄	綾村 安	加藤 優
主任研究官	細見 啓三	加藤 優	宮本長二郎	

遺物整理、保存処理については上記関係者の他に主として考古関係の調査部員が参加した。

稲田孝司、甲斐忠彦、黒崎直、田辺征夫、西村康、西弘海、山中敏史、金子裕之、山本忠尚、西口寿生、岩本立輔、大脇源、千田剛道、松沢直生、岩本正二、川越俊一、山崎信二、秋山隆保

本報告書の作成準備は1975年に開始し、その後調査部における数回の討議を重ねて最終原稿を完成した。執筆分担はつぎのとおりである。

第1章狩野久、第2章佐藤興治、第3章1・2佐藤興治、3菅原正明、第4章1須藤隆、吉田恵二、土肥孝、井上和人、2吉田恵二、3町田章、4菅原正明、第5章1菅原正明、2井上和人、3A、B町田章、C沢田正昭、4佐藤興治、樹體分析光谷拓実

英文要訳はシカゴ大学 James E. Keteaar 氏をわずらわした。

写真撮影は佃幹雄、井上直夫、渡辺泉芳が担当し、藤村礼子、池田千賀枝が助力した。

編集は坪井清足、鈴木嘉吉、岡田英男、田中琢、狩野久の指導のもとに着手し、佐藤興治がこれを受けて調査部員の助力を得て完成した。

## 第二章 調査経過

### 1 調査概要

今回の報告は平城宮第48次調査（1968年5月23日～同年10月3日）としておこなった推定第二次朝堂院地域の東朝集殿遺構の下層からみつかつた古墳時代の大溝と溝内堆積の一括遺物をとり上げ、さらに、平城宮第101次調査（1977年1月7日～同年3月25日）としておこなつた第一次大極殿院西方にある佐紀池の池底から検出された古墳時代溝とその遺物をとり上げたものである。

第48次調査の発掘地は平城宮東半部の中心を占める第二次朝堂院の南端にあたる。第二次朝堂院地域は周囲を築地と回廊でかこまれた南北420m、東西190mの南北に長い長方形区画をなしており、北は大極殿回廊に接し、南は宮の南面東門の北側に門を開く。朝堂院地域は築地によって南北二つに区切られており、北側には十二堂の殿舎を配し、南側は朝集殿を東西に対置させている。この推定第二次朝堂院地域は大正11年に史跡として指定され、土地は当時の内務省に寄託されたという経過があり、翌年には整備が行われた。現在、朝堂院外周をめぐる石組溝がその時の施設である。昭和37年の近鉄車庫新設問題に端を発した平城宮の保存と西車庫上げの経過については既知のとおりであるが、史跡地の買上げが進行するなかで、宮跡整備がはじまり、まず宮の中心部である推定第二次大極殿、朝堂院地域の整備事業が昭和38年から奈良県によって開始されることになった。この一連の整備事業に伴って、朝集殿一画の遺構を明らかにする必要から第48次発掘調査が計画された。一方、昭和42年から奈良県教育委員会文化財保存課による唐招提寺講堂の修理工事が進行中であった。同講堂は『招提寺建立縁起』（醍醐寺本『諸寺縁起集』所収）に平城宮朝集殿を移建したことが記され、また墓殿の旧番付によって本来はこの建物が西を正面にした南北棟建物、すなわち東朝集殿であったことを知るのである。工事では講堂建物を解体し、基壇遺構を露出する予定であったため、両遺構を比較するまたとない好機であることから、東朝集殿の調査となったのである。第48次調査として実施した東朝集殿地域を当研究所の遺跡表示法にしたがってあらわすと、6AAW区A地区、6AAX区A地区に相当する。この位置は平城宮のなかでもやや高所を占め、宮の北に接してある奈良山丘陵が南に舌状に張り出した末端部にある。平城宮の造営に伴って丘陵は削平され、北から南に緩く下降する平坦地に整えられているが、朝堂院地域のみは周囲に比べてやや高く、旧地形をより多く残した状況にある。

#### 大溝の検出

古墳時代遺構検出のきっかけは東朝集殿の基壇規模が判明し、さらに基壇造成過程を精査す

- 1) 朝集殿基壇規模は東西18m、南北38.5mあり、基壇上面はすでに削平が著しいが、基壇周囲には漢灰岩切石片が多数遺存し、一部には薪土付け痕跡が認められた。基壇の東・西辺には各3箇所階段痕跡があった。基壇の大きさから桁行9間、梁行4間の切妻造建物が想定でき、唐招提寺講堂の前身建物とよく一致することが明らかになった。『年報1969』pp.39-40。



## 1 調査概要

る過程で上層観察用畦畔に沿って掘り下げたところ、基壇下に古い流路の一部があらわれ、溝中には古墳時代遺物が大量に含まれていることがわかった。このため、部分的な断面調査を進めた結果、大溝 SD6030 は発掘区の北西端にあらわれ、S 字状に曲折して朝集殿基壇下を通して発掘区南東外へ延びており、溝の堆積層には多量の遺物を含んでいることが確認された。ただ、基壇下にあることから大溝の検出は基壇外に限っておこなうこととし、C 区以南の 18m 間と K 区以北の 21m 間の計 39m について遺構検出をおこない、両発掘区の間については観察用畦畔によって流路の位置と幅の確認にとどめることにしたのである。大溝 SD6030 の堆積は大きかみても上、中、下の 3 層に分かれ、上層は包含する遺物は少なく、中層からは土師器、須恵器、埴輪が出土し、下層からは土師器と多量の木製遺物が出土した。また、SD6030 の東方で、築地 SA5985 基壇東肩に埴輪円筒棺が検出された。基壇の上半は築地整地によって既に削平されていたが、棺に使用した円筒埴輪の遺存状況は良好であった。

埴輪円筒棺

このように生活遺物を多量に包含する溝と墓壇の検出によって朝堂院地域には丘陵の高台に

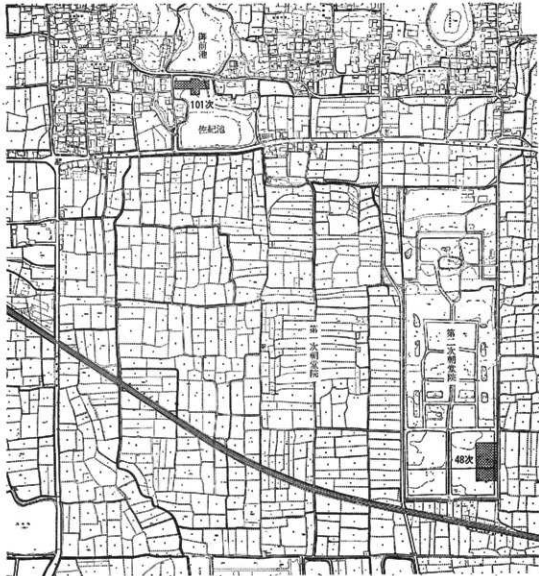


Fig. 1 調査位置図

第1章 調査経過

占地した古墳時代の集落が存在していたと推測され、平城宮以前の土地利用の一端を知ることができたのである。

つぎに第101次調査地である佐紀池は特別史跡平城宮跡内にあり、佐紀中町と佐紀西町との間に位置する。遺跡表示法にしたがうと6ACA区W・S地区及び6ACB区となる。佐紀池については明治17年に一条通り沿いに築堤をおこなって、背後の狭い谷筋に湛水した灌漑用溜池である。また、佐紀池の北側の御前池、下吉田池、上吉田池については北浦定政の『平城大内敷地図』(文久元年・1861)に三つの池が示されており、享保元年(1724)の『五ヶ村絵図』<sup>1)</sup>にも三つの池が記されている。このことから佐紀池を除く池は18世紀初頭に遡るものようである。

また、御前池のほぼ中央付近を宮の北限線が通るが、濁水期には南岸寄りに礎石列を見ることができた<sup>2)</sup>。このように佐紀池や御前池はともにその成立が比較的新しいために、景観的にも平城宮と直接関連して結びつけることが少なかった。しかし、昭和49年度には佐紀池の南3分の2が国有地となり、昭和51年に第二次内裏地城を主とした宮内整備地への湛水用水源として利用することになり、揚水ポンプと濾過装置を池尻の一条通り南側に設置することになった。同年、第92次調査として予定地を調査したところ、奈良時代の池岸を検出し、池中の堆積層からは奈良時代の土器と木簡が出土したために、佐紀池の前身は平城宮の園池であった可能性ができたのである。そして同年には池の北側の3分の1を埋め立てて市立幼稚園運動場が計画されることになった。このために池の濁水をまて翌52年1月に第101次調査として池底に調査区を設定した。調査は池の北端で堤防下に沿って東西67m、南北15mのトレンチとこの南東方に南北26m、東西6mのトレンチを設けておこなったところ、両発掘区からは拳大の礫を敷きつめた池の汀線があらわれ、現在の池の東岸と近似した屈曲を示しながら連続していることがわかり、池底からは奈良時代の土師器と瓦、9世紀中頃の土器が出土したことから、池SG8500が平城宮の園池であることが明らかになった。古墳時代の遺構は園池の堆積層を除去した地山面で検出し、北発掘区の東寄りに2条の溝が確認された。うち1条は蛇行、分流しながら北から南へ流れる幅3m程、深さ0.6mの規模で、分流点には矢板を打って堰を設けている。他の1条は西南方から前者の溝に注ぎ込む幅1.5m、深さ0.5mの断面V字形の溝で、合流点には同様に堰がある。両溝からは古墳時代の土師器、木製農具、小銅鏡が出土し、池底のガラス層からは縄文時代中期の土器片が出土している。このような溝、堰、農具等の存在から本地域周辺は少なくとも古墳時代に谷筋を利用した水田耕作がおこなわれていたことを示すものであり、沖積平野に面した朝集殿下層の遺構とともに平城宮造営以前の土地利用の一端を知る重要な資料が得られたこととなる。

古墳時代の

調査回数	調査区・地区名	調査期間	調査面積
48次	6AAW-B 第2次朝堂院 6AAX-A 東朝集殿	1968. 5.23~10.3	19.8a
101次	6ACA-WS 6ACB	1977. 1. 7~3.25	12.94a

Tab. 1 調査期間と調査面積

- 1) 奈良県立図書館蔵。 3) 第92次調査については『年報1975』p.18参照。  
2) 現在は平城宮覆屋の前庭に移動、展示している。

## 2 調査日誌

第48次発掘調査日誌（古墳時代遺構関係を抜粋）

6AAW-B, 6AAX-A 地区

1968年5月23日～10月3日

- 5・23～6・1 発掘準備（記録施設・器材搬入）および筋土の排除。
- 6・3 発掘開始，東朝集殿土層を中心に遺構検出をはじめ。
- 6・22 東朝集殿基壇の東方に朝庭院の東限を向する南北方向の築地痕跡を確認。
- 6・29 BK04 区の築地基礎東端で埴輪門筒棺を検出。墓室の上平は築地地業によって削平されているが遺存状況はきわめて良好である。
- 7・1 埴輪門筒棺の精査。
- 7・3 埴輪門筒棺の清掃および写真撮影。
- 7・4 埴輪門筒棺実測。
- 7・5～19 奈良時代遺構検出。
- 7・25 奈良時代遺構実測開始。
- 7・30 遺構断面図作成のため発掘区北端噴面沿いに掘り下げる。西端付近に古墳時代の溝を検出。土師器，埴輪が出土。
- 8・7 発掘区北壁土層固完成のために古墳時代溝 SD6030 を発掘，堆積層を確認。

- 8・14 各部の上層図作成完了。四面より SD6030 の規模および流路を検討した結果，発掘区の西北から東南方向に曲折していることがわかる。なお溝の堆積層は大略3層に分かれ，上層黄灰色土は砂質であり，中層黒色粘土層は40～50cmの厚さがあり，土師器を出土し，下層褐色砂層からは木質遺物が多く出土するとの所見を得る。なお中・下層には須恵器は含まれないようである。
- 8・16 AT07 区を中心に溝線を確認しながら黄褐土（北方の暗灰土・I砂）を除去し，黒色粘土層（以下Ⅰ黒と称す。Fig. 6・7参照）の発掘に備える。黒色粘土と黄褐土の間に褐色砂質土があり，盾形埴輪を検出。
- 8・19 発掘区南端からAU区までの3区間の黒色粘土層（Ⅰ黒）を掘り下げる。木製品をはじめ埴輪片・土器などを多量にとり上げる。黒色粘土とⅡ黒に介する褐色砂層を認める。溝の北限確認のため発掘区西北隅のBO・Q16区にトレンチを設定。

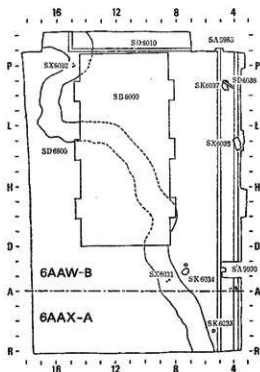


Fig. 2 第48次調査地地区別

## 第1章 調査経過

8・20 A区の遺物出土状況写真撮影準備。西北隅部分での溝跡検出に苦労する。

8・21 BK14~16区に東西トレンチを設ける。A区Ⅱ黒層の遺物とりあげを終了、Ⅲ黒層を掘り始める。Ⅲ黒層は西にのみ厚く、東半部では極めて薄い。はじめて須磨器を褐色砂層から検出する。

8・22 A区AR06のⅡ黒層の掘り下げおよび南壁付近の断面観察用土壌を除去。B区Rラインの黒色粘土層(Ⅰ黒)の下の青灰色砂層(Ⅱ砂)が土器器・木片材を多量に包含することを確認。

8・23 A区Ⅱ黒層下半はほとんど遺物なく、植物繊維が層状をなしており、Ⅱ砂(褐色砂)中の遺物とり上げを終了。B地区トレンチ内に溝東層検出。南への延長上のA区にトレンチを設けるが溝跡検出ならず、BL付近で東に曲折するものとみられる。

8・24 A区Ⅲ砂層を発掘。ハシゴなど大型部材が出た。B区Gライン南西セクション西部を再検討するが溝は及んでいないことを確認。

8・26 A区Ⅲ砂層より銅製品等出土。

8・30 A区、BCラインまでの区間のⅢ砂層の調査継続。出土遺物少ない。B区、Lラインから北側の3区間を拡張し、黄褐色土(整地層)を除去。土器器少量出土。東側を確認するが、北側では不明確。新旧溝の把握困難。

8・31 A区、Ⅲ砂(褐色細砂)の下に薄い有機質堆積層(N黒)があり、木質遺物のみ若干出土。N砂(褐色粗砂・細礫まじり)からは土器・木器が出た。一部溝底を確認。B区 溝上面の検出作業継続。地山面で薄層の形状がほぼ明確になる。

9・2 A区、Aライン以南で掘り残しのⅡ黒・Ⅲ砂層を掘り下げる。遺物は比較的少なくⅢ砂直上より大型木材が出た。Bラインより北はⅡ黒、Ⅲ黒、N砂の各層を下げる。最下層N砂は粗砂を含み遺物は少ない。B区では流れが一時変っていることを確認。Ⅰ黒層中よりS字口鏝器出土。Ⅰ黒の下は細かに細砂のバラツキあり。砂まじりの黒色粘土に続く(Ⅱ黒)。さらにその下は粘質の強い灰黒色土となる。

9・3 A地区Ⅱ黒・Ⅲ砂層よりの遺物とり上げ。B区全面的にⅠ黒層を除去。土器器を多量に含む。

木製品も少量ながら出土。一部Ⅱ砂・Ⅲ黒層に込む。Ⅲ砂(A地区のN砂に相当)は褐色粗砂層で素・銅・銀等出土。

9・4 A区、発掘区南壁付近未掘部分のⅡ黒の一部、Ⅲ・N砂層を掘り下げる。Ⅲ・N層には遺物少なく、木片と土器小片若干を出土したのみ。南壁近くのⅡ黒層には多数の木材、木製品が入り乱れて堆積。土器器も多数混じる。うち高杯の数が目立つ。B区、Ⅲ砂、N砂層を除去。Jより北について西方に発掘区を拡張し内溝を追求。最下層のN砂とするバラス層は溝岸積層か否か未確認。

9・5 溝セクション、A区Cライン、B区L・Rラインの実測。

9・6 A区溝の実測。

9・7 A区南壁部分溝セクションの検討、溝底の確認。溝底から下には全体に20cm厚の自然堆積層があり、樹木の枝などを含む。B区・Lラインセクション壁に沿って古墳時代の面まで掘り下げ、溝の範囲を確認する。

9・9 B区、O~QのⅠ黒・Ⅱ砂・Ⅲ砂を順次下げる。Ⅰ黒層は他に比べて薄い。Ⅱ砂の下はバラス土に続く。出土遺物は少ない。

K~L区セクション壁の掘り残しの部分の発掘を継続。Ⅰ黒層をほぼ完了。Ⅱ砂を一部あらわす。Ⅲ砂直上で木製遺物が少し出土。溝岸付近でⅡ黒を確認する。

9・10 B地区セクション壁部分の発掘継続、N砂直上まで下げる。Ⅲ黒は掘りの部分と溝の曲折点にのみ存在し全面にはわたらないことがわかる。厚いⅡ砂がⅢ黒の堆積を押し流した結果とみられる。BL区Ⅱ砂から小形丸底壺出土。以北の流路がほぼ明確になる。

9・11 B区溝岸をすべて確認し、流路を完備するとともに平面図を作成。Lラインセクション壁の一部現われていた板材をとり出す。長さ1.36m、加Tはとくにない。同時に木製鋸1点が出た。

9・12 清掃後写真撮影。

9・17 溝調査終了。埋戻し作業開始。

10・1 埋戻し終了。

10・2 発掘器材撤収。

10・3 発掘調査終了。

## 第101次発掘調査日誌

1・7 調査開始。

1・8~20 池底の泥層地を乾かすために調査地周囲に排水溝を設ける。

6ACA-S・W地区、(6ACB地区は省略)

1977年1月7日~1978年4月12日

1・22 W地区に発掘区設定。

1・24~31 沈降土と褐色砂土を排除。W6区以西では赤褐色の地山を確認し、小穴数個を検出。

- 2・1 58~62区で地山面に連続する灰白色粘土層上面で遺構検出作業。53区以东では沈泥層及び腐植土を排除し黒色土あらわれる。
- 2・2 灰白色粘土層上面には遺構がないことを確認し、掘り下げ開始。63区・64区にかけて土器、植輪片少量、木簡(黒書なし)1点、墨書土器、瓦片が出土する。
- 2・3 西半の灰白色粘土層排除。遺物なし。東半部は植物腐植層を掘り下げる。
- 2・4 WB57・WC56区に斜行する古墳時代層SD8521を検出。WD56区でしがらみの倒伏あり、撮影後取上げる。WS54区の黒色土層より庄内期土器と木器出土。SD8521東半がS地区へ延びていることがわかったために溝の掘り下げは一時中止する。
- 2・5 S地区の調査開始。水田耕土から掘りはじめる。
- 2・7 58ラインの土層観察を撤去開始。S地区東半傾斜部分では青灰色砂質地山がテラス状の段をなして下降することを確認。
- 2・8 58ライン趾部部分、最下層の植物腐植層に達し、若干の木器と木片が出土。
- 2・9~15 S地区、池の東岸沿いに掘り下げる。
- 2・16 S地区西半部で植物腐植層に達する。
- 2・17 S地区遺構検出。青灰色粘土の地山を遡って下降。地山は赤褐色粗砂層に交替する部分もあり。49ライン以西にはじまる植物腐植層から瓦、土器、木製品が出土。北半のG53~F52で多い。なお、EF51を中心にSD8520堆積層と同じ黒色粘土層の広がりにつながる。範囲を確認して作業を行う。
- 2・18~23 奈良時代の池の汀線を検出。
- 2・24 奈良時代の遺構写真撮影準備。
- 2・25 奈良時代の遺構写真撮影後、古墳時代層掘り下げ開始。

- 2・26 SD8520堆積層掘り下げ。黒色粘土層下に砂層の間層があり、さらに堆積層が続く模様であるが、砂層まで下げる。キスタ、ナスビ形鋤等が出土。
- 2・28 E54~55区では溝幅が広がり、遺物量が増す。WD55区に台状板製品他に自然木が多量にあらわれたために、清掃し出土状況の写真撮影を行う。
- 3・1 E54区で東岸が直角に折れて東へ分流していることが判明。分流点に堰があらわれる。D56にも堰SX8523があらわれ、SD8520に注ぎ込む別の溝SD8521の存在がはっきりになる。出土状況の写真撮影。SH57区を北へ拡張。
- 3・2 全景写真撮影のため清掃にかかる。
- 3・7 写真撮影。実測準備
- 3・11 実測終了。
- 3・12 現地説明会開催。
- 3・14 調査再開。木製品等を取り上げつつ、下層の砂質層に達す。木製品遺物は少なくなり、布留式土器が主体となる。SD8520の南端でBC52・53区南端沿いにも掘り、溝底の状況を確認する。
- 3・15 SD8520北端のWG55で掘り出す。53区南壁トレンチ、池底より1.5m下げるもバラス層より縄文式土器4片出土。
- 3・16 SD8520の河原を確認しつつ底を渡る。
- 3・17 清掃後、完掘状況の写真撮影。
- 3・18 実測。
- 3・19 実測。古墳時代遺構を残して埋戻し開始。
- 3・22 木製品取り上げ。
- 3・23 台状板製品の下から篆文鏡が出土。
- 3・24 実測終了。埋戻し開始。
- 3・25~4・11 埋戻し継続。
- 4・12 埋戻し終了。
- 4・15 佐紀池の樋口を閉めて湛水をはじめる。

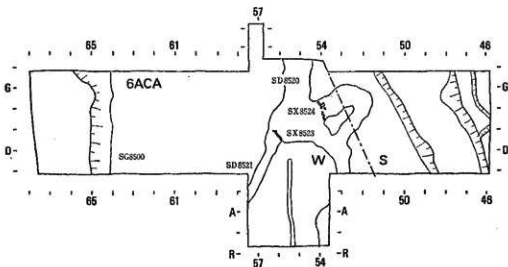


Fig. 3 第101次調査地域地区割

# 第三章 遺 跡

今回報告する古墳時代の遺構は 6AAW・X 地区の溝 SD6800, 円筒埴輪を用いた墓 SX6035 と 6ACA 地区の溝 SD8520・SD8521, 壘 SX8523, SX8524 などである。各遺構について述べるまえに平城宮周辺の古墳時代の遺跡の状況と立地について簡単にふれておきたい。

## 1 遺跡の概観

佐紀厩列古墳群

平城宮の背後には、奈良盆地北端を画して東西に広がる平城山丘陵があって、この平城山丘陵及び東側の佐保山丘陵は奈良盆地における屈指の古墳地帯である。平城山丘陵の尾根筋には大小の前方後円墳、帆立貝形前方後円墳、円墳が営まれており、佐紀厩列古墳群と称している。時期的にも前期から後期に及んでいる。おもな古墳をあげるならば、もともと東に位置するウツナベ古墳をはじめとしてコナベ古墳、磐之緩陵、市庭古墳、神明野古墳、猫塚、瓢箪山古墳、壘塚、マエ塚、日葉酢緩陵、成務陵があり、そして西端には神功皇后陵がある。この他に埴輪円筒棺墓、陶棺を納めた歌姫横穴墓も知られている。これらの古墳のうち、平城宮城内にある市庭古墳は現在平城天皇陵に指定されているが、平城宮の発掘調査によって周濠を持つ南向きの前方後円墳（全長 250 m）であることが判明したもので、最近の調査で二重の濠が確認されている。また、神明野古墳も平城宮の発掘調査によってはじめて存在が確認されたもので、宮の造営に伴う削平工事によって既に墳丘はなくなっているが周濠をともなり全長 105m の前方後円墳である（PLAN 1）。

市庭古墳

神明野古墳

平城宮の地形

つぎに平城宮城の地形についてのべると、宮の北半部は丘陵本体から派生した三つの支丘とこれにはさまれた二つの谷地形を含み、宮の南半部は丘陵末端の微高地と沖積平野からなっている。宮北端の標高は78mあり、南面大堰付近で64.5mであり、比高差は13m強である。三つの支丘のうち、東側の台地は東北方のコナベ古墳付近から延びてきて、東院地区、法華寺、海龍王寺などが含まれ、その西縁は水上池東岸から東院の西を通り、宇奈多利神社の南側で方向を転じて東行し、佐保川と菟川に沿った低地に達している。本台地上の各所からは従来より埴輪片等が出土することが多く、

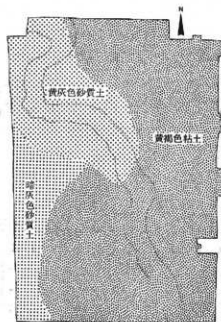


Fig.4 古墳時代遺構面の土質

昭和52年にコナベ古墳の南側、法華寺との中間で周濠を持つ全長110m規模の前方後円墳1基が確認されており、また、台地西縁にあたる東院地区からは方形周濠墓1基が検出されている。

中央の台地は広く、平城宮の中心部をほぼ包括し、東西500m、南北700m余りの範囲には内裏北方官衙、第一次朝堂院・大極殿院、第二次・朝堂院内裏が含まれ、市庭古墳は宮の造営時に後円部の一部と前方部、周濠が削平・埋め立てられて、周濠の一部は園池に利用される。南側の神明野古墳は内裏と大極殿回廊にまたがり、饅頭状の地形に整えられた際に、基底部から上の墳丘は全て削平されたものである。6AAW・X区はこの舌状に南へ広がる台地の南端の沖積平野との境近くに位置するが、台地と沖積地との接点は現地形では明瞭でなく、僅かに東北から西南へ延びる稜線の痕跡が認められる程度である。土質は内裏付近では床土直下は洪積層の礫含みの地山であり、6AAW・X区ではシルト層が認められる。

つぎに西側の支丘は前二者に比較して張り出しは弱く、宮の西北部にかかる程度で、丘尾は西と南側で秋篠川左岸沿いの敷高地と沖積平野に移行する。中央の支丘との間の谷筋は狭隘ながらも深く、日葉酢媛陵の東、瓢箪山古墳との間を通り、さらに水流は歌姫にまで達する。6ACA地区はこの谷の開口部に近く、御前池と佐紀池の築堤等のことを除くと起伏に富むこの周辺では大きな地形の改変はほとんどおこなわれていないようである。

## 2 朝集殿下層遺構 (6AAW・X区)

すでに述べたように6AAW・X区は宮の東半を占める第二次朝堂院の南端近くにあり、北から南へ緩く下降する丘陵の端部東側に位置する。古墳時代の遺構は奈良時代の遺構面より約40cm下の地山面で検出した。この間の堆積層は2層あり、上半は茶褐色土で下半は土師器を少量含む灰褐色土であり、いずれも平城宮造営時の整地層である。地山面は調査区の東半が黄褐色粘土層で、西北部ではSD6030の両岸が黄灰色砂質土層、西側南半部では暗灰色砂質土である。なお北端東寄りに地山面が落ち込んだ箇所があり、この部分は、宮造営時に暗灰色粘土で埋め立てられていた。地山検出面の高さは北西部がもっとも高く、海拔63.9mで南および東側に向かって低くなり、東北隅で63.6m、南東隅で63.2mを示している。したがって旧地形は北面から南東へ緩く傾斜下降していたことになる (Fig. 4)。

遺構検出面

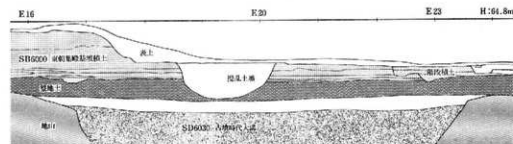


Fig. 5 東朝集殿基壇とSD6030との関係

## A SD6030 (PLAN 2~4, PL. 2~8, Fig. 5~8)

古墳時代の遺物を多量に包含する大溝であり、調査区北西隅のQ14~16区間にあらわれ、西南方向から南に流路を変えさらに逆S字状に曲折して朝集殿基壇下に入り、南東に延び、ふたたび基壇東南隅にあらわれ、ほぼ南東方向に直流して調査区外にのびる。この間の長さは直線で68mある。なお、この全区間のうち、発掘調査は朝集殿基壇外の部分に限られ、基壇下についてはトレンチを入れて流路位置と堆積層を確認した。また、溝北端部北岸についても断面観察にとどめた。したがって上流部にあたる朝集殿西側のKライン以北を北区とし、朝集殿基壇の南側の下流部を南区として以下に説明を加えることにする。

北区は発掘区北端では曲折点のために流路が西から東へ移動したために溝幅は6m、深さ0.9m近くに及ぶ。旧流路はほぼ南北に向い西肩とテラス状の溝底が認められた。流路は後に携束岸を侵蝕して深さを増して東に移る。新流路西肩には丸木杭が3ヶ所に打ち込まれたSX6032があり、護岸的な施設の一部であったとみられる。曲折部の南側のM・N16区では溝幅4m、深さ1.3mあり、溝底は狭く、断面はV字形に近い。

**北区層序** 北区ではほぼ7層の堆積層が認められるが、大きく下層は砂、中層は粘土、上層の砂質土の3層に区別される。このうち、中位にあたる黒灰色粘土層は木製品を多く含んでいる。これに対してLラインから曲折点までの区間は10層が認められるが、遺物をほとんど含まない灰色粘質土が間層となり、上下2層に大別できる。ともに砂と粘土の互層であり、上層の黒色粘質土には多量の土器器が、下層の褐色粗砂層からは案、鐏等の木製品が出土している (Fig. 6)。

南区はRラインからCラインまでの6区間を検出しているが、溝上端幅は4~4.5m、深さは北端で1.25m、南端で1.20mとほぼ同じである。また溝底は北区に較べて広く平らになり、断面は逆台形状を呈するが、最下層の礫混りの粗砂層の部分は一段深く掘り込んだ状態になっている。堆積層は北区と同様に大きく上下層に分かれ、北半部では下層は下から順に砂、植物質腐蝕層をはさんで砂が2層、粘質土が1層ある。上層は植物質腐蝕層、粘質土の3層からなる。南側Rラインではやや異なり、下層は最下層の粗砂と、レンズ状に入る砂層を除くと、粘質土が占められる。そして上層は下から砂、粘質土、砂となり、最上層の砂は、北半部にはな

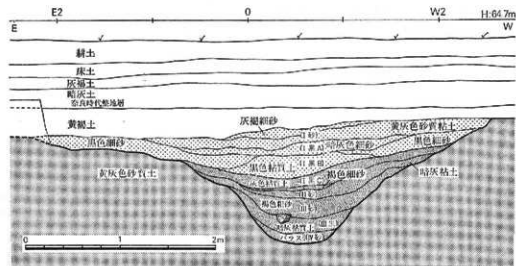


Fig. 6 SD6030 北区土層図





## C その他の遺構 (PLAN 2・5)

埴輪を出土した土壌 SK6037, 溝SD6038, 土壌 SK6033・SK6034 などがある。SK6037 と SD6038 は調査区東端を南北に延びる築地 SA5985 の下にある。SK6037 は東西 1.6 m, 南北 2.1 m 以上の不整形円形をした深さ 0.12 m の皿状の土壌で, 埋土から盾形埴輪と家形埴輪が出土した。SD6038 は土壌よりも古く, 西北から南東に向う幅 1.75 m, 深さ 0.3 m の溝であり, 遺物はないが, SK6038 より古いことから古墳時代の遺構とした。SK6033・SK6034 は大溝の東岸沿いに点在する小ピットで, 出土遺物はない。

## 3 佐紀池下層遺構 (6ACA区)

第 101 次調査は佐紀池の北岸寄りでおこなっており, 古墳時代の溝 2 条と堰 2 箇所を検出した。この位置は北方の日葉酢媛陵と鳳凰山古墳との間から南へ延びてきた谷の開口部にあたり, 東西の丘陵端間距離は 100 m 程である。検出した古墳時代の遺構はこの谷口の東寄りの低地であって, 谷水の自然排水路として機能していたものとみられる。層序は上から沈泥層, 灰色砂, 黒色腐蝕土層, 植物腐蝕泥り黄褐色粘質土, 黒褐色砂質土, 灰褐色砂質土, 灰白色砂泥り粘土層, パラス層であり, 黒褐色砂質土上面で奈良時代の園池に達しているが, 古墳時代溝も同じ面を検出した。なお, パラス層からは縄文式土器が出土しており, 層の厚さは 1.5 m 以上あるが, 地山については湧水のために確認できなかった。

## A SD8520 (PLAN 6・7, PL. 11・14, Fig. 9)

発掘区の中央を北から南へ蛇行して流れる溝で, 長さ 27 m を検出した。溝は発掘区北端から南へ 8 m の位置で 2 つに分流する。本流は「く」字状に東南に曲がり, さらに南西に流れを変える。分流した溝は東北方へ U 字形に曲がって再び南北溝に合流する。分流の起点には堰 SX8524 が設けられる。

溝の堆積層は北半部では下から粘質土及び粘土, 砂, 砂質土の 3 層に分かれる。下層溝は幅約 5 m, 深さ 1.0 m あり, 分流点で幅と深さを増し, 南端では幅 1.8 m, 深さ 0.5 m と狭くなる。また上層の堆積時には溝幅は北端では下層時期とはほぼ同様であるが, 分流点付近, 及び分流溝は埋まり, 浅い溝みになっていたとみられる。

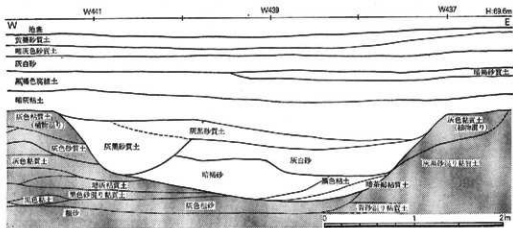


Fig. 9 SD8520北端土層図

なお南半部では北半の下層粘土、粘質土がなく、かわりに有機物を多く含む黒色土が厚く堆積する。ただし、この有機質黒色土は北半の溝層にある灰色粘質土とは異なる。各層からは土師器、木製品の他に自然木、果核、ヒョウタン、昆虫遺体などが出土しているが、流木が分流点付近に集中している。

#### B SD8521 (PLAN 6・7)

SD8520の西南岸にとりつく幅1.5m、深さ0.5mのV字溝である。合流点近くには堰SX8523がある。堆積層は上下2層に分かれ、下層は小礫含みの灰黒色砂層、上層は有機物の混った黒色砂層である。上層からは土師器が出土している。

#### C SX8523 (PLAN 6・7, PL. 14, Fig. 10)

SD8521がSD8520に合流する位置に設けられた堰であり、溝と直交して8本の丸杭を打ち込んでおり、中央部を開口する。杭列の前面には丸木の横材3本が残存している。

またこの堰の北側にも堰とみられる小ピット列と丸杭1がある。

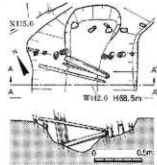


Fig. 10 SX8523 堰

#### D SX8524 (PLAN 6・7, PL. 14, Fig. 11)

SD8520の分流点に設けられた堰である。流路中央部分をあけて兩岸間に矢板を計9本打ち並べ、南岸では自然木の根を用いて矢板に根がらみさせて固定している。なお、堰の東側は1.7m程の間が水流による深みになっている。矢板は幅10~15cm、厚さ5cmの先端を尖らせた割板である。ただ杭は溝底以下に打ち込まれたものは1本のみで、他はすべて溝底面かその上でとどまっており、堰が設けられたのは砂層が堆積した後のものである。

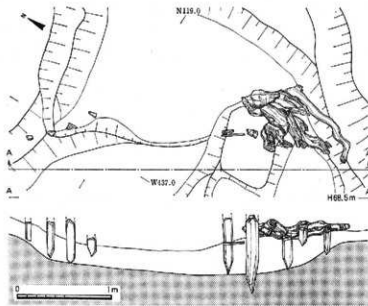


Fig. 11 SX8524 堰

# 第IV章 遺 物

## 1 土 器

SD6030 からは土師器 928 点と須恵器 2 点が出土し、SD8520 からは土師器 92 点が出土した。SD6030 の堆積層は砂と黒色粘土との互層で、細別すれば 7~9 層に分けられる。堆積層序は必ずしも整合でなく、異なる堆積層から出土した土器が接合する場合も少なくない。しかし、特徴的な様相を呈する器種——小型丸底壺、器台、碗、高杯、瓶など——の細別層位ごとの出土状況を総合的に判断して、下の 4 層（北区では 5 層）、上の 3 層（北区では 4 層）に明瞭に分別しえた。そのためここでは下層出土土器と上層出土土器の 2 群に分けて報告する。SD8520 の堆積層は砂と粘土の互層で、細別すると 7~8 層に分かれるが、堆積層の随所に層序の乱れがあった。したがって層位別の区分はおこなわずに一括して扱った。

整理の過程においては可能な限りの個体識別をおこなったが、記述に際しては口縁部を残す個体に限り数量を表記した。各個体の法量および器面の色調等は必要に応じて本文でふれ、図版に掲載したすべての資料については別表 1 に出土地区・層位とともに示す。器面調整技法の図版上での表現は、ハケメ調整、ミガキ調整、ケズリ調整、タタキ調整についてはその痕跡状況を図示し、ココナデ調整についてはできる限りその範囲を“-——”で示した。また土器焼成の際に器表面に生じた黒斑は範囲を斜目で示した。

ここで調整技法について若干ふれておく。器面調整とは器体成形の過程で生じた器面の凹凸を平滑にならし、また器表面を使用の便に備えて緻密化したり、逆に粗面につくるための技法である。SD6030 出土土器にみられる調整技法にはナデ調整、ケズリ調整、ハケメ調整、ミガキ調整、タタキ調整があり、1 個の土器をしあげるにはこれら諸技法を目的に応じて使い分け、また重複させている。

ナデ調整 1) ナデ調整 器面を擦過することにより平滑にしあげることを目的とした技法で、そのうち水平方向に連続して施すものを特にココナデ調整と呼ぶ。ナデ調整は土器製作過程で最も多用される技法で、粘土紐（帯）接合作業の際、接合部分を密着させるために施す場合や、ハ

	SD 6030 下 層		SD 6030 上 層	
	北 区	南 区	北 区	南 区
	比率%		比率%	
小型丸底壺 A	33(14.3)	58(24.0)	小型丸底壺 C	1 (1.9)
器 台 A・B	19 (8.3)	10 (4.1)	瓶	0 (0)
碗	23(10.0)	23 (9.5)	高 杯 B	14(25.9)
高 杯	9 (3.9)	9 (3.7)	高 杯 C	13(24.1)
壺	25(10.9)	36(14.9)	壺	2 (3.7)
甕	117(50.9)	105(43.4)	甕	21(38.9)
そ の 他	4 (1.7)	1 (0.4)	そ の 他	3 (5.5)
計	230 (100)	242 (100)	計	54 (100)
				402 (100)

Tab. 2 SD6030 土師器地区別個体数

ケメ調整あるいはケズリ調整の上に重ねて施すこともある。ヨコナデ調整は口縁部の調整にほとんど例外なく用いられ、壺の短く立ち上る口縁部を内彎させたり外反させたりする成形作業においても、ヨコナデを強く繰り返すことにより意図する形状につくりあげたものと考えられる。ナデ調整の多くは指腹部に木をつけておこなったのであろうが、布や皮革に水分を含ませて擦過したこともあり、後者の方法によれば同時に広い範囲をナデすることができる。

2) ハケメ調整 ナデ調整に次いで多用されている調整技法で、器面の凹凸を平滑にならすには極めて有効な技法である。削りに近い効果を発揮するが、場合によってはすでに平滑に仕上げられた器面を粗面化するために施されることもある。ハケメの原体には榎目板の木口面を利用したことが解明されており、木理の堅緻な部分の擦過痕跡が“ハケメ”の条痕として器面に残るものと考えられている。同様に小板材の稜角を利用した調整技法に板ナデ調整がある。この痕跡は木理条痕がごくかすかに残り、しばしば削りに近い効果をもつ。

3) ケズリ調整 器壁を薄くしあげる場合に有効な技法で、器形を整える際にも用いられる。SD6030 では壺・甕類を中心に多用されており、とくに甕Aでは体部内面を入念に削り取ることににより極めて薄い器壁を作りあげている(PL.27-4)。ケズリ調整は通常「ヘラ削り」と称されているように、道具にはヘラ状のものが考えられているが、使用する部位により種々の形態をとっていたと思われる。壺・甕類の内面器壁を削り取るにはそれにふさわしい細長い、しかも刃部の幅が広いものであったらうし、また高杯B・Cの脚部内面を削り取る際には後述するように細長い形態を呈する道具が考えられる。材質としては木、竹、金属、石、貝殻などが想定されるが、現状では限定しえない。ケズリ調整を施す工程は、案地土が十分に柔らかい段階と、ある程度器壁が固まった段階とがあり、器種により、あるいは個体の部位により施す時点は異なる。

4) ミガキ調整 ミガキは生乾きのある器面を表面が堅緻で平滑な道具で強く擦過することにより器表を滑沢にしあげるものである。器面の仕上げ調整として、器面を全体的に緻密化させる場合(PL.27-6)と、間隔をおいて規則的に施すことにより紋様の効果をもたせる場合とがある(PL.27-5, 7)。普通「ヘラミガキ」と称されるが、道具の形態はヘラ状のものと限定されるものではなく、また材質には木、石、貝殻、金属などが考えられる。一方刃部をもった道具の刃部を器面に対し鈍角に当てて擦過することによりミガキに近い効果を得ている調整技法がある。ヘラナデ調整と称するが、小型丸底壺A、器台A・B、高杯B・Cなどでは口縁部と体部あるいは杯部と脚部の接合部分を中心に上方にケズリ調整、下方にヘラナデ調整を同一の道具で連続して施している。

5) タタキ調整 器表面を平板な板で打ち叩くことにより粘土紐巻上げ時の凹凸を均らす技法で、SD6030 出土土器にはごく少数の製品にのみみられる。タタキ調整の痕跡はタタキ目として器表に残る。これはタタキ板の表面に刻まれた平行凹線の圧痕である。タタキ技法は須恵器製作の特徴的な成形技法の一つとして知られるが、須恵器の場合は内面を当て道具で押え、外面から叩き板で叩きつけるもので、器壁を叩き締め延ばさせる機能を果たしている。それに

ハケメ調整

ケズリ調整

ミガキ調整

タタキ調整

1) 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号, 1978, 3。

2) 横山「前掲書」ではハケメ調整の範疇に入れられているが、調整する部位やその効果の特質から一応類別して考えておく。

対し弥生式土器とその系譜上にある庄内式土器にみられるタタキ技法では、おそらく内面からの道具は用いられていなかったと考えられ、成形時に器体に生じた歪みや器面の凹凸を平滑化することを目的にしていたと推測される。またそのための技法としてはヘケメ調整やケズリ調整に比べるとすぐれて有効な方法であると思われる。

## A SD6030 下層出土土器 (PL. 15~18, Tab. 2・3, Fig. 12~20)

下層からは472点の土器が出土した。すべて土師器で須恵器を含まない。各地積層のうちもっとも多く出土したのはⅢ砂で、全体の4割強を占めており、ついでⅡ砂が2割であり、他の層は1割前後となっている。また北区と南区の出土数はほぼ近似している。

### i 土師器 (PL. 15~18 Tab. 2・3, Fig. 12~20)

出土土器の器種には小型丸底壺、器台、碗、把手付碗、蓋、高杯、壺、甕がある。このうちもっとも多いのは甕222点で、ついで小型丸底壺91点、壺61点、碗50点、器台29点の順になっている。

#### a 小型丸底壺 (PL. 15, Fig. 12)

丸底の小さな体部と大きく広がる長い口縁部をもつ小型の壺で、91点ある。胎土は精良で、成形、器面調整とも非常にいいにおこなっている精製品である。形態と製作技法の違いからAa, Ab, Acの3種に分けられる。

小型丸底壺 Aa (1~10) 扁平な半球形の体部にわずかに内彎し、あるいは直線的に外傾する長い口縁部がつき、底部はやや尖りぎみの丸底である。口縁部は弱く外反し、うすく丸くおわる。87点。口径10.5~12.6cm、器高6.5~8.1cmをはかり、口径に対する体部最大径の比率は64~46%、口縁部の高さに対する体部の高さの比率は92~53%と個体による差異が大きい、口径に比して体部最大径の小さなものほど口縁部の高さに対する体部高の比率が小さいという傾向がみとめられる。器面調整はいくつかの手法を重ねて入念におこなっている。まず口縁部外面下半部から体部外面、底部外面にかけてはケズリで器形を整える。但し、ケズリ調整のみられないものもある。ケズリの方向は底部でヨコ方向、以上の部位ではタテ方向をとる。口縁部外面上半部および内面はヘケメを施すが、その痕跡はほとんど残らない。口縁部内外面にはヨコナデ調整、外面の残余の部位にはナデ調整を施し、更に内外面全面にわたり、幅1mm前後の細いヨコ方向のミガキ調整を緻密に施す。約半数の個体では口縁部内面に正放射状あるいは斜放射状の細いミガキを加えている。器壁は橙褐色ないし灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含まない。1の外面には全面にススが付着し、この内面には部分的に黒色炭化物が付着している。また口縁部の小片であるが内外面に赤色顔料を塗布したものが1

小型丸底壺

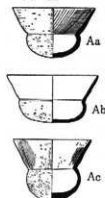


Fig. 12 SD6030  
下層出土の  
小型丸底壺

点ある。

小型丸底壺 Ab(12) 扁平な体部をもち底部は平坦に近い。Aa に比して口径はほぼ同じであるが、頸部径および体部径が著しく大きい。口縁部はうすく、端部はやや内側に巻き込みかげんに内彎する。3点。体部内面はハケメ、外面をケズリで調整したのちナデ調整を施し、口縁部内外面はヨコナデでしあげる。器面があられているためヘラミガキの有無は確認しがたい。明褐色を呈し、胎土中に微細な砂粒を多く含む。口径12.6 cm, 器高6.6 cm。

小型丸底壺 Ab

小型丸底壺 Ac(11) Aa に比べて口径に対する体部径の比率が大きく(74%), また口縁部の高さと同部高はほぼ等しい。底部はわずかにくぼんだ平底をなし、口縁端部はうすく丸い。1点のみ出土。内外面全面をハケメ調整で整えたのち、体部内外面をナデ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。口縁部内外面にはタテ方向の緻密なミガキ、体部外面には斜方向の粗いミガキを加えるが、ミガキの幅はAa より広い。灰褐色を呈し、胎土中に細かい砂粒を含む。口縁部の外面に大きな黒斑があり、約90度位置を離れた部位にも内外面に黒斑がある。口径10.9 cm, 器高8.4 cm, 底径2.6 cm。

小型丸底壺 Ac

### b 器 台 (PL. 15, Fig. 13)

小型の器台で、浅い小皿状の受部と直線状に下方に広がる脚部からなる器台Aと受部が直線状に外傾し脚部との境が開く器台Bとがある。A・Bともに精製品で胎土も精良である。

器台A(13・14) 10点ある。小皿状の受部は底部が丸味をおび、口縁部は短く直立し、端部が若干外反する。脚部の端部はわずかに外反し、うすく丸い。脚部のほぼ中位の3方に円形の透孔がある。脚部内面上端付近にはかすかなシボリ痕跡がのこる。脚部内外面はハケメで調整し、外面にはさらにヨコナデが施される。受部は内外面をヨコナデ調整し、外面下端付近をケズリで整える。ケズリはタテ方向に細かくおこない、脚部の上部約3分の1の範囲にまで及ぶ。脚部外面、受部内外面にはヨコ方向の細かいミガキを緻密に施すが、内面に比して外面はやや粗略である。受部内面には正放射状のミガキを加える。受部の成形は脚部上端を水平に切り取り、その上面に刻み目を交叉させたのちに粘土紐を積み上げておこなっている(PL. 27-6)。黄褐色ないし淡褐色を呈し、14の脚部下半には赤味をおびた黒斑がつく。胎土は精良で赤褐色軟質の微粒や白色の砂粒を含むものがある。口径7.6~9.1 cm, 器高8.9 cm, 裾径11.7~12.1 cm。

器 台 A

器台B(15・16) 19点ある。脚部上端にはシボリ痕跡がわずかにのこる。脚部内面の器面調整には、(i) ヨコ方向にケズリ調整をおこなったもの、端部付近にヨコ方向のハケメ調整を施すもの、(ii) 全面に弱いハケメ調整を施すもの、(iii) (ii) ののも端部付近にヨコ方向のケズリを

器 台 B

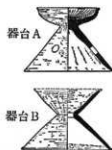


Fig. 13 SD6030下層出土の器台

施すもの3者があり、(ii) と (iii) の場合は指押え痕跡がのこる。脚部外面は斜め方向のハケメ調整ののちナデ調整を施す。受部は内外面をヨコナデで調整し、外面の端部付近をのこして以下の部分にタテ方向のケズリをおこなう。ケズリは脚部上端におよぶ。この部分ではヘラナデの状況を量する。受部内外面と脚部外面に細かいヨコ方向のミガキを緻密に施す。成形にあたっては、脚部と受部は別々に作り、のちに両者を接合したものと考えられ、脚部内面の上端には、接合時の粘土のうすいかぶりがみられる。灰褐色ないし赤褐

第N章 遺物

色を呈し、胎土は精良である。15の胴部内面全面および16の内面上半部にはススがうすく付着している。口径8.8~9.0 cm, 器高8.2 cm, 裾径11.9~12.5 cm。

c 椀A (PL. 15, Fig. 14)

- 椀 A 椀A(17~22) 九底の浅い体部に2段に屈曲して外反する短い口縁部のつく椀形の土器。46点。口縁部の形態には屈曲のごくゆるやかなものと、屈曲が強く、とくに上段が強く外彎するもの、それに両者の中間的なものがある。内面および口縁部外面をヨコナデ調整し、以下の外面はケズリで整える。ケズリの方向は上半部ではタテ方向、下半部(底部外面)ではおおむねヨコ方向をとる。内外面全面はヨコ方向の細かいミガキでしあげるが、内面の緻密さに比して外面では間隔が粗い。黄褐色ないし灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。内面に正放射状のミガキを加えるものが1点あり(17)、これについては胎土がやや粗く、砂粒を多く含む、色調も灰褐色で、他の45点とは異なっている。18および19の体部から底部外面にかけては黒斑がある。口径は15.4~16.2 cm のものが多いが、14.0~15.1 cm のやや小さいものも若干ある。器高4.6~5.7 cm。

d その他の椀 (PL. 15, Fig. 14)

- 椀 X 椀X(23~25) 23は口縁部の破片。口縁端部は丸く、内外面をヨコナデ調整する。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径10.5 cm の、浅い椀形の器形に復原できる。24は半球形の小型の椀。内面と外面の上半部をヨコナデで調整し、外面の下半部はケズリで整える。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径9.8 cm, 器高5.0 cm。25は平らな底部に、わずかに内彎しつつ外傾する口縁部のつく小型の器。口縁端部はうすく尖る。口縁部上半部の内外面にヨコナデ調整を施すが、以下の部分は不調整で、指押え痕跡が顕著にのこる。底部の周縁は両側から指で押しあげられ、わずかに突出する。黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径8.7 cm, 器高4.1 cm, 底径4.0 cm。

e 把手付椀 (PL. 15, Fig. 15)

- 把手付椀 把手付椀(27) 小さな平底と内彎して立ち上る口縁部からなり、口縁部の中位に1対の把手がつくもの。現状では把手を欠き、把手を装着した円孔が1ヶ所にのこる。口縁部上端付近にヨコナデ調整を施し、以下は不調整である。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面下半部から底部にかけて黒斑がある。口径9.3 cm, 器高8.3 cm, 底径4.5 cm。

f 蓋 (PL. 15, Fig. 15)

蓋(26) 平坦な頂部に外反しつつ下方に拡がる縁部につく蓋形土器。1点。頂部外面をナデ



Fig. 14 SD6030下層出土の椀



調整し、縁部内外面はハケメ調整にナデ調整を加えて平滑にしあげている。ハケメの方向は外面ではタテ方向、内面ではヨコ方向である。赤褐色を呈し、胎土に細かい砂粒を多く含む。頂部径 4.9 cm, 器高 5.0 cm, 縁部径 12.0 cm。

### 5 高杯 (PL. 15, Fig. 15)

下層からは18点の高杯が出土した。そのうち12点は高杯Aで、その他に6種6点がある。

高杯A(34・35) やや中張らみの円柱状の脚柱部に直線的にひろがる裾部のつく脚部と、平らな底部に外傾する口縁部のつく杯部からなる高杯で、胎土の精良な精製品である。杯部外面の底部と口縁部の境は屈折して明瞭な稜をなし、口縁端部はわずかに外反する。杯部の内外面はハケメ調整を入念に施し、さらにヨコ方向の細いミガキを加える。脚柱部の内面はシボリ痕跡をかるくナデ消したものと、ヨコ方向のケズリ調整を施すものがある。外面はタテ方向のケズリで調整したのち、ナデで整え、さらにヨコ方向のミガキを施す。脚部は内外面ともナデ調整でしあげる。杯部は、平坦につくった脚部上端面に刻み目を入れ、その部分に粘土をかぶせるようにして成形している。脚部内面上端に棒状工具で下方から浅く刺突した痕跡の残るものが1例、脚部上端に刻み目を施さず、凹形にくぼませて杯底部を受け入れるものが1例ある。灰褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。口径 14.7~17.4 cm, 杯部深さ 5.0~5.1 cm。

高杯 A

その他の高杯(28~33) 28は平らな底部に外傾する口縁部のつく比較的小型の杯部と、外反して大きく広がる脚部からなる。脚部の中位に円形の透し孔があき、上下2段に各3孔を千鳥に配している。口縁端部は分厚く丸く、脚端部はうすく丸い。口縁部は内外面をヨコナデ調整したのちタテ方向の粗いミガキ調整を施す。脚部内面は上半部をヨコ方向のケズリで、下半部をヨコ方向のハケメで調整し、外面はハケメ調整の上にタテ方向の緻密なミガキ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土中に砂粒が多い。口径12.6 cm, 器高10.7 cm, 杯部深さ 3.8 cm, 脚部径 16.8 cm。29はわずかに内彎する底部に外傾する口縁部のつく杯部だけをのこす破片である。口縁端部は外反し、うすく丸くおわる。底部内外面をナデ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。底部外面中央には脚部上端につめられた突起が剝離した状況でのこる。突起は断面逆台形で下面の中央に直径3 mm, 深さ2 mmの小円穴がある。灰褐色を呈し、胎土中に細かい砂粒が多い。口径13.8 cm, 杯部深さ3.8 cm。口縁部外面上半部の一部に小さい黒斑がある。30はやや下方にひろがる円柱状の脚柱部に大きくひろく裾部をもつ脚部と、平らな底部に外傾する口縁部のつく杯部からなる。杯部と口縁部との境の屈曲部位の外面は稜をなす。全体にうすく、口縁端部、脚部端部ともに丸くおわる。杯底部内面をナデ、口縁部内面をハケメで調整し、口縁部内外面はヨコナデでしあげる。脚柱部内面は不調整でシボリ痕跡がのこる。脚部内面は

高杯 X



Fig. 15 SD6030下層出土の把手付碗・蓋・高杯

第N章 遺物

ハケメで整えたのちナデ調整を施す。脚柱部外面はタテ方向に細かくヘラナデを行い、裾部外面とともにナデ調整でしあげる。出土の際に脚部と杯部は剥離していた。杯底部中央の脚部に接する部分は厚さ3mmとうすく、このことから脚部を成形したのちに、糞足すようにして杯部を成形したことがわかる。淡褐色を呈し、胎土には粗い砂粒と微細な金雲母片を含む。口縁端部の一部に黒斑がある。口径15.3cm, 器高12.9cm, 杯部深さ5.0cm, 裾径10.7cm。31は脚部を欠く。杯部の形態はAに類似するが、やや大型で口縁部が外彎する。口縁部内外面および底部内面ともヨコナデで調整し、ミガキ調整は施さない。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口縁端部の一部に黒斑がある。口径20.6cm, 杯部深さ5.7cm。32は平たい底部に外傾する口縁部のつく杯部と、下方にわずかにひろがる円柱状の脚柱部からなり、脚柱部を欠失する。杯部の底部と口縁部の境は屈曲し、外面は段をなす。口縁端部はわずかに反外し、うすく丸くおわる。口縁部内外面をヨコナデ、底内外面をナデで調整し、脚柱部外面はタテ方向のケズリ調整を施し、ナデ調整でしあげる。内面は不調整でシボリ痕跡がのこる。灰白色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。口径18.2cm, 杯部深さ4.6cm。33は平らな底部に直線状に外傾する口縁部のつく杯部と下方にやや大きくひろがる脚柱部からなり、脚柱部を欠く。杯底部と口縁部の境の屈曲部は稜をなさない。杯底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整でしあげる。脚柱部外面は杯底部下端から続くタテ方向のケズリで整え、ナデ調整でしあげる。脚柱部内面にはヨコ方向のケズリ調整を施す。脚柱部の下端の三方に円形の透孔があく。暗赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。杯底部内面には点状の剝離痕が多数のこり、外面には全面にわたってススが付着している。口径15.3cm。杯部深さ4.0cm。

h 壺 (PL.16, Tab.3, Fig.16)

壺として分類したものは61点あり、形態によりA~Fの6類に分けられる。

- 壺 A 壺A (40~44) 小さな平底をもつ丸い体部に外傾する口縁部のつく壺で、口縁部の比較的に短いAa (40~42・44) と口縁部が長いAb (43) とがある。Aa 13点, Ab 2点。底部の形態は40~43が明瞭な平底であるのに対し、44はほぼ丸底の中央をわずかにくぼませた平底を呈する。Aa, Abともに口縁端部は丸く、口縁部内外面をヨコナデ調整で整えるが、Abではさらにタテ方向のミガキを加え、43の内面は正放射状に2段に施す。体部内外面の調整手法は個体により異なる (Tab. 3 参照)。Aa は茶褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。40・44の体部外面、41の外面全面と体部内面にはススが付着し、44の口縁部の外面の一部分と、対向する位置の内面の一部分に黒斑がある。

口径7.6~12.0cm, 器高9.8~15.5cm, 体部最大径10.1~14.8cmで、口径は体部径より狭い。Abには固

	体部外面調整	体部内面調整
Aa	40 ナ デ	ナ デ
	41 ハケメ + ケズリ (ヨコ方向・下半部のみ)	ケズリ(タテ方向)
	42 ナ デ	ナ デ
	44 ハケメ	ケズリ(上半部)・ナデ(下半部)
Ab	43 ナデ+ミガキ(ほぼ横方向)	ナ デ

Tab.3 SD6030下層出土壺Aの体部調整技法

1) 器種の分類の問題点については後述する (p.76)。

版に示した以外に、43と口径を等しくするが、長さが1.5倍の口縁部片が1点ある。43は外面が黒色、内面が暗褐色を呈し、胎土には微細な砂粒を含む。43の体部内面には白色の物質が付着している。口径11.7 cm、器高11.7 cm、体部最大径11.7 cmで、口径と体部径が等しい。

壺B (53・54) 球形に近い丸い体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺。15点あるが、ほとんどが小片で、全形のわかるのは1点にすぎない。口縁端部には、内側に肥厚して端面が内傾するもの(53)と、うすくつくり尖りぎみにおわるもの(54)とがある。前者の場合、頸部の屈曲はゆるやかであるが、後者は強くくびれており、かなりおもむきを異にする。口縁部はヨコナデで調整するが、53ではヨコナデの下にハケメ痕跡が明瞭にのこる。体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整で整える。54ではケズリの方向はおおむねヨコ方向をとり、下半部に指頭圧痕がのこる。54の体部外面はナデ調整を施し、ハケメをほとんどすり消している。また口縁部外面にはタテ方向のミガキを約5 mm間隔に施し、これは体部上端付近まで連なる。53は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。内面には全面にススが付着している。口径16.9 cm。54は灰褐色を呈し、胎土は比較的精良で、細砂粒を含む。口縁部外面の一部と体部下半部と底部外面にはススが付着する。口径18.0 cm、器高31.1 cm、体部最大径22.9 cm。

壺C (45・46) 平底のやや細長い体部に外反する口縁部のつく壺で、体部の最大径は中位よりやや下位にある。4点。器面調整は45と46とで異なる。45は口縁部内外面をヨコナデ調整したのち、外面にはタテ方向のミガキを加え、内面には左下り斜め方向のミガキを部分的に施す。体部外面には左下り斜め方向のミガキを全面に施す。内面は上半部をヨコ方向の粗略なケズリで調整し、下半部はナデ調整で平滑にしあげる。底部外面は不調整で、木葉圧痕がのこり、凸面をなす。黄褐色を呈し、体部外面の下半から底部にかけて黒斑がある。口径9.9 cm、器高16.4 cm、体部最大径14.8 cm。46は口縁端部が欠くが、口縁部内外面にタテ方向のハケメ調整を施し、外面にはナデ調整を加える。体部外面にはタテ方向のハケメ調整を施し、下4分の1の範囲はナデでハケメをすり消している。体部内面は上半部をヨコ方向、下半部を斜め方向のケズリで整えるが粗略であり、器面の2ヶ所に水平方向の粘土接合痕跡がのこる。底部内面にはハケメ痕跡がタモの果状にのこり、底部外面は凹面につくられる。淡い黄褐色を呈し、

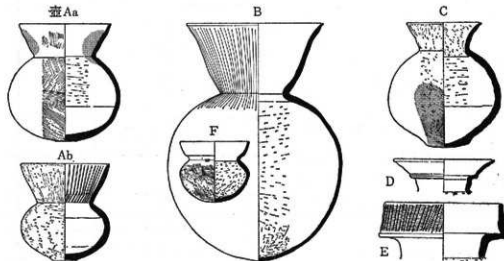


Fig. 16 SD6030下層出土の壺

胎土に砂粒を多く含む。口径12.7 cm (推定), 器高21.2 cm (推定), 体部最大径16.1 cm。

- 表 D** 壺D (47~52) 外傾度の強い二重口縁をもつ壺で、口縁部および頸部の破片が8点ある。口径13.3 cmの小型品(50)と、19.8~27.9 cmの大型品とがある。口頸部中ほどの屈曲部の形状には断面三角形形状にわずかに突出するもの(47~50)と、下方に強く突出し、突帯状を呈するもの(51・52)とがあり、いずれも口縁端部は弱く外反するが、48・50では肥厚させて丸くおさめる。口頸部の内外面はヨコナデで調整し、頸部の外面にタテ方向のハケメを顕著にのこすもの(47)、内面に斜めおよびヨコ方向のハケメを残すもの(48)、それに口頸部内面にタテ方向のミガキを加えるもの(52)が各1例ある。黄灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。
- 表 E** 壺E (55) 屈曲部以上が内傾する二重口縁の壺で、2点ある。55は頸部以上をのこす破片。肩向部位は外方に突出し、断面方形を呈する。口縁部の内外面をヨコナデ調整し、外面にはヨコ方向、ついでタテ方向のミガキを緻密に施す。頸部外面はタテ方向のケズリで整え、ナデ調整でしあげる。体部内面は上端部分をとどめるだけであるが、ヨコ方向のケズリで調整している。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径15.0 cm。
- 表 F** 壺F (38・39) 肩の張った扁平半球形の体部に内傾する口縁部のつく小型壺で14点ある。口縁部は一概にうすく、端部には丸くおわる。口縁内外面をヨコナデ調整、体部外面をハケメ調整で整え、体部内面はケズリ調整でうすくしあげる。底部内面には小範囲であるが指押え痕跡がのこる。体部内面の上半部をケズリによらずナデ調整でしあげるものが1例(39)ある。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。胎土、製作技法とも壺Aに類似するが、表面にススの付着はみとめられない。38は口径9.1 cm, 器高7.9 cm, 体部最大径9.2 cm。
- 表 X** その他の壺(36・37) 36は小型の平底壺。肩の張った丸い体部に直立する短い口縁部がつき口縁端部はうすく丸い。底部は不明瞭な平底をなす。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をナデで調整し、体部外面の下半部はさらにケズリで整える。暗褐色を呈し、体部外面の一部にススが付着する。口径6.7 cm, 器高5.6 cm, 37はやや長手の丸い体部に外傾する口縁部がつく小型の壺で、底部を欠くが、平底かと思われる。口縁端部はうすい。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、体部外面はケズリを施したのちナデ調整で整える。内面は板ナデで調整する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口縁部内面および体部内面の下半部にスス様のものが付着する。口径9.1 cm, 器高9.4 cm (推定), 体部最大径8.4 cm。

i 壺(PL.17・18, Fig.17~20)

溝下層から出土した壺は222点にのぼる。これらの壺は形態と製作技法によりA~Iの9種に分けることができる。

- 表 A** 壺A (60~69) きわめて薄い器壁をもつ球形の体部に、外傾あるいはわ

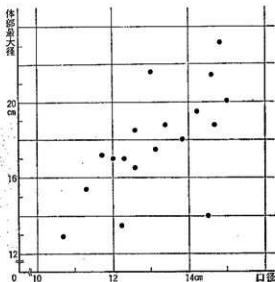


Fig. 17 SD6090下層出土の壺A法量

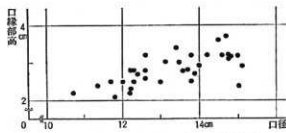


Fig. 18 SD6030下層出土の甕A口縁部決量

があるが、両者は明瞭に区分できるものではなく、法量的には大小ほぼ均等に分布している (Fig. 17)。口縁端部の形態には、折り返すことなくうすく丸くおさめるもの (量的には稀少) を含めて、折り返し (あるいは巻き込み) がごく弱く、端部がわずかに肥厚して丸くおさるもの (Aa) が60点、折り返しが明瞭で、端部が肥厚し端面が内傾する面をなすもの (Ab) が64点ある。全体的な傾向として、前者は小型品に多く、後者は大型品に多い。また口径の大きいものほど、口縁部がやや部厚く、口縁部高が高いという傾向がみとめられる (Fig. 18)。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整でしあげる。体部外面のハケメ調整は、全面に不定方向に施したのち上半部あるいは肩部にヨコ方向にていねいに施したものが目立つ。内面のケズリは底部周辺から体部上端よりやや下の位置におよび、頸部の屈曲点の下1~3 cmの範囲は不調整のままのこされている。ケズリの方向は下半部がおおむねタテ方向、上半部はやや傾斜した右上下りナメ方向をとる。ケズリ調整は入念に施しており、体部の厚さは2~3 mmのほぼ均一の厚さにしあげている。底部内面には指頭および指腹の圧痕が明瞭に残り (PL. 27—4)、体部中位付近に達するものが多く、底部中央付近にはケズリ調整の施されないものもある。なお底部の形態には62のようにやや尖り気味のものもわずかにあるが、ほとんどはほぼ完全な丸底であり、とくに63・65は体部下半部の断面形が同大の正円弧を呈している。胎土には砂粒を多く含み、体部外面の全面、あるいは肩部以下には例外なくススの付着がみられる。

甕 B (70~72) やや長胴の体部に外傾ないしわずかに内彎する口縁部のつく丸底の甕で14点ある。製作技法は基本的には甕Aに共通するが、器壁がより厚く、口径13.9~16.2 cm、器高22.3~27.5 cm (推定) で、小型の製品がない。口縁端部は内側に厚く肥厚し、端面は内傾する。器壁はとくに71では厚く、体部中位付近で8~9 mmをはかる。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面はハケメ調整、内面はケズリで整える。ケズリの方向は70では全面にわ

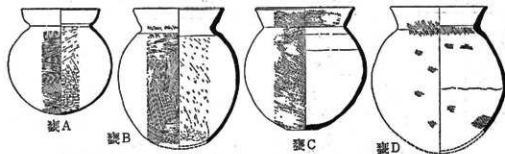


Fig. 19 SD6030下層出土の甕-I

たって左上りの斜め方向、70では右上りの斜め方向をとる。底部内面には指頭圧痕のこるが、その範囲は甕Aより狭く、底部周辺に限られる。胎土は砂粒を多く含み、71の体部外面上半部には黒斑がある。また70・71とも体部外面の肩部以下にスガが付着する。

- C 甕C (77・81~83) 肩の張った丸い体部に外反する口縁部のつく平底の甕。34点あり、口径13 cm、器高14 cm 前後の小型品(Ca: 77など7点)と、口径15~18 cm、器高19 cm 前後の大型品(Cb: 81~83など27点)とがある。口縁端部には、うすく丸くおわるもの(77・83)とやや角張り、端面が外傾する面をなすもの(81・82)があり、小型品はいずれも前者の形態をとる。口縁部の調整には内外面ともハケメ調整でしあげるもの(77・82)、内外面をヨコナデ調整するもの(81~83)の他、外面をヨコナデ、内面をヨコ方向のハケメで調整するものもある。体部外面はすべてハケメ調整によるが、大型品ではさらに下半部にケズリ調整を加える。体部内面の調整にはナデ調整を施すもの(77・81・82)が多いが、ケズリ調整で平滑に整えるものがある(83)。83は口縁部内面と体部外面上半部にヨコ方向の粗いキガキを加える。体部外面にはすべての個体に例外なく、ほぼ全面にスガが付着する。

- D 甕D (73・74・78) 丸い体部に外反する口縁部のつく丸底の甕。4点。口径15 cm 前後の大型品(73・74など3点)と口径9.5 cmの小型品(78)があり、大型品はやや副長の体部をもつ。いずれも口縁部内外面はヨコナデで調整するが、体部の器面調整は個体差が著しい。73は体部上半部が残存するが、外面をナデ、内面を斜め方向のケズリで調整する。74は底部を欠くが、体部外面をハケメ調整したのちタテ方向の入念なケズリ調整を施す。内面はハケメ調整を施し、ナデでしあげるが、やや粗略で、体部中位に水平方向の波状の粘土接合痕が一条みられる。78は小型品で、口縁部が比較的短い。完形品であり、体部外面はケズリ調整でととのえたのちナデでしあげる。内面はケズリを施し、弱いナデ調整を加える。ケズリの方向は下4分の1の範囲はタテ方向、以上の部分はヨコ方向をとる。73は体部外面の下半部分に、74・78は外面全面にスガが付着している。

- E 甕E (84) やや細身の丸い体部に外傾する口縁部がつく甕。底部は先端の丸い尖底をなす。口縁端部は丸くおわる。3点。口縁部内面はヨコナデ調整、外面はタテ方向のケズリ調整でしあげる。体部外面は傾斜の強い左下りのタタキ調整を施し、中位付近のみケズリで整える。内面の調整は器面がほとんど剥落しているため明瞭ではないが、ナデ調整によるものとみられる。赤褐色を呈し、体部外面下3分の1にスガが付着する。口径14.2 cm、器高20.7 cm (推定)。

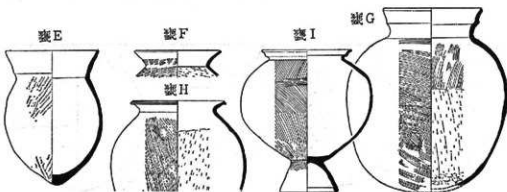


Fig. 20 SD6030下層出土の甕—2

甕 F (85) 口縁部と体部上端をのこす小片が1点ある。口縁部はわずかに外反し、端部が上方に鋭く突出する。口縁部内外面をヨコナデで敷え、体部外面には目の細かいタタキ調整を施す。このタタキ目はわずかに左下りで口縁部外面下半部におよんでいる。体部内面はケズリで調整する。ケズリはヨコ方向におこない、体部上端におよぶため、口縁部の屈曲部分の内面は鋭い稜をなす。橙褐色を呈し、外面にはススが付着する。口径13.0 cm。

甕 G (56~59, 75, 76, 93) やや長胴の体部に屈曲して立ち上る2重口縁のつく甕。11点。口縁部上半部分は直立あるいは外傾するが、内傾するものが1点(56)ある。口径36.8 cmの大型品(93), 15 cm前後の中型品(75, 76など5点), それに7.4~11.3 cmの小型品(56~59など5点)がある。口縁部の屈曲部の外面は稜をなし、断面三角形の突起がめぐるが、とくに小型品のうち口縁部上半の外傾するものには鋭い稜がつく。75は明瞭な稜をなさない。口縁端部の形態は、大型品はわずかに内傾する平坦面で、中型品では、75は中央がくぼむ面をなし、76は上方に突出してうすくおわる。小型品ではうすく丸いもの(56, 57, 59)のほかは外傾する狭い面をなすものがある(58)。口縁部内外面はヨコナデで調整し、小型品の中には外面にタテ方向のミガキを加えるものがある(58・59)。体部外面は、ほとんどが上端部分のみをどめる破片であるが、ヨコ方向のハケメ調整を施し、内面はヨコ方向のケズリで調整する。ほぼ完全に復原しうる76では外面の全面にわたっておおむねヨコ方向のハケメ調整を施す。内面には下半部にタテ方向のケズリ調整を施し、上半部のケズリのおよばない部分にはタテ方向のハケメがのこる。また底部内面には指押え痕跡がのこり、炭化物が付着している。57, 59, 93の外面にはススが付着し、93では口縁部から体部上端にかけての一部分に黒斑がある。なお、75は比較的胎土が精良で、色調も他に灰褐色ないし淡褐色を呈するのに対し橙褐色を呈する。また体部上端に2列の竹管押圧文を施すなど異なった様相をみせる。

甕 H (79・80) 2点あるが、いずれも破片で全形を復原しうるものはない。口縁部は短く外反し、端部が外傾する幅広い面をなす。端面には2~3条の浅い沈線がめぐる。口縁部内外面はヨコナデ調整し、赤褐色を呈する79では残存している体部内面の上端部分にケズリ調整の痕跡がみとめられる。80は体部外面にハケメ調整を施し、内面はケズリで調整する。ケズリは右上りの傾斜の強い斜め方向をとり、ケズリ調整のおよばない上端約2 cmの範囲は不調整で、指押え痕跡がのこる。黄褐色を呈し、体部外面にススが付着する。口径14.0 cm。79は口径15.0 cm。

甕 I (86~92) 肩の張りの強い丸い体部に、S字状に屈曲する短い口縁部のつく台付甕である。口縁部の屈曲が強く、端部をうすく丸くつくるIa(88~92)と、屈曲が弱く、端部が外傾する面をなすIb(86・87)とに分けられる。Iaが23点、Ibが6点ある。Iaには口径14 cm, 器高22 cm前後の大型品(90~92), 口径11 cm, 器高18 cm前後の中型品(89), 口径7 cm, 器高12 cm前後の小型品(88)の3者がある。いずれも口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をナデで調整し、口縁部と体部の接点であるくびれた部分の外面には沈線が1条めぐる。外面のハケメ調整は、肩部以下に強い傾斜をとる方向に施したのも肩部以上に施し、さらに両者の接する部位に水平方向に施すものがほとんどであるが、水平方向のハケメを先に施したのちに肩部以上のハケメ調整するものが1例(92)ある。体部の器壁はきわめて薄く、中位付近で2 mm前後をはかるが、器面は甕Aなどに比べると、内外面ともに凹凸が著しい。台

胴部は下端が内側に肥厚している。内外面をナデで調整し、外面の上半部には体部のハケメ調整がおよんでいる。黄灰色ないし灰褐色を呈し、外面にはススが付着するが、台脚部には全くみられず、火熱による器面の変質も少ない。また90では体部の下端約3cmの幅の範囲にはススがみられず、体部内面の上半部には黒色の炭化物が固着している。90の底部外面（台脚部内面）には黒斑がある。

Ib はすべて小片で全形のわかるものはない。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をタテ方向のハケメ、内面をナデで調整する。体部外面のハケメの目はIaより粗く口縁部と体部の接点に沈線はない。黄褐色ないし茶褐色を呈し外面にはススが付着する。口径14.2~15.2cm。

## B SD6030 上層出土土器 (PL. 19~24, Fig. 21~27)

SD6030 上層からは456点の土器が出土した。須恵器2点を除くとすべて土師器である。もっとも多く土器を出土したのはⅡ砂層とⅠ黒層で、大半を占めている。出土位置は北区で54点、南区が402点となっている。なお須恵器はⅠ黒層から出土した。

### i 土師器 (PL. 19~24, Fig. 21~26)

土師器の器種は小型丸底壺、椀、大鉢、甗、高杯、壺、甕、小型器台形土器がある。このうち高杯が291点で過半を占めており、ついで甕97点、壺27点、小型丸底壺12点となっている。下層との比較では器台が皆無であること、小型丸底壺と甕の数が減少していること、鉢と甗が加わっていることなどがあげられる。

#### a 小型丸底壺 (PL. 21, Fig. 21)

小型丸底壺はあわせて12点出土しており、B・Cの2種に分けられる。

小型丸底壺 B

小型丸底壺B (144) 半球形の体部にわずかに内湾する長い口縁部のつくもので、1点だけであるが、完形に復元できる。口縁部高は器高の2分の1にみえず、口径は体部最大径よりわずかに大きい。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面と体部上端付近の内外面をヨコナデで調整し、以下の部分の内外面はケズリで整える。明橙色を呈し、胎土は精良である。口径8.3cm、器高6.4cm、体部最大径7.1cm。

小型丸底壺 C

小型丸底壺C (145~147) 扁球形の体部に外傾する口縁部のつく小型の壺。口径7.9cm、器高8.2~8.6cm、体部最大径8.7~9.9cmで、口径は体部径よりやや小さい。11点。口縁端部はうすく丸くつくる。口縁部内外面をヨコナデで調整し、145の体部外面はヨコ方向のハケ

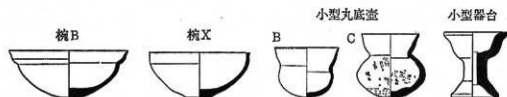


Fig. 21 SD6030上層出土の小型丸底壺・椀・器台形土器



メで調整。147ではナデ調整を施しているが、146ではほぼタテ方向のハケメ調整にナデ調整を加え、また底部にケズリ調整を施している。体部内面は145がナデでしあげるのに対し、146では下半部にヨコ方向のハケメ調整を施している。145の底部内面にはなだらかな凹凸がみられ、炭化物が付着する。146の底部内面は粘土を巻きつけた痕跡がそのままの状態でのこる。全体的に器壁が部厚く、製作は粗略で、胎土には粗い砂粒を多く含む。147の体部外面にはススが付着している。

#### b 碗 B (PL.19, Fig.21)

碗 B (94) 浅い半球形の体部に2段に屈曲する短い口縁部のつく器で、底部は小さな平底をなす。1点。類似した形態を示す下層出土の碗Aに比べると器壁が厚く、口縁部の屈曲がゆるやかである。口縁部内外面をヨコナデ調整で、体部内外面をナデ調整で平滑にしあげる。明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径15.3 cm, 器高 5.8 cm。

#### c その他の碗 (PL.19, Fig.21)

碗 X (95~100) 95は口縁部が外傾する浅い器で底部を欠くが、ゆるやかな凸面になるのであろう。口縁部内外面はヨコナデで調整し、底部との境の内面はかすかな稜をなす。褐色を呈し、胎土は粗いが砂粒を含まない。口径約15 cm, 器高約 5 cm。96は丸底の碗で口縁端部が外反する。器表面の剥落が著しいため器面調整法は不明瞭であるが、外面にはハケメ調整痕跡のこり、内面はナデ調整によるものとみられる。橙褐色を呈する。口径13.2 cm, 器高 5.5 cm。97は小さな平底と内彎する口縁部からなる碗。口縁端部は水平面をなし、端面中央がわずかに凹む。口縁端部近くの内外面をヨコナデで調整し、以下の部分をナデ調整でしあげる。内面は橙褐色、外面は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径13.0 cm, 器高 5.8 cm。98・99は半球形の小型の器。口縁端部近くの内外面をヨコナデで調整し、以下の内面と底部外面を粗いケズリで整える。褐色を呈し、胎土に多くの砂粒と赤褐色の軟質微粒を含む。98は口径9.0 cm, 器高 4.4 cm。99は口径 7.2 cm, 器高 3.5 cm。100は薄い器壁をもつミニチュアの器。外面は不調整で、内面に弱いナデ調整を施す。灰褐色。口径 4.3 cm, 器高 2.7 cm。

#### d 小型器台形土器 (PL.19, Fig.21)

小型器台形土器 (101) 小碗状の受部をもつもので、脚部は円柱状の脚柱部に直線的にひろがる裾部がつく。受部の上部部は強く外反し、端面はわずかに内側に傾斜する平坦面をなす。脚柱部芯には直径 1.3 cm の筒状孔が貫通し、この貫通孔の受部側の周囲には低い粘土の突出がみられる。棒状工具を軸芯にして脚柱部を成形し、上方に引き抜いたのであろう。外面にヨコ方向のハケメ調整を施したのち内外面ともナデ調整でしあげる。なお、口縁端面のナデ痕跡は他の部位に比べて粗略であり、剝離面かとも考えられる。明褐色を呈し、胎土に多くの砂粒を含む。外面には部分的に赤色顔料が付着している。受部口径 8.3 cm, 器高 8.4 cm。

#### e 大鉢 (PL.22)

大鉢 (175・176) 小さな平底と、内彎しつつひろがる口縁部からなる大型の深鉢。4点あ

碗 B

碗 X

小型器台形土器

大鉢

るが、全形のわかるものは1点だけである。175は口径44.6 cm, 器高36.5 cmをはかる。口縁端部約4 cmの部分は肥厚し、わずかに外反する。この部分の内外面をヨコ方向のハケメ、以下の口縁部外面を斜め方向のハケメ、内面をナデ、底部内面をハケメで調整し、底部外面は不調整である。成形に際しては、まず底から5 cmの高さまでを作る。内面に左まわりヨコ方向のハケメ調整(タモの巣状)を施したのちナデで整え、上端面を強く内傾する面を作る。半乾燥の状態にしたのち、幅7~8 cmを1単位として5~6段にわたって粘土帯を積み上げた痕跡が内面器壁にのこっている。外面のハケメ調整は、まず下3分の2の範囲に下から上方向に施したのち、上3分の1の部分に上から下方向に施しており、下位のハケメ調整時は器体を倒置していたと考えられる。ハケメ条痕の間隔は蹠などに比べると粗く、幅2.5 cmにつき9条である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。176では、高さ3 cmまでの部分を成形し、内面をハケメ、外面をナデで調整したのちに粘土帯を積み上げるという175と同様の工程がみとめられる。但しハケメ条痕はより細かく、内外面ともヨコ方向あるいは斜め方向に施されている。

## f 傾 (PL.24)

甗 甗(190) わずかに下すばまりの円筒形の体部にやや凸面になった平坦な底部がつく。底面には蒸気孔が穿たれており、体部の中位に一對の把手がつく。口縁端部はつよく外反し、端面は外傾する平坦面をなす。把手は基部がのこるだけであるが、角状のものであったとおもわれる。この基部には上下方向の貫通孔の痕跡がみとめられる。把手と体部との接合は、体部壁に円孔を穿ち、把手を押し込み、内外の周囲に粘土を補充している。内面はさらにケズリ調整で整えられていることから、内面の器面調整以前に把手の着装がおこなわれたことがしられる。蒸気孔は底面の中央に円形孔、その周囲に5つの楕円形孔を配する。口縁端部の内外面をヨコナデ調整し、以下の外面をタテ方向のハケメ、内面をケズリで調整する。内面のケズリ調整は下3分の2の範囲は下から上のタテ方向、以上の部分はやや左上りの斜め方向をとる。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含むが緻密である。外面の口縁端部付近に黒斑がある。口径22.2 cm, 器高23.4 cm。このほかに13個体分の破片と、角状把手6点があるが、角状把手のなかに、貫通孔の施されているものはない。

## g 高杯 (PL. 19・20, Fig. 22)

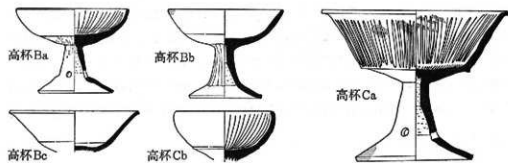


Fig. 22 SD6030上層出土の高杯

SD6030 上層からは291点におよぶ高杯が出土した。これは杯部だけで算定した数値で、同数に近い脚部みの破片もある。大半を占める高杯B・Cとその他の高杯とに分けられる。

高杯B(102~121) わずかに内彎する底部に口縁部がつく杯部と脚部とからなり、脚部は下端がややひろがる脚柱部からゆるやかに大きくひろがる裾部がつく。杯部で数えると199点あり、そのうち脚部とともにこのころのは14点にすぎない。杯部口縁部の形状により、内彎するBa、直線的に外傾するBb、端部付近が外反するBcの3種に細分できる。

高杯Ba(102~108)は杯部の口縁部が内彎するもので、口縁端部は平坦面をなす。この端面は水平であるものが多いが、やや外傾するものや内傾するものがあり、口縁端部付近の内彎度の強いものほど内傾が強くなる傾向がみられる。130点あり、高杯Bの65%を占める。口径は13.2~16.4cm(平均14.6cm)で、とくに13.5~15.1cmのものが多い。脚端部の径は8.1~11.7cm(平均10.1cm)で、9.0~10.9cmに集中する。器高は9.9~13.5cm、杯部の深さは3.5~4.7cmをはかる。高杯Baはとくに形態的な斉一性が強い。杯部は内外面ともハケメ調整で整えたのち、底部内面をナゲ調整で、口縁内外面をヨコナゲ調整でしあげる。杯部内面に放射状のミガキを加えるものが約半数ある。脚柱部内面には、上半部に上方から、下半部に下方からヨコ方向のケズリを施すが、下半部にケズリのないものが脚部をのこす12例中1例あり、それには器面にシボリ痕跡がみられる。脚柱部内面はヨコ方向のハケメ調整を施したのち、タテ方向のヘラナゲ調整を加え、さらに裾部外面を含めた全面をナゲ調整によりしあげる。脚柱端部はほぼ正円形を呈し、端面はほぼ垂直面に削られている。脚部の中位の3方に径0.8cm前後の円孔を穿つものが12例中10例ある。器体成形の手順としては、まず脚部をつくり、ある程度乾燥させてのち杯部を成形したものと判断される。杯部成形以前の脚部上端は開口しており、軟かい粘土塊を脚部上におしつけるようにして杯部の成形を始めているため、脚柱部内面上端には下方に突出する半球形の粘土の盛り上がりが見られ(PL.27-10・11)、その下面の中央には直径2~4mmの円穴がある。この小円穴は高杯B・Cのすべての個体に例外なくみられ、中には2度にわたり刺突した例もみられる(PL.27-9)が、杯底部に貫通することはなく、また最奥部には半球状の小突起がのこる場合もある。灰褐色ないし淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。105・108など7点の杯部外面には黒斑があり、杯部内面全面が黒色を呈するものが1点ある。残存状態の良好な個体が多いが、その中に杯部が著しく焼き歪んでいるものが1点ある。

高杯Bb(109~114)は杯部口縁部がほぼ直線状に外傾するもので、51点ある。口縁端部は丸い。口径13.6~16.2cm、器高11.7~12.4cm、杯部の深さは3.7~4.7cmをはかる。杯部の法量は高杯Baとほとんど変わらないが、杯部内面に放射状ミガキを施すものは少なく、観察可能な42点のうち6点にすぎない。脚部をのこすものは2点あり、そのいずれにも透孔がない。橙褐色ないし灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。杯部口縁部外面に黒斑のあるものが4点ある。109・110・113は杯部内面全面が黒色を呈する。なお114は脚柱部上半が中空がなく、器面の色調も茶褐色を呈し、他とは若干異なった様相をみせており、別種のものとして考えるべきかもしれない。但し、脚柱部内面上端には高杯Bに共通する小円穴がある。

高杯Bc(115~121)は18点であり、杯部口縁部が全体にゆるく外反するもの(115~119)と、端部付近が強外反するもの(120・121)とがある。口縁端部は前者が丸いのに対し、後者は

## 第N章 遺物

外傾する面をなす。口径は前者が14.0~15.9 cm、後者が17.2~18.5 cmと口縁端部の形態差に対応しているが、杯部の深さは3.9~4.7 cmの間にある。製作技法は高杯 Ba・Bb に共通し、杯部内面に放射状ミガキを施すものが2例ある。しかし、口縁端部が強く外反するものにはミガキがない。橙白色ないし灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。118・119の杯部内面は光沢ある黒色を呈し、117の口縁端部外面には黒斑がある。

高杯 B の脚部と判断されるものが207点ある。この中には後述する高杯 Cb の小型品の脚部も含まれるであろうが、Cb の杯部は1点だけであるので、その脚部の数量も限られているとおもわれる。裾部径は8.6~11.7 cm (平均10.0 cm)、高さ(杯底部と接する部分の高さ)は5.5~7.2 cm (平均6.3 cm)をはかる。成形および調整技法については高杯 Ba の項でふれたが、脚柱部内面の下半部にケズリ調整を施さず、シボリ成形痕跡をそのままどめるものが7点ある。また32点には脚部中位の三方に円形透孔がある。これらの相違は脚部の法量あるいは調整技法の違いに対応するものではない。脚部外面に黒斑のみられるものが7点ある。また32点には脚部中位の3方に円形透孔があく。

**ヘラ記号** 脚部内面に記号様の刻線のみられるものがある。刻線には「×」、「<」、「=」の3種があり(PL. 27-1~3)、平行線の例が最も多く9点、×が6点、<が2点ある。いずれも透孔が穿たれ、脚柱部内面下半部にケズリ調整を施す製品に限られる。

**高杯 C** 高杯 C(126~139) 杯部は平らな底部と、稜を境に屈曲してひろがる口縁部からなり、脚部の形態は高杯 B と全く同じであるが、より大型である。口縁部の形態には、ほぼ直線状に外傾して端部付近が外反するCaと、口縁部全体が内彎するCbとがあり、Caが85点、Cbが2点ある。

**高杯 Ca** 高杯 Ca(126~137)は口縁端部付近が外反するが、外反の度合いが強く、外反部分が水平に近くなるものとしてでないものがある。口縁端部は垂直に近い平坦面をなす。口径20.0~25.4 cm、器高18.0~19.6 cm、杯部深さ5.1~8.9 cm。脚部をのこすものは3点あり、裾部径14.8~15.4 cm、脚部高9.2~10.2 cmをはかり、高杯 B のおよそ1.5倍の法量をもつ。脚部の中位の3方にはいずれも円形の透孔を穿っている。杯部内外面はハケメ調整を施したのち、底部内外面をナゲ調整、口縁部内外面をヨコナゲ調整でしあげるが、ナゲが弱くハケメ痕跡を著しくとどめる例が多い。口縁部内外面および底部内面にミガキを加えるものがある。内外面ともにミガキを施すものが47点と約半数あり、外面にだけ施すもの3点、内面だけのもの11点で、内外面ともにミガキのないものが24点ある。ミガキの有無は口縁端部の外反度あるいはその他の形態的差異とは対応しない。内面底部のミガキはすべて放射状に施されるが、口縁部のものにはいくつかの変化がある。下から上のタテ方向に1条ずつ独立するもののほか、上下で反転しつづ連続するタテ方向のジグザグ状のミガキが多く施される。この違いの比率をみると、内外面ともジグザグ状のもの、外面がジグザグ、内面が一条単独のもの、内外面とも一条単独の調整がそれぞれほぼ同数ある。脚部の成形、調整技法は高杯 B と全く同じである。淡褐色ないし淡褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。132など7点では杯口縁部外面に黒斑がある。

高杯 Ca の脚部だけの破片が44点ある。裾部径が12.5~16.3 cm (平均14.1 cm)、高さが7.2~10.2 cm (平均8.2 cm)あり、高杯 B に比べると1.4~1.5倍の法量を示す。脚柱部下半部には例外なくロコ方向のケズリ調整を施し、脚部中位の3方に円形透孔のあるものは約3分の2をかぞえる。

高杯 Cb(138・139) 大型品と小型品が各1点ある。いずれも杯部のみの破片で、脚部を欠く。杯底部と口縁部との境の外側は断面三角形の低い稜をなす。大型品(139)は口径20.2 cm, 杯部深さ8.9 cm。口縁端面は内側に傾斜する凹面をなし、端面内側にわずかに突出する。杯部内外面をハケメで調整したのち、ナデ調整でしあげ、さらに全面にミガキを加える。ミガキは内面では底部と口縁部に分けて2段の放射状に施し、外面は底部に放射状、口縁部に斜方向のミガキを緻密に施す。外面は灰褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土は高杯 Cb より精良である。底部外面中央には下方から穿たれた小円穴がのこる。底部外面は摩耗した平坦面をなしており、脚部欠損のもの杯部のみを容器として再利用したものとおもわれる。小型品(138)の口縁端部は強く内彎し端面は丸い。底部外面中央の脚部折損面には小円穴がのこる。杯部内外面をハケメで整え、底面内外面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげ、口縁部内面には放射状のミガキを加える。橙白色を呈し、胎土は139に似て精良である。口径12.5 cm, 杯部深さ5.2 cm。

高杯 C の製作技法は基本的には高杯 B と同じであるが、杯部成形に際して、高杯 B が連続して口縁部までつくりあげるのに対し、高杯 C の場合は杯底部を成形したのちある程度乾燥させてから口縁部を成形している。これは杯部の法量の差に対応したものと考えられる。また脚部と杯部の接合部分には下方から穿たれた小円穴が例外なくみられ、この点も高杯 B と共通するところである。

その他の高杯(122~125・140~143) 上層出土の高杯の中には、大半を占める高杯 B・C のほか、形態、色調、製作技法を異にする数点の製品がある。杯部をのこすもの3種4点と脚部だけの破片が4種4点をかぞえる。122は比較的狭い底部に外傾する口縁部のつく杯部のみの破片。口縁端部はうすく尖りぎみである。底部外面中央には脚部が剝離した凹部がのこる。このことから、閉塞した脚部上端に粘土を堆き足すことにより杯部を成形したことがわかる。杯部外面と外面の端部付近をヨコナデで調整し、外面の以下の部分をナデでしあげる。黒褐色を呈し、胎土は粗い。口径11.9 cm, 杯部深さ4.4 cm。123は平らな底部に外傾する口縁部がつき、脚部は下端のひろがった円錐状の脚柱部から幅の狭い裾部が直線状にひろく。口縁端部はうすく、わずかに内方に巻き込み加減である。杯部内面をハケメ調整で整えたのち杯底部内面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげる。杯底部外面にはタテ方向のケズリ調整を施すが、このケズリは脚柱部外面上半部に及ぶ。脚柱部内面はヨコ方向のケズリで調整し、裾部内外面にはヨコナデ調整を施す。橙灰色を呈し、胎土は比較的精良である。杯口縁部外面の対向する2箇所に黒斑がある。口径13.7 cm, 器高11.5 cm, 杯部深さ3.6 cm。124は円錐状の底部に内彎する口縁部がつく杯部のみの破片で、口縁端部付近が強く外反し、端面は丸い。口縁部と底部の境には断面三角形の低い尖角がめぐる。杯部内外面をハケメ調整で整え、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげるが、内面のヨコナデは弱く、器面にヨコ方向のハケメ痕跡が顕著にのこる。底部外面中央には脚部上端の折損部分が残存しており、その内部には下方に突出した半球状の粘土塊がみられる。灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を含む。口縁部外面には大きな黒斑がある。口径15.7 cm, 杯部深さ6.4 cm。125の杯部は平らな底部に内彎してゆるやかにひろがる口縁部がつく。脚柱部は円筒状で上半部は中実である。脚柱部は直線状に強くひろがる。杯底部内面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげ、杯底部外面はタテ方

向のケズリ調整で整える。脚柱部内面はナゲ調整、裾部内面はハケメ調整、脚柱部外面はタテ方向のケズリ、裾部外面はヨコナゲ調整でしあげる。杯部の歪みが著しく、口縁部の一端が片口状に突出している。橙灰色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。口径14.6 cm、器高10.6 cm、杯部深さ 3.7 cm。140~143は脚部だけが残る。140は中空の脚部で、上端面はすり鉢状の剝離面をなし、中央に直径3 mmの小孔があく。外面にナゲ調整、内面にヨコ方向のケズリ調整を施すが、とくに裾部内面はていどに調整している。暗褐色を呈し、胎土は比較的精良である。裾部径11.0 cm、脚部高さ 6.8 cm。141は円錐状の脚部で下端近くが強く外反する。上端にはまるくぼんだ剝離面をとどめる。内面上半部にはシボリ痕跡がのこり、下半部はヨコ方向のハケメ調整が剝離面をとどめる。外面はタテ方向のハケメ調整を施し、ナゲ調整でしあげる。橙褐色を呈し、胎土は比較的精良である。裾部径13.3 cm。142は他の高杯に比して小型の脚部で、中実の脚柱部と、円錐状に小さくひろがる裾部からなる。外面はタテ方向のヘラナゲ調整でしあげ、内面はハケメ調整で整え、ナゲ調整でしあげる。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。裾部径 7.4 cm、脚部高 4.9 cm。143は中脰らみの中空の脚柱部に強くひろく裾部がつく。脚部上端は杯部との剝離面がのこり、中央に小孔のあくうすい閉塞粘土膜がある。脚柱部内面はナゲ調整、外面はハケメ調整のちナゲ調整でしあげるが、脚柱部外面上半部には数条の剝離痕跡が斜め方向に施されている。明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。裾部径10.6 cm、脚部高 7.5 cm。

h 壺 (PL.21, Fig.23)

上層から出土した壺は27点あり、A・B・G・H・Iその他に分けられる。

- 壺 A (153~158) 球形の体部に外傾する口縁部のつく壺で、下層出土の壺 Aa の形態に似る平底のもと、丸底で体部が扁球形を呈する Ac とがある。Aa・Ac あわせて15点あるが、多くは小片で、明瞭に区別しうるのは Aa 2点(157・158)、Ac 4点(153~156)である。157は体部の一部を欠くが、小さな凹面の平底をもつ。体部内面はナゲ調整を施し平滑にしあげる。口縁部内外面はヨコナゲ調整したのも、小きざみなヨコ方向のミガキを加える。体部外面は上半部をヨコ方向のミガキ調整、下半部をヘラナゲ調整でしあげる。暗褐色を呈し、表面にスス

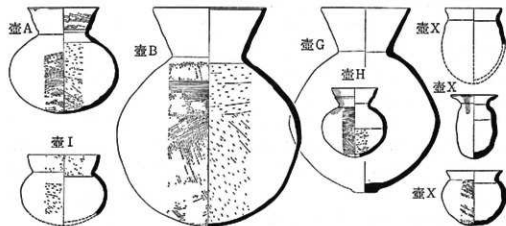


Fig. 23 SD6030上層出土の壺

の付着はみられない。口径11.1 cm, 器高12.0 cm(推定)。158は底部を欠く。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し, 体部外面は全面をハケメ調整したあと下半部のみにナデ調整を施す。体部内面は下半部をケズリ調整でととのえるが, 上半部は不調整で, 指押え痕跡がのこる。赤褐色を呈し, 胎土に砂粒を含む。体部外面にはススが付着する。口径11.5 cm,

壺 Ac の口縁部は下半部が肥厚しており, 端部はうすく尖りぎみである。内外面をヨコナデ調整で整え, 153・154では外面にタテ方向のミガキを加える。162では内面にナデはみられず, ヨコ方向の断続的なハケメがのこる。多くの例では口縁部下端の内面が凹形にくぼんでいる。体部外面はハケメ調整を施したのちナデ調整でしあげる。体部内面はおおむねヨコ方向のケズリで調整し, 156は底部に指頭圧痕が顕著にのこる。ケズリは粗く, 器壁の厚さは均一でない。154の体部外面にはススが付着する。

壺 B (164・165) 球形の体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺で, 2点ある。口縁端部は164が水平な平坦面であるのに対し, 165は内側に若干肥厚し, 端面は内傾面をなす。口縁部内外面はヨコナデ調整でしあげるが, 164にはハケメがのこる。体部外面にはハケメ調整を施す。ハケメの方向は上端付近でタテ方向, 以下の部分は斜め方向をとるが, 最後に肩部付近にヨコ方向に施している。体部内面は上半部をヨコ方向, 下半部を左上り斜め方向のケズリで調整する。165の底部外面にはススが付着する。164は口径16.5 cm, 165は口径17.7 cm, 器高34.6 cm。

壺 G (163) 下膨らみの丸い体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺で小さな平底がつく。壺 1点。口縁部は先端に向けてうすくつくり, 端部は丸い。口縁部内外面はヨコナデで調整し, 体部は内外面ともナデ調整でしあげる。灰褐色を呈し, 体部の下4分の1の範囲にススが付着する。口径13.9 cm, 器高29.1 cm。

壺 H (159・160) 2点ある。160は球形の体部に外傾する長い口縁部のつく小型の壺で, 口縁部の中位外面にわずかな稜がめぐる。口縁端部はうすく丸い。底部中央に直径約2 cmの不整円形孔があくが, これは焼成後に内側から穿ったものである。口縁部内外面はヨコナデ調整, 体部外面はハケメ調整で整える。体部内面には下半部にケズリ調整を施すが, 上半部は不調整で, 指押え痕跡をとどめる。赤褐色を呈し, 胎土は精良である。口径6.2 cm, 器高10.9 cm。159は口縁部の破片であるが, 160に比べると外面の稜がより明瞭で, 下層出土の壺Dにみられる二重口縁の形態に近い。灰褐色を呈する。口径10.0 cm。

壺 I (161・162) やや扁平な球形の体部に外傾する短い口縁部のつく広口の壺で, 2点ある。161の口縁部はわずかに外反するが, 162では内彎する。端部は丸い。この2点は形態的に類似しているが, 器面調整技法において著しく異なる。161は口縁部内外面をヨコナデ調整, 体部外面を弱いハケメ調整でしあげ, 体部内面にはヨコ方向のハケメ調整に, 斜め方向のケズリを加える。一方, 162は口縁部内外面をヨコナデ調整でととのえ, さらにヨコ方向のミガキ調整を施す。体部外面には弱いハケメ調整のちケズリ調整を施して平滑にしあげ, 内面はナデ調整で整える。2点とも淡褐色を呈し, 胎土に粗い砂粒を含む。161の口縁部外面には黒斑がある。口径は161が9.2 cm, 162が11.2 cm。

その他の壺 (148~152) 148は体部下半部を欠くが, 細長い体部に外傾する口縁部がつく小型の器。口縁部内外面ヨコナデで調整し, 体部外面はケズリ調整を施したのちにナデ調整で

しあげ、内面はナゲ調整で整える。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径9.2cm。149は浅い体部に外反する短い口縁部のつく広口の器で、底部を欠く。口縁端部は内側にわずかに巻きこみ気味につくる。口縁部内外面にヨコナゲ調整、体部外面にはぼタテ方向の条痕の粗いハケメ調整、内面にケズリ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.8cm。150はわずかに外傾する短い口縁部のつく小型の広口壺。口縁部内外面にヨコナゲ調整、体部外面に粗いハケメ調整のちナゲ調整を施し、内面は指でかき上げるようにして整える。底部外面は剝落

しているが、丸底とみられる。茶褐色を呈し、胎土にわずかな量の砂粒を含む。口縁部から体部上半部にかけての外面に黒斑がある。口径6.3cm。151は細長い体部に強く外反する口縁部のつく小型の器で、簡略な製作になる。口縁部内外面をヨコナゲ調整、体部外面をハケメ調整のちナゲ調整、内面を弱いナゲ調整でしあげる。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径7.2cm、器高10.1cm。152は丸い体部に外反する短い口縁部のつく広口の小型壺である。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナゲ、体部外面をハケメで調整する。体部内面は上半部を弱いナゲで整えるが、下半部には指押し痕跡が浅い凹部となつてのこる。黄灰色を呈し、外面全面にススが附着する。口径8.7cm、器高8.6cm、体部最大径10.3cm。

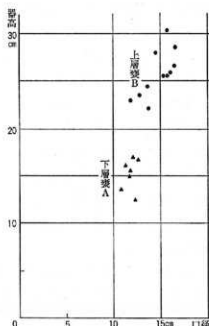


Fig. 24 SD6030 上層出土の壺 A・B 重量比較

i 甕 (PL. 22~24, Fig. 24~26)

上層からは97点の甕が出土した。A・B・C・D・G・H・Iがある。そのうち壺I(S字状口縁甕)についてはIbの口縁部片が2点あるが、形態、調整技法ともに下層出土品と同様であるので個々の説明ははぶく。

- 壺 A (166~167) 球形の体部に外傾あるいはわずかに内彎する口縁部がつく甕で、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。小片が多いが、口縁部で数えると17点ある。成形、調整技法は下層の壺Aに全く共通するが、166は体部下半部が若干歪んでいる。口径11.7cm、器高15.1cm。
- 壺 B (178~189) やや長胴の丸い体部に、外傾ないしやや内彎する分厚い口縁部がつく甕

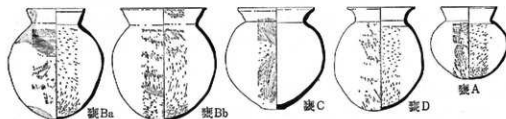


Fig. 25 SD6030 上層出土の甕-1



で、口縁端部が内側に折り返されて肥厚するBa(178~183)と、折り返さないBb(184~189)とに分けられる。Baが36点、Bbが14点ある。法量的に両者の間に差はない。口径11.3~19.8 cm、器高23.1~30.4 cmをはかり、製作技法が共通する下層の壺Aにみられた小型品がなく、比較的大型品に限られる(Fig. 24)。Baには口縁部が内彎するものが多く、肥厚した口縁端部はほとんどの例が内傾面をなすが、外傾するものも少量ある(178)。Bbには端部が水平面をなすもの(184など2点)、内傾面をなすもの(185・189など9点)、水平面で外側の端部が外方に突出するもの(186)、上方に尖りぎみに突出するもの(187)、外傾面をなすものがあり、単に丸くおわるものはない。Ba、Bbともに口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。185は体部外面のハケメをナゲ調整ですり消しており、186の体部内面には3分の1の範囲に斜め方向のハケメ調整痕が明瞭に残り、以下の部分のみケズリ調整を施している。体部器壁は壺Aに比べて厚く、中位付近で5 mm前後から、厚いものでは9 mmをはかる。胎土には砂粒が多く含まれ、ほぼ例外なく体部外面には全面にススが付着する。但し、183では底部周辺にススが付着していない。また180・183の体部内面には黒色炭化物が固着している。

壺C(168) 小さな不安定な平底をもち、肩のはった丸い体部に、外反する口縁部のつく壺。9点あり、ほとんどが破片であるが、完形品が1点ある。168の口縁端部は上方に突出する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメで調整し、体部内面はケズリ調整で整える。黄褐色を呈し、体部外面の全面にススが付着する。口径15.0 cm、器高21.3 cm。9点のうち6点は168に近い口径をもつが、3点は口径12 cm 前後の小型品である。

壺D(170~174) 丸い体部に外反する口縁部のつく丸底の壺で、12点ある。体部は長胴であり、最大径は中位かやや下の位置にある。口縁端部はうすく丸くつくるが、174は外傾面をなす。口縁内外面をヨコナデ、体部外面をハケメで調整する。体部内面は170・171・173ではケズリ調整であるが、172・174はナゲ調整で、器壁に粘土帯を積み上げた痕跡が明瞭にのこる。とくに174では、底部を欠くが、残存部分で、幅2.0~3.5 cmの間隔で7段につきあげて体部の成形をおこなったことが知られる。胎土には砂粒を多く含み、体部外面には例外なくススが付着する。また173では体部内面に炭化物が全面に固着する。口径10.6~15.2 cmをはかり、11 cm 前後の小型品と、15 cm 前後のものがある。170は口径10.9 cm、器高12.8 cmの小型品で、口縁部の外反が弱く、体部は長胴の大型品とは異なり、やや歪んだ球形を呈する。また器面の色調も比較的黒ずんでいる。

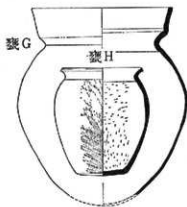


Fig. 26 SD6030上層出土の壺-2

壺G(177) わずかに外傾した屈曲する口縁部のつく丸底壺で、5点ある。177は口縁端部が水平をなし、口縁部の屈曲部の外面は明瞭な稜にならない。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。ケズリ調整は内面上半部がヨコ方向、下半部がタテ方向をとり、体部器壁は中位付近で3~4 mmと、比較的薄手である。灰白色を呈しており、器面の剝落が著しいためか、ススの付着はみられない。

口径21.0 cm。

- H 甕H (169) 肩の張りの弱い体部に、外反する短い口縁部のつく平底の甕で、底面はわずかな凸面をなす。1点。口縁端部は外傾する幅広い面で、中央がくぼむ。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。内面のケズリは下部がタテ方向、上半部がヨコ方向をとる。茶褐色を呈し、外面全体にススが附着する。口径12.0 cm, 器高16.1 cm。
- X その他の甕 (191) 191は口径21.4 cm, 器高44.9 cm をはかる大型の甕。やや長胴の体部に外傾する口縁部がつき、底部は尖りぎみの丸底である。口縁部外面はタテ方向のハケメ調整を施し、ヨコナデ調整でしあげるが、内面はヨコ方向のハケメ調整を施すにとどまる。体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整で整える。体部外面の上4分の1の範囲ではナデ調整によりハケメが消されている。また外面の中心に粘土の継ぎ目が水平方向に一条の波状線としてのこっており、体部製作に際して、この段階で一旦作業を中断したことがわかる。内面のケズリ調整は下3分の2の範囲に施され、以上の部分は指で下から上方向に強くなでつけている。底部内面には指頭圧痕が顕著にのこる。茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。体部外面上半部から口縁部にかけての広い部分と、内面下半部との2ヶ所に黒斑がある。また体部外面下半部にはススが附着する。甕Bの大型品と考えられる。

ii 須恵器 (Fig. 27)

SD6030 上層から出土した須恵器は2点だけである。

- a 甕 (202・203) 202は小型甕(はそう)の口縁部および頸部の小片で、口径9.1 cm, 頸部径4.3 cm, 口頸部高4.8 cmに復原できる。強く外反する頸部に外傾する口縁部がつつき、口縁部と頸部の境の屈曲部分にはゆるい稜線がめぐる。口縁端部は丸くおわる。全体をヨコナデで調整し、内面には自然釉がかかる。器表面は黒灰色を呈し、断面で見ると芯の部分は暗紫色を呈する。203も小型甕の口縁部の破片で、口径8.3 cm, 頸部径4.9 cm, 口頸部高2.9 cm である。口縁端部の内面には浅い凹線が施され、口頸部の中心に断面3角形の低い稜線がめぐる。稜線部以下の外面には櫛歯波状文が施されている。櫛目は12本あり左から右方向に施文される。器面は一様に暗灰色を呈し、内面には斑状に自然釉がかかる。器壁の芯部は暗紫色を呈する。

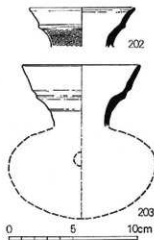


Fig. 27 SD6030上層出土の須恵器・甕

## C SD8520 出土土器 (PL. 25・26, Tab. 4, Fig. 28~30)

6ACA 地区の調査で佐紀池から奈良時代の園池 SG8500 が検出されるとともに、下層からは古墳時代の溝 SD8520 が検出され、朝集殿下層溝 SD6030 下層よりやや古い段階に位置づけられる一群の土器が出土した。溝の堆積層は砂と粘土の互層で3層に細別されるが、随所に攪乱がみられるため、ここでは一括して扱った。なお、SD8520 出土ではないが、土層観察用トレンチから縄文式土器が出土しているので併せて報告しておく。

## i 土師器 (PL. 25・26, Tab. 4, Fig. 28・29)

土師器には小型丸底壺、高杯、浅鉢、壺、甕があり、口縁部で識別しうる個体の総点数は92点をかぞえ、そのうち甕が74点(80.4%)と大多数を占める。

a 小型丸底壺 Aa (301) 小片で、体部下半と口縁部上半を欠く。外面と口縁部内面にヨコ方向の細かいヘラミガキを施す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。頸部径 6.4 cm, 体部最大径 7.3 cm。このほかに口径 9.4 cm に復原できる口縁部の小片がある。

b 高杯 (302・303) 302は高杯Aの杯部である。杯底部外面をタテ方向のケズリで調整し、内外全面にヨコ方向のミガキを施す。灰褐色を呈し、胎土は精良。口径 17.0 cm, 杯部深さ 5.3 cm。303は脚柱部の破片。下端の3方に透孔があく。外面をタテ方向のヘケ、内面をナデで調整するが、内面にはシボリ痕跡がのこる。茶褐色を呈し、胎土は粗い。脚部上端径 3.9 cm。

c 浅鉢 (304) 浅い体部に外傾する長い口縁部をつくる。口縁端部は断面が矩形をなす。体部外面下半部をケズリで調整し、口縁部内外面と体部外面にヨコ方向に粗いミガキ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径 23.8 cm, 器高 9.1 cm, 口縁部高 4.3 cm。

d 壺 (305~308, 317・318) 壺には B・D・F・G などがある。

壺 B (317) 球形の体部に外傾する長い口縁部をつくる土器で、底部はやや尖りぎみの丸底である。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をヘケメ、内面をケズリで調整するが、口縁部内面下半部にはヨコ方向のヘケメがのこり、体部内面にもケズリ調整以前のヘケメ調整痕跡が部分的にのこる。ケズリの方向は上半部がヨコ方向、下半部はタテ方向をとり、きわめて平滑にしているが、底部には指押え痕跡がのこる。体部の器壁は 3 mm 前後の均一な厚さをもつ。灰褐色を呈し、外面の肩部以下にはススが厚く付着する。口径 16.8 cm, 器高 28.2 cm, 体部最大径 23.5 cm, 口縁部高 7.3 cm。

壺 D (306・307) 306・307はいずれも二頂に屈曲する口縁部をもつ壺であるが、その形状

器種名	個体数・比率	
小型丸底壺 A	2 (2.2%)	
浅 鉢	1 (1.1%)	
高 杯 A	1	} 4 (4.3%)
X	3	
壺	A 2	} 11 (12.0%)
	B 1	
	D 3	
	G 1	
	X 4	
甕	A 48	} 74 (80.4%)
	F 3	
	G 3	
	I 3	
	J 5	
	K 2	
	X 10	
計	92 (100%)	

Tab. 4 SD8520出土土器個体数

小型丸底壺 Aa

高杯 A

浅 鉢

壺 B

壺 D

はやや異なっている。306は体部の中位以下を欠く。頸部は直立し、屈曲部以上の口縁部上半は外反する。全面をヨコナデおよびナデで調整したのち、口縁部内外面と頸部外面に緻密なミガキ調整を施し、口縁端部内面と口縁屈曲部外面に櫛掻波状文を、体部外面上端3cm幅の範囲には上から櫛掻平行線文、波状文、平行線文の順に施文する。口縁屈曲部外面にはさらに竹管文を付した円形浮文を貼付する。黄褐色を呈し、一部に黒斑がつく。口径15.3cm、頸部径6.4cm、口頸部高5.0cm。307の口縁部は中位でわずかに屈曲し、屈曲部の外面には表面に左下り斜めの刻み目を入れた突帯が1条めぐる。また外傾する口縁端部外面にも刻み目を施している。口縁部外面をタテ方向のハケメ、内面上半部をヨコ方向のハケメで調整するが、外面上半部はヨコナデを加えてハケメをすり消している。口縁部内面下半部はヨコナデで調整する。体部外面はハケメで調整し、粗いミガキを加える。ミガキの方向は上端近くがヨコ方向、以下がタテ方向をとる。体部内面はナデで整えるが、1.0~2.0cmの間隔をおいた7条の粘土継接合痕跡が水平方向にのこるが、体部下半部を欠く。黄褐色を呈する。口径16.9cm、頸部径9.9cm、口縁部高5.8cm。

壺 F 壺F (305) やや肩の張った球形の体部に外傾する短い口縁部のつく小型の器。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整し、外面肩部に蛇行する1条のヘラ刻線がある。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径7.6cm、器高8.9cm、体部最大径9.8cm、口縁部高1.8cm、頸部径5.6cm。

壺 G 壺G (318) 最大径がほぼ中位にある長胴の体部に外傾する口縁部のつくもので、口縁端部はうすく尖り、底部は小さい不安定な平底をなす。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデで整える。但し、ナデは微弱であり、器壁には2.0~3.8cm間隔の粘土(帯)接合痕跡が8~9条みとめられる。体部外面は器面の残存状態が不良で確認しがたいが、弱いハケメ調整にミガキ調整を加えているようである。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径13.8cm、器高32.6cm、体部最大径23.9cm、口縁部高5.3cm、頸部径9.8cm、底径4.4cm。

壺 X 壺X (308) 球型の体部にわずかに外反する直立口縁のつく広口の器で、底部は不明瞭な平底をなす。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデで調整する。体部外面は上端近くをハケメ調整で整え、肩部以下にケズリを施したのち、粗いミガキを加える。灰褐色を呈する。体部の中位の大部分を欠失している。口径12.6cm、器高18cm(推定)。

e 甕 (309~316, 319~332) 甕にはA・F・G・I・J・Kなどがある。

甕 A (320~327) 球形の体部に外傾する口縁部のつく丸底の甕である。口縁部は内湾ぎみにつくられているが、320だけは直線状をなし、端部は内上方に突出する。他の個体の口縁端

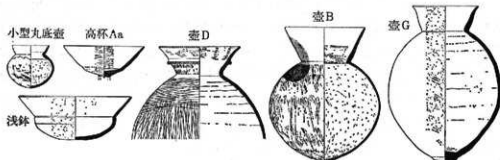


Fig. 28 SD8520出土の小型丸底壺・高杯・鉢・壺

部には折り返しが弱く端面がわずかに内傾するものと、端面が強く内傾するものがあり、前者は319・320・324・327など29点、後者は16点をかぞえる。口径は11.4 cm から15.7 cm の間にはほぼ一様に分布している。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。外面のハケメ調整の最後に体部の肩部から上端にかけてヨコ方向に念入りにハケメを施している。ハケメ条痕の間隔は1 mm 前後と非常に細かいが、323は間隔が2 mm 程であり、他に比べるとやや広い。320の口縁部内面にはヨコナデ調整以前のヨコ方向のハケメ調整痕がのこる。323・324の底部内面には指押え痕跡がのこり、323では体部の下半部全体におよぶ。全般的に暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面にはススが付着し、324の底部内面には炭化した米粒が付着していた。

甕 F (309・310) などで肩の体部に外反する口縁部がつく甕で、口縁端部は内上方に突出する。いずれも体部の大部分を欠く。口縁部内外面はヨコナデで調整するが、309の内面にはハケメがのこる。体部外面は傾斜の強い左下りのタタキ調整を施し、内面はヨコ方向のケズリで整える。310と同一個体の体部中位の破片にはタタキ目の上に粗いハケメの加えられているものがある。309は暗褐色、310は白褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径は309が13.5 cm、310が11.8 cm。

甕 G (314~316) 口縁部が屈曲して立ち上るもので、体部は長胴丸底であると考えられる。口縁上半部は314では強く外傾するが316は直立に近い。口縁端部は面をなすが、内傾するもの、外傾するものがあり、一定した形態を示さない。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部上半のこる316では外面には細かいハケメ調整を施し、上端付近にヨコナデ調整を加える。内面はヨコ方向のケズリで平滑に整える。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。316体部外面にはススがうすく付着している。口径は314が31.0 cm、315が29.2 cm、316が26.6 cm。316の体部最大径32.6 cm。

甕 Ia (311~313) S字状に屈曲する口縁部のつく台付甕。口縁部の屈曲は強く、端部は丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデ、外面をハケメで調整するが、313の頸部内面にはヨコ方向のハケメ調整が断続的に施されている。体部外面のハケメ調整は肩部以下に施したのも肩部以上に施し、さらに両者の接する部位に水平方向のハケメを施すが、312では水平方向のハケメがない。台脚部内面はナデで調整し、外面にはナデの上に体部のハケメ調整がおよぶ。ハケメ条痕の間隔は313が幅1.5 cm でハケメ条痕が10本であるのに対し、312・313では幅1.8~2.0 cm で8本と粗い。313は口径30.4 cm の大型品で白褐色を呈する。311・312は暗褐色を呈し、外面にはススが厚く付着するが、312の台脚部にはススがみられない。312

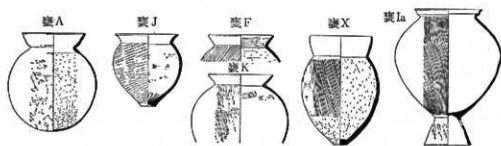


Fig. 29 SD6820出土の甕

は口径13.8 cm, 器高28.0 cm (推定), 体部最大径22.8 cm, 311は口径16.0 cm。

- 壺 J** 壺J (328~330) 最大径が中位より上にある丸い体部に, 外反する口縁のつく甕である。口縁端部は328が丸くおわるのに対し, 329・330は上方にわずかに突出する。底部のこのる 328では小さな平底の外周が輪状に突出し, 外面中央がくぼんでいる。口縁部内外面をヨコナデで調整し, 体部外面にはタタキ調整を施す。タタキ目の方向は328・329は左下りであるが, 330は右下りである。328は外面中位よりやや下へのこのる水平方向の粘土紐接合痕を境に傾斜が変化し, 330では底部寄り3分の1の範囲のタタキ目の傾斜が強い。330では傾斜の変化する部位の幅2 cmの範囲にナデ調整が施されてタタキ目はみられず, また内面の対応する部位より下はハケメ調整で整えるだけであるが, より以上の部分はハケメ調整ののちにナデ調整を施してあげている。茶褐色を呈し, 胎土に細い砂粒を多く含む。329は体部および口縁部の破片であるが, 内面のくぼみを利用して白色顔料を溶くのに利用した形跡がこのる。328は口径12.7 cm, 器高15.1 cm, 体部最大径14.6 cm, 329は口径14.9 cm, 体部最大径15.9 cm, 330は口径15.5 cm, 器高約29 cm, 体部最大径19.1 cm。
- 壺 K** 壺K (319) 球形の体部に外傾する口縁部のつく甕で, 体部下半部が欠失している。口縁部はわずかに内彎し, うすく, 端部は上方にわずかに突出する。口縁部内外面をヨコナデ, 体部外面をハケメ, 内面をナデで調整する。外面のハケメの間隔は2~3 mmと粗く, タテ方向をとる。内面のナデ調整は念入りで, 平滑にしあげているが, 部分的にハケメがこのる。器壁は3 mmの薄さである。灰褐色を呈し, 胎土に砂粒を多く含む。外面全面にススが附着する。口径13.5 cm, 体部最大径20.6 cm, 底部を欠く。
- 壺 X** その他の壺 (331・332) 331は壺308に近い口縁部の形態を示すが, 器外面にススが附着しており, 煮炊に用いられたものである。わずかに外反した口縁部の端部をうすくつくり, 内外面にヨコナデ調整を施す。体部外面はタテ方向の細かいハケメ調整, 内面はナデ調整でしあげれるが, 内面器壁には約2 cmの間隔をもった水平方向の粘土紐接合痕がこのる。灰褐色を呈し, 胎土は精良である。口径15.4 cm, 332はやや細身の長胴を呈する体部に内彎する長い口縁部のつく甕で, 底部は小さな平底をなす。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデで調整し, 体部外面の上3分の2の範囲をタテ方向の目の粗いハケメ調整で, 以下の部分をタテ方向のケズリ調整で整える。体部内面にはほぼタテ方向のケズリ調整を施す。底部外面には布目疋痕がみとめられる。茶褐色を呈し, 胎土に粗い砂粒を多く含む。口径12.9 cm, 器高22.6 cm, 体部最大径16.7 cm, 底径3.0 cm。

## ii 縄文式土器 (Fig. 30)

6ACA区のパラス層から12点の縄文式土器が出土した。奈良県北部では縄文式土器の出土例はほとんどなく, 平城宮城でも初見である。極小片の4点を除く8点を図示したが, いずれも摩耗しており, パラスとともに北方から流入したものと考えられる。口縁部 (口縁部付近を含む) 破片3点, 体部破片9点である。胎土含有物の共通性と推定器形などからみて, いずれも同一時期 (縄文時代中期後半) に属している。器厚は5~11 mmである。

- 鉢 a** 口縁部破片 (1~3) 1は口縁部断面が丸棒状を呈し, 直口形態の深鉢となるが口径は推定し難い。表面・裏面とも筒状工具による横方向の整形痕がわずかに認められる。胎土中

には他の破片と同様に砂利、長石が多く含まれている。色調は暗褐色で、焼成は良好。

2・3は口縁下より体部に移る部分の破片であり、キャリバー形の深鉢と考えられる。表面、裏面とも1と同様の整形痕が認められるが、裏面の剝落が著しい。表面は暗褐色を呈し、一部ススの付着が認められる。3は口縁がやや内彎する小型深鉢である。口縁部には3条の平行沈線（沈線幅5mm、断面はU字形）で長楕円形区画を描く。体部には燃りの細かい $R < \frac{1}{L}$ の原体を斜行させている。施文は縄文→平行沈線区画の順序でおこない、口縁部と体部界には最終仕上げの磨り消しがみられる。色調は淡黄色で、焼成は良好。胎土中には大粒の長石が目立つ。

b 体部破片（4～8） いずれも深鉢と考えられる。5～8はすべて縄文が斜行している。5・7・8は $R < \frac{1}{L}$ の原体であるが、6は観察が困難である。4の表面には竹管先端による擦痕が認められる。いずれも内面整形は篋状工具で行われている。色調は4・5が暗褐色、6・8が淡黄色、7が黒褐色を呈する。なお7の下部には厚いススの付着がみられる。

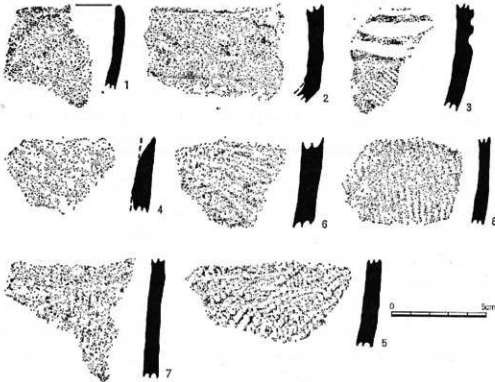


Fig. 30 縄文式土器拓影

## 2 埴輪

SD6030, SX6035, SK6037 からは各種の埴輪が出土している。数量は多くないが円筒埴輪のほか蓋形、盾形、人物形、家形、動物形などの形象埴輪がある。なお、GACA地区の奈良時代園池 SG8500 から盾形埴輪の小片が出土しているので併せて記述することにした。

## i SD6030 出土埴輪 (PL.28・29)

SD6030 から埴輪が5点出土した。このうち、下層が円筒埴輪1点、上層が円筒埴輪1点、盾形埴輪1点、蓋形埴輪1点、人物埴輪1点である。

a 下層出土の円筒埴輪 胴部の小片であるが、復原直径が約50cmの大型品である。突帯1条が残る。外面をタテハケメのちヨコハケメ、内面をヨコ方向ないし斜方向のハケメで調整する。ハケメは内外面ともにきわめて細かいもので、ヨコハケメの原体の幅は7.1cm以上である。突帯は断面長方形で幅広く低い。ヨコナデで調整する。ただし、蓋形埴輪の円筒部の可能性もある。BL16Ⅰ黒出土。

b 上層出土の円筒埴輪(502) 底部の破片で、基底部と胴部第1段が残る。突帯は断面台形で、横端面は凹面をなす。胴部第1段には相対する位置に一对の円形透孔があく。外面をタテハケメで調整し、胴部第1段にはさらにヨコハケメを施す。内面はナデ、突帯はヨコナデで調整する。底部径20cm, AR06Ⅰ砂出土。

## 盾形埴輪

c 盾形埴輪(501) 円筒埴輪の前面に盾部のとりつくもので、盾部上縁が山形に高くなる。盾面にはヘラで文様を描く。文様は平行線3本の中に綾杉文を配した綾杉文帯と鋸歯文からなり、周縁を綾杉文帯でふちどったのち、水平な綾杉文帯2本で盾面を上中下の3段に区画し、上下の2段には上向きの鋸歯文4個を配する。中段は垂直な綾杉文帯2本で3区にわけ、左右の2区には内向きの鋸歯文4個を描く。中区は無文である。背面の円筒埴輪は、口径と底径がほぼ等しく、突帯が4条つく。突帯は断面台形で横端面は凹面をなす。胴部第一段と第3段とに、盾面と平行する方向の円形透孔が各一对あく。なお、突帯位置には三角形の粘土板をはりつけて、盾部との接合を補強している。盾部前面をハケメとナデ、背面をナデ、周縁をヘラケズリで調整する。円筒部は外面を斜ハケメ、内面をタテハケメ、突帯をヨコナデで調整する。総高118cm, 盾面幅50cm, 盾面長さ80cm, 円筒部底径24cm, 黄褐色軟質, AT07Ⅰ砂出土。

## 蓋形埴輪

d 蓋形埴輪(511~514) 翼状の羽根飾り部である。511は受皿の上に十字形飾り板を貼りつけたもので、4枚の飾り板のうち2枚は完形あるいはほぼ完形に近いが、他の2枚は基部のみを残す。飾り板は厚さ1.7~1.4cmで、頂部と外側の3ヶ所に船状の突起を設け、表裏にヘラで直弧文風の文様を描いている。全面をハケメ、周縁をヘラケズリで調整する。受皿外底にとりつく筒部は欠損する。512は飾り板の断片、513・514は胴の部分にあたり、いずれも同一個体に属する。復原上端幅62cm, 黄褐色硬質, AU07Ⅰ黒出土。

e 人物埴輪(506) 草摺の破片である。垂直な平行線3本を1組にして、外面を4等分したのも、各分界内を水平線で15~16の帯に分割し、無文帯を1条をはさんで3~4帯1単位に



綾杉文を施している。外面をハケメ、内面をナデで調整し、内面には粘土紐接合痕を随所に残している。黄褐色軟質で、外面にはベンガラが残る。裾部径 56 cm, 残存高 18.5 cm。AT 07 I 砂出土。

f 家形埴輪 (509・515) 台部破片である。風返しのすぐ上に接して、垂直線 3 本と水平 2 線本があり、柱・入口を表現したものと思われる。灰白色軟質。515 は家形ないし盾形と思われる小片である。長方形を線刻する。黄褐色軟質。BB 09 I 黒出土。

g 動物形埴輪 (510) 芯のつまった円棒の一端に顔状のものを作りつけ、目を表現したと思われる小円孔をあけ、口のような挟りがある。頭頂部には細い角状の突起が 1 本あるが、基部を残すだけである。動物らしい何が何を表現したものか不明。灰白色軟質。AS 06 I 黒土。

## ii SX6035 出土円筒埴輪 (PLAN 5, PL. 29)

SD6030 の東約 20m の朝堂院東面築地に東接する地点で検出された土壌墓に用いられた円筒埴輪である。円筒埴輪を縦に半截したものを重ねて棺蓋とし、両端を円筒埴輪の破片で閉じたもので、棺底は平坦な地山である。円筒埴輪は 3 個体あり、うち、全形に復原したのは 1 個体である。

a 1 号埴輪 (504) 全形のわかるものである。底径よりも口径が大きく、底部から口縁部にかけてゆるやかにひろがる胴部に、4 条の突帯がめぐる。口縁部はわずかに外反し、幅広い端部中央がわずかに凹む。突帯は断面台形でやや高く、横端面はごくわずかに凹む。胴部第 1 段と第 3 段に、下が円弧をなす半円形透しが、各一对同じ方向にあく。口縁端部内外面をヨコナデ、胴部外面を左上り斜めハケメ、内面をナデ、突帯をヨコナデで調整し、内面には粘土紐接合痕が若干残る。なお、外面のハケメは、基部から胴部第 2 段中位までを連続して施したのち、それ以上をまた連続して行っている。胴部第 2 段中位までとそれ以上との 2 回にかけて積み上げたためであろう。黄褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 44 cm, 高さ 62 cm, 底径 26 cm。

b 2 号埴輪 (503) 1 号埴輪と同形のものであるが、胴部第 1 段以下を欠く。透しも半円形である。1 号埴輪に比して突帯はやや幅広く、横端面は凹面をなし、上端がわずかに突出する。口縁端部内外面と突帯をヨコナデ、胴部外面を左上り斜めハケメ、内面をナデで調整し、内面には粘土紐接合痕が若干残る。外面のハケメは 1 号埴輪に比してより垂直に近く、きめも細かい。茶褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 40 cm。

c 3 号埴輪 (505) 底径と口径がほぼ同じ円筒形の胴部に 4 条の突帯をめぐらせ、胴部第 1 段と第 3 段には各一对、同方向の円形透孔がある。小片のため、胴部第 2 段に透孔があったかどうかかわからない。口縁端は大きく外反し、端面は中央がわずかに凹む。突帯は断面台形で、幅せまく低い。横端面は凹面をなす。口縁端部内外面と突帯をヨコナデ、胴部外面をタテハケメのちヨコハケメ、内面をタテハケメないしヨコハケメで調整する。外面のヨコハケメは基部と口縁上端にはない。内面の突帯裏面のハケメは幅約 2 cm の一周するナデによって消されている。突帯成形および調整時のものであろう。胴部第 2 段中位に頸口縁がみられ、これ以下と以上との大きく 2 回にかけて積み上げたものと思われる。茶褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 37 cm, 高さ 63 cm, 底径 24 cm。

家形埴輪

動物形埴輪

棺に使用した円筒埴輪

1 号埴輪

2 号埴輪

3 号埴輪

iii SK6037 出土埴輪 (PL. 29, Fig. 31)

SK6037からは盾形埴輪，家形埴輪が出土した。  
いずれも破片で，器面の荒れもはげしい。

**盾形埴輪** a 盾形埴輪 (516) 円筒部前面に鼓形の盾部をとりつけたもので，盾部上半を欠く。残る下半部には，下に2個，上方中央に1個，計3個の小孔が正三角形状に配される。器面が荒れており，調整手法は不明。黄褐色軟質。復原高約70cm，盾面下端復原幅約30cm，円筒部下底径18cm。

**家形埴輪** b 家形埴輪 (507・508) 507は妻部の屋根に接する部分の断片である。平行線2本を1組として，妻柱，横板を表現し，妻柱の左に接して入口らしい表現が断片的に残っている。508は壁の断片で，間隔をあけて水平線2本が描かれている。いずれも器面が荒れ，調整は不明。厚さ1.0～1.8cm。

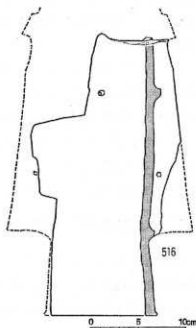


Fig. 31 SK6037出土盾形埴輪

iv SG8500 出土埴輪 (Fig. 32)

**盾形埴輪** a 盾形埴輪 (517) 円筒埴輪の前面に板状の盾面をとりつけたもので，盾面には平行する2本のヘラ描き沈線がある。小片であるため詳細は不明であるが，おそらく盾面を内外二区に仕切る画線とみられる。盾面厚さ1.6cm，円筒厚さ1.2cm。黄灰褐色を呈し，砂粒を含む。黒斑あり。63，灰白粘土層出土。

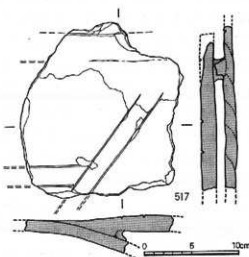


Fig. 32 SG8500出土埴輪

## 3 木製品

6AAW・X-SD6030 と 6ACA-SD8520 からは木工具、農具、発火具、容器、襦物、建築部材などの各種の木製品が多量の自然木、削屑とともに出土した。両者とも類似した内容をもっており、古墳時代の生活、生産用具を考察するための良好な資料となっている。

## A SD6030 出土木製品 (PL.30~41, Tab.5~13, Fig.33~35)

木製品は調査した溝の全域にわたって出土している。朝集殿基壇の西側に位置する北区屈曲部分(6AAW-Kライン以北)の出土量にくらべて、基壇の東南隅から南流する南区域(6AAW-Bライン以南)の出土量が多い。今回の報告では自然木や削り屑などを除く152点の木製品をとりあげるが、北区から出土したもの30点、南区から出土したもの111点という構成である(出土地点不明11点)。

この溝は上層(I黒・I黒B・II砂)、下層(II黒・III砂・IV砂・暗褐色砂)に大別される。木製品の出土状況を層位ごとにみると、上層出土のもの85点、下層出土のもの56点となり、上

		南 区											計
小地区		AR 08	AT 07	AR 06	AR 07	AS 06	AS 07	AU 07	BA 07	BA 08	BB 06	BB 09	
I	黒			6		10	20				1		37
I	黒B					1	5	1					7
II	砂			7		9	2			8	3		29
II	黒												
III	砂	2	1		3		2		7	10	5		30
IV	砂			1					5	1			7
	暗褐色砂											1	1
計		2	1	14	3	20	29	1	12	20	8	1	111

		北 区							計	合計
小地区		BK 16	BL 16	BM 16	BN 16	BK 12	BN 12	BQ 14		
I	黒					3		1	4	41
I	黒B									7
II	砂	4			3	1			8	37
II	黒									
III	砂	8	2	2	4				16	46
IV	砂	1			1				2	9
	暗褐色砂									1
計		13	2	2	8	4		1	30	141

※ 出土地点不明11点を除く

Tab.5 SD6030木製品小地区別出土点数

- 1) 遺物の移転、保存容器の変更、PEG 含浸槽での保存期間中などにラベルの文字が消えたり、ラベルがなくなったものがでてきた。

第N章 遺物

層からの出土量が多いことがわかる。下流の AS06, AS07 では上層から大型木材をふくむ木製品が集中的に検出され、その北方の BA07, BA08 では主として下層において発見されるというように、地点によって堆積の変化がみとめられる (Tab. 5)。

木の製品

木製品は、木工具・農具・什器・建築部材・その他に大別して整理した。それを出土層ごとに分類すれば、おおむね上下層ともに各種類をふくんでおり、上下二層による種類別の顕著な差異をみとめることはできない。しかし、農具のうち注日すべき膝柄股蘇や広蘇・平蘇あるいは一本鋸などは上層から発見され、建築部材に分類した2点の梯子は下層から検出されるなど、詳細にみれば上下二層の木製品構成の差異が明らかになる可能性もあるが、出土点数が少なく、類例の少ないことから形式分類も行えないので、ここでは一括してあつかうことにし、説明の末尾に出土地点を記しておくことにする。これらの木製品の特色を簡単にいえば、未成品がみられず、損傷を受けて破損したものが大半を占めていることである。つまり、消費地における廃棄品であり、製作地としての要素はとくに見られない。

i 木工具 (PL. 30, Tab. 6)

鉄斧を挿着した斧の膝柄。縦斧と横斧との区別がある<sup>1)</sup>。いずれも幅3.4~1.2cmの着装部をつくりだしていることから、鉄製の袋状鉄斧をつけた中・小の斧柄であることがわかる。5点出土したが、いずれも柔軟性にむすサカキの材を利用している。

縦斧柄

a 縦斧柄 (1・2・3) 木の枝分れた股部を利用した斧柄。幹の部分上台部とし、枝の部分を手握部とする。台部の左右側面を削りこんで扁平にし、下端に鉄斧を挿入する舌状の着装部をつくるものだが、1では着装部を一段細く削りだすのに対し、2ではわずかに細めるにとどまりとくに段をつくらない。いずれも握部に対して平行に刃をつけたことをしめす装着の押圧痕がのこる。基部の上端は粗く削りおとす程度の加工で、握部は全体に樹皮を除く。

この斧柄が小形であることや、弾力性のある枝を手握部していることからすれば、材を切断するマサカリ的な機能は想定しがたい。むしろ、材を側面から削ったり、クサビで材を割り裂いたのち、まだじゅうぶん離れていないところを切り離すような機能を想定すべきだろう<sup>2)</sup>。

横斧柄

b 横斧柄 (4・5) 木取りや材種は縦斧柄と変らないが、鉄斧を着装するとき握部に対して刃が横向きになるように台部をつくっている点がことなる。完形に近い4では長い基部の

番号	(全長)	(台部)			(着装部)			(握り部)	(材質)	(出土位置)	(層位)
		長さ	幅	傾	長さ	厚さ	傾				
1	50.3	12.0	3.4~1.5	3.3	1.6	2.2	1.8~1.2	サカキ	AS06	同層	
2	62.4	13.1	3.4~2.6	3.9	2.8	1.8	2.5~1.7	サカキ	AR07	III 砂	
3	(台部の一部のみ)										
4	36.2	22.1	4.0~2.1	4.5	2.4	1.8	2.3~1.5	サカキ	AS07	I 黒B	
5	(19)	(8.6)	3.7~2.8				2.1~1.7	サカキ	BK16	III 砂	

Tab.6 斧柄の寸法

( ) は現存の数値

1) 斧柄の用語は佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論叢—豊後松崎寿和先生 六十三才記念論文集』1977, にしたがう。斧柄の部分名称は<sup>2)</sup>大阪文化財センター「池上遺跡」

第4分冊の2木器編, 1978, にしたがう。  
2) 弥生時代の斧柄に柱状片刃石斧を縦につけるものがあるが、同様の機能をもつものである。

後面中央に線線をととし、嘴のようにのびる着装部を一段細く削ったところに、鉄斧を装着した痕跡をとどめる。5は台部の着装部を欠くが、前面と後面が平滑面をなしているので横斧柄とみてよい。用途はいわゆる手斧であり、材の表面を平面的にはつり取るもの。一概にいえないが、縦斧に対して握部が短いのが特徴となる。

## ii 農具 (PL.31~34)

農具としては、鋤・鍬・エブリ・鎌などがある。主としてカシ類の材を用いていわゆるミカン削りにした板材を加工したもので、多くの場合柄が欠除している。鍬の身部に鉄の刃先をつけたらしいものもある。

a 一木鋤(6・7) 身と柄を1木でつくる鋤<sup>1)</sup>。6はほぼ完形をとどめる。割板を加工したもの。身の前面はゆるやかな舟底形を呈する。後面中央には柄の延長部を隆起させ、左右に向けて次第に厚さを減じている。身の肩部は柄と直角に交るが、下部にくらべて帯状に隆起させ少し厚さを増している。踏込み時の加圧を考慮したのであろう。身の先端は欠損のため不明。鉄の鋤先の有無も不明である。柄は身に対して約20°の角度をもち、身の後面中央部分から斜め上方にのび、屈曲する。柄の断面は円形を呈し、ゆるやかなS字形の曲線を描いている。柄元はT字形を呈し、柄に対して直交する把手がつく。現存長87.5cm。身幅11.9cm以上、同長さ15.0cm以上、同厚さ3.8~0.4cm。柄長72.5cm、同直径3.2~2.5cm、把手長6.7cm以上、同径3.3~2.6cm。材；アカガシ。AS06 I 黒B出土。

一木づく  
りのスギ

7は一木鋤の断片である。身と柄の一部をのこす。身は扁平で板状を呈するものらしいが、左右の側辺が欠損しているため不明。肩部の高さが左右でことなり、一方が1.5cmほど高い。身の後面中央部を隆起させて柄をつくりだす。柄は身に対して約20°の角度で斜め上方に立ち上る。6よりも加工が粗い。現存長33.5cm。身の現存長18.3cm、同厚さ0.7cm、同幅5.2cm。材；アカガシ。AS07 I 黒B出土。

b 組合せ股鋤(8) 身と柄とを別木でつくる鋤であるが、身の中央に袂りをいれて二股につくる組合せ股鋤で、約半分を欠失している。後面は平滑面に、前面はゆるやかな舟底形に削っている。着柄軸は断面を半円形に削り、後面の約半分に一段の切込みを入れ、前面の端部に蹄状の股をつくる。いずれも柄を緊縛するためである。身の肩部上面は左右にはほぼ水平面をなし、左右の側縁はわずかに内彎しながら下降する。身の先縁中央から股の袂りをいれるが、それは身全体の約1/2.5におよぶ。身の刃部は縁を薄くして剣先状を呈する。身の中央に柄を固定する一対の方孔をあげ、前面では緊縛用の紐などが、身から突出しないように、2孔間に溝をえぐっている。全長37.8cm。着柄軸長12.4cm、同幅約2.5cm、同厚さ2.3~1.5cm。身部長さ25.4cm、同厚さ2.4~0.4cm、同復原最大幅14.5cm。材；アカガシ属。BB08 II 砂出土。

組合せの  
二股クワ

c 膝柄鍬A(9・10) 掘形の身に斧柄に似た膝柄を装着したとかがえられる鍬。9は全長の約1/3.5を着柄軸とし、それ以下を掘形の身とする。加工は粗いが、前・後面の区別があり、前面は平滑面とし、前面では中央を厚くして左右の側辺を薄くして舟底形に削っている。着柄軸の断面はカマボコ形を呈する。すなわち、前面を平坦にし、後面に丸味をもたす。

掘柄クワ

1) 鋤・鍬の部分名称については堺大阪府文化財センター「海上遺跡」第4分冊の1木器編、

1978, にしたがう。

2) 膝柄鍬の分類については考察にゆずる。

## 第N章 遺物

その端部は後面から削りこんで節状につくる。身の肩部には左右から鋸で切込みをいれた長方形の突起をつくる。おそらく膝柄を固定するための措置であろう。身は柳葉形を呈し、縁縁を比較的薄くつくる。一側縁では若干の損傷を受けたのちも、なお使用した痕跡がみとめられる。先縁部には磨減痕が顕著であり、鉄刀先をはめた痕跡はない。全長49.8cm。着柄軸長14.6cm、同幅3.1cm、同厚さ2.3cm。身部長35.2cm、同幅10.3~7.8cm、同厚さ2.0~0.3cm。材；コナラ亜属。BM16Ⅲ砂出土。

10も9と同じような形をとるが、保存がよくない。前面を平滑面とし、後面を鈍い舟底形に整えている。着柄軸の断面は山形を呈し、後面の上部に一段の切込みをいれるのは、別木の柄を固定するためである。着柄軸と身との間には左右の突起がなく、次第に身幅をひろげている。現在、身の先縁は欠損している。現存長36.3cm。着柄軸現存長17cm、同幅3.2cm、同厚さ1.8cm。身部長残存長19.3cm、同幅7.8cm、同厚さ1.7~0.2cm。材；アカガシ属。BA08Ⅱ砂出土。

### 膝柄設クワ

d 膝柄設鉄 (11~13) 薄い板材からつくる二股の鉄。従来の見解では、身の上部に棒状の柄を固定する一種の着柄軸とする見方がつよかった。しかし、近年になって身の後面に斧柄のような膝柄を固定した類似の設鉄が発見され、鋸とするよりも鎌に想定する方の可能性がつよまった。

11は鎌身の完形品である。着柄軸を股形につくり、身部を二股につくる。着柄軸の先端は断面半円形の棒状に削り、下降するにしたがって左右に幅をひろげ、その伸びきったところが笠形に突出する。身部は刃を外側にした刀身を2本ならべたような形を呈し、着柄軸の突出の下部から次第に幅をひろげ、身のはほぼ中位のところから再び幅を縮める。先縁の中央から上部分に向う股を折り、外縁を刃状に薄くする。全長55.8cm。着柄軸長16.0cm、同幅1.5~11.9cm、同厚さ1.2cm。身部長39.8cm、同最大幅20cm、同厚さ1.0~0.4cm。材；アカガシ属。AS07Ⅱ砂出土。

12は11と同形だが、着柄軸と身部の一部が欠失している。この例では、前面の着柄軸から身部中央にかけて押圧痕跡があり、さらに左右の突出部の下部側面にも緊縛痕跡がのこり、膝柄の台部を固定した位置を示している。現存長38.0cm。着柄軸幅2.4~4.5cm、同厚さ1.4cm。身部最大幅14.5cm、同厚さ1.5cm。材；アカガシ属。BK12Ⅱ砂出土。

13は膝柄設鉄の破片。先の2点にくらべて身部が長く、幅が狭い形になる。下層からの出土品で、後述する佐紀池の例に類似しており、古い形式を示す可能性がつよい。現存長29.8cm。刃部幅4.8cm、同厚さ0.8~0.4cm。材；コナラ。BK16Ⅲ砂出土。

### クワの膝柄

e 鉄の膝柄 (14・15) 鉄の身に装着した柄である。一見横斧の膝柄にみえるが、台部の後面が長い平滑面をなし、台部前面頂部に緊縛用の溝を切込んでいるところが斧柄とはことなる。14の台部前面下部には紐でしばりつけたらしい緊縛痕跡がみとめられる。また、内側気味の太い握部の保存はよく、末端を失うがほぼ全長とみてよからう。台部と握部との角度は57°内外である。15も同形の膝柄だが、台部しかのこっていない。

14は膝柄鉄9とともに下層の接近した位置から検出されており、両者は一組になる可能性がつよい。15は上層から出土しており、膝柄設鉄(11・12)にともなう可能性もある。台部の幅が着柄軸の幅よりも若干広いことを除くと、とりつけてみて不合理は生じない。材はともに

サカギ。14の現存長60.5cm、握部径3.2cm、台部長23.7cm、同幅3.0cm内外。BN16Ⅲ砂出土。15は台部長23.3cm、同幅3.2cm、BN16Ⅱ砂出土。

f 広楸 (16) 一部を欠くがほぼ完形の広楸である。長方形の板から加工したもの。上縁と両側縁に弧状の伏りをいれる。上縁中央部には一段低い半円形の切込みをいれる。後面には逆T字形の隆起を削りだす。縦の隆起はいわゆる舟形突起に相当するもので、柄孔をあけている。舟形突起の下端にそって、横位の突起を削り出す。この隆起は下端部を厚くし、帯状に削りのこし、楸の下縁との間に段状の切込みをいれている。おそらく鉄刃先を先縁にはめる装置とおもわれる。楸身の前面は平滑に敷え、上縁の弧状切込みの下に鎌溝を横断させている。楸身の縦割れを防止する補強材をはめたのだろう。柄孔は縦長の楕円形を呈し、約45°の角度であけている。全長28.5~26cm、幅15.4~11.3cm、厚さ3.0~1.1cm、柄孔径3.8×3.0cm。材：アカガシ。BK16Ⅲ砂出土。

広クワ

g 平楸 (17) 長方形の板から加工した完形の平楸。全体を楕形につくり、とくに前面と後面とを区別しない。頭部の幅を狭くし、中央に縦に長い長方形の柄孔をあける。柄孔の下縁が約60°の角度をもつことから、鋭角に柄がつけられていることがわかる。刃部は下方に向けて次第に薄くし、刃縁を薄く削りだしている。ただ、刃縁の一方は使用時の磨耗が著しい。全長25.6cm、幅11.0~5.6cm、厚さ2.1~0.6cm、柄孔径5.1×2.9cm。材：アカガシ。BB08Ⅲ砂出土。

平クワ

h フォーク状農具 (18) 身の下部に数本の歯をつくるフォーク状農具の断片。現状では歯の1本をとどめるにすぎない。歯の上部は扁平だが、下降するに従って幅を縮め、先端では串状を呈する。上縁は身の肩部にあたるらしく、斜めに削っている。この破片は小さく、身の全形や着柄の状況を推測することはできない。現存長34.7cm、歯の幅3.0~1.1cm、同厚さ0.5cm。材：アカガシ属。AR06Ⅱ砂出土。

フォーク状農具

i 鋤柄 (19) 割材を丸棒状に加工したもの。一端は二次的に切断されているが、他端は旧形をとどめる。すなわち、丸棒の下端部を削りこんで断面半円形の半截形とし、先端部の弧面を斜めにそぎ、一側面から切込みをいれる。半截部の上面には横位の押尻痕があり、紐などを巻きつけて固定したことを示す。材がカン類でないところに多少の疑念があるが、鋤などに着装した柄の断片とおもわれる。残存長32.9cm、直径2.5cm、半截部の厚さ1.4cm。材：スギ。BK16Ⅲ砂出土。

スキの柄

j えぶり (20) 長方形の板材でつくる身部がほぼ完形でのこる。上下の長辺は一直線に削り、上縁の左右に方形の孔を各1孔あける。柄を支える棒材を挿入する孔だろう。左右の短辺は弧状につくる。前・後面の区別があり、後面の上寄りに横位の鈍いしのぎをとおす。ほぼ中心に楕円形を呈する柄孔をあける。この部分は少しく腐蝕が進むが、約137°の鈍角で柄を着装したようである。このえぶりは使用中に破損したらしく、3ヶ所に補修孔がある。しかし、下縁中央部の縦破を補修する孔は一孔しかなく、補修を断念した様子がうかがえる。全長38.2cm、幅18.3cm、厚さ1.1~0.6cm。材：アカガシ。AU07Ⅰ炭B出土。

エブリ

k 鎌 (21・22) 鎌の柄に想定しうるものが2点ある。21は割材を丸棒状に加工したものの一端の木口から鉄鎌を装着する溝を切込む。この溝に直交する2面をそぎおとして平滑面とする。いま頂部には擦痕があるが、二次的に切断されたもののようである。下端は焼失しており、

カマ

## 第Ⅱ章 遺物

全長を知ることはできない。一般的な鎌の柄は、外反する頂部の下寄りに溝が切り込まれており、この例はやや形を異にするがとりあえず鎌柄にあてておく。現存長24.2 cm。直径2.25～2.1 cm。溝の長さ5.0 cm。材；ヒノキ。BA07Ⅲ砂出土。

22は割材を丸棒状に加工した柄の下端。端部の木口面を斜めにそぎ、内側にやや突出する蹄形の柄尻をつくりだしている。他遺跡の例からみて鎌柄とみてよからう。現存長16.2 cm。直径1.9～1.7 cm。材；アカガシ。AS06Ⅱ砂出土。

1 柄部残片 (23) 割材でつくる棒状具の破片。現在では縦に割れた半分しか残っていないが、端部の一方が突出しているので工具類の柄に想定しておく。現存長 7.2 cm。直径 2.3 cm 内外。材；ヒノキ。BL16Ⅲ砂出土。

タゲタ m 田下駄 (24) 板目の割板材を加工し、長方形につくる左足用の田下駄である。表面と側面は粗い手斧はつりで整え、前縁の外側を弧状に削りこむ。鼻緒孔は3孔あり、前室が内側に偏している。歯はつくりだしておらず、田下駄に類するものと思われるが、外枠をとりつけた痕跡はない。なお、鼻緒孔は端であけている。全長24.9 cm、幅10.7 cm、厚さ 1.8 cm。鼻緒孔径0.8 cm 内外。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

ヨコツチ n 横槌 (25) 心持丸太材を加工したもの。全長のおよそ半分を細く削りこんで柄とし、身の頂部は粗い手斧はつりで整え、表面は樹皮を除く程度の加工である。柄端は折損している。身に叩きの痕跡がみとめられず、一般の横槌にくらべて細身であるから、かならずしも横槌に限定できないかもしれない。現存長26.8 cm、身部径4.2 cm、柄部径2.4 cm。材；シャシャンボ。AS07Ⅰ黒B出土。

タテツチ o 堅槌 (26) 心持丸太材を加工したもの。現在では柄を欠損している。また腐蝕が進行しており、加工痕跡などは不明瞭である。身の横断面は楕円形を呈し、柄元部分の直径に対して頂部の直径が大である。側面周囲には叩きの痕跡がなく、頂部の木口面に若干の磨滅がみとめられるので、堅槌に比定した。現存長14.6 cm、長径12.3～8.2 cm、短径9.5～6.2 cm、柄径 2.9 cm。材；カキ。BR09暗褐色砂出土。

カケヤ P かけや (27) 心持角材を加工したもの。身は直方体につくり、先端を表裏から斜めに截ちおとす。身の中央部の4面に敲打による窪みがあり、その周辺に刻線状の刃痕が無数にのこっている。柄は丸棒状に粗く削りこんでいるが、先端を折損している。現存長 42.1 cm。身の最大幅11.6 cm、同最大厚8.4 cm、柄部径4.4～3.7 cm。材；シャシャンボ。BQ14Ⅰ黒出土。

ツチノコ q 槌の子 (28) 心持丸太を加工したもの。両木口面を削りおとし、中央部にV字形の溝をめぐらす。側面周囲は樹皮を除く程度の加工にとどまる。一部分が焼けており保存もよくない。長さ14.5 cm、直径5.7～5.0 cm。材；広葉樹。出土層位不明。

タタキ板 r 叩き板 (29～32) 具体的な使用目的を類推しえないが、柄をもち何物かを叩いた道具であることが想定しうるもの、あるいはそれに準じる使用が想定されるものである。かならずしも農具に限定しえないが、一応この項に入れておく。29は板目の板をすばりの羽子板状に加工したもの。全長のおよそ半分を柄とし、両側面から細く削りこむ。身は平滑面をなすが、一面の中央部に横位で幅広の磨滅痕跡がある。おそらくこの部分で何物かを叩いたことを示すのであろう。長さ29.9 cm、幅9.0～2.1 cm。厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。AS07Ⅰ黒B出土。

30は心持丸太材を半截し、羽子板状に加工したもの。表面には割裂きの面を残しているが、



平滑面をなす。全面に磨痕痕跡をとどめ、とくに先縁部分が顕著である。裏面はなお丸太の円弧をとどめ、中央部で少しく面取りし、半ばから先縁にかけて斜めにそぎおとす。全長のはば半分を細めて柄とするが、その断面は半円形である。身の先縁を刃物のように薄くし、柄の断面を半円形につくることからすれば、別木の柄を着装する土工具などの類に属する可能性もある。しかし、ここでは磨耗が身の表面に限られていることを重視して、この項に置いておく。長さ36.8 cm、幅6.4~1.8 cm、厚さ1.8~1.4 cm、材；ツバキ。出土層位不明。

31は板目の細板材からつく。全長の約半分を柄とする。柄は身よりも少しく幅を狭め、丸味をもたせて細く割る程度であり、身と柄の間に明瞭な境はない。身は柄より薄くし、方頭の木口面に若干の磨耗がみとめられる。叩き板とするよりも攪拌の道具とする方がよいかもれない。長さ39.8 cm、幅3.7~1.9 cm、厚さ1.4~0.8 cm、材；ヒノキ。AS07黒色粘土出土。

32は31と同じような形をとるが、一側縁に刻目をいれ鋸のような形につくる。この刻目の部分には使用痕跡がみとめられ、側縁で叩いたことが想定される。この種の木器は奈良時代までひきつづきつづられているが、いまのところ用途を決めがたい。長さ33.7 cm、幅3.1~1.9 cm、厚さ1.3~1.1 cm、材；ヒノキ。BA08Ⅱ砂出土。

### iii 什器類 (PL.34・35)

日常生活に使用する家具や道具類に想定しうるものは少ない。容器類の破片を主とするが、糸巻など紡織具と考えられるものもこの項に置いておく。

a ちきり (33) 長方形の柾目板を用い、短辺に把手状の突出部を削りのこす。片面の突出部付根の付近に著しい磨痕がみられ、身の両面にも数条の擦痕がのこる。とくに一面のX字形の擦痕は刃物によって刻みこんだものようである。左右の突出部を軸とし、身部に紐糸をまく織機のちきりに想定するのだが、布幅を示す身の長さが少しく短いところに難点があるかもしれない。長さ40.7 cm、身部長26.0 cm、同幅11.1~9.3 cm、厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。AS06Ⅱ砂出土。

チキリ

b 糸巻の横木 (34) 柾目の細板を加工したもの。中央部分を幅広にのこし、両端に向けて次第に幅を縮め末端では丸棒状を呈する。中央部では相欠様の仕口をのこしてあり、(一方は二次的に削りとられている) 同形の部材を十文字に組合せる糸巻の横木であることがわかる。現存部長19.4 cm、幅2.6~1.4 cm、厚さ1.8~1.2 cm。材；ヒノキ。AR06Ⅱ砂出土。

イトマキ

c 自在鉤 (35) 木の幹と枝の股を利用したもの。腐蝕が著しく、かつ一端を折損しているの、旧状はそなわれている。幹の部分を嘴のように尖らせ、股の部分にものを吊す自在鉤に想定しておく。現存長16.8 cm、鉤長11.9 cm、吊手径1.8 cm。材；ヨナラ亜属。AS07Ⅰ黒出土。

じざいかぎ

d 案 (36) 丸太の二つの割り材を用い、木心をはずし木裏面を上面にする横木取りの案である。現在、縦に割れておよそ半分を欠損しているが、全形をうかがうことは可能である。台板は長方形の板状に割りだし、左右の短辺に外反する口縁をつくる。身の上面は平滑面をなすが、下面はわずかに丸底風に仕上げている。下面の長辺にその部分に脚を割りだす。脚はわずかに外反する長方形の板状につくり、その中央部に弧形の割形をいれ、四脚とする。この割形は中心を意識して割りだしたものらしく、向って左側の割形が深くなり段が生じている。埋

あん

没時に左右口縁部が変形しているが、全体の仕上げは丁寧であり、鉋による削り痕跡が顕著にのこっている。長さ45.04 cm。残存幅12.5 cm。通高7.9 cm、身の厚さ1.1~0.7 cm。材；ヒノキ。BM16Ⅲ砂出土。

**容 器** e 箱形容器(37・38・39) すべて断片だが、箱形の器形を想定しうる。37は割材を削りぬいた長方形の箱で、器壁の一部と底がのこる。現在、長辺の口縁部が内傾しているが、これは発掘後の不手際で乾燥したためであり本来はわずかに外反したもののようである。それは底部から器壁立上り部分に残る割材から推測しうるので、長辺・短辺ともにみられ、広口の箱形容器となる。現存長23.7 cm。現存幅11.0 cm、底部厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。出土層位不明。

38・39は口縁部の破片で、木口部なので長方形容器ならば短辺にあたる。斜めに立上る幅広の口縁端形を形成している。38は器高7.5 cm以上、口縁端の幅5 cm。材；コウヤマキ。BN16Ⅱ砂出土。39は箱の隅部の残片で、器高4 cm以上、口縁端の幅4 cm。材；ホノキ。BB08Ⅲ砂出土。

**蓋** f 蓋の破片(40) 外面をわずかに甲高とし、内面を浅目に窪ませている。現存長7.5 cm、現存幅3.0 cm、高さ0.7 cm。材；スギ。AS06Ⅱ砂出土。

g 舟形容器(41) 残存状況が悪く細片になっているが、全形をうかがうことは可能である。二つ割りの丸太材からつくるもので、木裏面を口縁部にあて、長径を年輪方向に向える横木取りである。全体を平底の舟首形にかたどり、底部は内外とも平滑面をなす。口縁部は斜めに立上り、端に鋭角をつける。尖形に対応する短辺の口縁部は直線になるようだが、把手の有無は不明である。他遺跡にも短辺にコ字形の把手がつく同形の容器があり、ツルベに比定されている。<sup>1)</sup> 本例の場合把手の有無が不明のため用途をきめがたい。現存長33.5 cm、最大幅23.5 cm、高さ5.5 cm、底の高さ1.1 cm。材；スギ。BB08Ⅲ砂出土。

**じゅうのう** h 十能形木器(42) 箱の一短側壁を欠いたような身に棒状の把手をつくりだしたものの。縦半分程を欠損するが、全形をうかがうことは可能。心をはずした二つ割り丸太を用い、上面を木裏面とする横木取りでつくる。身は隅欠きの長方形を呈し、側壁が斜めに立上る。把手をつくりだす短辺の口縁部を厚くし、これに対応する短辺には側壁を欠く。一短辺から棒状の把手をつくりだすが、裏側に溝をほりこんでいる。なお、開口部の外底は斜めに削り、底の厚さを次第に減じているので、たとえば十能のようにものをすくいあげる道具に比定しうる。全体に加工が粗く、手斧はつりの刃痕を顕著にとどめている。現存長37.8 cm、最大現存幅10.6 cm、高さ6.7 cm。材；スギ。出土層位不明。

**フ ネ** i 槽(43) 心をはずした二つ割りの丸太を用い、木裏面を上面にあてる横木取りの槽である。長辺部しか残存しないが、小判形の全形を想定することは可能である。底部は内外とも平滑面をなし、口縁は斜めに立上る。全面は手斧はつりで仕上げたらしく、はつり面をよくとどめている。現存部長12.3 cm、高さ6.8 cm。材；マツ。出土層位不明。

#### iv 建築部材 (PL. 36・37, Tab. 7~11, Fig. 33)

建築部材としては、梯子のはか柱や板などがある。梯子がほぼ旧状をとどめるのに対して、

1) 上東遺跡の才の町調査区から類似のものが2点出土している。岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集、山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ、1974、p. 125・146。

他は片々とした部材で、建築物を復元しうるほどの遺物はない。これらの部材は主として下流域の AS06 を中心とする範囲でまとまって発見されている。

a 梯子 (44・45) 一木で作るものと 2 本の支柱に横木をわたした組梯子とがある。44 は黒木の心持丸太からつくる一木の梯子である。背面は円周のおよそ 1/4 をはつりおとして平滑面とする。表面は全長を 4 等分して 3 段の足かけを削りだす。足かけの上面は身に対して垂直面をなす半円形を呈し、下部は次第に深く削りこんで次の段に移行する。段の外周面と身の両側面には一切の加工をくわえず、皮つきのままである。上端木口は平滑面をなし、弥生時代の類似品のように高床のネズミ返の下面に挿入する柄をつくりだしていない。全体は手斧はつりて整えるが、背面と最下段以下の加工はきわめて粗雑である。全長 158.7 cm, 幅 11.0~9.3 cm, 厚さ 9.0~4.0 cm, 段の間隔 (上端から) 33.5+36.1+39.8+49.3 cm。材; コナラ亜属。BA08Ⅱ砂出土。

ハ シ ゴ

45 は 2 本の支柱に横木をわたす組梯子である。材は黒木丸太で、斧で両端を切断したり、横木をわたす部分を窪ませる程度の加工にとどまる。支柱には本を下にして横木を固定する浅い溝を 3 個入れる。横木は枝ないし灌木を用いたらしく細い。2 本の横木が支柱と重なって出土したが、横木をとめたであろう紐などの痕跡はなかった。なお、支柱の 1 本は他より若干細く枝わかれている。支柱長 111.5 cm, 直径 5 cm 内外, 横木の間隔 (上端から) 25+27+28+31.5 cm, 横木の長さ 39 cm, 直径 3 cm 内外。材; コナラ属。BA08Ⅲ砂出土。

b 柱材 (46~56) ここでいう柱材というのは嚴密な意味ではなく、柱状の木材という程度の意味である。46 は丸太材の一木口を斧で切断したあとをどめ、その内寄りに手斧はつりによる切欠きをいれている。他の一端は折損。現存長 62.4 cm, 径 5.4~5.0 cm。材; リョウブ。AS07Ⅰ黒出土。47 は角材。腐蝕のため削り加工の痕跡は不明である。一端では側面から切込みをいれる。しかし折損のため、相欠仕口になるのか、またこの部分から幅を狭めているのか不明である。もう一方の端には裏面に貫通する柄孔をあけた痕跡がある。現存長 71.5 cm, 幅 5.0 cm, 厚さ 2.9 cm。材; ヒノキ。BK16Ⅱ砂出土。48 は細い黒木丸太。末端は折損するが、本は一面から斜めに削って尖らせている。現存長 88 cm, 直径 3.8~2.5 cm。材; コナラ亜属。AS07Ⅰ黒出土。

ハ シ ラ

49 は柱根。表面を手斧はつりて整え、先端を粗い尖頭形に尖らせている。現存長 62.0 cm, 直径 15.7 cm。材; マツ。BK16Ⅱ砂出土。50 は黒木丸太の断片。加工部分をとどめていない。現存長 65.3 cm, 直径 7.5 cm 内外。材; マツ。AS06Ⅰ黒出土。51 は黒木丸太材。両端に斧による切断のあとがみられる。手斧はつりによる浅い切込みが 1 箇所ある。長さ 94.4 cm, 直径 8.0 cm 内外。材; シキミ。AS06Ⅰ黒出土。

52 は黒木丸太材。先端の木口から溝を切りこみ、溝の下部側面に 2 箇所のはつり痕がある。基端は二次的な切断をうけている。桁ないし梁をうけている構造材であろう。長さ 179 cm, 直径 7 cm 内外。材; コナラ亜属。AS90Ⅰ黒出土。54 は枝と樹皮をのぞいた丸木。長さ 114.3 cm, 直径 3.5 cm 内外。材; マツ。BA08Ⅲ砂出土。

55 は黒木丸太。両端は斧で整え、基部に枝を截ちおとした痕跡をとどめる。長さ 163.2 cm, 直径 12.0 cm 内外。材; マツ, 出土層位不明。

56 は皮をはいだ丸太材。両端を斧で整えるが、基端は両側から削りこんで舟首形を呈する。

柱表面のところで手斧などの刃痕がみられ、台形の切込みあとも残る。長さ167cm、直径9.0cm内外。材；ヒノキ。AR07Ⅲ砂出土。

## イ タ

c 板材(57~76) 板材も扁平な部材という程度の意味であり、特定の用途を推測しうるものは少ない。また、明らかに土工具などの材料とみられるミカン割りの材もこの項にふくんでいる。57は小屋の妻部分を覆う壁板。三枚の板を横につないだもので、現在三角形の隅部が残存している。下辺の隅寄りに3箇所切込みがあり、その上方で一条の押圧痕跡が横断する。あて木の痕であろうか。斜辺は下辺に対して45°の角度にそそえ、木口に沿ってやはり一条の押圧痕跡がある。全体に保存が悪く、表面の加工痕跡は不明。現存幅84.8cm、現存高92.4cm、厚さ0.8cm内外。材；ヒノキ。AS06黒粘土出土。

58は丸太材を両側面から割裂いた厚手の板。腐蝕が著しく加工痕跡はすでに消失している。現存長181.0cm、幅9.0cm内外、厚さ3.5cm内外。材；イスマキ。BA08Ⅲ砂出土。59は板目の割板材。木目にそって割裂いた痕跡をとどめ、手斧による整形をくわえていない。一面に割裂時に生じたらしい段差が上下に通っている。現存長158.4cm、幅16.0cm、厚さ1.8~3.6cm。材；ヒノキ。BA08Ⅲ砂出土。

60は柱目の割板材(Fig. 33)。一端に焼け焦げの痕跡があるが、ほぼ完形品である。一個縁にそって2孔で1対となる孔が上下2箇所にある。おそらく板を縦じわすためであり、壁板の可能性が大きい。長さ142.0cm、幅13cm内外、厚さ1.2cm内外、継ぎ孔の位置(2孔間の中心をとる。保存良好の木口から)41.6+51.0+49.4cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

## ホゾ穴のある板

61は板目の割板材(Fig. 33)。一端は腐蝕しているが、ほぼ完形。板の中央の端寄りにそれぞれ1個の柄穴をほる。一方の穴は著しく腐蝕しているが、他は旧形を保っている。長さ133.0cm、幅17~15cm、厚さ1.0cm内外。柄孔の位置(保存良好の木口から柄孔の心まで)33+68+32cm。材；ヒノキ。BU07Ⅰ黒出土。

62は板目の割板材(Fig. 33)。一端が腐蝕しているが、61と同様に両端寄りに各1孔の柄孔をあけている。長さ64.0cm、幅13.5cm、厚さ1.3cm、柄孔の大きさ5.0×3.0cm。柄孔の間隔(内々)39.2cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

63は板目の割板材に柄孔をあけたもの(Fig. 33)。この例では板が厚く、木口面をいねいに丸味をもたせて削り、若干の磨耗痕がある。一方の柄孔部分は欠損しているが旧形を知ることにはできる。長さ73.6cm、幅9.7cm、厚さ2.0~2.5cm。柄孔の大きさ7.0×3.0cm。柄孔の間隔(内々)42.9cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

64は柱目の割板材で完形をとどめる(Fig. 33)。割裂き時に生じた高い部分を粗く手斧はつりする程度の加工にとどまり、それ以外の部分には割裂きの面をのこしている。一方の側面から滑りくいをいれ、上下に通している。また溝を貫通する目釘孔が3箇所みられる。おそらく縦向きで板をつなぐ加工であろう。目釘は固定のためのもの。長さ137.4cm、幅27cm、厚さ1.7cm。溝の深さ1.7cm内外、同幅0.3cm。材；ヒノキ。BK12Ⅰ黒出土。

65・66はともに幅の狭い板目の板材(Fig. 33)。表面は加工をくわえず、割裂きの面をとどめる。また、腐蝕や焼け焦げによる損傷が目立つ。ともに材はヒノキで、BA08Ⅲ砂から出土。65は現存長82.0cm、幅10.9cm、厚さ1.0cm内外。66は現存長77.9cm、幅12.3cm、厚さ1.1cm。67も板目の割板材。表面に加工をくわえず、一方の木口辺に斜めの切欠きをいれ、

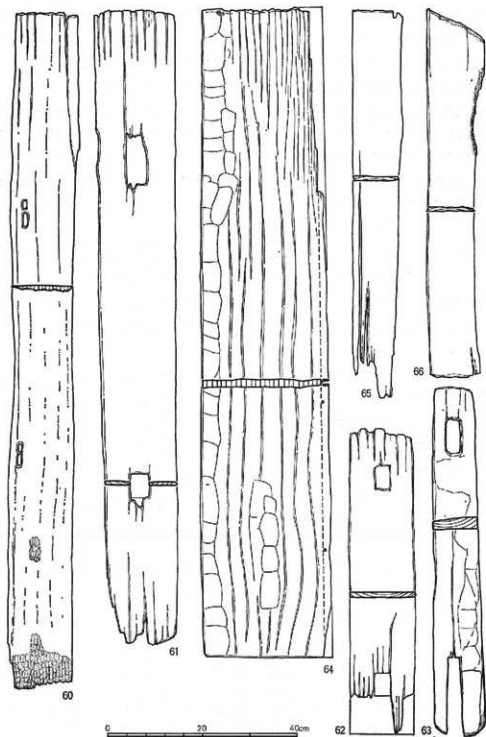


Fig. 33 SD6090出土板材実測図

軸状の突起をつくるが意味不明。また長辺の2ヶ所に切欠のようにみえる部分があるが、これは腐蝕による。長さ108.7 cm、幅9.6 cm、厚さ0.6 cm 内外。材；針葉樹。出土層位不明。

68は厚手の板目板を丁寧に加工した小形の板。木口の四辺を面取りし、一方の側面に端止めの溝抉りをいれる。この溝は材の一方に片寄っており、それ以下の表裏の腐蝕が著しいのは使用法的一端を示すかもしれない。長さ53.1 cm、幅8.0 cm、厚さ2.4 cm、溝の長さ26.4 cm、同幅1.0 cm、同深さ1.7 cm。材；ヒノキ。BK121黒出土。

第IV章 遺物

69は二つ割の丸太を加工したもの。現状では二次的に縦に割られている。中央に丸太の表面をのこす台形の隆起をのこし、その上下を板状に薄く削平する。長さ61.7cm。現存幅6.0cm、現存高6.6cm、隆起部高さ4.5cm、長さ16.7cm。材；イチイ。AS06Ⅰ黒出土。

70は割裂きの粗い木目を残す割板。板のほぼ中央に貫通する柄孔をあけている。柄孔は表裏から鑿であけたらしく、喰違いを生じている。両端の木口は斧で粗く切断した状態にとどまる。長さ44.3cm、幅7.2cm、厚さ2.2cm、柄孔2.4×1.8cm。材；スギ。AR06Ⅰ黒出土。71も板目の割板。表裏ともに割裂きの粗面をとどめ、両木口部分を斜めに粗く削りおとす。長さ6.1cm、幅6.0cm、厚さ1.3cm。材；ヒノキ。AR06Ⅰ黒出土。72は心持板材の断片。両端はすでに切断されているが、一方の木口に柄孔の痕跡をとどめている。長さ17.7cm、幅8.5cm、厚さ4.0cm内外。材；ヒノキ。出土層位不明。

73・74・75・76は丸太をミカン割りにした土工具などの材料。表裏に割裂きの粗面をとどめるほか、加工はみとめられない。いずれも材はコナラ亞種。73は長さ35.6cm、幅6.5cm、厚さ2.5~1.2cm。AT07Ⅲ砂出土。74は長さ30.6cm、幅4.5cm内外、最大厚3.9cm。BK16Ⅲ砂出土。75は長さ28.0cm、幅3.9cm、厚さ1.8~0.4cm。BK16Ⅱ砂出土。76は長さ38.5cm、幅8.9cm、厚さ4.0cm内外。BA08Ⅲ砂出土。

d 杭 (77~80) 雑木の溜木を

利用し、一端を斧で粗く尖らした杭。いずれも断片で、全長を知りうるものはない (Tab. 7)。

番号	〈残存長〉〈直径〉		〈材種〉		〈出土位置〉〈層位〉		
	cm	cm					
77	64.3	4.5	サ	カ	キ	AR 06 Ⅰ砂	
78	24.7	5.5	サ	カ	キ	BK 16 Ⅲ砂	
79	45.4	4.5	ア	カ	ガ	ン	偶 BN 16 Ⅲ砂
80	56.6	5.0	マ	ツ	不	明 不明	

オ モ リ

e 木鏝 (81~83) 丸木の断材。

木口面と側面の一部を削る程度の加工にとどまり、表面にはなお樹皮をとどめる。81は少しく長い、平城宮跡の奈良時代木器の例では側面から穴をあけた類似品が見えられているので一応槌の子のような鏝に比定しておく (Tab. 8)。

Tab.7 杭の寸法

番号	〈長さ〉	〈直径〉		〈材種〉		〈出土位置〉〈層位〉	
		cm	cm				
81	31.9	5.9~3.9	シ	イ	ノ	キ	AR 06 Ⅰ砂
82	17.7	7.0	ツ	バ	キ	?	BA 07 Ⅲ砂
83	20.0	6.3~5.1	ツ	バ	キ	?	BN 16 Ⅲ砂

Tab.8 木鏝の寸法

ク サ ビ

f 楔 (84~87)

材を割り裂くときに用いる楔に想定しうるもの。丸木と割材との別があるが、いずれも先端を両面からそぎおとし、斧頭状

番号	〈長さ〉〈幅〉		〈厚さ〉		〈材種〉		〈出土位置〉〈層位〉			
	cm	cm	cm	cm						
84	20.1	4.5	—	—	シャ	チャン	ボ	割木 BB 08 Ⅲ砂		
85	27.5	5.5	—	—	サ	カ	キ	丸木 BA 07 Ⅲ砂		
86	10.3	5.8	2.3	—	コ	ウ	ヤ	マ	キ	割木 不明 不明
87	12.0	6.7	2.5	—	コ	ウ	ヤ	マ	キ	割木 不明 不明

Tab.9 楔の寸法

につくる。85の頭頂部には叩き痕がのこる。84は両端を折損している、他の部材である可能性もある (Tab. 9)。

榑 材

g 棒状部材 (88~119) 棒状に加工した部材を集める。いずれも用途は明らかにしがた

い。88~94は割材を丸棒状に加工し、一端に突出する節を削りだすもの。多くは二次的に切断されたり半截する加工がくわえられている。ただし、88は表面の加工が丁寧で、端部に斜めの削りこみがあるので、農具の柄になることもかんがえられる。

95~104も割材丸棒の断片であるが、先端に節状の突起をとどめないもの。いずれも二次加工をうけており、原形を知りたい。95は一端をそぎおとして、下部に斜めの切込みをいれる。96は一端に切込みをめぐらしているが、これは切断するための切込みかもしれない。

105~110は割材でつくる角棒の類。部材というよりも木屑の類に属するものかもしれない。ただし、109・110は長大な角棒で、他と異なり建築材として使用された可能性がある。

111~119は雑木の皮付き丸棒。小枝を払ったものや、先端を尖らすものがあり、屋根の木舞などに利用した可能性がある。114と115とは連続する可能性がある。117は唯一の完形品である (Tab. 10)。

h 網板小片 (120~128) 板の小片をあつめる。形状は一定しない。120・125は両端を斜めに截つ。121・122は側面から切込みをいれる。123は一方の木口を細める。124・126は一端を尖らす。127は一端に相欠ような溝を切る。128は腐蝕が顕著だが、わずかに納孔の痕跡をとどめる (Tab. 11)。

#### v その他の木器

(PL. 40・41, Tab. 12・13, Fig. 34)

点数が少ないもの、あるいは形は明瞭であっても用途が不明なものをこの項にまとめる。

a 火鑽臼 (129) 心持ちの角棒でつくる。各面はていねいに削り、上面に6個の扇形の凹部を切込み、その凹部に当たる側面にV字形の溝をつける。6個のうち2個は使用されており、円錐形の窪みとなり、その内面から溝にかけて焼け焦げている。長さ27.6 cm、幅2.0 cm、厚さ1.5~1.0 cm。火鑽件孔径1.0 cm内外。材；ヒノキ。AS07 I 黒B出土。

番号	(長さ) (径・幅)		(材)	(種)	(出土位置)	(層位)		
	cm	cm						
88	63.4	2.5	サ	カ	キ・割木	BN 16	Ⅳ	砂
89	41.9	2.2	ス	ギ	割木	BA 07	Ⅳ	砂
90	9.8	2.9	ヒ	ノ	キ・割木	BL 16	Ⅲ	砂
91	9.8	1.3	ヒ	ノ	キ・割木	BB 08	Ⅲ	砂
92	15.7	3.1	ヒ	ノ	キ・割木	BK 16	Ⅲ	砂
93	18.3	1.9	ヒ	ノ	キ・割木	BA 08	Ⅳ	砂
94	19.9	1.1	ヒ	ノ	キ・割木	BA 07	Ⅳ	砂
95	62.5	3.0	ス	ギ	割木	BK 16	Ⅲ	砂
96	53.8	2.4	ヒ	ノ	キ・割木	BA 07	Ⅲ	砂
97	48.3	3.0	ヒ	ノ	キ・割木	BN 16	Ⅳ	砂
98	49.2	3.6	ク	リ	割木	BA 07	Ⅲ	砂
99	21.8	2.0	ス	ギ	割木	BA 08	Ⅱ	砂
100	22.1	2.8	ヒ	ノ	キ・割木	AB 08	Ⅲ	砂
101	12.2	2.4	ス	ギ	割木	BA 07	Ⅳ	砂
102	15.1	1.0	コウヤマキ	キ	割木	AR 06	Ⅱ	砂
103	11.0	2.8	針	葉	樹・割木	BA 07	Ⅳ	砂
104	28.3	2.2	コナラ	雑	割木	AR 06	Ⅱ	砂
105	20.3	2.4	ヒ	ノ	キ・割木	BN 16	Ⅳ	砂
106	25.9	2.2	ス	ギ	割木	BA 08	Ⅱ	砂
107	13.3	2.4	ヒ	ノ	キ・割木	BA 08	Ⅲ	砂
108	18.6	3.9	サ	カ	キ・割木	BN 16	Ⅳ	砂
109	12.0	3.2	ヒ	ノ	キ・割木	AS 07	Ⅲ	砂
110	132.5	2.8	ヒ	ノ	キ・割木	BA 08	Ⅲ	砂
111	38.7	2.0	サ	カ	キ・丸木	AS 07	I	黒
112	30.0	1.4	ヒ	ノ	キ・丸木	BB 08	Ⅲ	砂
113	43.1	1.8	ヒ	ノ	キ・丸木	BA 07	Ⅲ	砂
114	53.0	1.4	サ	カ	キ・丸木	AS 07	I	黒
115	48.8	1.8	サ	カ	キ・丸木	AS 07	I	黒
116	58.0	1.6	イ	ボ	タ・丸木	AS 07	I	黒
117	109.5	1.3	リュウブ	丸木	AS 08	I	黒	
118	84.8	2.7	ヒ	ノ	キ・丸木	BA 08	Ⅲ	砂
119	12.1	2.5	ヒ	ノ	キ・丸木	AR 06	黒結土	

Tab. 10 棒状部材の寸法

番号	(長さ) (幅) (厚さ)			(材)	(種)	(出土位置)	(層位)		
	cm	cm	cm						
120	11.2	2.3	0.8	ヒ	ノ	キ	AR 06	I	黒
121	6.8	2.9	0.8	ヒ	ノ	キ	BA 07	Ⅳ	砂
122	5.8	2.3	0.9	ヒ	ノ	キ	BA 08	Ⅱ	砂
123	7.4	2.9	0.8	アカガシ	属		AS 06	Ⅱ	砂
124	16.4	1.9	0.4	ヒ	ノ	キ	AR 08	Ⅲ	砂
125	21.1	5.8	0.8	ヒ	ノ	キ	BN 16	Ⅲ	砂
126	21.6	2.9	1.4	ス	ギ		BA 07	Ⅳ	砂
127	31.8	4.1	0.7	ヒ	ノ	キ	BA 08	Ⅱ	砂
128	30.6	5.4	1.7	ス	ギ		AS 06	Ⅱ	砂

Tab. 11 細板小片の寸法

角 棒

丸 棒

網 板

ヒキリウス

**木製の矢** b 木矢 (130・131) 割材からつくる。鐵部を紡錘形にかたどり、丸棒の矢柄をともづくりにする。折損のため全長は不明。2点は、ほぼ同形だが、131のほうが鐵部と矢柄部の境がはっきりしている。折岡泉湯納遺跡では篠竹の矢柄に木鐵を装着する実用品らしいものが出土している。また平城京左京一条三坊十五・十六坪遺跡からも、奈良時代の同形の木矢が発見されている。後者は祭祀用の形代である。ともに材はヘノキ。130は現存長20.8cm、鐵部長約5.5cm、同最大径1.8cm、矢柄部径0.7cm。AS06Ⅱ砂出土。131は現存長10.1cm、鐵部長4.2cm、同最大径1.8cm。AS06Ⅱ砂出土。

**タテグシ** c 堅櫛 (132) 細い竹ひごをならべ、中央を糸でかがってU字形につくる堅櫛。古墳から発見される同種のものとは変らない。現在、齒部を欠き頭部のみがのこる。竹ひごは11本で、折曲げて22本の齒とする。齒と頭部との境を幅広く糸でまき、黒漆をぬりあげている。現存長2.0cm、幅2.4cm、厚さ0.15cm内外。AS07Ⅰ黒A出土。

d 袋形木器 (133) 頂部を円形の鋸頭形にかたどり、角柱の足をつくりだす袋形の木器である。足の先端は二次的に切断されている。部材を結合する具であろうか。用途は不明。長さ6.1cm、頂部径2.9cm、底部径1.5×1.2cm。材：アカガシ属。AR07Ⅲ砂出土。

**セオイハシゴ** e 背負梯子 (134~137) 灌木の股部を利用した一種の支柱。一枝を角状にのこし、幹部の両側から削平して扁平にし、一定の間隔をおいて方形の柄孔をあける。135は幹部の両端を欠くが、柄孔を5個あけ、1孔には楔止めにした横木の一部が残存する。136は股部の破片で、135と対になるものであろう。股部をはさむ柄孔の間隔は135と同じである。137は同種の破片で基端部にあたる。134は薄い針状を呈し、材とつくり方からして135の先端に想定できる。以上のような部材から左右に2本の支柱をたて、五段以上の横木をわたす形が想定できよう。その形態を復原すると、現在、地方の民俗例にみられる有爪形の背負梯子に近い形態をとる。薪炭や稲、マガサなどを背負って運ぶ道具で、左右の支柱に三・四本の横木をわたし、角状に外方にのびる股部で荷を支える。本例にそうした用途を想定して火過なからう (Tab. 12)。

f 嘴状木器 (138) 木の股部を利用した道具。身部を幹にとり、柄部を枝にとるのであるが、身に対して柄が鈍角になる。身は木裏面を削平するにとどまるが、中央に稜をとおして両側縁を薄くする。先端が折損しているため使用法を知ることができない。2本で1対となり、その間に網をはった漁具になるかもしれない。現存長28.3cm、身最大幅4.1cm、厚さ1.9cm、柄径2.3cm。材：クリ。BA07Ⅲ砂出土。

g 脚状木器 (139・140) 139は基端を欠き、140は末端を喪失しているが、同形の部材にみえる。心持材を加工するのだが、末端に自然面をとどめるコブ状に削りのこし、その下部

番号	(現存長)	(幅)	(厚さ)	(柄孔径)	(材種)	(出土位置)	(層位)
	cm	cm	cm	cm			
134	18.4	2.4	1.0	1.0×1.2	サカキ	AS 07	I 黒
135	86.2	3.4	2.4~1.6	1.4×2.6	サカキ	AS 07	I 黒
136	25.4	2.6~4.8	1.5~2.0	1.8	サカキ	AS 07	I 黒

Tab.12 背負梯子の寸法

1) 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1976, p. 112。

2) 『平城宮報告Ⅱ』1974, p. 82。ここでは不明

木器としている。

3) 脇田雅彦『背負い網・背負い板の形態』『民具マンスリー』11巻5・6号, 1978。



## 3 木製品

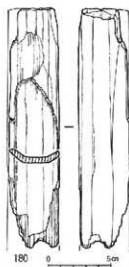


Fig. 34 刀鞘断面図

を角柱形にし、基端を蹄状にかたどる。案などの脚に想定しておく。139は現存長22.8cm, 最大径4.1×3.2cm。材；サカキ。BA08Ⅱ砂出土。140は現存長24.8cm, 最大径3.6cm。材；エゴノキ。AS07Ⅰ黒出土。

h 刀鞘(180) 片面に刀身を挟むための刃込みを施し、外面には曲面をつけた鞘の先端近くの断片である(Fig 34)。現存長19.1cm, 最大幅3.9cm, 厚さ1.2cm。材；スギ。BN16Ⅱ砂出土。

i ヒレ付丸棒(141) 割板から加工したもので、軸状の丸棒に板を接合したような形につくる。現状では両端を折損しているため、用途は不明。現存長17.3cm, 最大幅4.5cm, 丸棒径1.3cm。材；サカキ。BA07Ⅰ黒出土。

j 節のある丸棒(142) 割材を加工した丸棒。先端を円頭形にととのえ、その下部に長方形の納孔を明け、やや間隔をおいて袋状の節をつくりだす。納孔は少しく斜めに傾き、内に納の断片をとどめる。節以下は折損のため不明。現存長36.3cm, 直径2.0cm内外。納孔2.1×0.4cm。材；スギ。AS07Ⅰ黒出土。

k 袂りのある板材(143) 長方形の板材の一長辺から台形の袂りをいれたもの。他遺跡からも類似品が比較的多く発見されているが、用途不明。長さ25.8cm, 幅10.0cm, 厚さ1.0cm。材；ヒノキ。AS07Ⅰ黒出土。

l 撥形木器(144-145) 割板材を撥形にかたちどり、短辺の中央に柄をつくる。一面は平滑面をなすが、他面の中央部には、板を横断する幅広の仕口を切りこむ。144では平滑面長辺に面取りがみられ、145では平滑面に針書きの刻線がある。ともに、長辺の木口面に磨耗痕がみとめられ、一種の台脚のような用途を想定しうる。ともに材はヒノキ。144は長さ19.8cm, 幅12.9~5.6cm, 最大厚2.0cm, 仕口幅8.1cm, 同深さ0.4cm。AR06Ⅱ砂出土。145は長さ18.7cm, 現存幅4.9cm, 最大厚2.0cm, 仕口幅6.2cm, 同深さ0.3cm内外。BA08Ⅱ砂出土。

m 加工のある木片(146~152) なんらかの加工のある木片をあつめる。146は側面からV字形の切込みをいれた割板。147は丸木に納孔をあけたものの断片。148は丸木を半割りにし、刃先状に削る。149は扁平な材に左右から切込みをいれる。150は目針孔をとどめる板片。151は覆り屑。152は納孔の痕跡をとどめる丸木断片(Tab. 13)。

刀の鞘

丸棒

バチ形木器

加工木片

番号	〔長さ〕〔幅〕〔厚さ〕		〔材 種〕	〔出土位置〕〔層位〕		
	cm	cm				
146	28.9	3.7	1.4 ヒノキ・割木	AS 07	I	黒
147	11.9	3.9	1.8 ヒノキ・丸木	AS 07	I	黒B
148	14.5	4.5	2.3 エゴノキ・丸木	AS 06	II	砂
149	14.8	3.4	1.3 アカガシ属・割木	BB 08	II	砂
150	6.6	3.5	1.8 スギ・割木	AS 06	II	砂
151	5.3	4.0	3.5 サカキ・丸木	AR 06	I	黒
152	28.7	6.3	6.9 シイノキ・丸木	AS 07	I	黒

Tab.13 加工のある木片寸法

## B SD8520 出土木製品 (PL. 42~44 Tab.14, Fig.35)

佐紀池下層の溝SD8520から発見された木器は、出土量としてはさほど多くないが、注目すべき遺物を含んでいる。出土量が少ないのでここでは種類別に分類せず、逐次遺物ごとの記述をくわえることにする。

一木づく  
りのスキ

a 一木鋤 (153~157) いずれもアカガシ属の原木をミカン割りにした材からつくったもの。152は丸棒状の柄にT字形の把手を削りだし、柄の下部がわずかに後面に屈曲する。身の後面はほぼ中央に柄端につながる隆起をつくり、前面は舟底形を呈し左右に向けて厚さを減じる。身の肩部は左右で幅を異にし、向って右側肩幅が広い。これに対応して刃先の磨耗状態も右の方がはげしい。左足利きの人の所有品であろう。全長107.8cm, 身部長20.5cm, 同幅14.4cm, 同最大厚2.2cm, 柄径2.9cm, 把手幅9.0cm, WG54 Ⅱ 砂出土。154も同形の鋤だが、やや短い。丸棒状の柄は直線的で、身の肩部で終る。把手は一部欠損するが、孫の手状を呈し、三角形にちかく、長辺の木口を折返したように厚くしている。身の後面は平滑面をなし、前面はゆるやかな舟底形。この例では身の向って左肩部の幅が若干ひろく、その直下の刃も著しく磨耗している。右足利きの人が使ったもの。全長98.4cm, 身部長21.9cm, 同幅15.7cm, 同最大厚さ1.8cm, 柄径2.9cm, 把手現存幅6.2cm, WO54出土。155・156は鋤身の断片。155は身の上部が厚く、先の部分のみ裏面から削って薄くする。とくにこの部分には再加工の削り痕跡がみとめられる。現存長23.1cm, 復原幅14.5cm, 最大厚2.0cm, WE54出土。156は身の刃先の断片。現存長6.0cm, 現存幅4.4cm, 厚さ0.9cm, WE54出土。157は柄の把手の断片。逆鉤形を呈する類のものに復原しうる。復原幅11.2cm, 厚さ1.7cm, WD26出土。

## 鎌柄状クワ

b 鎌柄状鍬 (158) ミカン割りの板材からつくる長大な鍬身の身。全長のおよそ7割を身とする二段の鍬であり、刃形を呈する身の上部に撥形の着装部をつくる。その棒状部分は前面を平滑面とする半円形の断面形とし、柄の着装の便をはかる。しかし、他の類似品にみられるような先端の節状のすべりどめを欠いている。基部の下部は左右にひろがり、のびきったところの左右に三角形の抉りをいれ、柄の繫縛位置とし、それ以下が刃部となる。刃部はわずかに内寄りを厚くし、後面外縁に法面をつけ、先に向りにしたがって薄くする。また、ほぼ半分以下の刃部に磨耗痕がみとめられる。全長82.6cm, 最大幅13.9cm, 最大厚2.0cm, 材: アカガシ属, WF53出土。

## ヨコツチ

c 横槌 (159・160) 心持丸木を加工した同形の横槌。砲弾形の身部に円柱状の柄をつくりだす。全面はいいいに削りだし、柄頭を太く削りのこす。2例とも身の側面周囲に使用による磨減痕跡が明瞭にのこる。身部の木口面には粗い面取りがみとめられ、7の木口面には鏝による切断のち小刀のようなもので調整した痕跡が見られる。材はともにサカヤ。159は全長28.4cm, 身部長17.0cm, 同最大径10.0cm, 柄径3.0cm, WF54出土。160は全長90.0cm, 身部長14.1cm, 同最大径8.5cm, 柄径2.8cm, WF54出土。

## ハシゴ

d 梯子 (161) 心持丸木からつくる一木の梯子。背面は円周のおよそ1/3をはつりおとして平滑面とする。両側面もやはり手斧はつりて平滑にととのえ、表面の足掛けの部分のみをもとの表面にちかい高さで削りのこす。足掛けの上面は身に対してほぼ垂直面をなす半円形を

呈し、下部面は次第に深く削りこんで次の足掛けに移行する。梯子の最下端は両側面から斜めに削る尖頭を呈する。残存は足掛けを2段のこす下半部で、上半部は二次的に切断されたらしく、両側から刃物で切込みをいれ、中央部で折りよった痕跡をとどめる。現存長68.9 cm、幅10.6 cm、最大厚7.1 cm。材；コナラ属。WG54出土。

ハ コ

e 箱形容器 (162) 割板材から木裏面を上にし、横木取でつくる箱形容器の断片。平面は長方形を呈し、その短辺を木口面にあてたようである。底部を欠くが、口縁部が斜め上方に立上る厚味のある器壁で、口縁端面が平坦面をなし、その外側が直立する。底部外面の剝離状況から、底には長辺にそう台脚がついていたものとおもわれる。全体は手斧はつりてつくり、口縁の周囲のみを小刀もしくは鉋のような刃物でいねいにととのえ、内面には丸盤様の削痕跡をとどめる。現存長19.8 cm、現存幅16.5 cm、現存高4.8 cm。材；ヒノキ。WC56 出土。

f まないた (163) 割板材からつくる。木心をさけて木裏面を上にし、横木取りのまないた。平面形は四隅を面取りした長方形につくり、上面を平坦面とし、下面に台脚をつくりだす。台脚は短辺にそって2個あり、その断面は梯形を呈する。長辺の両側面は直立するが、台の側面は内側に向って斜めになる。全面にわたって腐蝕が著しく加工痕跡などは不明であるが、上面に写眞の刻線が無数にのっている。長さ68.2 cm、幅40.0 cm、高さ7.0 cm。材；スギ。WD55出土。

まな板

g 編み巻き板 (164-167) 細板にアシのような繊維を巻きつけたもの。現状では4片にわかれるが、もとは同じ個体であつたらしい。ただし、裏面からV字形の溝をいれて切断し、断面にまで削り加工がおよんでいるため、接合できない。板目板の表裏を刀子様の刃物で粗くとのえ、両側面を面取りした細板を芯にし、アシを編みかつ巻く。つまり、表面に4条のアシを長辺にそろえて経とし、これを短片方向の緯でござ目に編む。裏面には経をおかず、コイル巻状を呈している。165の中央部の崩れているところでは、経のアシが重複する部分があり、織ぎ目であることがわかる。緯の織ぎ目は明らかでないが、末端と先端を重ねて編みこんだものようである。

編み巻き板

164と167では短辺に接する一側縁を斜めに削り、木口の角をおとしていること、木口面のやや内側に刃先で一孔をあけ、ここには編み巻きがおよんでいないことから、本来の両端であったことを示す。一方、4枚の細板は、17.5-18 cmのはほぼ同一長さに切り揃えられているが、165には両端、164・166には一端の木口切断面に斜めにあけた木釘孔痕がある。このことから、もとも同一間隔でなにもか固定されていた筒所を切断位置に選んだことを示している。

仮りに4枚が連続するものとして全形を推測すると長さ約72 cmとなり、両端をふくむ5箇所を固定する部材が想定でき、その際ござ目の面が表面に出ていたことになる。長さ17.5 cm、幅2.7 cm 内外、厚さ0.7 cm、アシの幅0.3 cm 内外。材；ヒノキ。WC54 出土。

h 加工板材 (168・169) とともに広葉樹の板をいねいに加工したもの (Fig. 35)。168は少しく弧面を呈するが、上下木口部で折損している。169は左右両側がやや薄くなる厚板。折損している木口部は材の端を示しているようである。しかし、もう一方の端は雨りよりの面が粗く、製品ないしは二次的に切断した痕跡のようにみえる。ともに部材になるのであろうが用途不明。168は長さ34.5 cm、幅11.0 cm、厚さ1.1 cm。材；ホノノキ。WD54 出土。169は長さ59.4 cm、幅13.2 cm、厚さ2.8 cm。材；アカガシ属。

加工の  
あるイタ

棒

i 棒状木器 (170~178) 用途は明らかにしがたいが、棒状の形をとる木器が9点ある。170は枝をはらった心持丸木的一端を加工したもの、木口面を斜めに粗く截ちおとし、その下部を浅く削りこんで、端部を亀頭形にする。それ以外の面は樹皮を除く程度でなお樹皮が残っている部分もある。一方の木口は折損する。171も170と同様の形をとる。現在頭部のみを残し、下部は折損する。172は心持丸木の両端を亀頭形に加工したもの。両端部分に削りの加工

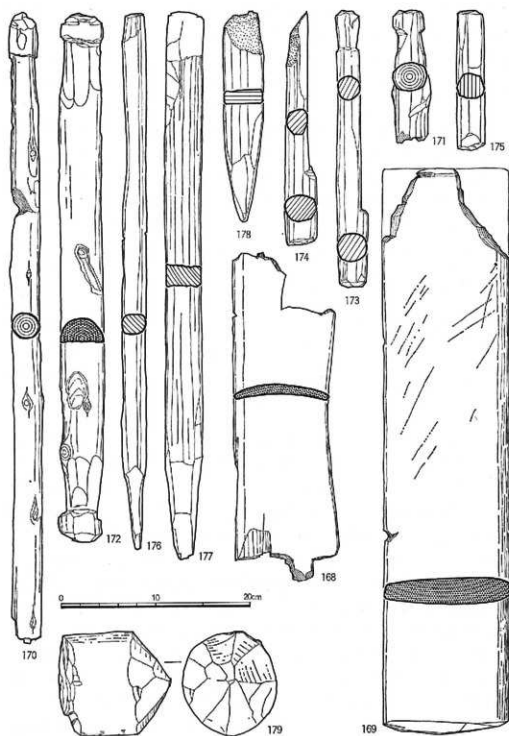


Fig. 35 SD8520出土板・棒製品実測図

をくわえるほかは、表面の樹皮を除くにとどまる。現在、縦に半截されている。紡織具のチマキかとも推測されるが、後考をまちたい。173・174は同形の棒であるが、174は一端を焼損している。ともに割材からつくる丸棒で、全長の1/4ほどの下部を太くし、それ以上を細くする。上端部は少しく削り細めて円頭形につくる。175は面取りをほどこした粗い棒で、二次的に切断されている。176は割材でつくる角棒。一方の先を尖らせている。177は割製面をとどめる角棒。一端を尖らせ、もう一方の端も斜めにそぎおとしている。杭か。178も173と同形のものの先端で一端が焼損している (Tab. 14)。

番号	(長さ)	(直径)	(材 種)	(出土位置)
	cm	cm		
170	66.3	3.0	イヌマキ?・丸木	WD 55
171	13.9	3.8	サカキ・丸木	WF 54
172	53.6	4.1	コウヤマキ?・丸木	WD 53
173	29.0	3.2~2.4	スギ・割木	WE 56
174	24.5	3.4~2.3	スギ・割木	WE 55
175	14.6	2.9	ヒノキ・割木	WF 52
176	56.3	2.5	スギ・割木	WD 52
177	57.7	3.6×2.4	ヤ・割木	WG 55
178	22.1	4.2×1.5	ヒノキ・割木	WE 54

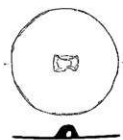
Tab.14 SD8520出土棒状木器寸法

j 柱切断材 (179) 心持丸太の丸柱を切断したもの。周囲は樹皮を除くにとどまり、両端には斧で切断した痕跡をとどめる。なお、尖頭形に削る方の木口の切断が新しい。長さ11.8 cm, 直径10.8 cm。材;ヒノキか。WG54 出土。

## 4 金属器

6ACA-SD8520 から小型素文鏡が1点出土した。

a 小型素文鏡 (PL. 44, Fig. 36) 直径が2.75 cmの素文鏡で、鏡面は凸面につくり、鏡端は僅かに厚みを増し、平縁状に丸くおわる。鈕は一部湯回りが悪いため、円形にはならず、平面長方形に近い。頂部は鋳造後に研磨している。厚さは鈕近くで0.68 cm, 周縁部で0.63 cm。鈕幅0.75×0.40 cm, 鈕高0.25 cm, 総高0.33 cm。光沢をおびた黒色を呈す。WD55・灰黒色砂質土出土。



小型素文鏡

Fig. 36 小型素文鏡突頭図 (拡大)

# 第V章 考 察

## 1 旧地形と平城宮造営前の遺跡

平城宮造営前の地形については、各発掘調査時における地山層の観察結果と宮城内主要地点のボーリング調査によって復原資料を蓄積してきたが、すでにこれらの資料をもとにして地形復原の研究もあり、おおよその輪郭が把握されている。ここではその後の資料も加え、宮造営前の旧地形を復原し、旧地形区分と遺跡の立地について検討する。

### A 平城宮造営前の地形と表層地質

平城宮は奈良盆地の北端、京都府との境界付近にひろがる奈良山丘陵が東南に延びる小支丘の南麓に位置し、下ッ道の北端を中心として東西、南北1km四方100haとその東の張り出し部20haを占めている。宮城内には三つの支丘が南に延び、支丘と支丘の間は浅い谷となり、その南は平野となっている。(Fig. 37)。

平城宮の造営に際して、旧地形を変えた大きな地業として水処理と整地がある。

#### i 水処理

**佐紀池** 宮の西北に位置する佐紀池の北方の谷筋には御前池・下吉田池・上吉田池が連なっているが、佐紀池底の第101次発掘調査によって、谷水を集めて南流する古墳時代の自然流路SD8520が確認された。SD8520は谷の開口部に位置し、流水を調整するための小規模な堰を伴っている。平城宮の造営に伴ないこの谷が閉塞されて圍池SG8500に整えられた。SG8500は打線に準大の堰を敷きつめており、圍池の規模と形は現在の佐紀池とさほど大きな差異はなかったようであるが、谷水の調整池をも兼ねたらしく、池尻には堰SX8192・8193(第92次調査)を設け、さらに宮西半部の基幹排水路である南北溝SD3825(第28次調査)へ導水している。

**水上池** 佐紀池と同じく宮の東北に位置する水上池も谷筋にあり、南の堤が東西方向に直線的に延びており、この位置が北面大堤にあたることから、水上池は宮の造営時に水処理の一環として、この谷を閉塞したことによってできたと考えられる。昭和3・7年に岸熊吉氏が一条通り北側で検出した玉石積の南北溝は北で池尻につらなり、南で内裏東側の玉石積の南北溝SD2700につらなる(第21次調査)。さらに宮の西南部を西北から東南に向けて流れていた旧秋篠川を東につけかえ、旧河道SX1579を埋めたてている。宮の廃絶後ふたたび、この旧河道に沿って范

1) 八賀晋「平城宮造営以前の地形について」『大和文化研究』第13巻2号, 1968, pp. 25-30.

2) 『平城宮報告Ⅳ』1976, 『平城宮報告Ⅴ』1978, 『年報1970』『年報1979』。

3) 立命館大学地理学同好会『生駒山脈』1944.

4) 岸熊吉「平城宮遺溝及遺物の調査報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十二冊』1984.

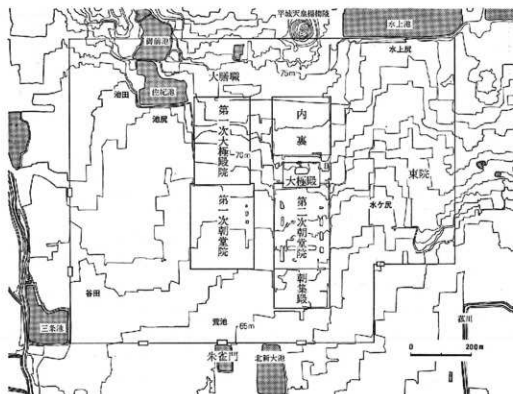


Fig. 37 平城宮の現地地形図

蓋がおきており、現在幅20~25m、深さ1.1m前後の南北につらなる窪みとなつてのこっている(第18・25次調査)。

## ii 整地

a 内裏・第二次大極殿地区 宮東半を占める内裏地区は一辺200m四方の平坦面をなしている。この平坦面は支丘頂部および神明野古墳SX0249の墳丘を削平し、周濠を掘りめぐらして形成されたものである(第6・9・12・36・73・78・103次調査)。本地域の旧地表面は内裏東回廊SC156の西雨落溝とSX0249の後円部第1段の円筒埴輪の残存状況からみて、遺構検出面よりやや高く、標高72m程と考えられる。また内裏北方で内膳職のある北方官衙地区も平坦面を呈しているが、ここでは丘陵頂部および市庭古墳SX500(平城天皇陵)の前方部を削平し、周濠を掘りめぐらしている(第10・11・13・20・82・4・95-6次調査)。削平と整地にあたって市庭古墳後円部第1段テラスの西側では地山を削りだしているが、埴輪をめぐらす埴輪門筒列の据付痕跡(第95-11次調査)からみて、旧地表面はこの面より15~20cm高く、標高76m程と考えられる。内裏・大極殿地区から朝堂院に至る宮の南北の高低差を示すとFig. 37のようになる。内裏東外郭は中央支丘の東縁辺に位置しているため、地山の下の東南部に数度にわたり盛土している(26・70次調査)。この地区の地山は、内裏地区と内裏東外郭(第70次調査)では2.5m、第二次大極殿と内裏東外郭東南隅(第35次調査)では3.5mほどの比高差があり、支丘が東縁で急勾配に下っている。また、内裏西外郭では地山が西南に下っている(第11次調査)。内裏北外郭においても東に地山が下っており、東端部では盛土の厚さが0.5mにも達している。

神明野古墳の削平

市庭古墳の前方部削平

東外郭の盛土

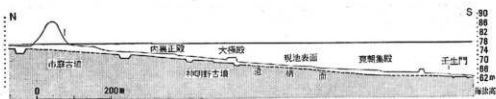


Fig. 38 第二次朝堂院・内裏地区の南北高低差模式図

第一次大極殿院の造成

b 第一次大極殿院地区 内裏地区とおなじ台地上にある第一次大極殿院は南半と北半で大きな段差があり、それぞれ緩い傾斜面を呈しているが、北半部では支丘頂部が削平されており、床土の下がすぐ地山である。平城宮造営当初には大極殿前面の丘陵先端を斜めに掘削し、擁壁を造り出し、南限を設定していたが、のちにさらに南に拡張している。この段の残存高は1.5mほどあり、現地形の等高線71・72mはこの部分で北に突出している(第69・72・86次調査)。この擁壁より南75mで下ツ道東側溝の北端を検出している(第75次調査)。また下ツ道の北端より南の地山は粘質土で、北の地山は黄褐色の土である(第72次調査)ことから、擁壁から南75m位のところから丘陵は高まっていたものと考えられる。第一次大極殿院北半部と佐紀池の池尻(第92次調査)との地山面の比高差は3mほどあり、地山は西南に急勾配で下っている。また大膳職の中央(第5～8次調査)およびその北方(第62・79・84次調査)は丘陵頂部が削平されており、床土の下がすぐ地山である。東側の地山は東にわずかに下がり、自然路流 SD337・338は東南方向に向いている(第8・11次調査)。大膳職西側の地山は佐紀池に向かって急勾配で下っており、大膳職の中央と佐紀池の底との地山の比高差は6m位ある。この傾斜は一様でなく、佐紀池東側より東約53mに0.9mほどの段があり、この段の下は有機質を含む灰色土で、池状の湿地を呈している。この傾斜池に3期にわたって広範かつ分厚い盛土がみとめられ、厚いところで1.5mにも達する。また大膳職の西北部も地山が佐紀池に向

宮北端部の削地

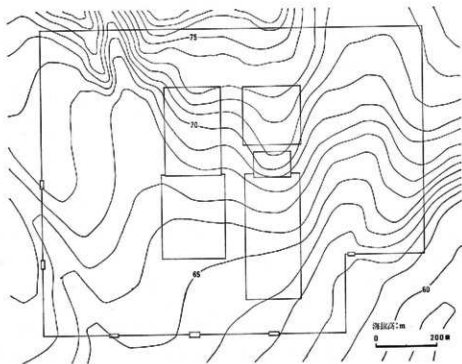


Fig. 39 平城宮造営前の旧地形復原図



1 旧地形と平城宮造営前の遺跡

って急勾配に下っており、この傾斜地にも盛土している（第107次調査）。佐紀池西岸の南側は床土の下がすぐ地山であり（第98—3次調査）、この位置まで支丘が半島状に突出していたと思われる。この地区の標高は72mで、第一次大極殿院の北半部の地山面とはほぼ同じである。第一次大極殿院の南側は、中央支丘の西側の谷につらなる浅い谷で、旧地表面は谷筋に堆積した軟弱な腐植物を含む黒色粘土に覆われており、低湿地であったと考えられる（第41・77・97・102・111次調査）。この低湿地は第一次大極殿の擁壁より南130m付近より南に広がっている（第77次調査）。この低湿地の埋め立ては数回におよんでおり、第一次大極殿院東南隅では盛土の厚さが1mにも達する。地山の標高は68.3mである（第41次調査）。さらに東朝朱殿付近では40cmほど盛土によって整地されている。地山の標高は63.9mである（第48次調査）。

谷の埋立

c 東院地区 東院の西側は中央支丘の東側の谷につらなる浅い谷で、谷筋に低湿地があり、この低湿地を数回にわたって埋め立てており、盛土の厚さは30~40cmほどである（第22・43・104次調査）。また東院東南部分の低地も数回にわたって埋め立てられており、盛土の厚さは40~50cmほどである（第110・120次調査）。以上のように宮の造成に当って全体を平坦にするのではなく、旧地形を利用しながら削平・盛土により、平坦面を階段状に形成していた。中央支丘は削平の著しいところであったが、地山を削りだした古墳の墳丘第1段の埴輪掘付痕跡からみて、旧地形は大幅に変えられておらず、盛土された個所が多かったため、宮造営以前の旧地形の輪郭を具体的に把握することができた。宮造営前の旧地形図は、1967年に奈良国立文化財研究所が作製した平城宮跡2000分の1の地形図を参考にして地山面の標高・傾斜等を調べ、さらに未発掘区については、そのまわりの宮造営前の地表面を考慮し、1m間隔の等高線で描いた（Fig. 39）。

東院地区  
低湿地  
の埋立

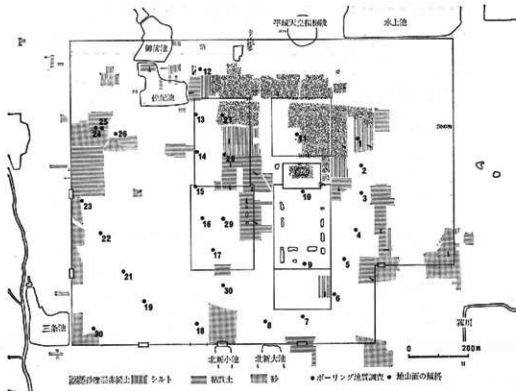


Fig. 40 平城宮の表面地質図

第V章 考察

表層地質

d 表層地質 つぎに発掘調査で明らかになっている地山の表層地質をみると、北の支丘の頂部は赤褐色系の砂礫土であり、裾部は黄褐色系の土である。この支丘の南側および谷筋は灰色系の粘質土の堆積が優勢である。第一次大極殿院の立地する支丘の西・南は低湿地を呈し、腐植物を含む黒色粘土が広がっている（第41・77・91・97・102・111次調査）。ところが朝堂院南門付近は砂質粘土で黒色粘土が認められず（第119次調査）、低湿地はやや北側のところで終っている。また大膳殿の西側（第2・81次調査）、東院の西側（第22・104次調査）と東側（第80次調査）にも低湿地が認められる。東院の西南隅東側の地山は高く、バラス混じりの暗褐色土で、西側の地山は低く黒色粘土であり、この付近まで東の支丘南端が延びていることを示している。この他に宮の西南部（第14・15・18・25次調査）、および東南部（第32・39・44・48・99・122次調査）には砂の地積が優勢であり、第一次朝堂院南門および南面東門付近は粘質土が優勢である（Fig. 40）。

地質構造

e 地質構造 昭和46・47年度に平城宮跡環境整備の基礎調査として行なった宮城内の地質調査のデータをもとに、宮城の地質構造について見てみたい。この地質調査はボーリングによる地表下5mまでの地・水質調査で、宮内30箇所で行なっている。この結果によると、支丘No.1～3・10・11・27地点では表土下に後期洪積層がみられ、砂礫・シルト・砂が互層をなしている。洪積層（段丘相当層）の粘性土のN値（検尺の標準貫入試験回/30cm）は10～20回、砂質土のN値は30～50回である。平野No.4～9・13～17・24～26・28～30地点および宮西南隅の旧秋篠川に沿ったNo.18～23地点では沖積層がみられる。沖積層は粘土・砂質粘土・粘土混り砂で構成され、全体的に不均質である。

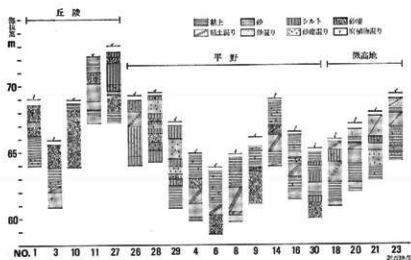


Fig. 41 平城宮の地質柱状図

- 川崎地質株式会社大阪支店「平城宮跡環境整備昭和46年度第二期工事（ボーリング工事）報告書」1972, 「平城宮跡環境整備昭和47年度第二期工事（ボーリング工事）報告書」1973.
- 大穴晚氏によるとN値一標準貫入試験は、内径35mm, 外径51mm, 長さ810mmのスプ

リットスプーンサンブラーをボーリング孔の孔底におろし、63.5kgのハンマーで75cmの落差から打撃し、サンブラーが地盤中に30cm貫入するに要する打撃回数を記録しN値とする。N値が低ければ土質はやわらかく、高ければ土質は緻密である。『地学事典』1971, p.916.

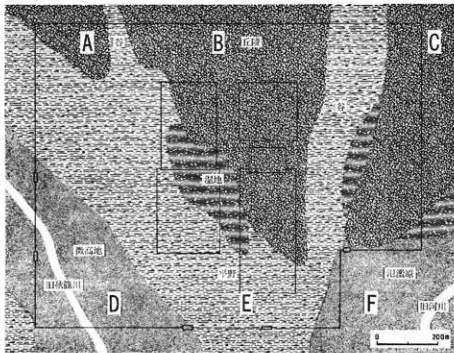


Fig. 42 平城宮の旧地形図

沖積層の粘性土のN値は3～10回である。No. 4～9・13～17・24・25地点の表層は粘土の堆積が優勢で、No. 26・28・29地点の表層はシルト・砂が互層をなしている。またNo. 18～23地点の表層は砂が優勢であり、この砂層中に腐植物を含み、地盤が軟弱であることから、自然堤防と考えられる。No. 9地点では表土下2mに厚く砂礫層が堆積しており、中央支丘は東南にゆるやかに傾斜していることを示している。宮城では全体を沖積土が被覆しており、沖積土は北ではきわめて薄く、南の厚いところでは3.5mもある (Fig. 41)。

つぎに地下水位と地形との関係について調べてみると、丘陵は自然水位が低く、揚水量がきわめて少ない。これに対して平野は自然水位が高く、揚水量が多い。また秋篠川沿いは自然水位がやや低く、揚水量が少ない傾向がみられる。

f 旧地形の概観 このようにして明らかになった宮造営前の旧地形の景観を概観すると、奈良山洪積丘陵の支脈が枝状に南に延び、支丘と支丘の間は浅い谷で、支丘南麓から南には沖積平野が広がっており、一部は湿地である。宮の西南には秋篠川に沿った微高地がみられ、また宮の西南隅には砂層が広がっている。現在の狐川の西側が谷状をなしているので、旧河川がこの付近を流れ、その流域に氾濫原を形成したものと考えられる。宮の北と南の地山面の高低差は13m近くあり、全体として南に傾斜している。以上の点をまとめると Fig. 42 に示したように丘陵(A～C)、微高地(D)、平野(E)、氾濫原(F)の区分で示すことができよう。

旧の地形概観

## B 平城宮造営前の遺跡

平城宮跡の各発掘調査地からは、宮造営前の弥生時代、古墳時代に属する遺構を検出している(Fig. 43)。さらに測るものとしては、遺構を伴わないが今回報告した縄文式土器が出土している。以下、地形区分にしたがって宮造営前の遺構をとり上げる。

## 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構が検出された地点は奈良盆地の北を限る奈良山丘陵の南縁にあたる微高地と丘陵縁辺、それに平野である。旧秋篠川東岸の微高地Dでは弥生前期の土壌 SK6122, 弥生後期の土壌 SK9675 がある(第25・59次調査)。同じく旧秋篠川西岸の微高地においては弥生後期の竪穴住居跡9棟・方形周溝墓11基・土壌墓2基・溝2条があり(第14次調査)。これらの

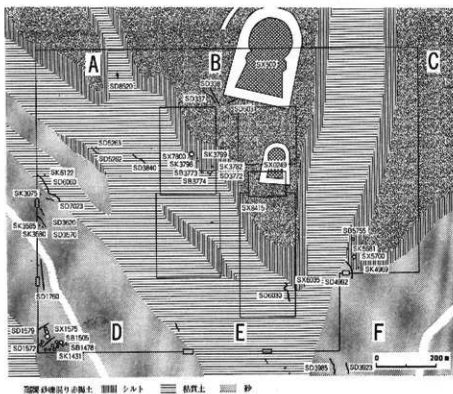
## 竪穴住居跡

遺構はかなり重複していた(Fig. 44)。竪穴住居跡には平面円形のもの2棟と方形のもの7棟があり、住居中央には炉跡がある。方形竪穴住居 SB1505は焼失し、そのまま廃棄されていた。

## 方形周溝墓

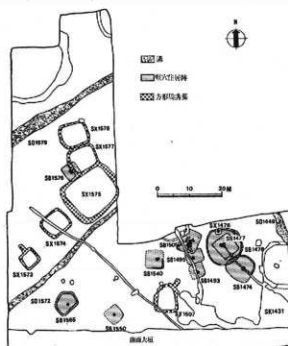
方形周溝墓は一边が6m前後のものが多いが、なかには大型のものもあり、もっとも大きいSX1575は一边が12.3mである。いずれも主体部は削平されていた。土壌墓SX1476には大型の壺棺を埋納している。西南方向の斜行溝SD1572・1577は、旧秋篠川に直交して人為的に掘られたもので、居住区と墓域を画す境界溝とみられる。土壌 SK1431からは1斗におよぶ炭化米が出土した。弥生時代の遺構はさらに調査区外に広がっているものと考えられる。また二つの谷が合流する付近の平野には弥生時代後期の土壌が2基ある(第122次)。この他に弥生式

## 炭化米



1 旧地形と平城宮造営前の遺跡  
土器が出土した遺構として、東の泥  
葦原Fの南北溝 SD3923・3985（第  
32次調査）、同じくこの支丘Bの西  
縁辺に接する平地の東南溝 SD3840  
（第28次調査）、支丘A・B間の谷の  
南北溝 SD8520（第101次調査）が  
ある。いずれも蛇行しており、自然  
の流路である。弥生式土器の出土点  
数は少なく、そのほとんどが弥生後  
期のものである。さらに遺構はとも  
なわれないが、朱雀門付近（第16次  
調査）で弥生式土器片、支丘Bの東  
縁辺に接する平地（第22次北調査）  
で太形始刃石斧が1点出土している。  
現在のところ弥生時代の集落として  
確認されたのは旧秋篠川西岸の微高  
地だけである。しかし、東岸の自然流路からも弥生式土器が出土しており、この微高地にも弥生後期の集落跡があった可能性が高い。水田跡や木製農具は発見されていないが、集落の立地する微高地の後背低地で稲作が行なわれたことは、多量に出土した炭化米が如実に示している。

自然流路



第V章 考察

の位置からはじまって西南に流れる溝 SD503 は古墳築成時の溝で、外堤が完成した段階ではこの溝を埋め戻し、その上に石を葺いている。溝底の高さは周濠底とほぼ等しく、周濠掘削とその後の墳丘築成時の湧水を処理するための溝と考えられる。造り出しの有無は遺構上からは確認していないが、佐紀后列の同規模古墳から推定すると造り出しをそなえていたとも考えられる。

**神明野古墳** 神明野古墳 SX0249 は市庭古墳の南に位置する前方後円墳で、宮の造営に際して墳丘は削平され、濠は埋めたてられている。この古墳の前方部西南隅、東側のくびれ部、後円西北部を部分的に調査し、あわせて周濠の底を一部検出している（第6・9・12・73・113次調査<sup>1)</sup>）。復原全長 105m、後円部復原径 64m、前方部幅 68m、周囲に幅 18m 前後、深さ 1.5m の周濠をめぐらしている。墳丘は段築成であったらしく、墳丘第1段は地山を掘りこんで形成され、後円部墳丘裾部と外堤部で埴輪列が確認された。後円部では墳丘の基底縁にそって人頭大の石を一行に並べたのち斜面に拳大の石を葺いている。

神明野古墳前方部西南隅から西へ約 120m の支丘 B 西斜面で円筒埴輪を 2 個、南北約 3m の間隔で据えつけられた状態で検出した。この円筒埴輪列 (SX8415) の性格は発掘面積が狭いため不明である。このほか支丘 B に立地する古墳時代の遺構としては、西南縁辺部に、北で西にふれる掘立柱建物 SB3773 (4 間×3 間)、SB3774 (2 間×2 間)、一辺 11m で断面 V 字形

**掘立柱建物** の周溝を持つ方墳 SX7800、西南方向に蛇行する幅 0.95m、深さ 0.2m の溝 SD3772、土墳 SK3782・3798・3799 がある (第72・75次調査)。SX7800 の墳丘は削平され、基底部のみを残している。周溝からは埴輪や布留式土器が出土した。また SD3772 からは布留式土器の破片が数点出土した。南縁辺部には今回報告した土壌墓 SX6035、東南方向に蛇行する溝 SD6030 がある (第48次調査)。

**掘立柱建物** 支丘 C の南縁辺の奈良時代の遺構の下層においては、北で東にふれる掘立柱建物 SB5755 (3 間×3 間)、断面 V 字形の周溝を持つ一辺 10m の方墳 SX5700、西北から南方向に「く」の字形に屈曲する幅 3~4m、深さ 0.6m の溝 SD4992、小土墳 SK4969・5681 がある (第39・43次調査) (Fig. 45)。SX5700 の墳丘は削平され、基底部のみを残す。周溝上層から埴輪や須恵器が出土した。なお、SD4992 からは 5 世紀初頭の土師器や木製品が多数出土した。また支丘 C の東・西縁辺 (第39・43・105・120次調査) の整地土中にも埴輪が含まれており、支丘上に古墳があったものと考えられる。一方、支丘 A と支丘 B の間の谷には、南北方向に蛇行する幅 3m、深さ 0.6m の溝 SD8520 がある (第101次調査)。溝中から古墳時代前期の土師器、木製品が出土した。土器のほとんどが布留式である。

旧秋篠川東岸の微高地においては溝 SD3570・3620・

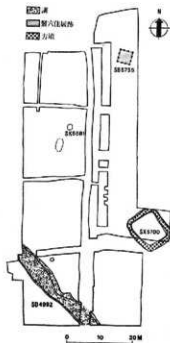


Fig. 45 第39・43次調査古墳時代の遺構

1) 『平城宮報告Ⅱ』1963, 『年報1979』p.1.

6060・7023, 小土壇SK3580・3585がある(第25・50・51・59次調査)。溝はいずれも旧伏篠川に平行しており、自然の流路と考えられる。また西岸は幅1.1m, 深さ0.7mの南北溝SD1760があり(第15・18・25・50・51・59次調査), この溝は直線的で、人工の溝と考えられる。さらに2つの谷が合流するやや平坦な平野Eにおいては北で西にふれる斜行溝があり、この溝の埋土より5世紀末の土師器・須恵器が多量に出土した(第122次調査)。

これら4, 5世紀の遺構の立地をみると、大型古墳は支丘上に、掘立柱建物や小型の墓は谷の入口に面する支丘縁辺と微高地、それに低地に散在している。特に支丘Bの西南縁辺および支丘Cの西南縁辺では掘立柱建物・小型の方墳・土壇・溝等が一つのまとまりをもって小規模に分散している。このような小規模のまとまりは掘立柱建物数棟からなることから、一つの世帯ともみることができ。支丘Bの南縁辺では発掘面積が狭く溝SD6030や土壇墓SX6035しか検出していないが、近くに掘立柱建物が存在しているのであろう。宮内では灌溉・排水施設や水田遺構は検出されていないが、支丘と微高地との低地で稲作がおこなわれたことは豊富な木製農具がこれを物語っている。このような古墳時代前半の遺構のありかたは水田開発の一形態を示していると考えられる。以上の5世紀頃までの遺構に対して6, 7世紀の遺構はきわめて少ない。しかし、左京三条二坊十<sup>1)</sup>・十五<sup>2)</sup>坪で東南方向に蛇行している溝SD881からは5, 6世紀初頭, SD890からは5~7世紀前半の土器・木製品が出土しており、また右京六条一坊<sup>3)</sup>で北西から南東方向に蛇行している幅3~4m, 深さ1mの溝の底より4世紀後半から5世紀にかけて、上層より5世紀頃から6世紀初めの土器が出土している。奈良盆地北部の沖積地への進出は5世紀以降に積極的に行なわれたことを示している。それも集落的面的な拡大ではなく点的な拡大によっていることは、水田の開発と経営のありかたと関連して注目されることである。奈良山丘陵における大型古墳の築造は、これら低地における生産基盤を支えられていたものであろうと考えられる。

7世紀末から8世紀になると、下ツ道が奈良山丘陵の裾部まで達していた。この西側溝SD1900-A下層から8世紀初頭の多量の土器と木簡が出土した(第16・17次調査)。木簡の中に平城宮造営にともなって消滅したと考えられる「大野里」の里名を記したものがあり、また墨書土器の中に「五十戸家」「五十家」などの里家の存在を示すものがあることより、宮造営以前にはこの付近に集落が存在していたと推定される。また東側溝SD7821の東側で検出した掘立柱建物SB7816(2間×2間)・SB7817(3間×2間)はこの時期のものと考えられている(第77次調査)。

人工の溝

4, 5世紀の遺構の立地

6, 7世紀の遺構の立地

下ツ道

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』

1975, p. 8 - pp. 33-42, PL. 4・19-24。

2) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974,

p. 10・21, PL. 14・15。

3) 『平城宮報告K』1978, p. 60, PL. 35・45。

4) 『年報1973』p. 20。

## 2 土 器

## A 土器の出土分布と器種構成

SD6030は、奈良時代の遺構である東朝集殿の基壇下を、北西から南東に向けて蛇行しつつ流れている。溝のうち、基壇外となる北の部分と南の部分は全掘したが、基壇下では、部分的にトレンチを設けて流路を確認したにとどまる。土器の出土点数は、口縁部で個体識別した限りにおいて、溝下層 472 点、上層 456 点であった。北区と南区との出土量を比較すると、下層では北区 230 点、南区 242 点とほぼ同数であるのに対し、上層では北区 54 点、南区 402 点と著しく片寄っている。南区での出土分布を詳細にみると、とくに調査区南端 6 m の範囲に集中していることがわかる (Tab. 2・15, Fig. 46~48)。この集中状態は調査区の南の未掘部分に続いているものと推測される。

下 層  
器 種 構 成

下層から出土した器種には小型丸底壺、器台、碗、高杯、壺、甕などがある。土器の用途を供膳、貯蔵、煮炊の三つに大別すれば、小型丸底壺 A、器台 A・B、碗 A、高杯は供膳に使用された土器とみなすことができる。小型丸底壺 A、器台 A・B、碗 A はいずれも胎土のキメが細かく、器表面に細いミガキ調整の施される精製品であり、高杯の大半を占める高杯 A も同様の精製品である。この他、壺 Ab (43) や壺 C (45) などにも器表面に緻密なミガキ調整が施されているが、ミガキの幅は広く、胎土はやや粗い。下層出土土器群の中において供膳用土器に限る、そのほとんどが精製品であることは、きわだった特色の一つである。

壺、甕の分類について、本報告では明確な基準を設定することなく、慣用的に使用されてい

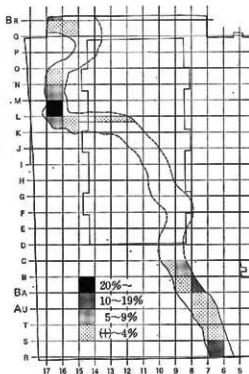


Fig. 46 SD6030 下層土器出土分布図

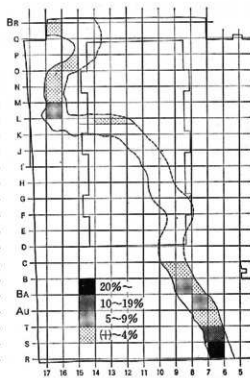


Fig. 47 SD6030 上層土器出土分布図



る区分をそのまま踏襲した。壺と甕は、弥生式土器にあっては、前者が貯蔵用、後者が煮炊用の土器として理解されており、器体の形態は比較的明瞭に分化している。SD6030出土の壺あるいは甕とした土器のうち、甕については器形からも、外器表面に付着したススの状態からも、ほとんど例外なく煮炊に使用されたと判断することができる。しかし、壺には若干の問題が残される。形態上、壺とした土器の中でも最も量の多い壺Aや壺Bには、外器表面にススの付着しているものが少なくない。それとともに、同様の法量、形態を示す土器であっても、器表面にススの付着するものとそうでないものがあり(壺Aaの41と42など)、壺形態をとる土器の一部は、恒常的に煮炊に使用されたのであるか否かは判断しかねるものの、形態から直ちに用途を推定することが困難な場合のあることを指摘しておかなければならない。また、壺と甕とを区別する形態上の指標の一つである口縁部の法量を基準にして両者を明確に分けることも困難である。一般的な傾向としては、口径：口縁

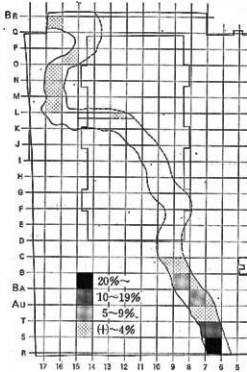


Fig. 48 SD6030 上層高杯B・C出土分布図

器種名	SD6030下層	SD6030上層	壺と甕の 分	
小型丸底壺	Aa	87	0	} 12 (2.6%)
	Ab	3	0	
	Ac	1	0	
	B	0 (19.3%)	1	
	C	0	11	
器台	A	10	0	} 0
	B	19 (6.1%)	0	
純	A	46	0	} 8 (1.8%)
	B	0	1	
	X	3 (10.6%)	7	
把手付純		1	0	
大鉢		0	4 (0.9%)	
甕		0	14 (3.1%)	
蓋	1 (0.2%)	0		
小型器台形土器	0	1 (0.2%)		
高杯	A	12	0	} 291 (63.8%)
	Ba	0	130	
	Bb	0	51	
	Bc	0	18	
	Ca	0 (3.8%)	85	
	Cb	0	2	
	Cc	0	5	
	X	6	5	
壺	A	15	15	} 27 (5.9%)
	B	15	2	
	C	4	0	
	D	8	0	
	E	2	0	
	F	15 (12.9%)	1	
	G	0	1	
	H	0	2	
	I	0	2	
	J	0	2	
	X	2	5	
甕	A	124	17	} 97 (21.3%)
	Ba	14	96	
	Bb	0	14	
	C	34	19	
	D	4	12	
	E	3	0	
	F	1	0	
	G	11 (47.0%)	5	
	H	2	1	
	Ia	23	0	
	Ib	6	2	
X	0	1		
須恵器甕	0	2 (0.4%)		
合 計	472 (100%)	456 (100%)		

Tab.15 SD6030 出土土器個体数

第V章 考察

部高の比率3:1~4:1を境にして壺と甕を区分することができる (Fig. 49・50)。しかし、それは幅をもった境界線であり、少なからぬ例外を生ずることになりかねず、適切な方法とはみなしがたい。従って、SD6030出土土器に限って言えば、壺と甕とを単純に形態の上から分類することはできず、各土器の用途を考える際には、体部と口縁部の大きさの関係や外器表面の器面状態などをもとに、個々の土器について個別に判断するほかはない。

もとより、体部に欠く製品も多く、個体数のデータも口縁部でのデータに限られているなど、不確定要素が少なくない。そのことを前提とした上で、下層出土の壺、甕の数量をみると、甕は222点 (47.0%) あり、これに、壺としたもののうち煮炊に使用されたものを含めると、50%以上の土器が煮炊用であったと考えられる。それに対して、壺は61点あるが、その中で煮炊に用いられたもの、および供膳の器として使用されたと推定される壺Fなどの小型品を除くと、おそらく10%以下の比率になるものとみられる。以上をまとめると、下層出土土器群では、器台を除く外すと、供膳に使用したもの約40%、貯蔵に使用したもの10%ならず、煮炊に使用したものの50%あまりという比率になろう。

上層から出土した土器には小型丸底壺B・C・D、碗、高杯、深鉢、瓶、壺、甕、須臾器の罐などがある。そのうち高杯が著しく多く、291点あり63.8%を占める。高杯の98%は同質の胎

壺と甕の比率

上層土器構成

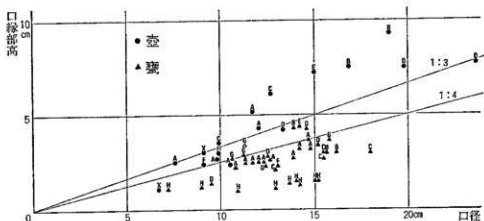


Fig. 49 SD6030 下層壺・甕類口縁部法量

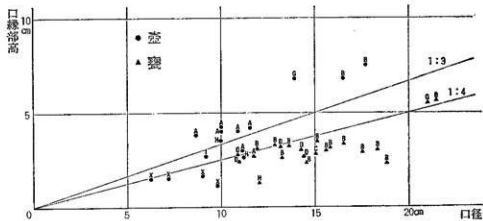


Fig. 50 SD6030 上層壺・甕類口縁部法量

土、同じ製作技法になる高杯B・Cで、その6～7割は南区南端付近に集中していた。壺と甕の区分については下層と同様の問題をはらんでいるが、壺の数量は甕を100とした場合26.8あり、下層ではそれが27.5の比率を示すので、ほぼ一致した傾向をみせていることになる。

須恵器は小型甕の口縁部の破片が2個体分出土したにとどまる。いずれも初期須恵器の範囲に属する製品である。

## B 下層土器群と上層土器群の比較分析

SD6030下層土器群は、精製の供膳用土器（小型丸底壺A、椀A、器台A・B、高杯A）と、薄手丸底の甕Aの存在を著しい特徴とする。小型丸底壺はその96%がAaであり、胎土、作り方に斉性がみとめられる。また口縁部の外傾角度はいずれも55～65°の範囲内にあり、ほぼ60°前後に集中しているが、その反面、口

縁部と体部の法量の比率には個体差が小さくなく、口径に比して体部最大径の小さなものほど、口縁部の高さに対する体部の高さの比率が小さいという傾向を看取することができる<sup>1)</sup> (Fig. 51～53)。

下層出土の壺、甕の中には、明らかに大和地方以外の諸地域に由来すると判定しうる製品が少なからず存在する。壺E55は瀬戸内海東部沿岸地方の弥生時代終末期に普遍的にみられる、独特な形状を呈する複合口縁壺である。甕Gのうち57～59は、山陰地方に濃密に分布する、古

供膳用土器と甕A

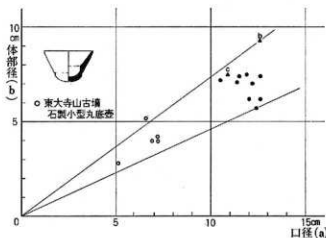


Fig. 51 SD6030 下層小型丸底壺 Aa 法量-1

他の土器

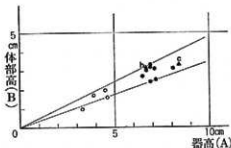


Fig. 52 SD6030 下層小型丸底壺法量-2

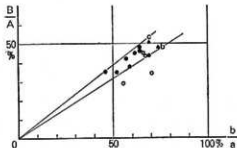


Fig. 53 SD6030 下層小型丸底壺法量-3

1) 奈良県天理市所在の東大寺山古墳の副葬品には13点の石製小型壺が含まれる。これらは形態、石質により数群に分別しうるが、そのうちの一群はSD6030出土の小型丸底壺Aaに

きわめて類似した形状を呈し、また個体差のあり方も同様の傾向を示している (Fig. 54)。文化庁監修『重要文化財28—考古1』毎日新聞社刊 1976, p. 127。

第V章 考 察

頃時代初頭前後に属する山陰系の複合口縁甕と判断される。甕F85は河内地方に生産地が想定されるいわゆる庄内式甕であり、甕H79・80は吉備地方で弥生時代後期に位置付けられる鬼川市Ⅱ〜Ⅲ式に属する製品と考えられる。また、甕I86〜92は、伊勢湾沿岸地方を中心に、関東地方から近畿地方にかけて広汎な分布圏を示すS字状口縁のつく台付甕である。この甕Iは29点あり、下層土器の甕の13.1%を占めている。下層の甕の主体をなす甕Aは、外器表面のほぼ全面にススが付着しているが、甕Iは台部および下部下縁付近にススが付着することがほとんどなく、煮炊の方法が両者の間では異なるものであったことを明示している。以上に示したものに限っても、他地域の製品は合わせて39点あり、下層出土土器の8.3%、甕だけでみれば17.6%を占めていることになる。

**在地産の甕** 煮炊の容器としての甕では、同じ製作技術によると考えられる甕A・Bが下層出土甕の60.4%を占める。この甕A・Bは、いずれも丸底で、口縁端部を厚くつくり、外器表面にハケメ調整を施すもので、大和地方をはじめとして畿内地方各地で普遍的に、多量に出土する。前述した外来の製品に対して在地で生産された土器と考えることができる。

上層土器群は、高杯B・Cが多いこと、小型丸底甕はCがほとんどであること、甕では甕Bが最も多いこと、甕があり、わずかではあるが須恵器を伴うことなどが特徴としてあげられる。その他にも、とくに下層土器群と比較すると、いくつかの相異点が見とめられる。以下にその要点を列挙しよう。

**下層と上層の比較**

- ① 下層にだけあり、上層から出土していないものには、二重口縁をもつ甕D、タタキ調整を施した甕E・Fなどがある。また下層に多い供膳用精製土器が上層には全くみられない。
- ② 下層にはなく、上層だけにまとまった数量をみせるものには、小型丸底甕C、高杯B・C、扁球形の体部をもつ甕Ac、大型の鉢などがあり、量は少ないが小型丸底甕B、外傾する口縁部の外面に低い稜のめぐる甕H、それに須恵器の小型甕がある。
- ③ 同じ製作技法によると考えられる甕Aと甕Bの数量比が、上層では8:1であるのに対し、下層では1:3と逆転する。
- ④ 上層では甕Cの比率が減少し、甕Dが増加する(甕C:下層甕の15.7%→上層9.0%、甕D:下層1.8%→上層13.0%)。
- ⑤ 下層では他地域からもたらされたと考えられる土器が少なくないのに対し、上層では明らかに大和以外の地域から搬入されたと判定しうる製品はきわめて少ない<sup>2)</sup>。

このように、各器種ごとの様相や器種構成のあり方からみると、一部に共通する要素がみとめられるものの、下層土器群と上層土器群との間には明瞭な違いがあり、両者は土器群としての総合的な存在形態を異にするものといえる。

**他遺跡との比較**

平城宮東朝集殿下層甕S D6030の発掘調査と、その出土資料の一部の紹介がなされて以来、古式土器器に関しては、大和地方に限っても、いくつかの遺跡から出土したある程度まとまっ

1) 岡山県教育委員会『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16, 1977。  
2) 甕H(169)は、吉備地方で弥生時代後期末葉に位置付けられている鬼川市Ⅲ式に属すると考えられる。  
3) 『年報1969』pp. 38-44。安達厚三「平城宮址遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編1, 1971。

た資料が公にされている。ここでは、それらとの時間的併行関係あるいは先後関係を示しておくことにしたい。S D6030下層土器群は、薄手・丸底の甕Aの盛行と、供膳用精製土器の存在<sup>1)</sup>を特徴とするもので、奈良盆地の南端に位置する高市郡明日香村板田寺下層遺跡出土資料<sup>2)</sup>、奈良盆地東南部の桜井市纏向遺跡辻土壇4上層出土資料にみられる各土器型式と共通した内容をみせており、時間的には並行する段階のものと考えられる。また、器種構成において基本的に共通するものの、各器種にわたり形態や製作技法に若干の変化のみられる橿原市藤原宮跡下層溝S D912・S D914、桜井市上ノ井手遺跡溝S D031および纏向遺跡辻土壇14出土資料などにやや先行する時期の所産であろう。

一方、S D6030上層土器群は、小型丸底壺C、壺Fがあり、厚手長胴の甕Bが盛行し、初期須恵器が共存することなどから、上ノ井手遺跡井戸S E030上層土器群<sup>3)</sup>には並行し、奈良市平城京左京三条二坊遺跡下層溝S D881出土土器群<sup>4)</sup>にやや先行する様相を示している。なお、桜井市上ノ井手遺跡では井戸S E030上層土器群よりも時間的に先行する井戸S E030下層土器群があり、さらにこれは溝S D031土器群より新しい段階に位置づけられることが明らかになっている。従って、S D6030下層土器群と上層土器群は、時間的に連続するものではなく、一定の間隔をもったものと考えることができる。

下層土器群は、当遺跡の所在する大和地方にあっては、大規模な前方後円墳が築造されるようになる時期に作られ、使用されたものであり、従来「布留式土器」と称されている土器様式の中でも古い様相を示すものである。上層土器群には須恵器が含まれ、新たに甕が加わるなど、土器様式の変化に大きな影響を与えらると思われる要因が顕在化している状況であろうことができる。

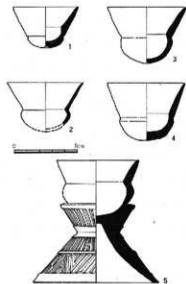


Fig. 54 東大寺山古墳出土の石製小型丸底壺(1:2)

- 1) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土器」『考古学雑誌』第60巻第2号, 1969.
- 2) 桜井市教育委員会『纏向』1976, pp. 53-54・174・246.
- 3) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ」奈良国立文化財研究所学報第37

- 4) 安達・木下前掲書。
- 5) ただし須恵器は共存していない。
- 6) 奈良国立文化財研究所前掲書『平城京左京三条二坊』1975, pp. 33-36, PL. 19-21.

## 3 木製品

## A SD6030 出土の木製品の検討

## i 斧柄について

SD6030 から5点の斧柄が出土している。いずれも柔軟性とむサカヤの枝別れを利用した  
 縦斧と横斧 豚柄である。台部の形態から縦斧柄 (PL.30-1・2・3) と、横斧柄 (PL.30-4・5) と  
 におけることはすでに述べた。ここでは、そうした斧柄に挿入する鉄斧頭の形状などについて  
 若干の推測を試みてみよう。

縦 斧 柄 まず、朝集殿縦斧柄 (1・2) に装着すべき袋のある鉄斧の大きさを推定してみよう。台部  
 の先につくりだす着装部は、袋状鉄斧の袋部に挿入されるのであるから、それに対応する鉄斧  
 をさがせばよい。朝集殿縦斧柄 I は、装着部の長さが3.3cm、幅2.2cm、厚さ1.7cm。2は  
 長さ3.9cm、幅2.8cm、厚さ1.8cmとなり、いずれも装着基部での計測値である。さて、古墳  
 出土の袋状鉄斧では袋部の長径と短径とを数値で示す報告がなく、実測図にたよらざるをえな  
 い。また、サビのため原形をそこなっており、計測値がはたして原形のものか否かの問題もあ  
 る。さらに、古墳に關する鉄器は送葬用の仮器であり、実用品でないとするかんがえかたも  
 ある。このようなことを承知のうえ、手近にある報告書のうち図面の描いている奈良県メスリ  
 山古墳の鉄斧と比較することにした。この古墳からは14本の鉄斧が出土しており、さいわいそ  
 のすべてが図示されているので、図によって袋部の長径と短径を測ってみる (Tab.16)。朝集  
 殿縦斧柄 1・2 に即応する鉄斧はないが、近いものはある。すなわちメスリ12・13 が朝集殿  
 縦斧柄 I に近く、メスリ 4・11・14 などが朝集殿縦斧柄 2 に近い大きさをとる。うちメスリ  
 4 がもっとも大きく、そのほか

はおおむね長さ11cm内外、刃  
 幅5cm内外におさまる。ただ  
 し朝集殿縦斧柄 I に対応するメ  
 スリ13はもっとも小さく、長さ  
 9.7cm、刃幅4.0cmとなり、  
 大型の斧柄に対して小型の斧柄  
 であることを示し、斧柄の長短  
 にも対応していることがわかる。  
 今回報告した木器のうち、刃痕  
 をとどめるものから刃幅をたど  
 ってみると、梯子 (44)、板材  
 (60)、杭 (76) などでは、縦斧、

番号	(長さ) (刃幅) (備考) (刃部形状)		(袋部径)			
	cm	cm	長径cm	短径cm		
1	14.5	7.2	有肩式	直	3.6	2.0
2	13.8	7.3	#	#	3.3	1.3
3	13.4	6.7	#	#	3.4	1.5
4	12.9	5.5	#	弧	2.7	1.7
5	12.8	5.8	#	#	2.8	2.8
6	11.6	5.7	#	直	2.8	1.2
7	11.9	5.5	#	やや弧	3.3	2.7
8	11.4	4.5	#	直	2.6	1.6
9	11.4	5.1	#	弧	2.9	1.7
10	11.0	4.3	#	#	2.8	1.8
11	10.9	4.5	無肩式	#	2.8	1.7
12	9.8	4.2	#	左弧	2.1	1.0
13	9.7	4.0	#	弧	2.1	1.3
14	9.5	4.0	#	#	2.7	(2.0)

袋部径は実測図から求めた数値

Tab.16 メスリ山古墳出土の斧頭計測表 (報告書より)

1) 奈良県立橿原考古学研究所編『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊, 1977, pp. 132-135.

### 3 木製品

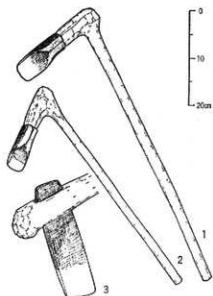


Fig. 55 縦斧模式図

横斧をとわず4cm以上の刃幅が推測でき、これらの斧柄も建築・土木用のものであったことが類推できる。鉄斧用の縦斧柄の類例は乏しく、弥生時代後期の福岡県鶴町遺跡<sup>1)</sup>、古墳時代中期(5世紀)の和歌山県鳴神Ⅱ遺跡<sup>2)</sup>や平城宮6AAG地区<sup>3)</sup>のものが知られる程度である。それらはいずれも朝集殿縦斧柄1・2とはほぼ同じ大きさであり、建築・土木関係の工具とみてよからう。(Fig. 55-1・2) つぎに朝集殿横斧柄4にはまる鉄斧をみてみよう。この斧柄では着装部の長さ4.5cm、幅2.4cm、厚さ1.8cmを計る。やはりメスリ山古墳の鉄斧でみると、メスリ8程度の鉄斧を装着することが可能であり、その長さ11.4cm、刃幅4.5cmとなり、ほぼ縦斧と同じ大きさの鉄斧を想定

横斧柄

できる。横斧については、斧頭と柄をとづくりする鉄製品が若干しられている。それらの刃幅には大小の別があるが、朝集殿横斧柄4で想定した鉄斧に近い刃幅をもつものとして、大阪府七観古墳<sup>4)</sup>や奈良県上殿古墳<sup>5)</sup>の鉄製横斧があげられる(Fig. 56-4)。一方、朝集殿横斧4の柄の全長は36.2cmであり、縦斧柄の約半分の長さである(Fig. 56-3)。それは上殿古墳例ときわめてよく似た長さであり、古墳出土の鉄製横斧がたとえ実用に耐えない仮器であったとしても、実物を忠実に写しとっていることがわかる。中世の絵巻物にあらわれる片手持ちの横斧は、こうした横斧の具体的な使用法を連想さす。一方、弥生時代以来の扁平鉄斧の着装が想定される横斧がある。それは湖西線関係遺跡から発見されているもので、斧台の前面に鉄斧をおく切り欠きをいれ、その後面を一段低くして紐などで繫縛するように配慮したものである(Fig. 56-2)。

いままで、鉄斧の長さと同刃幅しか問題にしなかったが、鉄斧の形態についても看過してはな

鉄斧の形

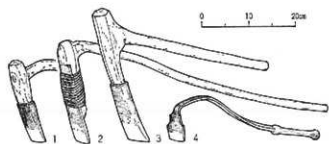


Fig. 56 横斧模式図

らない。数少ない鋳造製品を別にすれば、一般には有肩、無肩に大別されているが、やはりメスリ山古墳の例でみると有肩のものは刃幅が全長の1/2.5以内におさまる狭刃のものと、全長に近いかそれを越える広刃のものにとわかれる

- 1) 福岡市教育委員会『那珂町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第37集, 1976, p. 48.
- 2) 和歌山県教育委員会『昭和45年度飯和高速道路(近畿高速自動車道と和歌山線)遺跡発掘調査概報』1971, p. 12.
- 3) 町田章『平城宮跡出土の古墳時代木器』『大和文化研究』第12巻9号, 1967, p. 18.

- 4) 鶴口隆康・岡崎敬・宮川徒『和泉国七観古墳調査報告』『古代学研究』27号, 1961, p. 16.
- 5) 伊達宗泰『和泉上殿古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊, 奈良県教育委員会 1966, p. 53.
- 6) 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』1973, p. 186, PL. 77.

## 第V章 考察

(Tab. 16)。こうした鉄斧の形態的分類が使用法とどのようにかかわっているのが問題となる。鉄製横斧が有肩鉄斧の形をとり、後世の横斧にも有肩鉄斧がつけられていることから、従来は莫然と有肩鉄斧を横斧にあてていた。

古墳出土の鉄斧には、縦断面で袋部口縁短径の中心と刃先を結ぶとき断面形が左右対称の二等辺三角形あるいはそれに近い形をとるものと、袋部以下の刃部が一方に偏するものと大別できよう(Fig. 57)。いいか

片刃と両刃

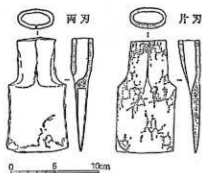


Fig. 57 両刃と片刃の鉄斧 (『メソリ山古墳』報告書より)

えれば、前者が両刃であり、後者が片刃であることを意味する。錆などに覆われた鉄斧の刃先から両刃であるか片刃であるかをしることは困難なことであるが、これによって片刃ないしはそれを意図する鉄斧が存在したことがうかがわれる。弥生時代の片刃石斧や後世の横斧の事例からして、この片刃鉄斧ともいふべきものが、横斧に装着されていた可能性はきわめて高い<sup>1)</sup>。このようなことから、再び有肩鉄斧をみると、有肩鉄斧のなかに片刃と両刃の2種が混在していることがわかる。

斧柄の形態

朝葉殿斧柄が縦、横をとわず、いずれも弾力性のあるサカキを利用しているので、削平なりハツリを主目的にしていることが推測される。では伐採や大木から角材などを切り出すときの縦斧としてはどのようなものを想定しえようか。現在のところそれらに対応する斧柄の事例を欠くが、鉄斧からするならば1有肩広刃の大型袋状鉄斧, 2無肩狭刃の大型袋状鉄斧, 3短冊形鉄斧とよばれる扁平な板状鉄斧が候補にあがる。伐採用の縦斧の柄としては、縄文・弥生時代の石斧柄や後世のマサカリなどから推して膝柄はかんがえられず、より頑丈なカン割材などをつくる直柄を想定しなければならない。この場合、袋状鉄斧では斧台にあたる履納を袋にはめ、この納孔に別木の柄をつける漢式斧柄が考えられよう。板状鉄斧では柄の先端に割目をいれ鉄斧をはさみ、紐で固定する直柄もかんがえられようが、弥生時代以来の伝統を重視すれば、柄の先端に着装孔をあけてここに鉄斧を挿入する形式を考えるほうが無難である (Fig. 55-3)。

### ii 膝柄設綴について

平面形をナスビを縦切りにしたような形につくり、身の中央に股をいれた耕具の使用法の問題は、多くの人達を悩ませてきた。というのは、おそらく柄をつける耕具であろうが、柄を身に対して平行につけるのか、それとも柄を直交させてつけるのかという点で意見がわかれる。前者ならば鋤であり、後者ならば鍬としてかんがえねばならないからである。大分県丹生川遺跡<sup>2)</sup>の出土例を報告した佐藤暁らは、これをA類馬鞍型木器とよび、斧の膝柄のような股木の柄を想定し、身の前面に固定する方法を推測した。その後、各地からの出土例があいつぎ、両説二様の着柄法が推測され、発掘報告書では鋤とも鍬ともよばれる状況がつついた。

鋤と鍬の類

1) 粟籬寺西塔再建工事に際して部材の加工工程を西岡常一氏に教示してもらったところ、実用では両刃・片刃ともに使用されており、手斧がよく片刃でなければならぬ必要性はなく、それよりも、むしろ刃先が鉛刀状の弧

形を呈していることが重要であるとのことである。

2) 富米盛・佐藤暁・杉崎重臣「丹生川一先史時代の水田遺跡の考察」『大分大学学芸学部研究紀要』2-1, 1962。



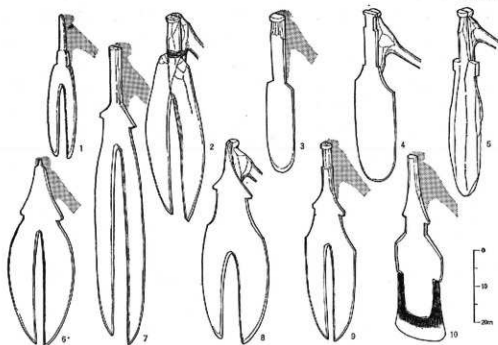


Fig. 58 膝柄鍬と膝柄設鍬模式図

1976年、黒崎直は各地で発見されているこの種の木器を集成し、「ナスビ形着柄鋤」とよぶことを提唱した<sup>1)</sup>。黒崎の想定によれば、名称が示すように身に対して平行する柄をとりつける鋤となり、これを前提にしてこの種の耕具が果たした歴史的役割りを追跡した。彼の見解では、「従来（弥生時代）広鋤が担っていた役割り、すなわち水田耕起作業に用いられる中心的な農耕具という役割りが、新しく出現したナスビ形着柄鋤によって肩代りされていく過程をうかがわせる<sup>2)</sup>」ものといひ、弥生時代の農法と古墳時代の農法とを画する重要な標識となるともいう。黒崎の意見に対するたいした反論もなく、筆者らも積極的に支持してきたのであった。

1977年になって静岡県宮塚遺跡<sup>3)</sup>から、黒崎のいうナスビ形着柄鋤に類似する耕具に一見斧柄にみまがらうほどの膝柄を蔓で固定した設鋤が発見されるに至り、事態は一変する。すなわち、黒崎が「なぜこのような複雑な柄を作り、鋤として使用しなければならないか」としてしりぞけた佐藤案の正しいことが、実物によって証明されたのである。宮塚遺跡の着柄鋤は、黒崎のいうナスビ形着柄鋤と若干形をことにするが、後述のように両者が親縁関係にあることは疑問の余地がない。このようなことから、今回報告した朝倉殿木器のなかにも存在するナスビ形着柄鋤として処理してきたものについて再考せざるをえなくなった。

宮塚遺跡の着柄鋤については、「二本歯の着柄形式の鋤で、鋤先は全長54.5cm、最大幅19cm、柄との接合部は長さ12cm、幅3cmの棒状に突出している。全長42.5cmの菱形に近い本体は、先端から長さ31cm程の切り込みを入れて二本歯としたもので、厚さは基底で2.5cm、先端は0.3cmとなる。接合する上面では、切り込みの周辺に深さ0.5cm程の削り込

ナスビ形着柄鋤

宮塚遺跡の着柄鋤

1) 黒崎直「古墳時代の農耕具—ナスビ形着柄鋤を中心にして」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊, 1976, pp. 3-36.

2) 黒崎前掲書 p. 32.

3) 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会『宮塚遺跡・湖城跡』国史1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告第4冊, 1981, p. 79.

第V章 考 察

みがなされ、下面では逆に稜をつくって削り残すが、これは素材のもつ弾力性を利用し、鎌としての機能性を高めるためと思われる。接合部は末端を段状に削り残り断面コマボコ状となる。柄は二股状の枝を素材とし、一方を長さ 16 cm に半截し、接合部に密着させたもので、一端は削り込まれて接合部と同様段状を呈す。着装方法は柄と鎌先をまざワラ状のもので密着させ、さらに幅 0.5 cm 程の蔓状の樹皮によって両者を締め合わせており、一部に遺存する。鎌のほぼ全面にわたって鋭利な工具による成形痕がみられる。」と説明されている (Fig. 58-2)。これと従来ナスビ形とよんできたものとの相違は、前者の着柄軸が棒状を呈しかつ身の前面に浅い刃込みをいれるのに対して、後者では身の頭部を股形につくり、着柄軸と頭部と刃部との境に入れた切欠きによって柄を着装した点にある。なお、宮塚遺跡例の時代については弥生時代から古墳時代にかけての間というような大雑把なときかきえないようである。1977年から本格的な調査が行われた群馬県日高遺跡<sup>1)</sup>の水田から、弥生時代後期の膝柄鎌が発見されている。それは身部を握形につくり、身部に二股ないしは一枚の刃をつけたものであるが、同時に発見された股木利用の膝柄をつけていた可能性が大きい。弥生時代後期において膝柄をつけた鎌が存在したことを示すと同時に、二股か否かを別にすれば、類似する宮塚遺跡例も弥生時代後期に属する可能性が大きい。

静岡県と群馬県の遺跡で発見された膝柄鎌に類似するものは、従来から知られる弥生時代の木器のなかに見出すことができる。たとえば大阪府池上遺跡の報告書のなかで、鋤 B Ⅲ 型式<sup>2)</sup>とよばれているものがそれである。「身と柄は組み合わせ式。長い着柄軸をつくり出し、柄孔および着柄溝は設けないもの。身は細長く反りを持たない。肩は下がり気味にわずかに張り出す。身および着柄軸の下面先端に凸帯をつくりだす。」と説明されており、中期(第Ⅱ～Ⅲ様式)の遺物であるという (Fig. 58-3)。日高遺跡例と同形で、従来フグシとよんできた木器のなかにもこの種の器具がある。このようなことから、この種の木器を膝柄鎌とよぶことにしよう。膝柄鎌は古墳時代にも存続しており、今回報告した

朝集殿木器のなかにもある (Fig. 58-4・5)。  
 岡山県上東遺跡<sup>3)</sup>、大阪府池上遺跡からは、扁平な身に二股をいれ、基部に棒状の着柄軸をつくりだす二股鋤とよばれる器具が発見されている。いずれも弥生時代中・後期に属する (Fig. 58-1)。この種の器具では着柄軸が上下二段にわかれ、上段つまり着柄軸の先端が一段細い棒状に突出している点が特色である。着柄軸が二段になるか、棒状を呈するかという点をのぞけば、宮塚遺跡例もこの種の鎌にぞくすることになる。これを膝柄鎌とよぶことにしよう。

着柄鎌の代

膝柄鎌

	長(a) × 幅(b)		a/b
	cm	cm	
大分, 丹生川A	51.0	21.0	2.4
大分, 丹生川B	50.6	13.0	3.4
岡山, 下市部	46.4	10.0	4.7
大阪, 東奈良	73.0	15.5	4.7
奈良, 6ACA	82.6	13.9	5.9
奈良, 6AAX	55.9	20.0	2.8
大阪, 四つ池A	54.2	16.8	3.2
大阪, 四つ池B	47.7	13.9	3.4
大阪, 古池A	52.4	17.0	3.1
大阪, 古池B	48.0	14.0	3.4
岐阜, 宇田	47.0	17.0	2.8
静岡, 伊場	43.0	16.0	2.7
山形, 島	55.0	16.0	3.4

Tab. 17 膝柄鎌の長・幅の比較

1) 群馬県立歴史博物館『新発見の考古資料—発掘された古代の水田』1990, p. 4, 写真 6・7。  
 2) 08大阪文化財センター『池上遺跡』第4分冊の1木器編, 1978, p. 12。  
 3) 岡山県教育委員会「上東遺跡の調査」『岡山県歴史文化財発掘調査報告書第2集』山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ, 1974, p. 125。

新に設定する二種の鍬にとまなり木の幹と枝を利用した膝柄は、従来は斧柄に分類されてきた。いま宮塚遺跡例にしたがって台部後面が平滑で、台基部前面に溝をいれる膝柄をさがすと、静岡県登呂<sup>1)</sup>、奈良県纏向<sup>2)</sup>、大阪府池上遺跡<sup>3)</sup>など弥生時代後期・古墳時代の木器のなかに見出すことができる。

当面問題になっている「ナスビ形着柄鍬」も、鋤とするよりも上述の膝柄鍬、膝柄股鍬の部類に属する講具とかがえた方がよさそうである。そのことから、弥生時代中・後期からある笠形の頭部が発達していないものを膝柄鍬 A、膝柄股鍬 A とよび、いわゆる「ナスビ形着柄鍬」を膝柄鍬 B、膝柄股鍬 B とよびわけることにする。黒崎の研究によれば、膝柄股鍬 B は弥生時代後期にはじまり、古墳時代中期（5世紀後半）まで使用される。膝柄鍬 B は古墳時代中期にあらわれ、ある期間膝柄股鍬 B と共存するが、次第に膝柄股鍬 B を凌駕していく<sup>4)</sup>。この見解は大筋として正しいのだが、いま一度膝柄股鍬 B をくわしくみる必要がある。

弥生時代後期から古墳時代にわたって存在する膝柄股鍬 B は、鍬身基部と着柄軸の形によって4種に分けることができる。1は盤形の頭部を左右から段をつけて削り込み、その端に着柄軸を細い突起状につくるもの。2は上部が文字通り盤形を呈し、左右に段がなく棒状の長い着柄軸を削り出したもの。3は着柄軸の上部が寸詰りとなり、先端部が細く短かいもの。4は着柄軸の後面に一段深く削りこみ、柄を緊縛しやすくし、木口に接する部分を節状に削りのこしているものである。

膝柄股鍬 B<sub>1</sub> は大分県丹生川・安国寺遺跡<sup>5)</sup>、大阪府東奈良遺跡<sup>6)</sup>にみられる弥生時代後期のものである (Fig. 58-6)。一般的な膝柄股鍬 B<sub>2</sub> は岡山県下市瀬遺跡<sup>7)</sup>、平城宮跡佐紀池などから発見されており、弥生時代後期から古墳時代初期に属する (Fig. 58-7)。膝柄股鍬 B<sub>3</sub> は近畿・瀬戸内地方の古墳時代中期の遺跡から発見され、三股鍬もふくめて出土例が多い (Fig. 58-8)。膝柄股鍬 B<sub>4</sub> も畿内地方を中心に広がり、山形県鳥遺跡にまでおよんでおり、古墳時代後期に属する (Fig. 58-9)。膝柄股鍬 B は普通長さ 50~60 cm の大きさであるが、膝柄股鍬 B<sub>1</sub> には全長が 70 cm をこえる大型のものがある。また、4種類を通じて狭刃と広刃の区別があるらしく、その境は身幅に対する全長の割合が 1:4 付近のようである (Tab. 17)。

さて、膝柄股鍬 B のうち、弥生時代後期にはじまる膝柄股鍬 B<sub>1</sub> がもっとも古い。この鍬にとまなり木の大な二股の刃は、同時期の北部九州の遺跡から発見される股鍬とよく似ている (Fig. 59)。一方、基部に

膝柄の諸例

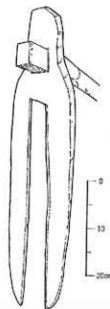
膝柄股鍬の  
A と B膝柄股鍬  
B の時代

Fig. 59 北部九州の股鍬  
股鍬模式図  
(板付第2区遺跡)

- 1) 日本考古学協会『登呂』木編, 1954, 挿図第36・62-64。
- 2) 石野博啓・関川功『纏向』橿原考古学研究所1976, p. 322, 図154-16。
- 3) 『大阪文化財センター』『池上遺跡』第4分冊の2木器編, 1978, PL. 22-8。
- 4) 黒崎前掲書, pp. 18-19。
- 5) 九州文化総合研究所編『安国寺弥生式遺跡の

調査』毎日新聞社, 1958, p. 239。ここではヒレ状木器とよんでいる。

- 6) 東奈良遺跡調査会『東奈良』1979, p. 239。
- 7) 岡山県文化財保護協会『落合地区下市瀬遺跡』『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(9), 1973。
- 8) 山形市史編さん委員会『鳥遺跡』『山形市史』別巻1, 1964, 第41回-11・12。

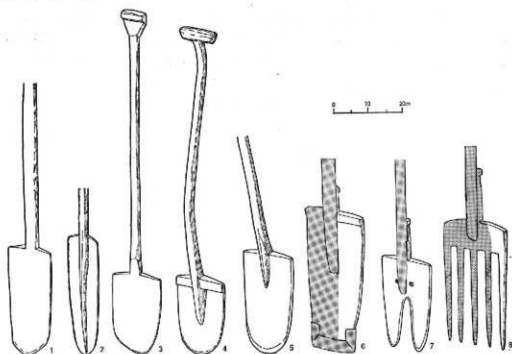


Fig. 60 鋤・フォーク状木器模式図

みられる二段の若柄軸は、畿内・瀬戸内地方の膝柄股鋸Aと共通している。また、膝柄股鋸Aは古墳時代の遺跡からの発見例を欠いているので、古墳時代には消滅する辨見らしい。以上のようなことから、北部九州の股鋸と畿内・瀬戸内の膝柄股鋸Aとが合体した形態が膝柄股鋸B、ではあるまいか。北部九州でさかんに使用されている股鋸は、板状の身に二股、ときには三股をつくり、長い刃部は鋭い刀身形を呈し、柄は基部にあけた長方形の柄孔に挿入する。その機能は、類似の形をとる膝柄股鋸Aにくらべてすぐれていることはたしかである。膝柄股鋸Aにはサカキなど弾力性のある膝柄がもともと着装されていたこと、畿内地方では方形なり長方形の柄孔をあける方法が発達していなかったことなどによって、北部九州の股鋸を導入するとき膝柄股鋸Bのような形態を生じたのではないかとおもわれる。

膝柄股鋸の原 型

膝 柄 鋸

鉄刃の装着

膝柄股鋸Bは、古墳時代後期になってあらわれる。基部の形状は膝柄股鋸B<sub>1</sub>に対応するが、一刃先に鉄刃先を装着する点をもっとも異なる。鉄刃先をつけるため身の先端を舌状につくり、ときには静岡県伊場遺跡例のように鉄刃先をつけた状態で発見されることもある (Fig. 58-10)。

膝柄股鋸Bの発生は鉄刃先をはめることにある。いまのところ、膝柄股鋸Aの発展形態なのか、膝柄股鋸B<sub>1</sub>の発展形態なのか明らかにしたいが、形態的にみれば膝柄股鋸Aとの関係がよいようにおもえる。膝柄股鋸Bの出現によって膝柄股鋸A、膝柄股鋸Bも消滅に向うことは事実である。だから、両者の機能をともにそなえた耕具であることはたしかである。本文完成後、滋賀県針江中遺跡から5世紀末ごろの膝柄股鋸Bと、これにともなり柄が出土した<sup>21)</sup>。着装状況からすれば、明らかに組合せ式の鋤であり、鋸ではない。このことによって黒崎の説も完全に否定できず、鋤と鋸との両用に使う耕具と考えられるに至った。

- 1) 浜松市道跡調査会『伊場遺跡第6・7次発掘調査報告』1975。
- 2) 滋賀県教育委員会『国道161号線バイパス開

- 道跡調査概要 (昭和57年度) 9—新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』1983, p. 29。

## iii 古墳時代前・中期における耕具の構成

各地で木製耕具の出土例が増加するにしたがって、弥生時代の九州地方の耕具と畿内地方の耕具との間に著しい相違があることが注目されている。一方、畿内においては、弥生時代前・中期の耕具とそれ以降の耕具との間に顕著な差異があり、古墳時代前・中期の耕具と弥生時代後期との間に強い関連性があることが次第にあきらかになりつつある。そうした観点から奈良盆地の遺物を中心に古墳時代前・中期における耕具の構成をうかがってみることにしよう。

弥生時代前  
中期と後期  
の差異

## a 鋤類 (Fig. 60)

鋤類は大きく一木鋤と組合せ鋤とに分かれる。一木鋤は弥生時代以来の形態をとり、バラエティにとむ。身の長さによって大小に区別できる。大型のものを、ここでは一木鋤Aとよぶ。一木鋤Aは身の長さが30 cm内外のもので、1:後面を平坦にして前面を舟底形につくるもの、2:身幅を締め前面中央に鑿をとすものにわかれる。一木鋤A<sub>1</sub>は池上遺跡からも発見されており、弥生時代後期に属する (Fig. 60-1)。一木鋤A<sub>2</sub>は平城宮 6AAG 地区から出土した古墳時代中期の例が知られている (Fig. 60-2)。

一木鋤

小型のものを一木鋤Bとよぶが、その身の全長は20 cm内外で、完形品によれば全長は1 m内外となる。出土量が多く、形態も各種のものがみられ、ここでは3種類に分類しておく。1:柄を直線的に削り出すもの (Fig. 60-3)、2:身に近いところと握り部に近いところで、カーブの弱いS字形に屈曲するもの (Fig. 60-4)、3:柄が斜め上方にのびるもの (Fig. 60-5) である。一木鋤B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>はともに弥生時代後期からの形態だが、一木鋤B<sub>3</sub>は古墳時代中期になって著しく発達し、朝集殿鋤6のように身の前面中央に鑿をとし、肩部を厚くするのは一つの典形といえよう。一木鋤B<sub>4</sub>も古墳時代中期の例で、平城宮 6AFI 地区の例では、身に対して約20°の角度で柄が斜め上方にのび、長さ1 m内外の鋤をえようとすれば、厚さ30 cm内外の板から削り出したことになる<sup>3)</sup>。握り部の形状はさまざまで、削り出しのT字形、納差しのT字形、中空半円形な中実三角形などがみられる。しかし、多くの場合は身と柄が折損した状態で発見されるので、特別の傾向を見出すことは困難である。

身とは別木の柄をつける組合せ鋤の発見例は少なく、いまのところ分類をさしひかえることにする。平城宮朱雀大路側溝からは、断片ではあるが大型の鋤身が発見されている。身の上寄り中央に柄を挿入した納穴と、先縁に鉄刃先をはめた痕跡をとどめている<sup>4)</sup> (Fig. 59-6)。古墳時代中期の遺物である。しかし、その形は上東遺跡のもの<sup>5)</sup>と一致しており、弥生時代後期以来の形であることがわかる。朝集殿鋤8は、小振りの二股鋤で、棒状の柄受けと身の中心に柄を繫縛する一対の孔をあけている (Fig. 60-7)。いまのところ類例がない。

組合せ鋤

## b フォーク状木器 (Fig. 60)

鋤のように柄を身に対して平行につける農具に、フォーク状木器がある。それは身を数本の細長い歯に分つ道具である。朝集殿下層、平城宮 6AFI 地区で発見されているのは歯の断片で、

フォーク状  
木器

1) 畿内文化財センター前掲書「池上遺跡」第4分冊の2 PL. 45-1~4。

2) 町田前掲書「平城宮跡出土の古墳時代木器」p. 18。

3) 奈文研前掲書「平城宮左京三木二坊」p. 37。

4) 奈良市前掲書「平城宮朱雀大路発掘調査報告」1974, p. 17。

5) 岡山県教育委員会前掲書「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」第2集。

## 第V章 考 察

全形を知りうるものはない<sup>1)</sup>(Fig. 60-8)。また有柄になるのか着柄になるのかも不明である。静岡県山木遺跡例のような弥生時代後期の諸例からすれば、着柄の具であるかもしれない。

### c 鍬 類 (Fig. 61)

**各種の鍬** 鍬類については、必ずしも適切な分類といえないが、広鍬・狭鍬・膝柄鍬・膝柄股鍬に分類する。前の二者はカシ類材の丸棒を柄とし、後の二者はサカキのような弾力性のある膝柄をつける。

**広 鍬** 広鍬は2種にわかれる。広鍬Aは身の平面形が幅広い長方形を呈するもの(Fig. 61-1)。朝集殿鍬16は左右や上縁に弧形の削り込みをいれた多分に装飾性を加味した広鍬Aの例である。弥生時代後期の長方形板の中央に柄壺をあけた広鍬と、ほぼ用途を一にしているとみてよい。広鍬Bは柄壺の左右で身幅を縮め、刃部の幅にくらべて上部の幅を狭くするものである(Fig. 61-2)。いまのところ奈良県では発見例を欠くが、滋賀県湖西線関係遺跡から発見されている<sup>2)</sup>。身の後面に柄壺の舟形突起をつくり、前面の上部に鑿納仕口で棧をはめこむ。直刃で鉄刃先をつけた痕跡はない。同形のもが弥生時代後期の奈良県四分遺跡<sup>3)</sup>、瀬向遺跡石塚古墳周濠<sup>4)</sup>で発見されており、弥生時代後期以来の耕具であることがわかる。このほか、湖西線関係遺跡からは、刃部が円弧形を呈する広鍬が発見されているが、類例を欠くのでここではふれないでおく。

**狭 鍬** 狭鍬の出土例は乏しく、いまのところ朝集殿鍬17の例にとどまる。それは刃先をやや広い長台形にかたどり、長方形の柄壺をあげている(Fig. 61-3)。上述のように、畿内地方では舟形突起をつくらず長方形の柄壺をあげる鍬の例がなく、九州との関連を示すものとして注目される。

**膝柄鍬** 膝柄鍬 この種の鍬の概略はすでに述べた。楕形を呈する弥生時代以来の膝柄鍬Aが、古墳時代前・中期を通じて残存し、膝柄鍬Bの出現したのちに消滅する(Fig. 61-5)。

**膝柄股鍬** 膝柄股鍬 弥生時代後期に出現した膝柄股鍬Bは、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>と形を変えながら、古墳時代の主要な耕具となり、膝柄鍬Bの出現以降次第に衰退していく(Fig. 61-4)。

この股鍬の特徴は、長大な二股の刃部にある。身が長く柄が短かい鍬は、民俗例によれば、土質の軟かい畑作業に用いられており、使用時には地面にうつむいて割るようにして後退しながら耕す。一方、身が長く二股になる鍬は土がよくきれ、粘質の上壤で有効に働き、柄の角度が鋭角のほうが使いよいとされている。膝柄股鍬Bもおそらくそうした類の耕具であり、低湿地での川上例が圧倒的多数を占めることから、水田用の耕具とみなすべきである。<sup>5)</sup>

### エ プ リ d エブリ (Fig. 61)

身に対して直交する柄をつける耕具にエブリがある。幅広い長方形あるいは台形の板で身部をつくり、その長辺を刃部にあてる。朝集殿エブリ20のような直刃のものほか(Fig. 61-6)、鋸歯形の歯を切り出す例もある(Fig. 61-7)。また大阪府服部古池遺跡例のように、前面の柄壺の周囲に突起をのこし、左右上部に支木をはめる切り欠きをいれ、柄を強固にするものもある。<sup>5)</sup>

1) 奈文研前掲書『平城京左京三条二坊』, Fig. 27-29。

2) 滋賀県前掲書『湖西線関係遺跡調査報告』, p. 124, PL. 64-1。

3) 奈文研前掲書『飛鳥・藤原宮発掘調査報告

Ⅲ』p. 136, PL. 74。

4) 石野博信・岡川功前掲書『櫻向』, p. 318。

5) 畿中・古池遺跡調査会『畿中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』1976, p. 46。

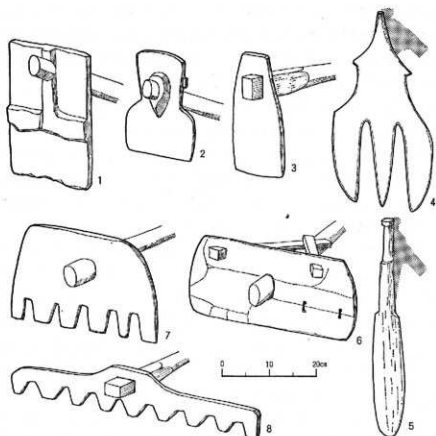


Fig. 61 鉄・エブリ模式図

また、身のヒビ破れを補修孔によって修理するのもこの具の特色である。単に土をかきならすだけでなく、ジョレンのように身背後面に土をのせて移動するような機能をもそなえるのだろう。円形で直刃のものが四分遺跡から発見されており、弥生時代後期に成立した耕具であることがわかるとともに、祖形を中期以前の丸鉄に求めることができる。

一般にいうエブリは細長い板の長辺に鋸歯形の歯を切りこんだものだが、古墳時代の例はいまのところ畿内地方で発見されていない。だが、古墳時代中期の佐賀県森の下遺跡からは、細板に鋸歯をつけたエブリが発見されており、畿内地方でも弥生時代以来連続して使われている可能性が大きい (Fig. 61-8)。細板のエブリの存在を予想するならば、身の高さが高いエブリは荒代や中代など土塊がまだよく碎けていない段階に用い、細板のエブリは苗代の整備や穀物を広げて乾かすときに用いるというような用途上の相違をかんがえねばならない。

#### c 鉄器から推測される耕具

古墳などから発見される鉄製の刃先によって推測しうる耕具がある。

**馬鉄** いわゆる備中鉄の類で、身の全体を鉄でつくり、3~4本の歯をそなえた耕具である。弥生時代中期以前では、木の馬鉄が一般的だが、後期以降になると発見されない。これは弥生時代後期に木から鉄に移行していることを示しており、その間に馬鉄が消失したことを意味しない。

**鉄板折曲げ刃先** 古墳から発見される鉄刃先に、長方形の鉄板を左右で折るかえしたものが

1) 佐賀県教育委員会『生石・森の下遺跡』1978, p. 91.

ある。都出比呂志はそれらを、A（長さ10cmをこえるもの）、B（長さ6～12cmのもの）、C（長さ6cm以下のもの）にわけ、AとBを実用品としCを非実用の模型とした。その用途としては線先に想定し、打鉄の刃先に比定した。<sup>1)</sup> 朝集殿の広鉄16に予想されるのはA類であり、出土量の比較的多いB類は鉄線につくとみてよからう。

金属刃先  
の痕跡

福岡県板付遺跡2区から発見されている弥生時代中期の鉄線には、銅ないしは鉄の刃先がつけられた痕跡をとどめる。その身幅は8.7cm、刃部の幅は6.3cmであり、同地方の遺跡から発見される銅刃先ないしは鉄刃先をつけたものとしてよい。だが、この種の刃先が必ずしも鉄線にのみ限定されているとはかぎらない。弥生時代後期の岡山県上東遺跡からは、同種の鉄刃先が着柄跡に装着された状態で発見されているからである。つまり、鉄板折曲げの刃先は、鉄・銅ともに装着されているとみなければならぬ。

U字形  
鉄刃先

U字形鉄刃先 古墳時代中期の終りごろから、U字形にかたどる鉄の刃先があらわれる。先鋒のカーブの弱い弧刃のものやカーブの強い円刃のものがあるが、いずれも木身の台にはめて使用するものとされている。前者は弥生時代の銅製品に類似形のものがあり、後者は前者の使役によって磨耗したとする考え方がある。静岡県伊場遺跡で発見された6世紀の鉄線Bに装着する刃先は弧刃であった。<sup>2)</sup> だが、上述のように扇類にも鉄刃先をつけた痕跡をとどめるものがあり、鉄・銅両用の刃先であることを想定しておかねばならない。後世の鉄刃先にしても、形態上では扇跡の区別を識別しえないものが少なくないからである。

手斧鉄

手斧鉄 かつて松本正信・加藤史郎は、古墳から発見される鉄斧のうち、「手斧とは考えられない比較的刃幅の狭い、顕著な肩をもたず細長い感じのする、海手の始刃になっていない形式のものにも手斧と同じような柄、あるいはふたまたの板で作った柄をつけたらいい何になるであろうか。これはまさしく、鉄としての機能を考える他にないしろものである。」とし、「しかし、刃幅は狭いが柄さえしっかりしたものをつければ、これでも開型に使用しうることであきらかである。」といわれた。そして、現在も播州地方で用いられている「手斧鉄」という鉄が古墳時代にも存在したことを提唱した。<sup>3)</sup>

これは大藏永常の『農具便利論』にいう新<sup>Supra</sup>鉄にあたるもので、大小3種に分類され、「第一変を鋸、葉類等萬のものを鋸とき筋を切に用ゆ。……広き新鉄を用ゆるは、田をすきかへし、日に乾かしたる塊を砕くには此具をもてきざみ、又はみねをもて打くだに鉄をもてなすよりは、はるかほかどりで勞すくなし」と説明されているものと同一物であろう。かれらの論が正鵠を射ているとはいえないが、いわゆる鉄斧のなかには薄身で刃が袋の一方に片より袋の閉塞がじゅうぶんでなく、横斧の機能を果しそうにないものも確かに存在する。もしも開型などに用いるのならば、大型鉄斧のほうがのぞましく、またサカキの鉄柄のようなものではなく、カシ材のしっかりした柄のほうがのぞましい。いまのところ存在の可能性をみつめつつも、今後の検討をまつことにしたい。

1) 都出比呂志「農具鉄器化の二つの例期」『考古学研究』51 1967, p. 37。  
2) 福岡県教育委員会「板付 市営住宅建設にともなう発掘調査報告書」上巻, 1976, p. 424。  
3) 浜松市遺跡調査会前掲書『伊場遺跡第6・7

次発掘調査概報』p. 27・32。

4) 松本正信・加藤史郎「手斧鉄考」『考古学研究』57 1968, pp. 33-39。

5) 『復刻 日本科学古典全書 6』朝日新聞社, 1978, p. 88。



古墳時代の木製耕具の遺物でみるかぎり、鉄刃を装着するものは少量であり、圧倒的多数は鉄刃を装着しない。これは木製品が低湿度からしか出上しないという特性によるのであろうが、しかし農耕具の鉄器化が無制限におこなわれなかったことを暗示している。

## B 古墳時代農耕具の問題点

畿内地方における古墳時代前・中期の耕具について概述した。それらのほか、杵・臼などの農具にも弥生時代中期以前とはことなる形態上の変化がみとめられ、弥生時代後期に普及する大足・鎌などの農具も大いに進展しているとみるべきである。農耕具でみるかぎり、弥生時代後期から古墳時代にかけての大きな転換点はみとめられず、弥生時代後期に確立した耕具の延長線上に位置づけられる。つまり、弥生時代の中期から後期への転換期に農耕具に大きな西側があることを認めねばならない。このことは、愛媛県古照遺跡にみられるような大規模な灌漑土木工事を生み出す過程とも軌を一にしており、単なる農耕具の変化としてではなく農法転換の一つの証拠としてとらえることが可能である。

これまで、弥生時代後期以降の農耕具に対しては、きわめて工芸的に洗練された弥生時代中期以前の耕具と比較して、粗製化・退化・単純化などの評価がとまずれば与えられがちであった。現象としては確かにそうである。この時期には美しい文様を刻した堅竹などはもうみとめられなくなり、整美で手のこんだ鋤類も少なくなる。すぐれて実用本位に製作されている気風が濃厚にたどよう。たとえば、柄孔を欠いた薄身の鋤やエブリの類は、出土品でみるかぎり軟弱で頼りないようにみえるが、軽くて使いやすい耕具を追求すれば、そのような形をとることは必至である。

このような耕具の転換の糸口になったのは、北部九州地方の農耕具が畿内地方に波及したことによるのではなからうか。北部九州の農耕具の特色をなす線系耕具の大形で単純な形態が、弥生時代後期になって東漸したのではないかと考えるからである。農耕具ではないが、畿内地方における板状鉄斧から九州型の袋状鉄斧への転換も弥生時代後期にあるとみられている。しかし、それは北部九州から畿内地方へ一足飛びに移植されたのではなく、瀬戸内海の沿岸を東漸する過程で、在来の農耕具を改良する形で摂取されたようである。この間の状況は、さきに膝柄股鋤Bの形成過程の説明ですでに述べてきた。

北部九州における弥生時代前期の耕具と中期以降の耕具とを比較することは、前期の資料がきわめて少ない現状では非常に困難である。だが、瀬戸内・畿内・中部地方に形成された弥生時代中期までの農法が、前期の遠賀川式土器に象徴されるような九州を起点とする農法の発展形態であろうことは、仮定としてじゅうぶん成立する。だとすれば、畿内とは著しく形態を異にする弥生時代中期の北部九州の農耕具は、遠賀川式土器以降の時期に形成されたのみならぬ。

縄文時代と弥生時代とを画する水稲耕作だが、起源を中国の長江下流域に発し、朝鮮半島中・南部で定着したのも日本列島に及んだとする説は、大方の認めるところである。その農法は漢代まで中国の江南地方で行われていた火耕水耨であろうか。火耕水耨の解釈には諸説があり、大きな問題を内包しているのであるが、『漢書』武帝紀応劭注によると「まづ雑草を焼いてその

大足・鎌

農耕具  
の西側実用本位の  
耕具九州から  
畿内へ水稲耕作  
の波及  
中国の農法  
火耕水耨

## 第V章 考 察

あとへ水をそそいで稲を播種する。すると焼いたとき生残った雑草と稲とがともに発芽生長する。それが高さ7,8寸にのびたとき、ごとごとこれを刈ってふたたび灌水すると、雑草は枯死して、稲苗のみが生育する<sup>1)</sup>という農法であった。また、稲以外のアワ・ムギなどの栽培を併用したこともあろう。ところが、漢代以降、華東地方においては新しい稲作農法が発達する。それは『氾勝之書』崔寔にいう北土の移植式稲作であり、淮河流域の歳易(一年休閑)・直播(条播)・条間手耨の稲作法であった。田植と条播とは各段の違いであろうが、いずれにせよ立毛間の除草作業(耨)に重点がおかれ、そのことが稲の増産につながるとされている。6世紀の

### 漢代からの 新稲作農法

### 齊民要術に みる稲作法

『齊民要術』にのべられている淮河流域の稲作法を、西山武一はつぎのようにまとめている。「1: 稲は必ず歳易(二年一作)がよい。上流に近いがよい。2: 陰曆(以下すべて陰曆記日)三月ないしは四月上旬中に直播し、霜降(九月中)期に刈る。3: まず放水十日のち陸軸(ローラ)を火くこと10回、地を熟せしめる。4: 種子を五口水に漬し、次いで草履で蒸らすこと3分、2分の長さに催芽さす。5: 一畝に三斗の割で播種し、三日間鳥を逐う。6: 苗が7・8寸長るとき、<sup>2)</sup>蘆草がまた起るので、鎌で水を侵してこれを斃死せしめる。7: 苗がさらに長じてからまた耨する。8: 耨し終れば水を決して去って根を曝して堅くする。9: 水旱の状況に応じて時々灌溉する。10: 成熟直前には水を去る。」

### 新式農法 の導入

北部九州では弥生時代中期以降、瀬戸内以東では後期以降にみられる農耕具上の変化は、歳易条播か移植かの問題を別にすれば、中国における新式農法が何らかの形で朝鮮半島に定着しそれが日本に導入されたことを示すのではあるまいか。この時期に新たに登場する鎌・エブリ・フォーク状木器・大足などは新式農法を支える耕具であろう。たとえば、『周礼』地官稲人の鄭注に、「歩いて基の芟を揚ぐとは、田水が排罵されている故に、田中には歩いて行って(草を)芟鉤で挙げることができる」というように、水で立枯れた水田の雑草を除去するためにフォークを使用することをのべている。また、近年になって各地で発見されている水田遺跡では、水の給排を巧みに操作する水田と水路の状況が明らかになっている。

### 耕具の使 用段階

上のような観点から、弥生時代後期から古墳時代にかけての耕具の使用段階を想定すると次のようになる。最初の水田起耕は鋤類あるいは馬鍬で行い、さらに広鍬や狭鍬で土塊を砕き、放水後エブリで水田をならし、種子を条播さす。次に、通風・通光をよくし、稲の生育をうながすため、中耕除草を行って株間を整理する。この際、身が長くて設わかれた北部九州の股鍬あるいはナスビ形を呈する瀬戸内以東の株間股鍬Bが有効な役割りを果たしたと考える。この際、水面にただよう雑草類をフォークで集める。その後は適当に水の給排を管理し、秋になると鎌で刈り取るということになる。

いまのところ中国における木製農耕具が明らかになっていない現状で、転換の基準を漢式農法に求めるのは恣意のきらいもあるが、さりとて弥生前中期の農法を基盤として日本列島で創造されたともおもえない。

### 漢式農法 導入のき っかけ

漢式の新しい農法が朝鮮半島に土着し、それが日本へどのようにして導入されたか。いまのところ直接その間の事情を説明しうる資料を欠く。紀元前108年の楽浪郡設置によって漢植民

- 1) 西崎定生「火耕水耨について」『中国経済史研究』東京大学出版会、1966。
- 2) 西山武一「齊民要術における淮域稲作の実体」

『アジア的農法と農業社会』東京大学出版会  
1969, p.163。

地経営の一環として朝鮮半島の農法が改良され、その余波が日本列島におよんだとする見方が、可能性の一つとしてありうる。かくして、弥生時代中期の北部九州の生産力を高めた新式農法が、弥生時代後期には瀬戸内海沿岸を東漸し、中部・関東地方にまでおよぶことになる。

新式農法が奈良盆地、大阪湾沿岸地方の農地拡大の原動力であり、大和・河内の生産量を飛躍的に進展せしめたのである。それは用水の給排水を調節する網目のような大小の水路を必要とする。低湿地で発見される木製耕具でみるかぎり、鋤類、それも有柄鋤が多数を占め、しかも著しい使用痕跡をとどめており、消耗率の高かったことを示す。纏向遺跡の石塚古墳周濠から発見されている一木鋤の多くには著しい使用痕跡をとどめるとともに、握り部のつくりが中空半円形に統一されている。このことは、特定工房で量産的に製造された鋤をもち、池溝を開発する集団労働の存在を暗示している。

古墳時代中期の終りごろに出現するU字形鉄刃先を重視して、農地開発の一つの画期とするみかたもあるが、それが農法自体を著しく改革したという痕跡はない。むしろ、弥生時代後期から古墳時代初期までに蓄積した革新的な技術を量的に拡大し、それを維持する生産の組織力を強化した一つの到達点としてとらえたほうがよいのではなかろうか。

大和・河内の生産量の増加

耕具の量産

## C PEGによる出土木材の保存処理方法とその問題点

朝葉殿下層から出土した各種の木製品を含む出土木材については、出土後に水浸けにして保存してきたが、木材の劣化がさらに進むなど、保存管理上に大きな問題が生じた。このために、科学的保存方法の一つである「PEG含浸法」による保存処理を行なった。処理の結果から見ると、樹種（広葉樹と針葉樹）や劣化状態などの違いによってその効果も変わることがわかった。このため、現段階におけるPEG含浸法の問題点を要約することにした。

i. 出土木材の保存方法のひとつに、高分子物質のPEG（ポリエチレン・グリコール）をしみこませて強化する方法がある。PEGはその分子量の大きさによって状態が異なっている。無色透明の液状を呈しているもの（分子量が小さい）から、軟こう状、そしてロウ状（分子量が大きい）のものまで種類は多い。そして、これらの異なる性質が出土木材の保存処理のために微妙に生かされている。

一方、保存処理の対象となる出土木材は、長年、土中に埋もれていたものであり、劣化が激しく、その本来の物性は著しく損なわれている。しかも、出土木材の多くは、湿地帯からの出土品である。いわば、水漬けに近い状態で埋蔵されていたものであり、水分を過飽和に含んでいる。主な樹脂分であるセルロース分もほとんどが失われており、木材の強度もすたになくなっているものが多い。木材そのものの重さに対して、5倍から10倍の水を含むことによって辛うじて形をとどめている。自然乾燥させると、ほとんどのものは激しい収縮が起こり、もとの形がわからないくらいに変形してしまう。この含有水分を如何に処理するかが、出土木材保存の第一歩となる。

現在、①不安定ともいべき水を、安定した物質に置き変えてしまう方法、あるいは、②木

PEGの性質

出土木材の状態

## 第V章 考 察

製品の原形を変えずに、含有水分を強制的に除去する方法がおこなわれている。前者の代表的な方法のひとつに「PEG 含浸法」が、後者には「真空凍結乾燥法」などがある。

### PEG 含浸法

ii. PEG 含浸法でも、その利用の仕方によって処理方法も違ってくる。第一は、分子量の低いPEG（無色透明の液状を呈しており、吸湿性が大きく、木材を湿った状態に保つ）をしみこませて、木材の急激な乾燥を抑制することである。第二は、木材中に含まれている水分を分子量の大きいPEG（ロウ状を呈し、木材を硬化する）に置き変えて木材を処理する方法である。朝集殿下層出土の木材について、当初、前者の処理方法（PEG-1500）を試みた<sup>1)</sup>。このような低分子量のPEGを使う方法は、スウェーデンのストックホルム港湾から出土した木造軍船のために応用された<sup>2)</sup>。それは、木材を湿らせ、乾燥速度を緩慢にし、木材の変形を最小限にとどめることに成功した例である（この場合には、乾燥後、さらに高分子量のPEG-3350を表面にコーティングして完全を期している）。しかし、平城宮跡出土木材の場合には、十分な効果をあげることはできなかった。しみこませたPEG水溶液は高温高湿の収蔵条件の中で、ふたたび外部に溶出してしまい、木材が変形する結果となったのである。これら低分子量PEGによる処理済の木材は、適切な条件のもとで保管され、徐々に乾燥されれば、変形を抑制できたであろう。

保存処理後の木材を保管するために、これほどの複雑な条件を要しないのが第二の方法といえる。すなわち、木材中の水分を分子量の大きいPEG-4000（ロウ状）に置き換えて強化することである。デンマークにおけるバイキング船体の保存方法がそれであった。平城宮跡出土の木材についても、すでに、この方法に切り換えている。

PEGを利用する保存方法では、その手法や効果の程度が上述の例のように種々異なってくるのは、木材保存の基本的な考え方の違いにもよるが、木材そのものの理学的性質にも起因している。木材は、出土した時点で、すでに劣化の激しいものと、そうでないものがある。さらに、その程度は樹種の違いに大きく影響される。また、同一の木材の中でも中心部分と表層部分では劣化度が異なっている。こうした諸条件を考慮したうえで、PEG含浸法、真空凍結乾燥

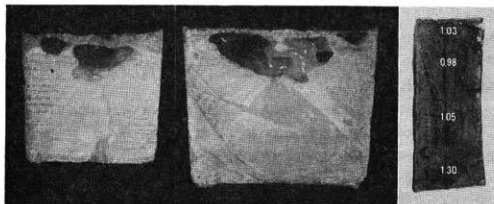


Fig. 62 PEG の凝固形態と PEG を含む木材の密度

- 1) 平均分子量が500～600で、外観は軟こう状を呈している。30%程度の水溶液をつくり、これに木製品を漬けて処理した。
- 2) およそ360年前、ストックホルム港湾に進水

- 直接沈没した木造軍艦「バーサ号」。1961年船体が引き揚げられ、保存処理された。
- 3) 五隻のバイキング船が発見された。これらはPEG処理され、現在第五隻目を復原中。

燥法などの適否についても検討すべきである。

iii. PEG による保存処理が、PEG の性質や木材の理学的性質をふまえた適切な条件のもとで実施された場合でも、さらに複雑な技術的問題が残されている。木材の中にしみこむ過程としみこませたあとの PEG が凝固するまでの間に起こる木材への影響である。現在、当研究所がおこなっている「PEG 含浸法」は、分子量の大きい PEG-4000 を用い、最初20%ぐらいの水溶液に木材を浸して十分に浸透させる。水溶液の濃度は1~2年もの長い時間をかけて徐々に上昇させ、最終段階では95%から100%近い濃度の PEG をしみこませる。それは、常温ではロウ状を呈しており、木材を原形のまま保つことができる。

この方法によれば、PEG-4000 の溶液が木材の中にしみこんだあと、室温にまで冷却され凝固するのだが、その過程で PEG は収縮する。PEG の収縮が、具体的にどのような現象をひき起すのか、さらに、木材に与える影響などについて検討する必要がある。PEG-4000 の収縮率は、たとえば、融解した PEG 溶液を 80°C から 20°C にまで冷却し、凝固させると、体積比では約7%程度となる。この凝固は外周および下部から始まり、最終的に凝固する内心部で PEG の収縮が顕著される結果となり、空洞が発生する (Fig. 62・左)。このような PEG の収縮にともなう空洞現象はあきらかに木材組織に影響を及ぼしているときみなければならない。また、木材の中で PEG 溶液が凝固するまでの間、通常の室内温度のもとでは一昼夜を要するが、その間に溶液は木材の中で流動し、PEG の分布が一律ではなくなる。下部の方が PEG の分布密度は高くなる (Fig. 62・右)。同一木材の中で PEG の分布状態が異なる点も、恒久的な木材保存の観点からみれば、留意しなければならないところである。

Fig. 62・左は、500および1000 cc のビーカーの中で100%の PEG 溶液を 80°C で融解したあと、20°C にまで冷却、凝固させた場合のロウ状になった PEG 塊の断面をあらわしている。机上に放置されたビーカー内の PEG は、やや上方に空洞を生じている。この部分が最終的に凝固した箇所である。また、Fig. 62・右は、PEG-4000 を十分にしみこませた木材で、4箇所について密度 (PEG 分布の粗密に関係する) を測定したものである。写真左の場合と同じ部位、つまり、やや上方部分における密度が最も小さくなっている。このような PEG 自体の挙動が、木材の中でどのような影響を及ぼすのか、経年変化の観察を続行中である。しかし、過去10年間の結果をみる限り顕著な変化はあらわれていない。

現在、平城宮跡出土の木材については、PEG 含浸法とともに、真空凍結乾燥法を併用している。木材の大きさ、劣化の程度に応じて使い分けているが、これにも PEG を使っており、やはり分子量の選定、処理方法の決定など、複合的に絡む問題がすべて解決されているわけではない。たとえば、真空凍結乾燥法の場合には、PEG を有機溶剤 (トープチルアルコール) に溶かして木材にしみこませる。この PEG 溶液の適切な凝固点 (共晶点) の設定、つまり、予備凍結するときの温度の決定が重要となる。前述したように、PEG が凝固するときの現象が木材に影響を与えることがあるからだ。

しかし、いずれの処理方法を採用するにしても、PEG が利用されるので、その物性を理解し、活用すべきである。今後の出土木材保存の課題は、PEG 含浸法、真空凍結乾燥法の長所短所をより正確に把握することのほか、その短所を補う新しい方法を開発することである。

PEG  
の 収 縮

真空凍結  
乾燥法

## 4 結 語

この報告は第二次朝堂院朝集敷地区および、第一次大極殿院西方の佐紀池下層で検出した古墳時代の溝とその出土遺物についてとりまとめたものである。平城宮からはこれまでの調査で、宮の造営に伴って削平された古墳や整土中から埴輪が数多く出土しており、古墳時代に関する資料もかなり得られている。しかし、木製農耕具や建築部材、多量の土器など生活遺物を豊富に出土する遺構は上記二例のほかはそう多くはない。

**遺 構** 東朝集敷水窪下を通る溝 SD6030は奈良山丘陵の一部が舌状に張り出した支丘の南端西縁に沿って北西から南東方向へ蛇行して流れる自然流路であり、上・下二層からなる堆積層からは多量の土器、埴輪、木製遺物が出土したが、なかでも南区とした溝の南半部からは建築部材や農耕具、容器などの木製品が多量に出土している。このように生活遺物を中心とするところから、近傍に集落の存在が推測されたが、住居跡などの建築遺構は調査区にはなく、溝の東方には円筒埴輪を棺に用いた墓(SX6035)が1基と埴輪片を含む土塚 SK6037、小溝 SD6038などの確認にとどまった。

いっぽう、佐紀池の下層からみつかった古墳時代の溝 SD8520 はやはり奈良山丘陵から派生する二つの支丘間にある狭隘な谷地形が平野部に開口する位置にあり、谷水の自然排水溝とみられる。溝は分流、合流して蛇行しながら北から南へ流れるが、分流点と、南東方向からこの溝に注ぎ込む溝 SD8521 との合流点の二箇所に簡単な堰が設けられており、流水の調整をおこなっている。おそらく、下流域の水田耕作に関連する施設であったとみられる。

**土器の構成** 出土遺物のうち、土器に関しては SD6030 から土師器 928 点と須恵器 2 点が出土している。器種別では土師器に小型丸底壺、器台、碗、高杯、壺、甕、鉢、甌、蓋があり、須恵器は埴のみ上層から出土している。このうち、器種構成をみると、下層では甕がもっとも多く、以下小型丸底壺、壺、碗、器台、高杯の順となっており、上層では高杯がもっとも多く、次いで甕、壺、甌、小型丸底壺、碗となっている。これを用途別に対比してみると、下層は煮炊用土器(甕)が47%、供膳用土器(小型丸底壺、器台、碗、高杯)が39.8%、貯蔵用土器(壺)が12.9%となり、上層では供膳用土器が68%、煮炊用土器21.3%、貯蔵用土器5.9%であって、下層とやや様相を異にしている。なお、今回出土した壺のなかには、煤が付着し、煮炊に用いられた痕跡を示すものや、供膳用と考えられる小型壺(壺F)などがあるので、これらを加味すると、下層土器群では供膳に使用したもの40%、煮炊に使用したもの50%、貯蔵に使用したもの10%という比率になる。なお、SD8520 では92点の土師器が出土しているが、甕が80.4%を占め、壺は12%、小型丸底壺や高杯などの供膳に使用されたものは10%にみえない。

**土 器 群  
の 比 較** つぎに、下層と上層の土器群を比較すると、下層土器は上層土器にくらべて器種が多く、壺D、甕E、甕F、器台、碗A、小型丸底壺は下層に限られ、なかでも供膳精製土器である小型丸底壺はきわめて特徴的な器種である。また下層土器群には他地域で製作された土器が多く含まれており、一つの特徴をなしている。すなわち、瀬戸内海東部沿岸地域の土器(壺E・55)、山陰地方に見られる二重口縁を持つ土器(甕G・55~59)、河内地方の庄内式土器(壺F・85)、吉備地方の弥生時代後期の土器に類似する土器(甕H・79・80)、伊勢沿岸地方を中心にして

近畿地方から関東地方にまで広がる土器(変I・86~92)などである。以上の他地域産とみられる土器は下層出土土器の約8%を占めている。

このような下層土器群の特徴に対して上層土器群は供膳用精製土器がなくなり、かわって小型丸底壺C、高杯B・C、壺Ac、大型鉢などがまとまってあらわれ、また新しい様相として甌や須恵器の存在があげられる。また、下層に多くみられた変A・Cが減少し、変B・Dが増加する。さらに他地域産の土器はわずかに変H(169)に限られるだけである。

このように上層と下層の土器群の間には明瞭な相違が認められるが、大和地方の同時期の他遺跡と比較すると、下層土器は坂田寺下層土器や纏向遺跡辻土壇4上層土器と共通し、上層土器は上の井手遺跡SE030上層に対比される。なお、SD8520出土土器についてはやはり、他地域産の土器(変Ia・311~313、変F・309・310)を含むが、器外面にタタキ調整をもつ変J(328~330)の存在からすると、SD6030下層よりも一段階古い様相の土器群である。

SD6030出土の木製品としては木工具、農具、什器、建築部材、その他がある。木工具には鋸斧柄と横斧柄があり、農具には鋸、鎌、フォーク状木器、エブリ、田下駄、槌、カケヤ、籠の子、叩き板、鎌柄がある。什器に属するものとしてはちぎり、糸巻の棒、自在鉤、案、箱、蓋、桶、十指形木器があり、建築部材とするものは梯子、柱、杭、板、楔、棒などである。この他に火鑽臼、木製矢、笠筒、背負梯子、刀の鞘などの生活具と装身具がある。またSD8520からは鋸・鉞・籠の農具、梯子・柱・板・棒などの建築部材と箱、また板が出土している。これらの木製品のうち、斧柄と鋸、鉞に関する若干の考察をおこない、また古墳時代前期、中期における耕具の構成についてふれているが、その要点を述べると、まず斧柄については刃を装着する台部の形状から鉄製刃が平行につく縦斧と、直角につく横斧の二種が想定される。そこで、古墳出土の鉄斧についてみると、縦斧には3種、横斧には4種あることが明らかになった(FIG. 54・55)。また、有肩鉄斧には片刃と両刃があって片刃鉄斧は横斧に、両刃鉄斧は縦斧として用いられたことを指摘した。

各種の耕具のなかでも鋸は弥生時代以来、多様な形式を持ち、広く使用された水田耕具であるが、なかでも二股の身をもつ「ナスビ形鋸」は、柄を身に対して平行につける鋸の機能をもった耕具とも考えられていたが、現在では身に対して鋭角の柄を固定した実例がみいだされたことから鋸であることが明らかになっている。柄が膝を屈めたかたちをすることで「膝柄股鋸」と称するが、身の頭部が未発達なA類は弥生時代に限られ、笠形の頭部を持つB類は弥生時代後期にあらわれ、古墳時代の前・中期まで存続する。しかし、古墳時代後期に鉄製刃先を装着した膝柄股鋸B(FIG. 57-10)が出現し、膝柄股鋸Bや膝柄鋸Aは衰退する。また、今回出土した木製耕具を中心にして畿内地方における古墳時代前・中期の水田耕具構成についてみると、鋸(一木鋸、組合せ鋸)、フォーク状木器、鉞(広鋸、狭鋸、膝柄鋸、膝柄股鋸)、エブリ、馬鋸などがあり、これに鉄板折曲げ刃先、U字形鉄刃先、手斧鋸などの鉄製刃先から推測される耕具が加わる。しかし、膝柄股鋸にみるように、一木鋸Bと手斧鋸をのぞくと他はいずれも弥生時代後期に確立した耕具の延長上に古墳時代前・中期の耕具があったと考えられるのである。むしろ、耕具の転換期は弥生時代中期以前の工芸的に洗練された耕具と弥生時代後期の単純化された実用本位の耕具との間に置くことができる。この変化は中国における移植式稲作農法が朝鮮半島を経て北部九州に導入され、さらに畿内地方に及ぶ過程でもたらされたものと考

木製品の  
種 類

鋸の 変遷

古墳時代の  
耕 具

## 第V章 考 察

えた。

### 古墳時代 遺構の分布

最後に平城宮域における古墳時代の遺構のあり方についてふれておくと、古墳時代の遺構とくに4～5世紀に造営された大型古墳は旧丘陵の頂部に見い出され、支所の縁辺と微高地には小型の方墳、孤立性建物、農耕具などの遺物を出土する溝が集中する傾向がみられる。ところが6～7世紀にかけての遺構は丘陵部にはみられなくなり、かわって宮の南側の沖積平野からは木製農耕具を伴う遺跡が発見されている。このことは古墳時代の生活、生産の基盤が丘陵地から次第に平野部へ進出していった過程を示すようである。



# 別 表

- 1 出土土器一覽表
- 2 古墳時代遺構・遺物一覽表
- 3 出土土器器種表



別表1 出土土器一覧表

## SD6030 下層

小型丸底壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考	
1	Aa	BA 07 Ⅲ	黒	10.5	(7.1)	6.1	7.2	橙褐色	スス	
2	Aa	BA 07 Ⅲ	砂	12.2	6.5	7.1	7.0	灰褐色	内面に炭化物	
3	Aa	AR 07 Ⅲ	砂	12.6	8.1	7.1	7.4	淡褐色		
4	Aa	BK 15	黒色粘土	11.9	6.9	7.3	7.5	明褐色		
5	Aa	AR 07 Ⅲ	砂	12.4	6.9	5.7	5.7	明褐色		
6	Aa	AR 06 Ⅳ	砂	12.6	—	6.1	6.2	淡黄褐色		
7	Aa	BM 16 Ⅱ	砂	11.4	6.7	6.1	7.1	淡褐色		
8	Aa	BA 07 Ⅳ	砂	12.0	(7.2)	6.0	6.2	明褐色		
9	Aa	BK 15	黒色粘土	11.5	6.9	7.1	7.4	灰褐色		
10	Aa	BA 07 Ⅲ	砂	—	—	7.3	7.5	—	灰褐色	
11	Ac	BA 07 Ⅲ	砂	10.9	8.4	6.8	7.5	4.1	灰褐色	底径2.6, 黒斑
12	Ab	BQ 16 Ⅲ	砂	12.6	6.6	9.0	9.3	3.4	明褐色	

\*杯部との接合部位外徑

器台	小地区	層位	口径	器高	頸部径	脚高	脚上端径	色調	備考	
13	A	BL 16 Ⅰ	黒 C	8.4	8.9	12.1	6.2	2.5	黄褐色	
14	A	BM 16 Ⅱ	砂	(9.1)	(8.9)	11.7	5.9	2.9	淡褐色	黒斑
15	B	BL 16 Ⅰ	黒 C	9.0	8.2	12.5	4.7	2.8	灰褐色	脚内スス
16	B	BM 16 Ⅱ	砂	8.8	—	—	3.3**	3.2	赤褐色	脚内スス **交部高

碗	小地区	層位	口径	器高	口縁高	頸部径	色調	備考		
17	A	BL 16 Ⅲ	砂	15.5	—	1.3	12.1		灰褐色	
18	A	AR 07 Ⅲ	砂	15.5	5.7	1.6	13.0		灰褐色	黒斑
19	A	AR 07 Ⅲ	砂	16.4	(4.6)	1.5	13.7		黄褐色	黒斑
20	A	BL 16 Ⅲ	砂	15.7	5.7	1.8	13.0		灰褐色	黒斑
21	A	AR 06 Ⅳ	砂	16.2	—	1.3	13.3		灰褐色	
22	A	BN 16 Ⅰ	砂	16.2	—	2.0	13.8		灰褐色	
23	X	BA 09 Ⅲ	砂	10.5	—	—	—		灰褐色	
24	X	BL 16 Ⅲ	砂	9.8	4.9	—	—		灰褐色	
25	X	BM 16 Ⅰ	黒 C	8.7	4.1	—	—		黒褐色	底径4.0

蓋	小地区	層位	口径	器高	頸部径	色調	備考		
26		BL 16 Ⅲ	砂	4.9	5.0	12.0		赤褐色	

把手付碗	小地区	層位	口径	器高	底径	色調	備考		
27		BA 08 Ⅲ	黒	9.3	8.3	4.5		灰褐色	黒斑

高杯	小地区	層位	口径	器高	頸部径	杯部深	脚上端径	色調	備考	
28	X	BL 16 Ⅲ	砂	12.6	10.7	16.8	(3.8)	3.3	黄褐色	
29	X	BM 16 Ⅱ	砂	13.8	—	—	3.8	—	灰褐色	黒斑
30	X	AR 08 Ⅲ	砂	13.3	12.9	10.7	5.0	3.0	淡褐色	黒斑
31	X	BA 07 Ⅲ	黒	20.6	—	—	(5.7)	—	淡褐色	黒斑
32	X	BK 12 Ⅱ	砂	18.9	—	—	4.6	3.4	灰白色	黒斑
33	X	BK 12 Ⅱ	砂	15.3	—	—	4.0	2.2	暗赤褐色	スス
34	A	BN 16 Ⅰ	砂	17.4	—	—	5.0	—	灰褐色	
35	A	BA 07 Ⅳ	砂	14.7	—	—	5.1	2.7	灰褐色	

標	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口径高	色調	備考		
40	Aa	BL 16	Ⅲ	砂	7.6	9.8	6.8	10.1	2.5	茶褐色	底径4.5, スス
41	Aa	BA 07	Ⅲ	砂	9.8	10.6	8.5	11.3	2.7	暗褐色	底径3.0, スス
42	An	BK 16	Ⅲ	砂	10.5	12.1	8.3	12.2	2.4	暗褐色	底径4.0
43	Ab	BL 16	Ⅲ	砂	11.7	11.7	7.8	11.7	5.2	黒褐色	底径3.0
44	Aa	BG 08	Ⅲ	古トレンテ 砂	12.0	15.5	8.1	14.8	4.3	茶褐色	底径2.8, 黒斑, スス
53	B	BK 13	Ⅲ	砂	16.9	—	11.3	—	7.5	茶褐色	スス
54	B	BK 16	Ⅲ	砂	18.0	31.1	9.1	22.9	9.3	灰褐色	スス
45	C	AR 07	Ⅳ	砂	9.9	16.4	6.6	14.8	3.5	黄褐色	底径5.6, 黒斑
46	C	BG 08	Ⅲ	古トレンテ 砂	(12.7)	(21.2)	9.4	16.1	(6.1)	黄褐色	底径5.1
47	D	AT 07	Ⅲ	砂	27.9	—	—	—	—	茶褐色	
48	D	BA 07	Ⅲ	砂	23.6	—	10.9	—	7.7	茶褐色	
49	D	BL 16	I	黒C	19.8	—	10.0	—	7.5	黄褐色	
50	D	BB 08	Ⅲ	砂	13.3	—	6.6	—	4.2	灰褐色	
51	D	AR 06	Ⅲ	砂	24.4	—	—	—	—	茶灰色	
52	D	BQ 15	Ⅲ	灰色砂	—	—	14.3	—	—	淡褐色	
55	E	BK 16	I	黒C	15.0	—	10.8	—	7.2	茶褐色	
38	F	BK 16	Ⅲ	砂	9.1	7.9	6.7	9.2	2.4	黄褐色	
39	F	BL 16	I	黒C	9.9	—	7.2	13.6	3.0	黄褐色	
36	X	BA 07	Ⅲ	砂	6.7	5.6	6.7	7.6	1.1	暗褐色	スス
37	X	BK 15	Ⅲ	黒色粘土	9.1	(9.4)	7.3	8.4	3.0	黄褐色	内面スス

標	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口径高	色調	備考		
60	A	BL 16	Ⅲ	砂	10.7 (13.6)	8.7	12.9	2.2	黄灰色	スス	
61	A	BM 16	Ⅲ	砂	12.3	12.6	9.3	13.5	2.5	淡褐色	スス
62	A	BL 16	Ⅲ	砂	11.3 (16.2)	9.4	15.4	2.4	赤褐色	スス	
63	A	BK 16	Ⅲ	砂	12.6	16.8	10.0	16.5	2.6	淡褐色	スス
64	A	BB 08	Ⅲ	砂	11.7 (15.5)	10.1	17.2	2.5	茶褐色	スス	
65	A	BL 16	Ⅲ	砂	12.0	17.5	9.4	17.0	2.5	茶褐色	スス
66	A	BL 16	Ⅲ	砂	14.8	—	12.2	23.2	3.2	灰褐色	スス
67	A	AR 06	Ⅳ	砂	13.9	—	11.0	—	2.7	暗褐色	スス
68	A	BL 16	Ⅲ	砂	14.2	—	11.4	19.5	3.2	黄灰色	スス
69	A	BL 16	I	黒C	14.7	—	11.0	18.8	3.7	暗灰色	スス
70	B	BL 16	I	黒C	13.9 (22.3)	11.5	14.0	3.3	茶褐色	スス	
71	B	BL 16	I	黒C	15.7 (27.5)	12.9	24.0	3.0	黄褐色	黒斑, スス	
72	B	BA 07	Ⅲ	黒	16.2	—	14.3	—	3.0	灰褐色	
77	C	BL 16	Ⅲ	砂	12.9	14.0	10.5	14.0	2.1	赤褐色	底径5.1, スス
81	C	BL 16	Ⅲ	黒	15.0	19.4	13.5	19.1	2.7	赤褐色	底径4.8, スス
82	C	BK 16	Ⅲ	砂	15.5	19.3	13.3	19.5	3.0	茶褐色	底径4.5, スス
83	C	BM 16	Ⅲ	砂	18.0	18.8	14.7	21.1	3.0	暗褐色	底径6.0, スス
73	D	BA 09	Ⅲ	砂	12.5	—	11.1	18.2	2.8	灰褐色	スス
74	D	BK 16	I	黒C	15.2	—	12.9	21.1	3.4	黄褐色	スス
78	D	BK 13	Ⅲ	砂	9.5	11.4	8.1	12.5	1.4	白褐色	スス
84	E	BL 16	Ⅲ	砂	14.2 (20.7)	10.9	15.3	4.4	赤褐色	スス	
85	F	BA 07	Ⅳ	砂	13.0	—	9.9	—	2.3	砂褐色	スス
56	G	BL 16	I	黒C	7.4	—	7.8	—	2.3	茶褐色	
57	G	AR 07	Ⅲ	砂	11.2	—	7.9	—	2.9	灰褐色	スス
58	G	BA 07	Ⅳ	砂	10.6	—	7.6	—	2.7	淡褐色	
59	G	AR 06	Ⅲ	砂	11.3	—	9.2	—	3.4	灰褐色	スス
75	G	BB 09	Ⅲ	黒	15.8	—	13.3	—	3.7	橙褐色	
76	G	AS 07	Ⅲ	黒	14.6 (28.6)	12.5	24.6	4.3	灰褐色		
93	G	BB 07	Ⅲ	砂	36.8	—	34.2	—	8.5	黄灰色	黒斑, スス
79	H	BA 07	Ⅲ	黒	15.0	—	13.4	—	1.5	赤褐色	
80	H	BB 08	Ⅲ	砂	14.0	—	11.8	21.0	1.5	黄褐色	スス

壳	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考		
88	Ia	BL 16	Ⅱ	砂	7.2 (11.9)	6.8	9.8	1.1	灰褐色	脚高3.5, スス	
89	Ia	AS 07	Ⅱ	黒	10.9	18.1	9.7	16.1	1.0	灰褐色	脚4.6, スス, 出斑,
90	Ia	BA 07	Ⅱ	砂	13.5	22.1	11.7	20.2	1.2	黄灰色	脚4.8, スス,
91	Ia	BB 07	Ⅲ	砂	12.9	22.0	11.2	20.9	1.1	黄灰色	脚4.5, スス
92	Ia	BM 16	Ⅱ	砂	13.7	—	11.5	23.6	1.4	褐色	スス
86	Ib	BL 16	I	黒C	15.2	—	12.8	—	1.5	茶褐色	スス
87	Ib	BA 07	Ⅲ	砂	14.2	—	11.6	—	1.3	茶褐色	スス

#### SD6030 上層

碗	小地区	層位	口径	器高	口縁高	直径	頸部径	色調	備考		
94	B	BL 16	I	黒	15.3	5.8	1.7	13.1	2.7	明褐色	
95	X	BL 16	I	黒B	15.0	—	—	—	—	褐色	
96	X	AR 07	I	黒	13.2 (5.5)	—	—	—	—	橙褐色	
97	X	AU 07	I	砂	13.0	5.8	—	—	3.3	灰褐色	
98	X	AU 07	I	砂	9.0	4.4	—	—	—	褐色	
99	X	AT 06	Ⅱ	砂	7.2	3.5	—	—	—	褐色	
100	X	AS 07	Ⅱ	砂	4.3	2.7	—	—	—	灰褐色	

小型塔形土器	小地区	層位	口径	器高	頸部径	脚柱径	受部高	色調	備考		
101		BA 08	I	黒	8.3	8.4	5.9	2.9	3.6	明褐色	赤色调料

高杯	小地区	層位	口径	器高	頸部径	杯深	胴上端径	色調	備考		
102	Ba	AS 07	I	黒	16.2	—	—	3.5	2.2	淡褐色	
103	Ba	AR 06	Ⅱ	砂	14.6	—	—	3.9	1.9	明褐色	
104	Ba	AR 06	Ⅱ	砂	14.4	11.1	9.5	3.5	2.2	淡褐色	
105	Ba	AS 06	Ⅱ	砂	14.4	11.8	9.9	4.1	2.4	茶褐色	黒斑
106	Ba	AS 07	I	黒	13.9	12.0	9.5	4.4	2.3	灰褐色	
107	Ba	AS 07	I	黒	13.7	11.0	14.0	3.4	2.3	淡褐色	
108	Ba	AS 07	I	黒B	12.8	11.9	10.5	4.6	2.0	明褐色	黒斑
109	Bb	AR 06	I	砂	14.9	—	—	3.9	2.1	橙褐色	内面黒色
110	Bb	AS 06	I	黒B	15.0	—	—	3.7	—	暗褐色	黒斑, 内面黒色
111	Bb	BP 16	I	黒	14.9	—	—	4.1	2.2	灰褐色	黒斑
112	Bb	AS 07	I	黒	15.5	—	—	4.3	2.3	黄灰色	
113	Bb	AS 06	I	黒B	14.9	11.7	9.3	3.8	2.4	橙褐色	黒斑, 内面黒色
114	Bb	BA 08	I	黒	15.9	12.4	9.3	3.9	2.3	茶褐色	
115	Bc	BP 16	I	黒	13.9	—	—	4.2	2.3	黄褐色	
116	Bc	AR 06	Ⅱ	砂	14.8	—	—	4.2	—	橙白色	
117	Bc	AS 06	Ⅱ	砂	14.7	—	—	4.1	—	灰褐色	黒斑, 内面黒色
118	Bc	AS 06	I	黒B	14.7	—	—	4.6	—	橙白色	内面黒色
119	Bc	AT 07	I	黒	15.8	—	—	4.5	—	灰褐色	内面黒色
120	Bc	BB 08	I	黒	16.8	—	—	4.6	—	橙白色	
121	Bc	AS 07	I	砂	18.3	—	—	3.8	—	橙白色	
122	X	AR 06	Ⅱ	砂	11.9	—	—	4.4	2.6	黒褐色	
123	X	AR 06	Ⅱ	砂	13.7	11.5	9.5	3.6	2.1	橙灰色	黒斑
124	X	AR 06	Ⅱ	砂	15.7	—	—	6.4	—	灰褐色	黒斑
125	X	AS 06	I	黒	14.6	10.6	8.9	3.7	2.8	橙灰色	

高	杯	小地区	層位	口径	器高	裾部径	杯部深	脚上端径	底径	色调	備考
126	Ca	AR 06	Ⅱ 砂	24.5	19.7	14.9	7.6	3.4	14.1	淡橙褐色	黒斑
127	Ca	AR 06	Ⅰ 黒 B	19.8	—	—	7.1	—	12.2	黄褐色	黒斑
128	Ca	AS 06	Ⅰ 黒 B	21.3	—	—	7.7	—	12.5	橙褐色	黒斑
129	Ca	AU 07	Ⅰ 砂	22.8	—	—	6.2	2.6	12.8	褐色	
130	Ca	BB 08	Ⅱ 砂	22.8	—	—	6.8	2.7	12.8	褐色	黒斑
131	Ca	AS 06	Ⅰ 黒 B	22.9	—	—	7.7	—	12.4	橙褐色	
132	Ca	AS 07	Ⅰ 黒	22.2	17.6	14.3	6.6	3.4	13.1	白褐色	黒斑
133	Ca	AS 06	Ⅰ 黒 B	23.4	—	—	6.2	—	12.3	橙褐色	黒斑
134	Ca	BI 10	Ⅰ 黒	23.6	—	—	7.1	2.9	12.8	淡橙褐色	
135	Ca	AR 06	Ⅰ 砂	23.7	—	—	5.1	—	14.7	淡褐色	
136	Ca	AS 07	Ⅰ 黒	24.7	—	—	7.5	—	13.3	淡橙褐色	黒斑
137	Ca	AS 06	黄褐色土	25.3	—	—	8.5	3.3	12.1	茶褐色	
138	Cb	AR 06	Ⅰ 黒 B	12.5	—	—	5.2	—	8.7	橙白色	
139	Cb	AS 07	Ⅰ 黒 B	20.2	—	—	8.9	3.5	12.5	灰褐色	
140	X	BL 16	Ⅰ 黒	—	—	11.0	—	3.0	6.8	暗褐色	
141	X	AS 06	Ⅰ 黒 B	—	—	13.3	—	—	—	橙褐色	
142	X	BN 16	Ⅰ 黒	—	—	7.4	—	2.2	4.9	灰褐色	
143	X	BL 16	Ⅰ 黒	—	—	10.6	—	3.4	7.5	明褐色	

小型丸底壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口径高	色调	備考	
144	B	BB 07	Ⅱ 黒	8.3	6.4	6.8	7.1	2.5	明橙褐色	
145	C	BB 07	Ⅱ 黒	7.9	8.2	5.5	9.0	2.7	白褐色	内面に炭化物
146	C	BB 08	Ⅰ 砂	7.9	8.6	5.7	8.7	2.5	淡褐色	黒斑
147	C	BB 08	Ⅰ 砂	7.9	—	6.6	9.9	2.8	黄褐色	スス

壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口径高	色调	備考	
152	X	BK 12	Ⅰ 黒	8.7	8.6	7.1	10.3	1.3	黄灰色	スス
150	X	AR 06	Ⅱ 砂	6.3	(7.0)	6.1	7.6	1.5	茶褐色	黒斑
151	X	AS 06	Ⅱ 砂	7.2	10.1	4.5	5.5	1.5	灰褐色	
149	X	AS 06	Ⅱ 砂	9.8	—	8.7	9.7	1.2	灰褐色	
148	X	AR 06	Ⅱ 砂	9.0	—	8.2	(10.3)	1.6	淡褐色	
153	Ac	AS 07	Ⅰ 黒	10.0	—	8.0	—	4.0	黄褐色	
154	Ac	AS 07	Ⅰ 黒 B	10.0	(14.6)	7.6	15.5	4.2	黒褐色	スス
155	Ac	AR 06	Ⅰ 砂	8.7	—	6.2	(15.6)	3.8	茶褐色	
156	Ac	AS 07	Ⅰ 黒	10.9	16.8	7.6	17.0	4.0	灰褐色	
157	Aa	AT 06	Ⅱ 砂	11.1	12.0	9.4	12.7	3.0	暗褐色	底径4.5
158	Aa	AT 06	Ⅱ 砂	11.5	—	7.5	12.6	4.2	赤褐色	スス
164	B	AS 06	Ⅱ 砂	16.5	—	10.5	—	6.8	灰褐色	
165	B	BB 09	Ⅰ 黒	17.7	34.6	11.7	29.6	7.5	黄褐色	スス
163	G	BL 16	Ⅰ 黒	13.9	29.1	8.7	23.9	6.8	灰褐色	底径4.0, スス
159	H	BB 08	Ⅱ 砂	10.0	—	6.2	—	3.5	灰褐色	
160	H	BB 08	Ⅱ 砂	6.2	10.9	4.9	10.3	2.6	赤褐色	
161	I	AR 06	Ⅱ 砂	9.2	—	8.7	11.9	1.7	淡褐色	黒斑
162	I	AT 06	Ⅱ 砂	11.2	—	9.9	13.5	2.7	淡褐色	

薬	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考	
166	A	AR 06	Ⅱ 砂	11.7	15.1	9.7	16.3	2.7	灰褐色	体部高12.2, 底径5.0, スス
167	A	AS 07	I 黒 B	—	—	10.3	16.8	—	灰褐色	
168	C	BL 16	I 黒	15.0	21.3	12.8	21.0	2.8	黄褐色	底径7.7, スス
169	H	AS 07	I 黒	12.0	16.1	11.0	14.3	1.3	茶褐色	
170	D	AU 06	I 黒	10.9	12.8	8.8	7.9	2.4	黒褐色	スス
171	D	BI 10	I 黒	14.4	21.7	10.9	18.9	2.7	灰褐色	スス
172	D	AR 06	I 黒	10.8	—	9.7	16.3	2.8	黒灰色	スス
173	D	BA 08	I 黒	13.1	—	10.1	21.1	3.2	灰褐色	スス
174	D	AU 06	I 砂	14.3	—	11.4	22.0	3.0	黄褐色	スス
177	G	BN 16	I 黒	21.0	—	17.0	25.5	5.5	灰白色	
178	Ba	AS 07	I 黒	15.1 (25.9)	—	12.6	23.7	3.5	黄灰色	黒斑, スス
179	Ba	AS 06	I 黒 B	18.3	—	16.8	24.6	3.0	茶褐色	黒斑, スス
180	Ba	BA 08	I 砂	15.6 (28.6)	—	13.8	26.9	3.0	黄灰色	内面に炭化物, スス
181	Ba	AU 06	I 砂	11.9	23.1	10.3	19.9	3.1	茶褐色	黒斑, スス
182	Ba	AS 07	Ⅱ 砂	13.2	—	10.8	20.8	2.6	茶褐色	スス
183	Ba	AS 07	I 黒	16.5	26.6	13.9	24.3	3.3	黒褐色	内面に炭化物
184	Bb	BB 08	Ⅱ 砂	13.7	30.4	13.9	26.9	3.2	赤褐色	黒斑, スス
185	Bb	BB 08	Ⅱ 砂	13.6	24.4	11.5	22.3	3.2	灰褐色	スス
186	Bb	AR 06	Ⅱ 砂	12.8	23.6	13.4	21.7	3.4	灰褐色	スス
187	Bb	BL 12	I 黒	14.5	27.9	11.4	22.9	2.3	灰褐色	黒斑, スス
188	Bb	AS 06	Ⅱ 砂	15.4	25.5	13.1	24.0	2.3	淡褐色	スス
189	Bb	AR 06	Ⅱ 砂	17.5	—	14.1	28.1	2.9	黄灰色	スス
191	X	AS 07	I 砂	21.4	44.9	16.1	37.4	5.6	茶褐色	黒斑, スス

火鉢	小地区	層位	口径	器高	底径	色調	備考	
175		AR 06	Ⅱ 砂	44.6	36.5	9.4	淡褐色	
176		AS 07	I 黒 B	—	—	9.4	黄灰色	黒斑

甌	小地区	層位	口径	器高	底径	色調	備考	
190		AS 07	I 黒	22.2	23.4	10.0	淡褐色	黒斑

須窓器	小地区	層位	口径	頸部径	口縁高	色調	
202	廻	AR 06	I 黒	9.1	4.3	4.8	黒灰色
203	廻	AR 06	I 黒	8.3	4.9	2.9	暗灰色

#### SD8520

小形丸底壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考
301	A	WG 55	溝	—	—	6.4	7.3	—	淡褐色

高杯	小地区	層位	口径	器高	裾部径	杯部深	脚上端径	色調	備考
302	A		17.0	—	—	5.3	—	灰褐色	
303	X	WD 54	しがらみ下	—	—	—	3.9	茶褐色	

浅鉢	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考
304		WD 56	溝 しがらみ下	23.8	9.1	17.2	17.3	4.3	灰褐色

壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考	
305	F	WE 55	溝	7.6	8.9	5.6	9.8	1.8	灰褐色	
306	D	WS 54	溝	15.3	—	6.4	—	5.0	黄褐色	黒斑
307	D			16.9	—	9.9	—	5.8	黄褐色	
308	X	WD56, 溝2層, 3層		12.6	(18.0)	11.6	—	1.9	灰褐色	
317	B	WG 54	溝	16.8	28.2	10.4	23.5	7.3	灰褐色	スス
318	G	WF 54, WE 54	溝	13.8	32.6	9.8	23.9	5.3	黄褐色	底径4.4

壺	小地区	層位	口径	器高	頸部径	体部径	口縁高	色調	備考	
309	F	WS 54	黒色粘土	13.5	—	11.3	—	2.5	暗褐色	
310	F	WS 54	溝	11.8	—	8.5	—	3.1	白褐色	
311	Ia	WE 52	溝	16.0	—	13.2	—	1.5	暗褐色	スス
312	Ia	WG 54, WE 52	溝	13.8	(28.0)	12.0	22.8	1.7	暗褐色	スス
313	Ia	WD 54	溝	30.4	—	27.0	—	1.8	白褐色	
314	G	W地区	上土	31.0	—	23.6	—	4.7	暗褐色	
315	G	WG 54	溝2層	29.2	—	24.5	—	4.3	暗褐色	
316	G	WE 55, WD 56	溝	26.6	—	23.8	32.6	5.9	暗褐色	スス
319	K	WF 53	溝	13.5	—	11.0	20.6	2.2	灰褐色	スス
320	A	WF 53	溝	14.4	—	11.2	—	2.7	明褐色	スス
321	A	WD 54, WK 53	溝2層, 3層	15.4	—	12.3	—	2.4	明褐色	スス
322	A	WD 54	溝	12.7	—	10.3	—	2.3		
323	A	WD 53	溝	11.4	(15.4)	8.7	(15.9)	2.5	灰褐色	スス
324	A	WF 52	堰下	13.3	20.6	9.6	18.8	2.9	灰褐色	スス, 内面に炭化米粒
325	A	WD 53	溝2層	15.6	—	11.9	—	3.3		スス
326	A	WD 52	溝	16.7	—	12.6	—	3.4	灰褐色	スス
327	A	WF 53	溝	13.9	—	11.0	—	3.5	灰褐色	
328	J	WS 54	溝	12.7	15.1	10.8	14.6	2.0		底径3.1
329	J	WF 55	溝2層	14.9	—	11.9	15.9	2.1	灰褐色	白色顔料
330	J	WF 53	溝3層	15.5	(29.0)	11.9	19.1	2.0	茶褐色	
331	X	WD 53, WF 55, WD 56	溝2層, しがらみ下	15.4	—	13.2	—	3.6	灰褐色	スス
332	X	WF 52	堰下	12.9	22.6	11.9	16.7	4.9	茶褐色	底径3.0

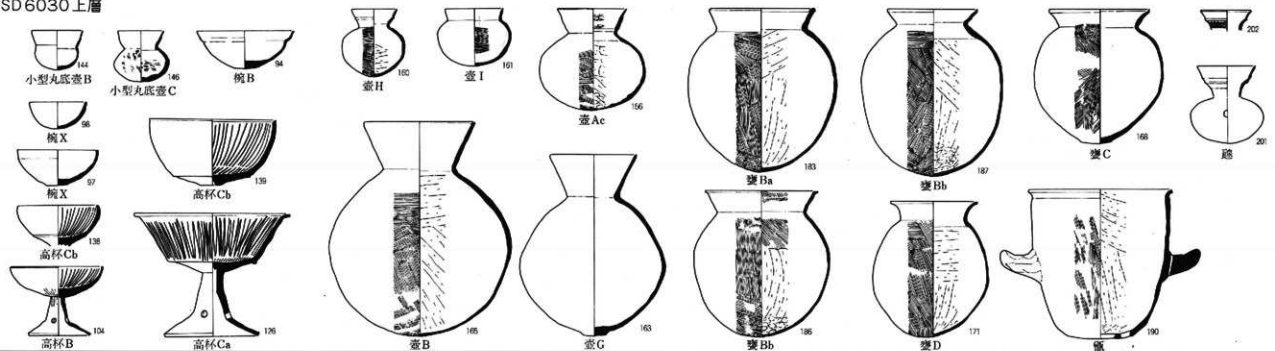


別表2 古墳時代遺構・遺物一覧表

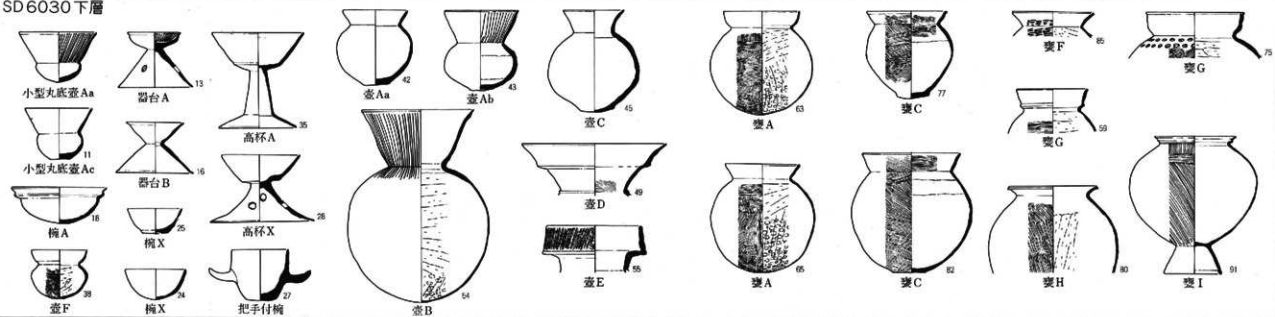
調査次数	場所	地区	調査年月	遺構	出土遺物	備考
1	第二次大塚殿院	6AAR-	1955,8	SX0249 (神明野古墳)	埴輪	『平城宮跡・伝飛鳥坂古宮跡発掘調査報告』1961
9	内 裏	6AAQ-A-C	1961,4~7	SX 0249	埴輪	『平城宮報告Ⅲ』1963
6	内 裏	6AAQ-C-E-F	1962,3~8	SX 0249	埴輪	
10	内裏北外郭	6ABB-C 6AAO-P-Q-R	1962,7~11	SX 0500	埴輪	
11	"	6ABB-A-B 6AAO-L-N-O	1962,11~ 1963,6	SX 0500	埴輪	『平城宮報告Ⅳ』1976
13	"	6AAO-C-D-F H-I-K 6AAB-U	1963,8~10	SX 0500	埴輪	
20	"	6AAO-F-G-M	1964,7~11	SX 0500	埴輪	
15	玉手門	6ADF-P-R-T	1964,2~3	SD 1760	土師器	『平城宮報告Ⅳ』1976
16・17	朱雀門	6ABX-GABY	1964,5~10		陶棺	
25	佐伯門	6ADD-Q 6ADE-K-L-M	1965,3~9	SD3570-3620 SK3680-3675	土師器	『年報1966』
27	第一次大塚殿院	6ABQ-B-D 6ABR-K-P	1965,7~ 1966,1	SD3772 SK3782-3798 -3799 SB3773-3774	土師器 須恵器 埴輪	『平城宮報告Ⅴ』報告予定
39	宮東南入隅の門	6AAG-C-D-F G-I-J 6AAH-R-T	1966,12~ 1967,5	SD 4992	土師器 埴輪	『年報1967』
43	東院西南隅	6ALS-E-F-O-P RS-T-U-V-W	1967,8~ 1968,4	SD4992 SX5700(方墳) SK4969-5681 SB5755	土師器 埴輪	『年報1968』
48	東朝集殿	6AAX-A 6AAW-B	1968,5~9	SD 6030	土師器 須恵器 埴輪	本報告
50	馬寮南部	6ADD-M-N-P-Q	1968,7~10	SD6060-6137	土師器 須恵器	
51	馬寮南部	6AADD-L-M-O-P	1968,9~ 1969,1	SD6060-6137	土師器 須恵器	『平城宮報告Ⅵ』報告予定
59南	馬寮南部	6ADD-O-P-Q	1969,12~ 1970,4	SD 6060 SK 6310	土師器 須恵器	
71	馬寮南部	6ADD-N-Q 6ADE-A-B-K	1971,2~4	SD 6060 SK 7088	土師器 須恵器	
54	ウツナバ古墳	4PUN-O-P	1969,2~4	濠・外堤	埴輪 須恵器	
55	東三坊大路	6AFB-I-J	1969,3~5	平塚1号墳	埴輪 須恵器	『平城宮報告Ⅶ』1974
56	"	6AFB-F-G-H	1969,6~10	平塚2号墳	埴輪 須恵器	
60	ウツナバ古墳	4PUN-K-L-M	1969,9~ 1970,1	円筒埴輪列	埴輪	
	西陸寺	6BSR	1971,3~5	SX 037 土壇	土師器 須恵器	『西陸寺発掘調査報告』1976
73	内 裏	6AAG-A-B 6AAR-C	1971,11	SX 0249 (神明野古墳)	埴輪	
75	第一次大塚殿院	6ABQ-P 6ABR-G	1972,4~6	SX 7800 (方墳)	土師器 埴輪	
83	左京三条二坊十・十五坪	6AFI-H	1973,8~10	SD880-881	土師器 須恵器	『平城京左京三条二坊』1975
86	左京三条二坊十・十五坪	6AFI-Q-H-I	1974,2~6	SD 881	土師器 須恵器	
97	第一次朝雲院 東北部	6ARF-B 6ABS-A-B	1976,4~7	SX 8415	埴輪	『昭和51年度平城宮跡調査概報』1977
101	佐紀池	6ACA-S-W 6ACB-	1977,1~3	SD8520-8521	土師器	本報告
103-14	西一坊大路	6AGA	1978,1	SD06-10, SK07	土師器	
115	第二次大塚殿院	6AAR-A-B	1978,10~ 1979,2	SX 0249 (神明野古墳)	埴輪	『昭和53年度平城宮跡調査概報』1979
122	壬生門	6AAY-B-C-E-F	1980,3~7	SD 9457	土師器 須恵器	『昭和55年度平城宮跡調査概報』1981

別表3 土師器類表

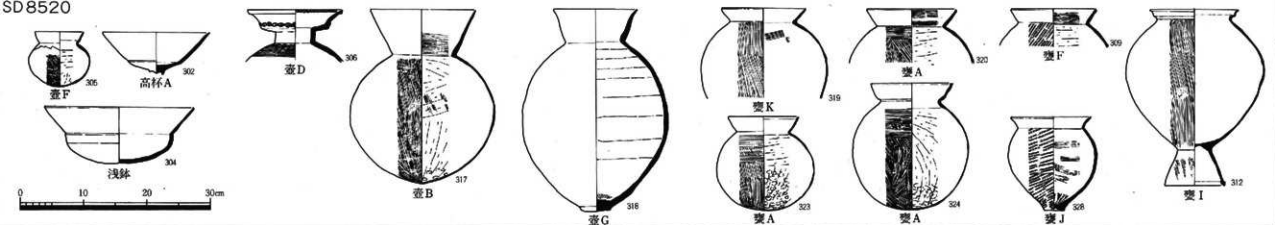
SD6030 上層



SD6030 下層



SD8520



RESEARCH REPORT OF NARA NATIONAL CULTURAL  
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, NO. 39

NARA (HEIJŌ) IMPERIAL PALACE  
SITE EXCAVATION REPORT X

SURVEYS IN THE "KOFUN ERA"-I

ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH  
INSTITUTE 1980

NARA (HEIJŌ) IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION  
 REPORT X  
 SURVEYS IN THE "KOFUN ERA" — I

CONTENTS

Chapter I	Introduction .....	1
Chapter II	Excavation Surveys .....	4
	1. Outline of Excavations .....	4
	2. Daily Record of Excavation Work.....	7
Chapter III	Sites .....	10
	1. General Outline of Sites .....	10
	2. Lower Level of the <i>Chōshiden</i> (Area 6AAX.W).....	11
	A. Kofun Era Ditch SD 6030.....	12
	B. Cylindrical <i>Haniwa</i> Coffin SX 6035.....	13
	C. Other Sites .....	14
	3. Lower Level of the <i>Saki-ike</i> Pond.....	14
	A. Kofun Era Ditch SD 8520.....	14
	B. Kofun Era Ditch SD 8521.....	15
	C. Dams SX 8523 .....	15
	D. Dams SX 8524 .....	15
Chapter IV	Artifacts .....	16
	1. Pottery .....	16
	A. Pottery from the Lower Stratum of SD 6030.....	18
	B. Pottery from the Upper Stratum of SD 6030.....	28
	C. Pottery from SD 8520 .....	39
	2. <i>Haniwa</i> .....	44
	3. Wooden Implements .....	47
	A. Wooden Implements from SD 6030.....	47
	B. Wooden Implements from SD 8520.....	62
	4. Metal Implement .....	65
Chapter V	Problems and Analysis .....	66
	1. Reconstruction of Ancient Topography .....	66
	A. Topography and Geography of the Heijō Area Prior to Palace Construction.....	66
	B. Heijō Area Site Prior to Palace Construct- ion .....	72
	2. Pottery .....	76
	A. Breakdown of Density and Composition of Findings .....	76
	B. Comparative Analysis of Pottery from the Upper and the Lower Strata.....	79
	3. Wooden Implements .....	82
	A. Wooden Implements from SD 6030.....	82
	B. Problems Concerning Kofun Era Agricul- tural Implements .....	93
	C. Use of PEG as a Preservative and Restor- ative for the Wooden Implements.....	95

4. Conclusions .....	96
Supplementary Tables .....	103
English Summary .....	111
Plans	
Plates	

## PLANS

1. Topographical map of the Heijō Palace Site and environs
2. Excavation area 6AAW-X
3. Northern part of SD 6030
4. Southern part of SD 6030
5. SX 6035, SK 6037
6. Total view of area 6ACA
7. Wooden objects in SD 8520

## PLATES

1. Aerial view of the Heijō Palace Site and environs
2. Excavation area 6AAW-B, 6AAX-A
  1. *Higashi Chōshūden*, from south
  2. same, from north
  3. SD 6030
3. SD 6030
  1. Southern half of ditch SD 6030 with artifacts *in situ*, from north
  2. Same, from south
4. SD 6030
  1. Southern half of SD 6030 with wooden objects and a sun-shade shaped *haniwa in situ*, from east
  2. Southern half of SD 6030 with a shield-shaped and a tassel-shaped *haniwa in situ*, from east
  3. Same, from south
5. SD 6030
  1. The lower stratum of southern half with a wooden ladder *in situ*, from south
  2. Same, from north
6. SD 6030
  1. Cleared southern half, from north
  2. Same, from south
7. SD 6030
  1. Cleared northern half, from north
  2. Same, from south
  3. Same, from west
8. SD 6030
  1. Cross section at L-line, from north
  2. Cross section at C-line, from south
  3. Cross section at R-line, from north
9. SX 6035, Cylindrical *haniwa* coffin
  1. Total view of wall SA 5985, from north
  2. Cylindrical *haniwa* coffin *in situ*, from north
10. SX 6085, Cylindrical *haniwa* coffin
  1. Close-up of coffin, from south
  2. Same, from west
11. Excavation area 6ACA-S-W

1. Total view, from north
2. Same, from south-east
12. SD 8520
  1. Garden pond SG 8500 and shore line, from east
  2. SD 8520 with wooden objects *in situ*, from north
13. SD 8520
  1. Natural wood *in situ*, from south
  2. Spade and ladder *in situ*, from south
  3. Cleared ditch, from south
14. SD 8520
  1. Dam SX 8523, from north-east
  2. Same, from north-west
  3. Dam SX 8524, from north-east
15. *Heiji* pottery from the lower stratum of SD 6030
16. Same
17. Same
18. Same
19. *Heiji* pottery from the upper stratum of SD 6030
20. Same
21. Same
22. Same
23. Same
24. Same
25. *Heiji* pottery from SD 8520
26. Same
27. Manufacturing techniques of pottery
28. *Haniwa* from SD 6030
29. *Haniwa* from SD 6030, SX 6035, SK 6037
30. Wooden implements from SD 6030
31. Same (agricultural implements)
32. Same
33. Same
34. Same
35. Same (artifacts for daily use)
36. Same (architectural materials)
37. Same
38. Same
39. Same
40. Same (other artifacts)
41. Same
42. Wooden Implements from SD 8520
43. Same
44. Same

#### SUPPLEMENTALY TABLES

1. List of unearthed pottery
2. Kofun Era sites and artifacts within the Heijō Palace compound
3. Pottery typology

## FIGURES

1. Map of excavated areas
2. Excavation 48th, area divisions
3. Excavation 101st, area divisions
4. Reconstructed geological map of the site in Kofun Era
5. Relation between foundation of the *Higashi Chōshōden* and SD 6030
6. North area of SD 6030, cross section
7. South area of SD 6030, cross section
8. Restored composition of SX 6035
9. North area of SD 8520, cross section
10. Dam SX 8523
11. Dam SX 8524
12. Small round bottomed jars from the lower stratum of SD 6030
13. Vessel stands from the lower stratum of SD 6030
14. Small bowls, small bowls with handle, lids, from the lower stratum of SD 6030
15. Pedestalled dish from the lower stratum of SD 6030
16. Jars from the lower stratum of SD 6030
17. Dimensions of jars from the lower stratum of SD 6030
18. Jar A mouth dimensions from the lower stratum of SD 6030
19. Jars from the lower stratum of SD 6030
20. Same
21. Small round bottomed jars, small bowls, vessel-stand shaped pottery from the upper stratum of SD 6030
22. Pedestalled dishes from the upper stratum of SD 6030
23. Jars from the upper stratum of SD 6030
24. Volume measurements of jars A, B from the upper stratum of SD 6030
25. Jars from the upper stratum of SD 6030
26. Same
27. *Sue* pottery, *Hasō* jar from the upper stratum of SD 6030
28. Pedestalled dish, bowl, and jars from SD 8520
29. Jars from SD 8520
30. Rubbings of Jōmon pottery
31. Shield-shaped *Haniwa* from SK 6037
32. House-shaped *Haniwa* from SG 8500
33. Wooden boards from SD 6030
34. Wooden sheath from SD 6030
35. Wooden boards and poles from SD 8520
36. Scale drawing of bronze mirror
37. Topographical map of the present Heijō Palace Site
38. Elevations of the eastern half of the Palace
39. Topographical map of the Heijō area prior to palace construction
40. Geological map of the Heijō Palace site
41. Strata diagram
42. Topographical map of the Heijō Palace site prior to palace construction
43. Geology of the Heijō Site prior to palace construction
44. Yayoi Era sites in excavation 14th
45. Kofun Era sites in excavations 39th and 43rd



46. Density of pottery findings in the lower stratum of SD 6030
47. Density of pottery findings in the upper stratum of SD 6030
48. Density of pedestalled dish findings in the upper stratum of SD 6030
49. Mouth dimensions of jars from the lower stratum of SD 6030
50. Mouth dimensions of jars from the upper stratum of SD 6030
51. Dimensions of small round bottomed Jars A-a from the lower stratum of SD 6030  
(part 1)
52. Same (part 2)
53. Same (part 3)
54. Small round bottomed jars from the *Tōdaijyama* tumulus
55. Axes
56. Adzes
57. Single and double edged iron blades
58. Spades and hoes
59. Northern *Kyūshū* style spade
60. Spades and fork-shaped implements
61. Hoes and field rakes
62. Solidified PEG density within a sample wood

#### TABLES

1. Dates and areas of excavations
2. Pottery pieces per 3 m square in SD 6030
3. Manufacturing techniques of the bodies of jars from the lower stratum of SD 6030
4. Pottery findings from SD 8520: totals
5. Wooden objects per 3 m square in SD 6030
6. Measurements of ax handle
7. Measurements of stake
7. Measurements of stake
8. Measurements of wooden weight
9. Measurements of wedge
10. Measurements of wooden rod
11. Measurements of fragment wood
12. Measurements of pack frame
13. Measurements of wooden object with some indication of human processing
14. Measurements of wooden poles from SD 8520
15. Pottery findings from SD 6030: totals
16. Measurements of clay ax head from the *Mesurijama* tumulus
17. Comparisons of widths and lengths of spade and hoe

## HEIJŌ IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION REPORT X

The Nara Cultural Properties Research Institute has carried out a continuing series of excavation studies since 1959 at the special site of the HEIJŌ (NARA) Imperial Palace in Saki-cho, Nara city. Results of these studies have been published in the *Heijōkyū Hakutsu Chōsa Hōkoku* (Heijō Imperial Palace Site Excavation Report) nos. 1—IX. This present report is a coalition of the results of surveys on the remaining sites and artifacts from the Kofun Era (AD. 4th–7th centuries), which were unearthed in excavations carried out during the 48th survey (1968) and the 101st survey (1977).

The 48th survey site was located in the area of the *Higashi Chōshūden* (East Assembly Hall) south of the *Dainiji Chōshūden* (Second Hall of State) (Fig.1). The area is at the foot of a hill that gently descends towards the south. The 101st survey site was located in the dried up bed of the Saki-ike pond to the east of the *Daiichiji Daigokuden* (First Palace Council Hall). The 101st excavation was carried out as a study preliminary to a change in the status of the site (i.e., it was to become a construction site for private use.) The Kofun Era sites excavated within the area of the 48th survey were ditches SD 6030 and SD 6038, tomb SX 6035 and pits SK 6034 and SK6033. From the 101st survey area (6ACA) ditches SD 8520 and SD 8521 were excavated.

Ditch SD 6030 runs from the northwest of the survey area toward the southeast beneath the foundations of the East Assembly Hall (SB 6000). It is a natural riverbed, "S"-curved, 4–5 meters (1 meter=1.094 yard) in width and 1.2 meters in depth (Plans 2–4, Pl. 3–8). Excavations were carried out to the west side ("north area") and to the south side ("south area") of the building's foundation. In the ditch basin of the north area there is an arrangement (SX 6032) where several wooden stakes were driven in a line across the ditch. There is a similar arrangement in the south area (SX 6031).

Though there is a slight difference in the ditch's strata accumulation between the north and south areas, in both areas from seven to nine strata are recognized. These strata can be roughly divided in to two major levels: sandy lower stratum and clay based upper stratum (Pl. 8, Figs. 6–7). From each stratum various artifacts, such as pottery, *haniwa* (clay figurines), and wooden implements were found. Notably, a large number of wooden implements were unearthed from the upper stratum of the south area, along with natural wood (Plan 4, Pl. 3–4). Within the rectangular tomb SX 6035, located to the east of SD 6030, were three rows of vertically halved cylindrical *haniwas* utilized for coffins. In each coffin a corpse seems to have been buried with its head towards the north, though a very few pieces of human bone were found and no funerary articles were discovered (Plan 5, Pl. 9–10).

Ditch SD 8520 divides as it runs an irregular north-south course. The north terminous of the ditch is 5 meters wide and 1 meter deep; the dimensions of the other sections of the ditch, however, vary. The ditch strata can be divided into upper and lower sections. When the upper stratum was formed the dividing point of the ditch was covered; moreover, this point appears to have been a stagnant area. From these strata, pottery, wooden implements, a small bronze mirror, plant seeds, gourds, and insect remains were unearthed (Plans 6–7, Pl. 12–13).

At the dividing point of ditch SD 8520, as well as at the point where ditch SD 8521 enters SD 8520, there are located dams SX 8524 and SX 8523. Both of these dams were formed by a row of imbedded stakes, with a break in the center of their

line (Pl. 14, Figs.10-11). Artifacts unearthed from these areas were divided into the categories of pottery, *haniwa*, wooden implements, and a metal implement and which will be described for each site.

Nine hundred and twenty-eight pieces of red pottery (*Haji* ware) and two pieces of unglazed grey pottery (*Sue* ware) were unearthed from SD 6030. Four hundred and seventy-two of these pieces were from the lower stratum, 458 were from the upper. Among the pieces of *Haji* ware were small round bottomed jars (*tsubo*), vessel stands (*idai*), small bowls (*wan*), pedestal dishes (*takatsuki*, dish with a foot), jars, earthen pots (*kame*), bowls (*hachi*), and steamers for rice (*koshiki*). *Sue* ware from SD 6030 were liquid containers of a particular type (*hasi*). The vessel stands were found only in the lower stratum; and the bowls, rice steamers, small vessel stands and *Sue* ware were found only in the upper stratum. Conventional divisions based upon the shape of pottery and its presumed use shows that in the lower stratum 40% of the artifacts (earthen pots) were made up of "cooking sets", 39.8% (small round bottomed jars, vessel stands, small bowls, and pedestal dishes) were made up of "food serving sets", and 12.9% (jars) were made up of "storage sets". In the upper stratum 68.4% were "food serving sets", 21.3% were "cooking sets", and 5.9% were "storage sets".

From SD 8520, 92 pieces of *Haji* ware were unearthed; the artifacts included some small round bottomed jars, bowls, pedestal dishes, and earthen pots. Among these the majority (80.4%) were earthen pots for "cooking", 12% were "storage" jars, and 10% were small round bottomed jars and pedestal dishes for "food serving" (Pl. 25-26, Tab. 4, Figs.28-29).

In addition to the above, twelve fragments of the Jōmon Era pottery were also unearthed in the 6ACA area. Each of them were either from the body or the mouth of deep bowls, and dated from the latter half of the Middle Jōmon Era (B.C.2500) (Fig.30).

Unearthed *haniwa* included both the cylindrical type and the figurative styles of shields (*tate*), houses, humans, and animals. From ditch SD 6030 shield-shaped (Pl.28, 501), sun-shade-shaped (Pl.28, 511), human-shaped (Pl.29, 605), house-shaped (Pl.29, 509, 515), animal-shaped (Pl.29, 510), and cylindrical (Pl.29, 502) *haniwa* were unearthed. Unearthed from pit SK 6037 were shield-shaped (Fig.30), house-shaped (Pl.29, 507-508) *haniwa*, from tomb SX 6035 were cylindrical *haniwa* utilized for coffins, and from 6ACA arca house-shaped *haniwa* was found in Nara Era Palace garden SG 8500.

There were 179 wooden implements unearthed from SD 6030 and SD 8520, (excluding natural wood and shavings, etc.). The implements in SD 6030 were of four types: wooden tools, agricultural implements, artifacts for daily use, and architectural materials. The wooden tools consisted of ax handles (Pl.32, 1-3), and adze handles (Pl.32, 4-5). Agricultural implements consisted of spades (*suki* Pl.31, 6-8), long bladed hoes (*kuwa* Pl.31, 9-10 Pl.32, Pl.33, 16-17), forked hoes (Pl.32, 18), field rakes (*eburi* Pl.33, 20), wooden field clogs (*tageta* Pl.34, 24), mallets (*tsuchi* Pl.34, 25-26), mauls (*kakeya* Pl.34, 27), weights (*tsuchinoko* Pl.34, 28), pounding boards (Pl.34, 29-32) and sickle handles (Pl.33, 21-22). The spades were of two types; those fashioned from a single piece of wood (*ichiboku-suki*), and those fashioned with two or more pieces joined together (*kumiawase-suki*). There also were four distinct types of hoes. Field rakes were tools for leveling the land to be cultivated; wooden field clogs were for use in the muddy paddy. Mallets and pounding boards were used for threshing and

for softening the grain stalks for later use. The weights were used as a counterbalance in the construction of straw mats or other woven materials.

Articles for daily use consisted of *shikiri* (a section of a loom: the rod around which the warp threads were wound during weaving: Pl.34, 33), spools for thread (Pl.34, 34), pothooks (Pl.34, 35), small tables (Pl.35, 36), boxes (Pl.35, 37-39), lids (Pl.35, 40), carved-out water tubs (Pl.35, 43), carved-out ladles (Pl.35, 42), boat shaped vessels (Pl.35, 41), etc. Architectural materials consisted of ladders (Pl.36, 44-45), pillar sections (Pl.37, 46-56), board sections (Pl.37, 57 Pl.38, 64 Fig.32), wedges (Pl.38, 84-87), poles (Pl.39, 88-119), stakes (Pl.38, 77-80), wooden weights (Pl.38, 81-83), etc. In addition to these items, rubbing sticks with hollow base for starting fires (Pl. 40, 129), wooden arrows (Pl.40, 130-131), combs (Pl.40, 132), pegs (Pl.40, 133), a wooden frame for a shoulder pack (Pl.41, 134-137), a sword sheath (Fig.33), etc., were also unearthed. Wooden implements unearthed from SD 8520 included spades (Pl.42, 153-157), long bladed hoes (Pl.42, 158), mallets (Pl.43, 159-160) in the category of agricultural implements; pillar sections (Fig.34, 179), board sections (Fig.34, 168-169), and rod pieces (Fig.34, 170-178) in the category of architectural materials; other items unearthed included boxes (Pl.43, 162), cutting boards (Pl.43, 163), and boards wrapped with stalks of grain (Pl.44, 164-167), etc. From SD 8520 there was also excavated a small (dia. 2.75 cm) bronze mirror (Pl.44, 200 Fig.35). There are no markings on the mirror's back.

Chapter 5 of this report focuses on the interpretive analysis of various problems related to the sites and artifacts.

1) Reconstruction of area topography prior to Palace construction.

Based on an analysis of the range of the surface area of leveled, as well as undisturbed earth, it has been determined that the palace area lay at the foot of three gently sloping knolls, and in a shallow depression defined by these knolls. When the palace was constructed these slopes were leveled and the earth removed was used to fill in the valley to create a continuous flat area (Fig. 38). This interpretation was confirmed by analysis of the geological structure as revealed in drilling samples from the palace area (Figs. 40-41).

2) Outline of the Heijō Site prior to Palace construction.

Based on excavations carried out so far, the earliest vestiges of human life in the area are suggested by the Jōmon pottery mentioned earlier in this report. But the artifacts and sites become more plentiful and remarkable in the succeeding Yayoi Era. For example, on the south-western side of the palace compound, the remains of several dwellings with a dugout floor and pole frame construction (*itana-shiki jūkyō*) and tombs, indicating a part of a village community, have been discovered (Figs. 42-43). This village is from the latter half of the Yayoi Era, but pottery and stone-implements from the early Yayoi Era have been unearthed in many locations, and the existence of villages in earlier periods can be surmised positively in this area. The situation shows that there were villages on the hillsides, and the population had worked the paddy fields in the lower area throughout the Yayoi period.

From the Kofun Era a large number of burial mounds appeared in the hills to the north of the palace area. This tumulus group is called a *Saki-tanami* Cluster, and it gives one of the densest concentration of tumuli in the Nara basin. Thus from this higher area, on and near the summit of the older hills, a great number of related sites have been found (Figs. 42-44, Suppl. tab. 2). Within the *Saki-tanami* Cluster

are the *Ichinawa* (SX 500) and the *Shimeno* (SX 249) tumuli; both are of the so-called "keyhole" shape (*zenpô kôri fun*). At the time of the construction of the Heijû Palace the anterior portion of the *Ichinawa* tumulus was removed, but after several excavations the plan of its rectangular front portion and the surrounding moat were uncovered, and its length was determined to be approximately 250 meters. Similarly, the mound of the *Shimeno* tumulus had totally disappeared. It was determined, however, that it too was surrounded by a moat and had a total length of approximately 105 meters. In addition to these two major tumuli, smaller rectangular tumuli (SX 5700 and SX 7800), imbedded pole frame buildings (*hotatebashira* building) (SB 5755, SB 3773, SB 3774) were found.

These sites date from the 4th-5th centuries. Meanwhile much of the Kofun Era site from the 6th-7th centuries were found to the south of the Heijû palace area in the alluvial plain. One conclusion that may be drawn from the situation is that during the Kofun Era culture gradually moved from the hills towards the plain.

3) Density of pottery findings.

In the lower stratum of ditch SD 6030 there were 230 pieces of pottery unearthed in the north area, and 242 pieces removed from the south area; the heaviest concentration at the curve of the ditch in the north area. In the upper stratum the heaviest concentration was in the south area: 54 pieces were unearthed in the north area, and 402 in the south. Moreover, the characteristic pedestal dishes (B, C) of the upper stratum were mainly unearthed in the southern side of the south area (Figs. 45-47).

Earlier the relative percentage of each type of earthen ware (divided according to presumed use — "food serving", "storage", "cooking") were noted. However, many of these artifacts classified as jars (*tsubo*) because of their shape (and thus assumed to have been used in storage), on closer examination exhibit excessive accumulation of soot that indicates they were used for cooking. Based on the height and the diameter of the mouth a distinction between jars and earthen pots (*kame*) could be made (Figs. 48-49); namely, those with the diameter to height ratio from 1:3 to 1:4 could be classified as jars, and those with the ratio from 1:1 to 1:2 could be classified as pots. But the number of exceptions to this classification were great. And to determine the actual use of each piece, an individual examination was necessary. By this examination the above noted figures for lower stratum pottery were adjusted to 40% for use in food serving, 10% for storage, 50% for cooking.

We next compared the earthen ware from the upper and lower strata. In the lower stratum, we noted that among the pottery used for food serving, there were a large number of the highly finished pieces of small round bottomed jars (A), bowls (A), vessel stands (A, B), pedestal dishes (A), etc. There were also a large number of archaic style pots (E, F) and earthen jars (D, E), as well as a number of pieces produced in other provinces. 8.3% of the pieces unearthed from the lower stratum were from other provinces. Among these pieces there were jars (E) (Pl.16, 55) from the eastern coastal area of the Inland Sea; pots (G) (Pl.16, 56-59) from the Sanin area; pots (H) (Pl.18, 85) from the Okayama, *Kibi* area; and pots (I) (Pl.18, 86-92) from the Ise coast and the Kantô area.

In the collection of pottery from the upper stratum, the highly finished pieces used for food serving are lacking, and the pots (A, C) prevalent in the lower stratum become rare, while pots B and D increase considerably in number. Rice steamers and *Sue* ware mark new traits of the phase. The pieces produced in other provinces

decrease and they are limited to pots (H) (Pl.22, 109) from the Okayama, *Kibi* area.

As apparent from the brief description above, the difference between the pottery group of the upper and lower strata are clear. Based on comparisons with other sites in Nara, *Yamato* of the same period, we note that the two strata represent two discontinuous phases within the large cra of *Furu* style pottery in *Yamato*.

#### 4) Wooden implements.

Blades for ax handles unearthed were fashioned parallel to the handle itself, while the blades used with the adze handles were attached perpendicularly. The axes were used for felling and splitting trees, while the adzes were employed in the making of planks and the stripping of felled trees. Based on a comparison made with metal axes of the Kofun period, three types of axes (Fig.54) and four types of adzes (Fig.55) were reconstructed. And the "shouldered" metal blades of these tools were determined to be of two types: single and double edged (Fig.56). The double edged blade was most likely used with the ax, and the single edged blade with the adze.

Agricultural tools made up the largest portion of the unearthed wooden implements, and among these the majority were for use in paddy cultivation. On examining the wooden cultivation tools unearthed from SD 6030 and SD 8520, we noted that they were almost all included within known types of tools, already unearthed in the *Kinai* (Kinki) provinces and dating from the Middle and Early Kofun Eras. Items that can be added to these already known types, are harrows (*maguwa*) and mattocks (*chōmaguwa*) and certain tools that can be reconstructed from the "U"-shaped spade blades and fitted metal blades. (These latter blades were thin pieces of metal bent to fit over wood carved in the shape of a blade.) All these types collectively represent the characteristic composition of agricultural tools of the period.

Among all the different types of agricultural tools, the hoe (*kuwa*) is the most varied. The "V"-handled hoe with an "eggplant shaped" wooden blade (Pl.32, 11-13 Fig.57, 1-9) can be found as early as the Yayoi Era, and continually developed to become the primary tool of the Kofun Era. The bell shaped wooden blade was an advanced design, the use of which extended from Kyūshū in the south and to as far north as Tōhoku provinces. However in the Later Kofun period this particular style of hoe was replaced by the "V"-handled hoe with a metal blade (Fig.57, 10). Including the "V"-handled hoe with an "eggplant shaped" wooden blade, almost all the agricultural tools in the Early and Middle Kofun Eras, had already appeared in the Later Yayoi Era. In other words, the use of tools established in the Later Yayoi Era continued on into the Early and Middle Kofun Eras without any major alterations. The main development of agricultural tools is recognized to have taken place in the Middle and Later Yayoi Eras when we can witness the shift from the technically refined tools used down to the Middle Yayoi to the more simple and practically fashioned tools of the Later Yayoi. The cause of the change is commonly considered to be a change in the agricultural method itself: the adoption of the technique of trans-planting. This technique, originated in China during the Han Era, was introduced into northern Kyūshū via the Korean peninsula in the Middle Yayoi Era. As this new agricultural technique spread into the *Kinai* provinces, the tools from northern Kyūshū moved with it. As the Kūyūshū tools were gradually improved upon we can recognize the change to the so-called "Kofun Era tools". Among these tools were those used for the construction and management of irrigation waterways indispensable to the rice paddies, and of all others they contributed to the increase of the size

and production levels of the fields.

Many hoes and spades, dealt in this report, were of equivalent size and shape, and bore the indication of heavy use as they wore down easily because of their wooden blade, and make it possible for us to assume that there were particular workshops for the mass-production of these tools which in turn serve to indicate the presence of group labor in the development of farm lands.

The last chapter of the report is a brief discussion of the application of Polyethylene glycol (PEG) as a preservative for excavated wooden artifacts. In PEG treatment, unstable water molecules contained in the unearthed wood are replaced with more stable high polymer chemical compounds: PEG. Depending on the molecular weight, PEG can range from a liquid to wax-like solid at room temperature. The wooden artifacts unearthed from the lower stratum of the *Chōshūden* arca were treated with the low weight PEG 1500. After the treatment, a portion of PEG permeated the wood was subsequently discharged, and with this discharge the wooden artifact changed its shape, if it was left in unfavourable condition. Thereafter we used the heavier weight PEG 4000. The artifacts were submerged in PEG diluted with water by 20% concentration, and left there for one to two years gradually increasing the PEG concentration to 95-100%. The heavier weight PEG must be heated to liquid state in order to be absorbed by the artifact, and when it returns to room temperature it solidifies within the wood, and thus stabilizes it. This method proved to be very effective in strengthening the poorly maintained artifacts. But it is not without its own problems. As PEG hardens it also sinks to the bottom of the artifact; thus in the process of hardening, the density of the wood is altered and pockets of air are formed within the wood. Therefore it will be necessary to improve upon this submerging technique complying with physical characteristics of PEG. And the application of other methods along with the PEG treatment, freeze drying of the artifacts in a vacuum for example, must be considered to check more effectively the decay of the unearthed woods, in near future.

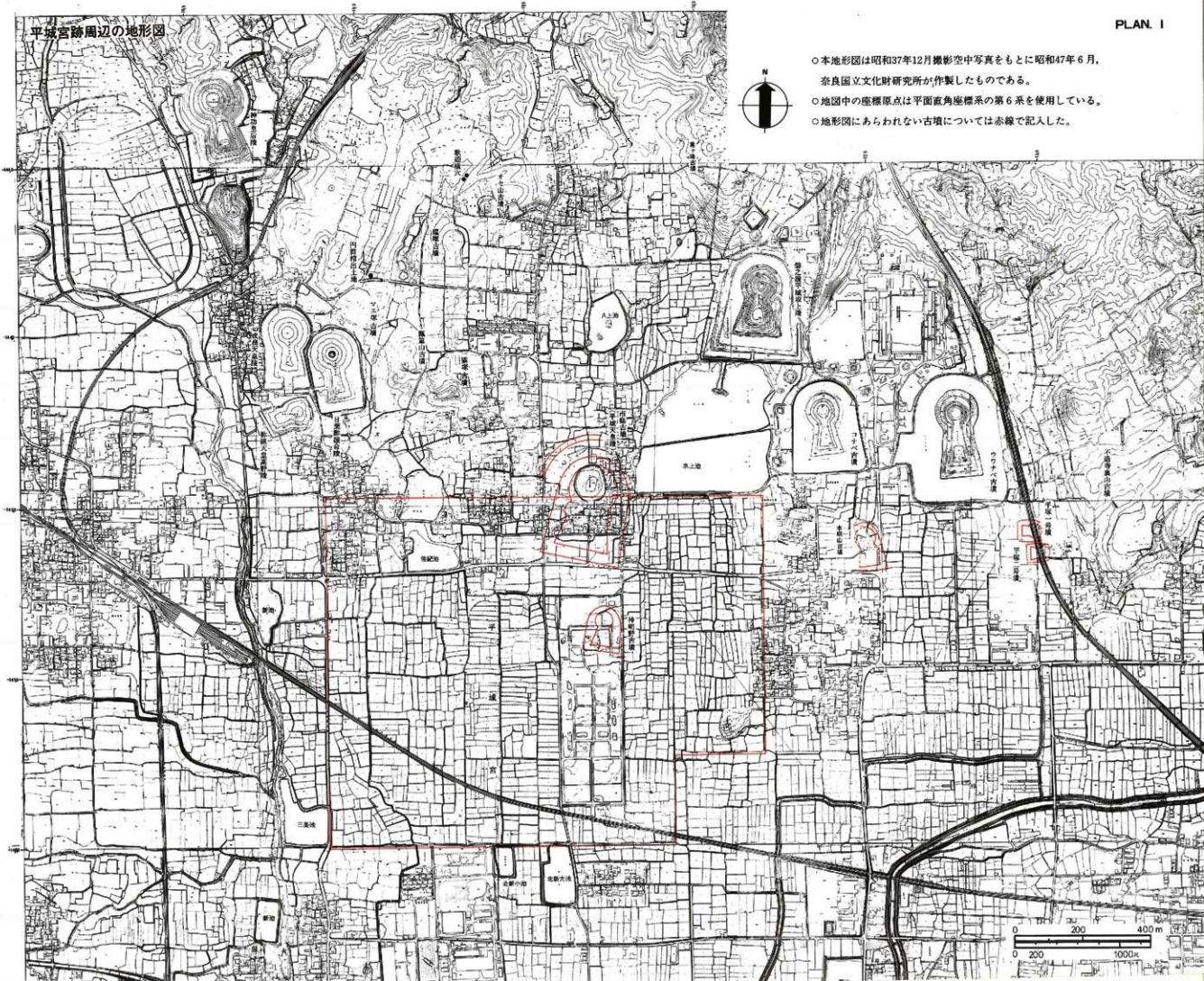
## 図面・図版

### 凡 例

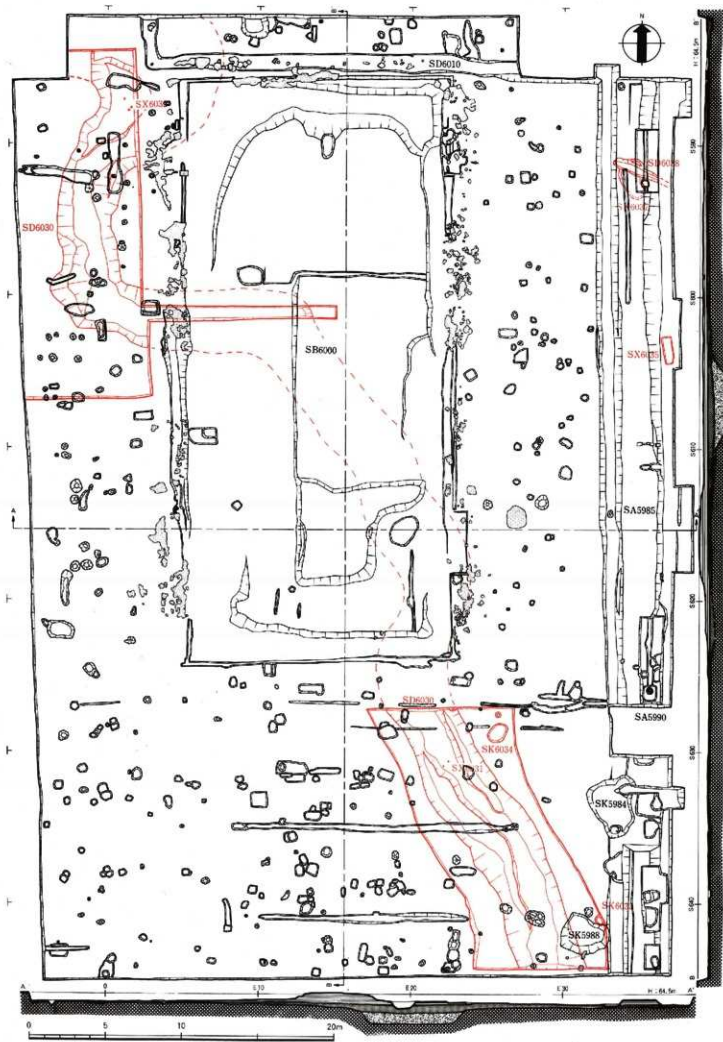
1. 各遺構には一連番号を付し、その前にSD：溝，SK：土壇，SX：その他の分類記号を標附する。但し，奈良時代の遺構については遺構番号を省略したものがある。

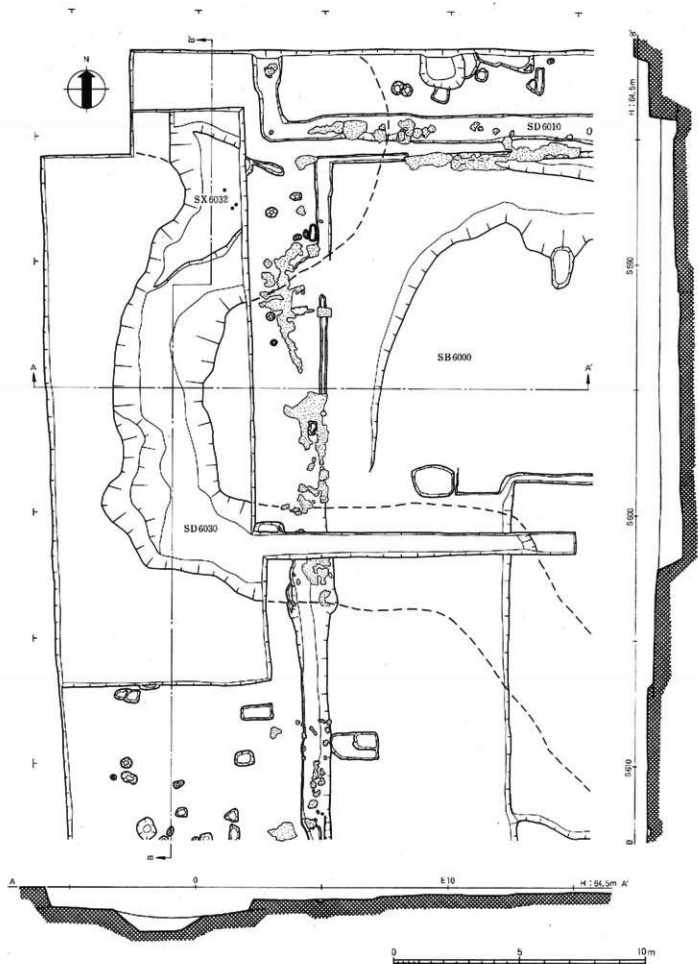


## 平城宮跡周辺の地形図

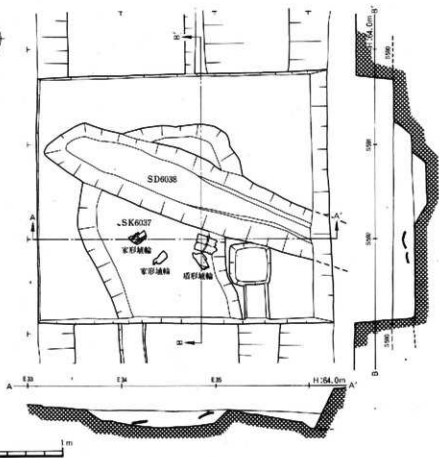
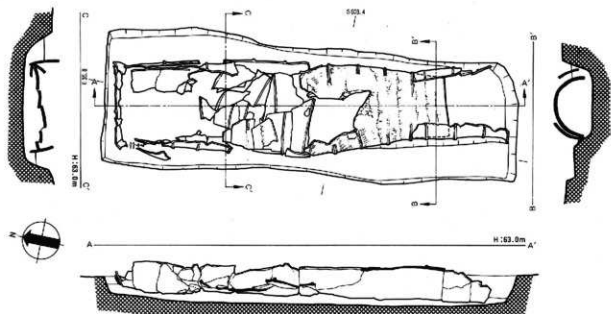


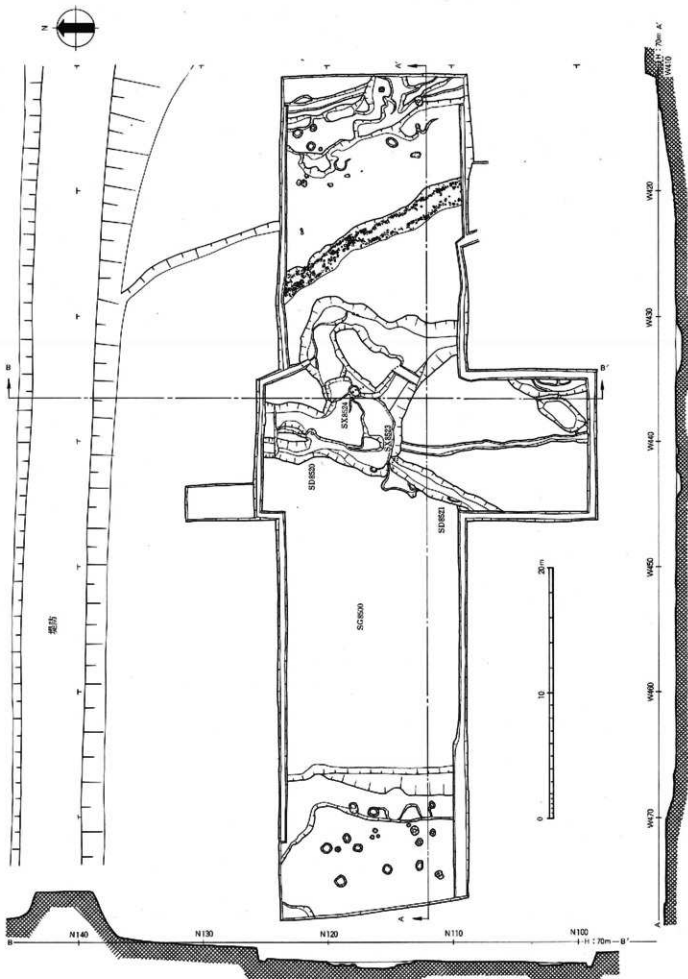
- 本地形図は昭和37年12月撮影空中写真をもとに昭和47年6月、奈良国立文化財研究所が作製したものである。
- 地図中の座標原点は平面直角座標系の第6系を使用している。
- 地形図にあらわれない古墳については赤線で記入した。

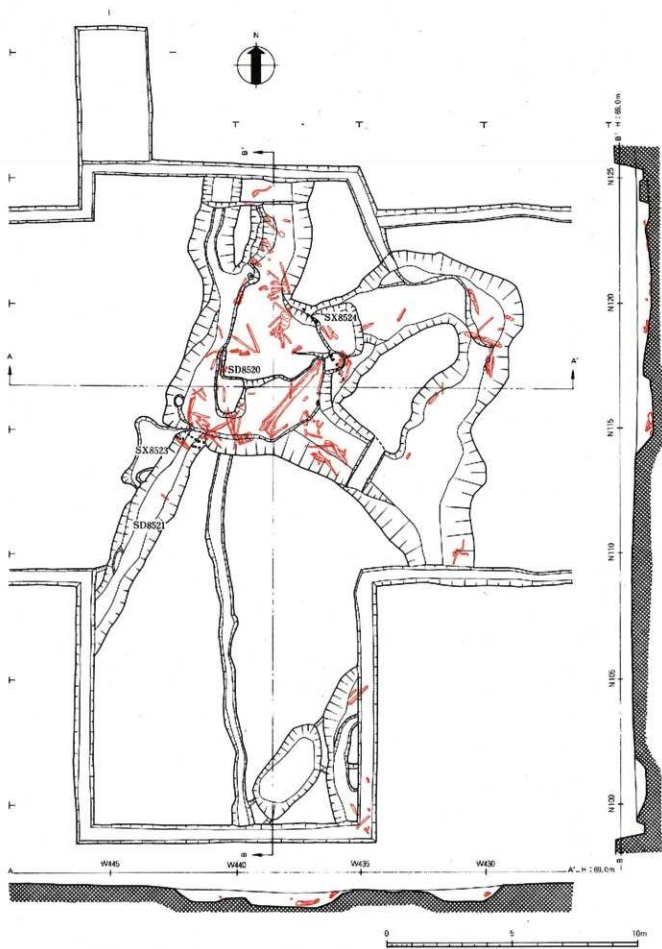






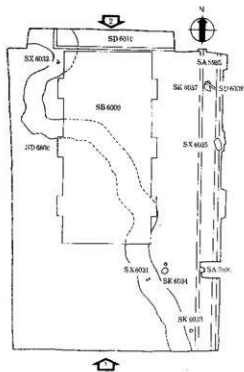












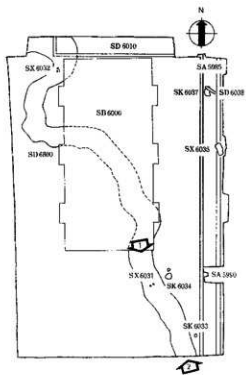


1. 東朝集殿SB6000  
全景 南から



2. 同全景

北から

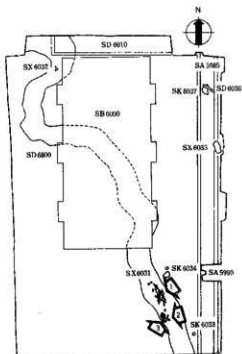




1. SD6030南半部  
遺物出土状況  
北から



2. SD6030南半部  
遺物出土状況  
南から



1. SD6030南半部  
部材・蓋壇出土  
状況

東から



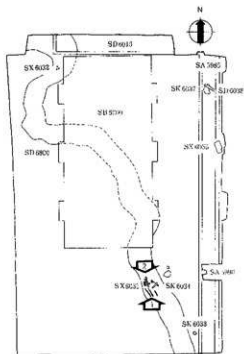
2. 同 上  
層・人物壇出土  
状況

東から



3. 同 上 南から



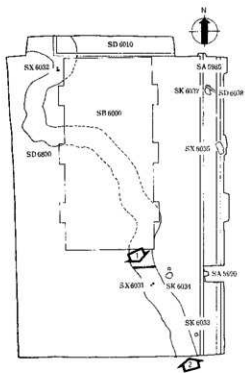




1. 南半部下層  
梯子出土状況  
南から
2. 同上 北から





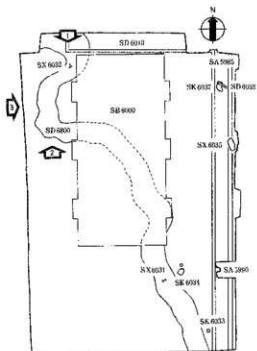




1. 南半部完掘状況  
北から

2. 同 上 南から







1. SD6030北半部  
完掘状況

北から



2. 同上 南から



3. 同上 西から



1. SD6030北区  
南壁土層  
北東から



2. SD6030南区  
北壁土層  
南から

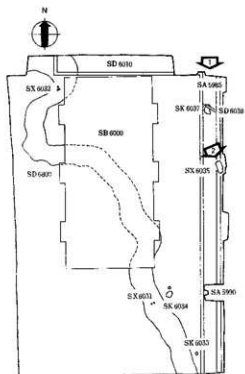


3. SD6030南区  
南壁土層  
北から



4. SD6030北区  
基壇下土層  
北から







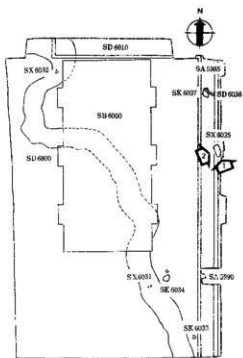
1



2

1. SA5985築地堀全景 北から 2. 埴輪円筒棺出土状況 北から

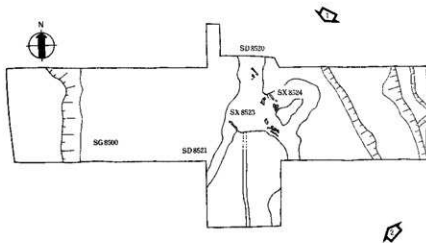




1. 埴輪円筒棺細部  
南から

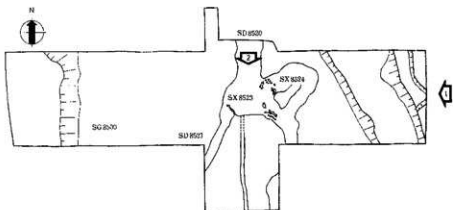


2. 同 上 西から



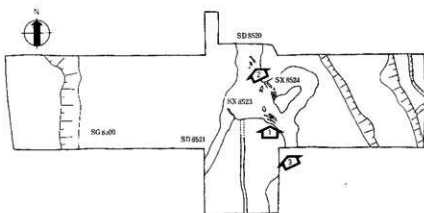


1. 全景 北から 2. 全景 東南から





1. 菟池 SGB500 と釘線 東から 2. SD8520 木製品出土状況 北から





1. 自然木出土状況  
南から

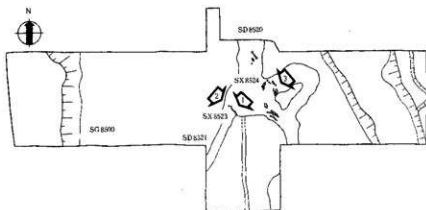


2. 掘・梯子出土状況  
南から



3. 完掘状況 南から







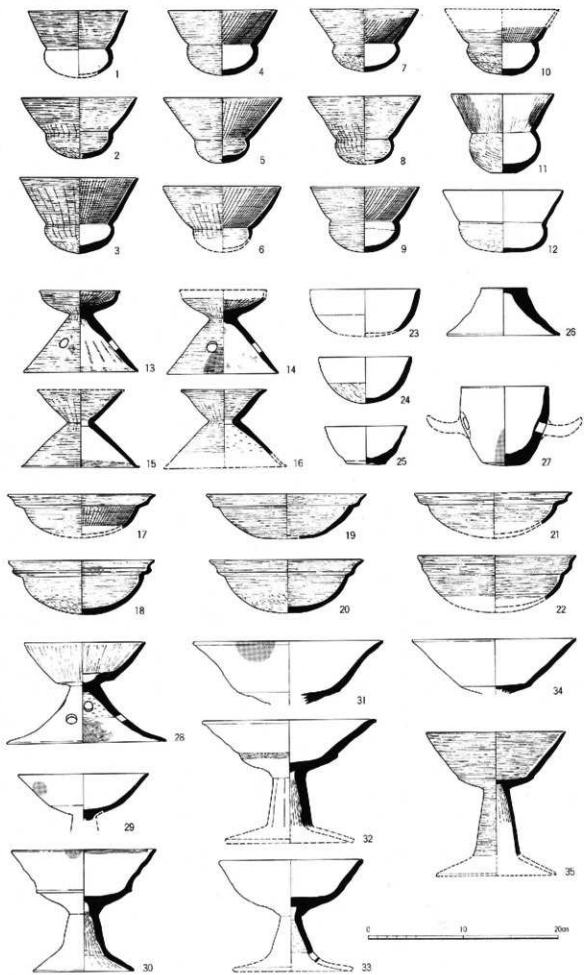
1. SX8523・堀  
東北から



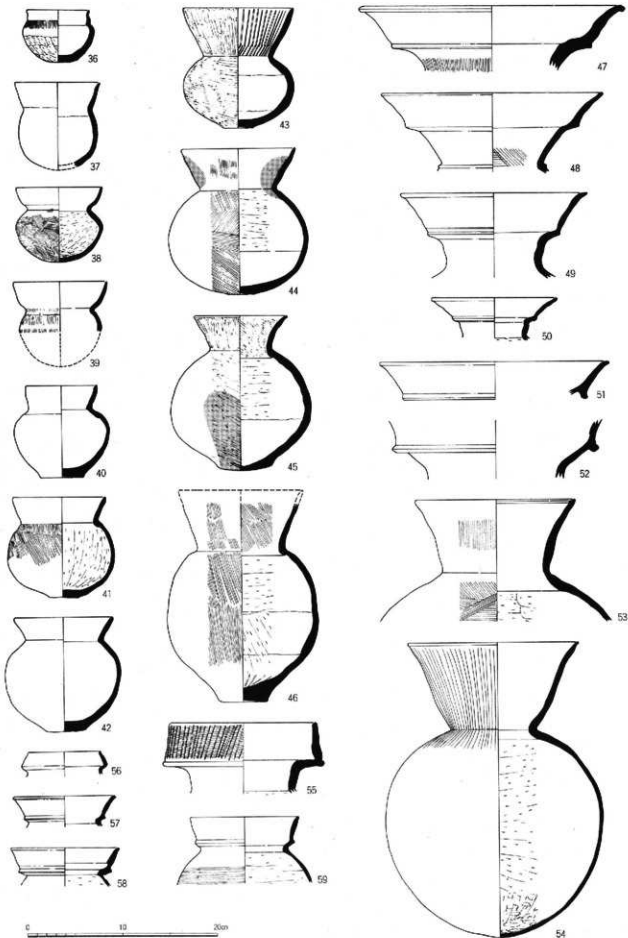
2. SX8523・堀  
西北から



3. SX8524・堀  
東北から







0 10 20cm



36



38



42



40



41

1:2



43



44

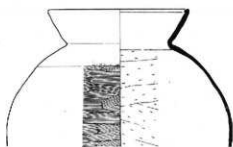


1:3

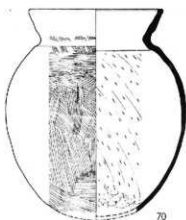
54



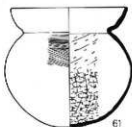
60



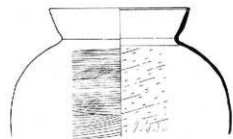
66



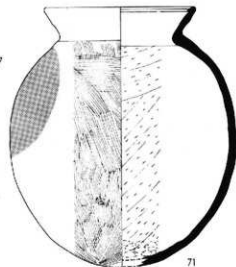
70



61



67



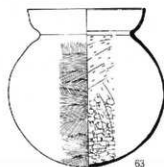
71



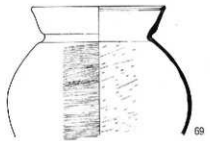
62



68



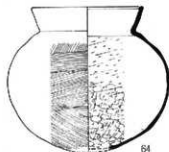
63



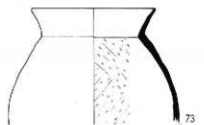
69



72



64



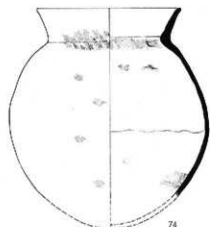
73



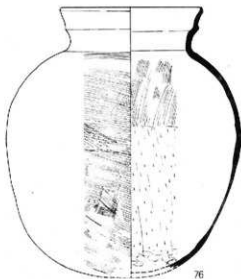
75



65



74

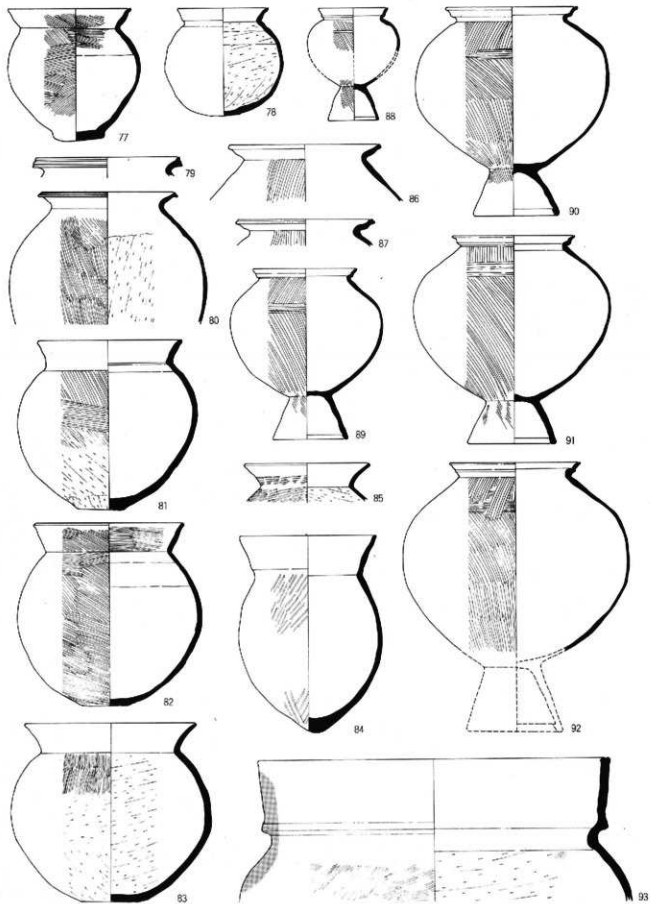


76









0 10 20cm



77



78



82



84



81



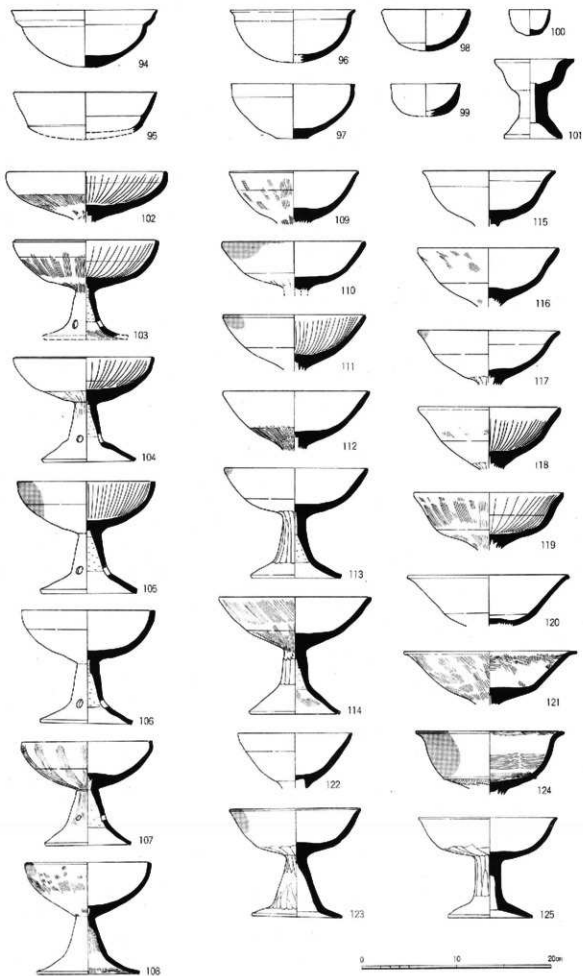
89



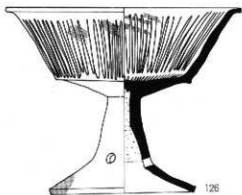
83



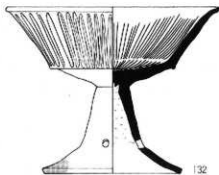
91



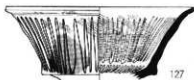




126



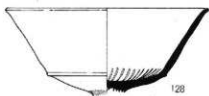
132



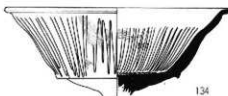
127



133



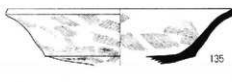
128



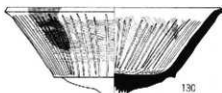
134



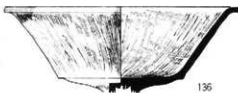
129



135



130



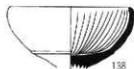
136



131



137



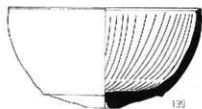
138



140



142



139



141



143





132



126



128



134



130



135



138

1:3

1:2



139



1:2

140



1:2

141



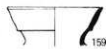
144



153



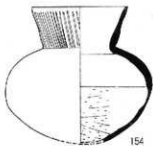
152



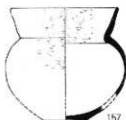
159



145



154



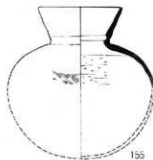
157



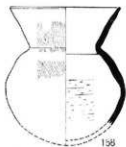
160



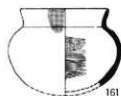
146



155



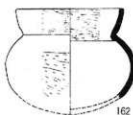
158



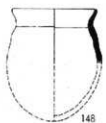
161



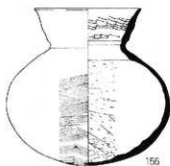
147



162



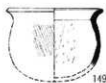
148



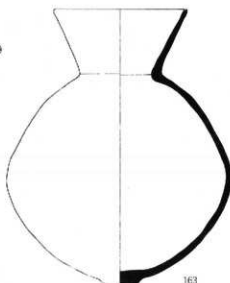
156



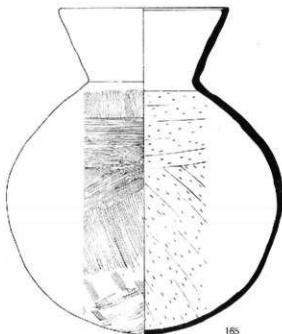
164



149



163



165



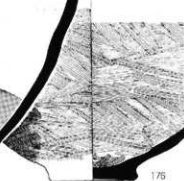
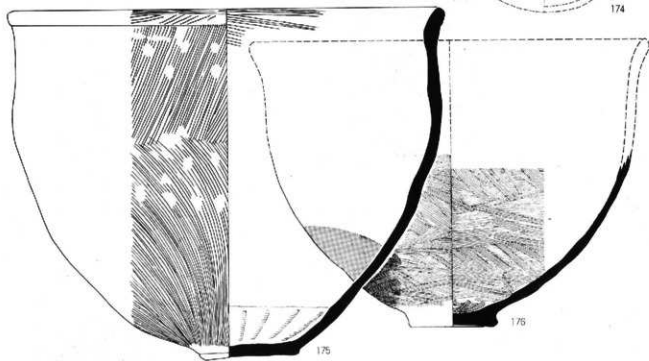
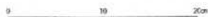
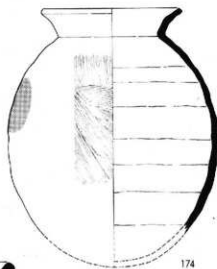
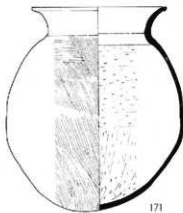
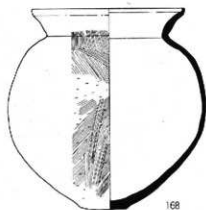
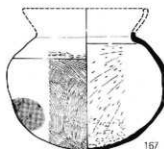
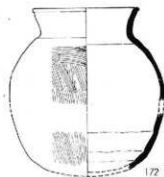
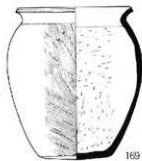
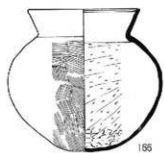


1:2

1:3

1:4







169



170



168

1:3

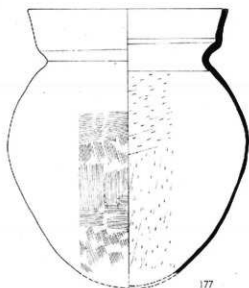


171

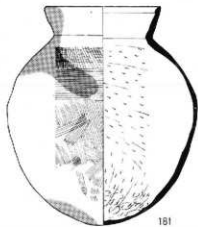


1:4

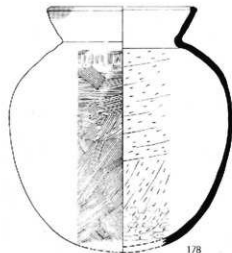
175



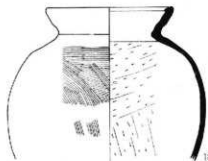
177



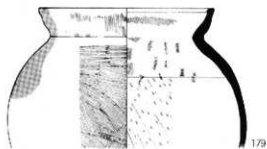
181



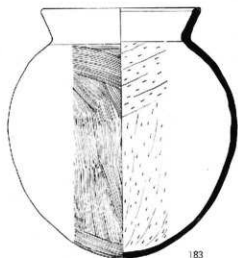
178



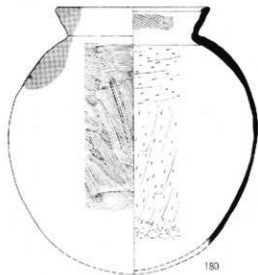
182



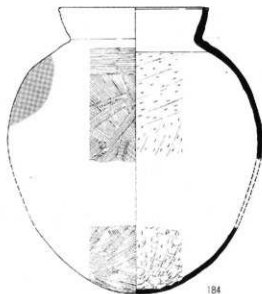
179



183



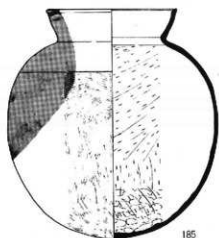
180



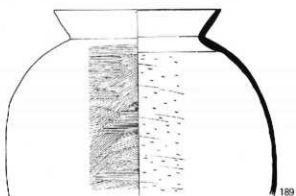
184

0 10 20cm

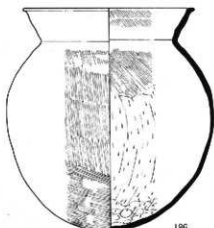




185



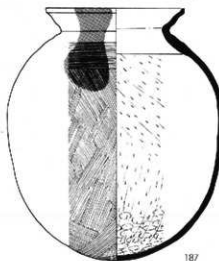
189



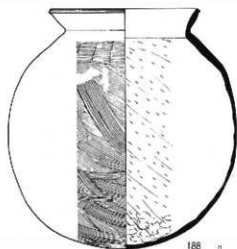
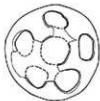
186



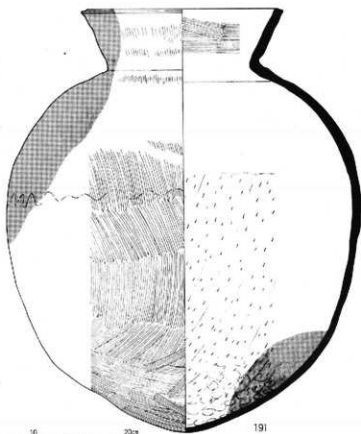
190



187



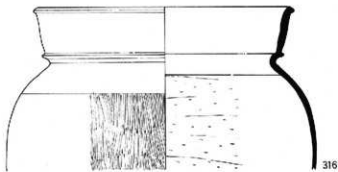
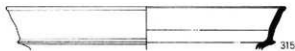
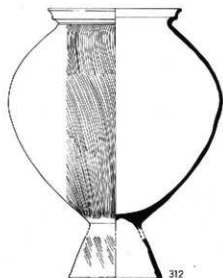
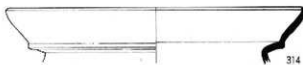
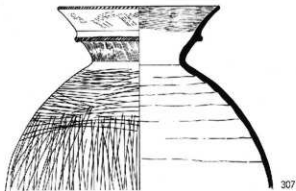
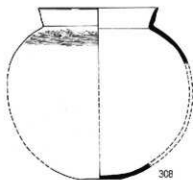
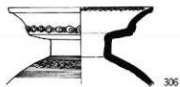
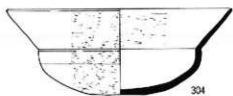
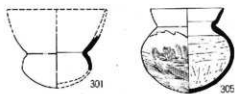
188



191

0 10 20cm





0 10 20cm



305



306



302



304



307

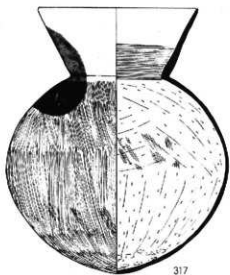


317



312





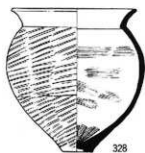
317



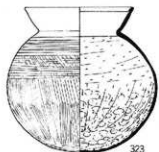
321



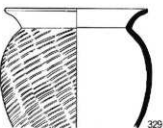
322



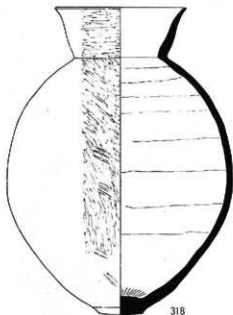
328



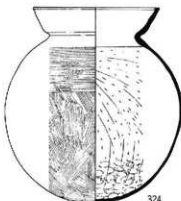
323



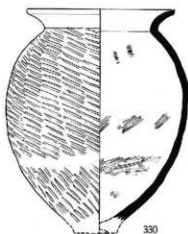
329



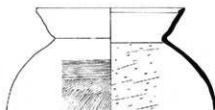
318



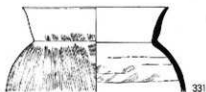
324



330



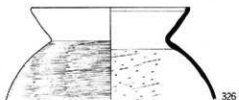
325



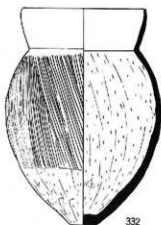
331



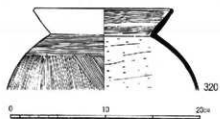
319



326



332



320



327





319

330



320

332



323



1:3

318



324



1



2



3



4



5



6



7



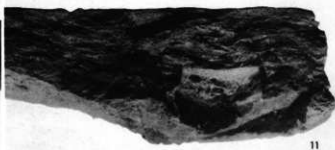
8



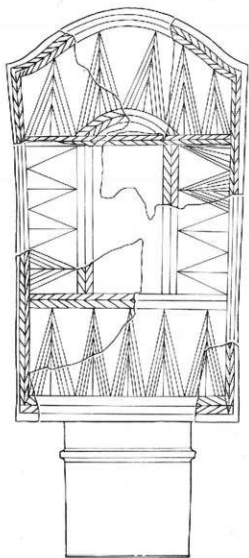
9



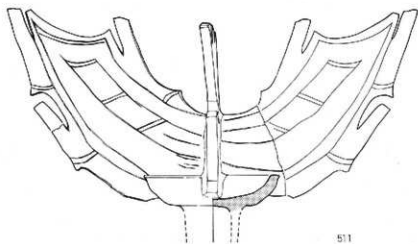
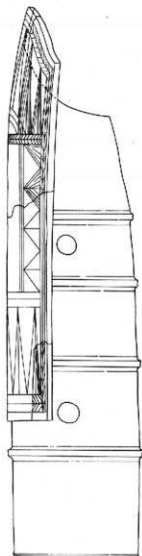
10



11

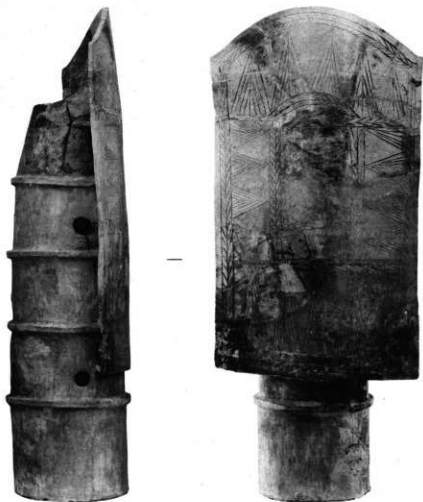


501



511





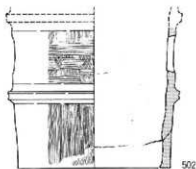
1:6

501

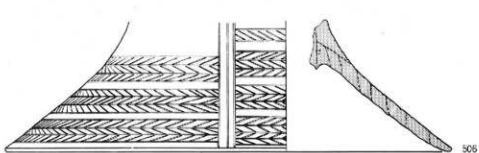


1:4

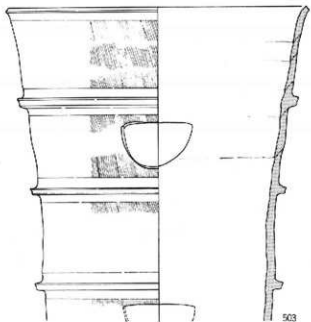
511



502



506



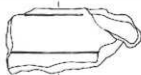
503



507



510



508



512



513



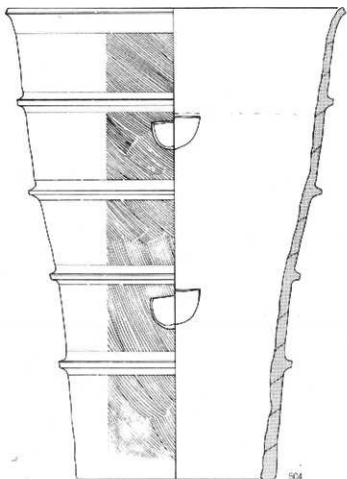
514



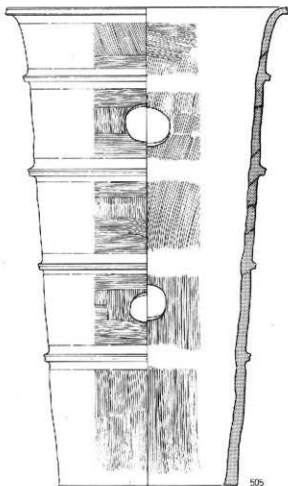
509



515



504



505





506

510



509



502



515

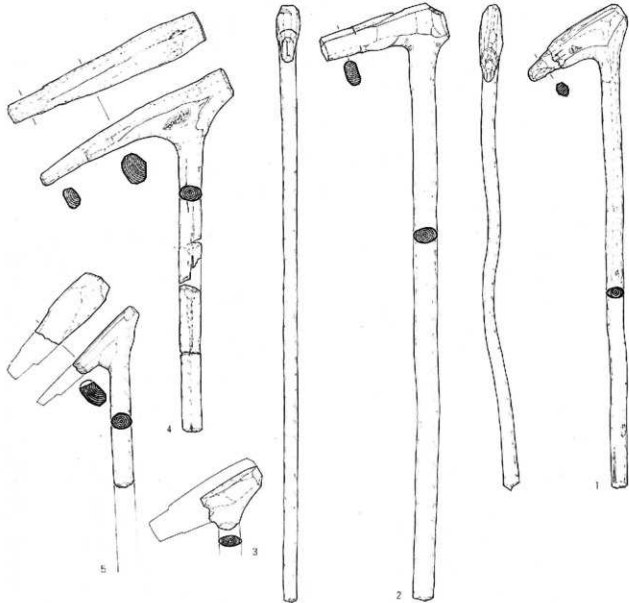


505



504

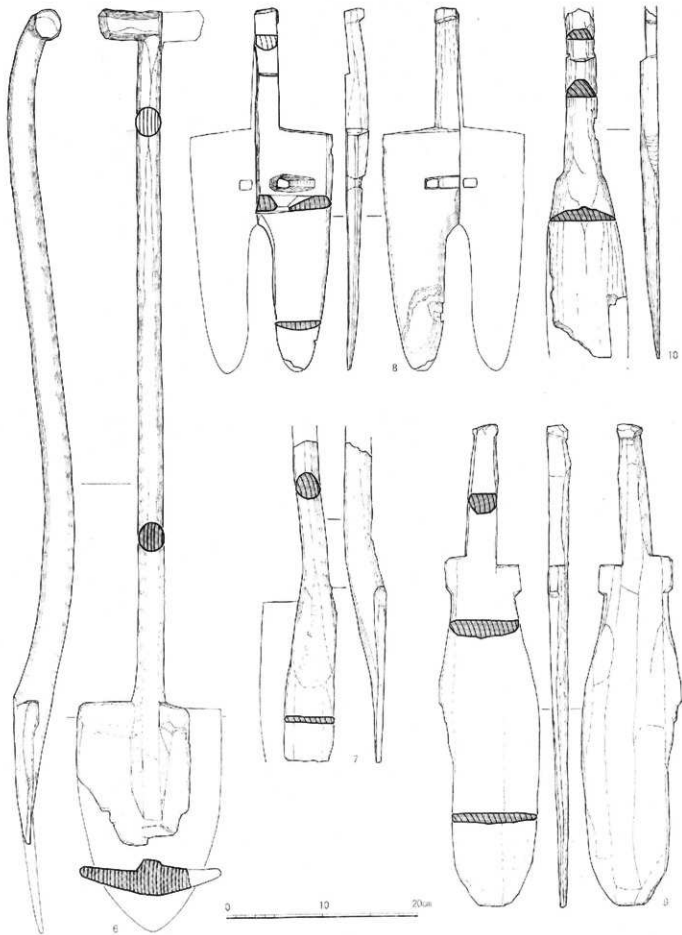
502, 509, 510, 515~1:4 504, 505, 506~1:6

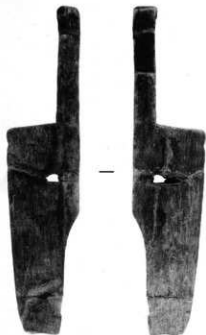


0 10 20cm

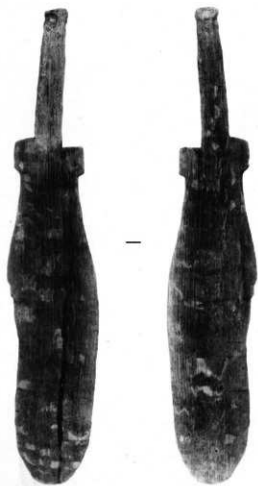
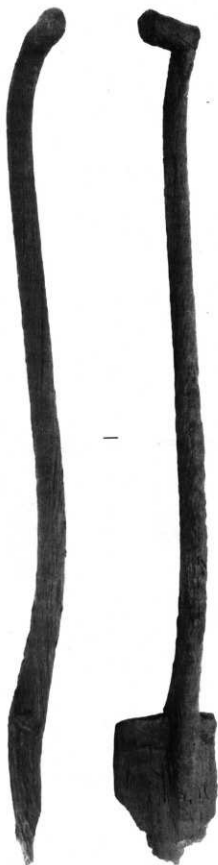








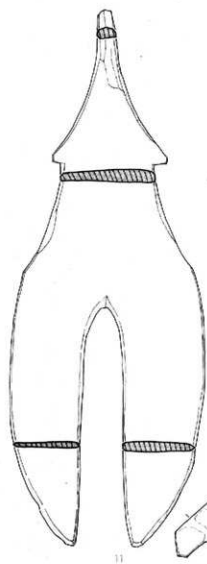
8



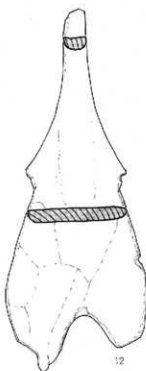
9

1:3

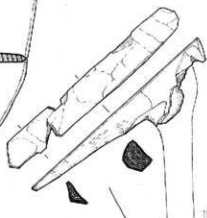
6



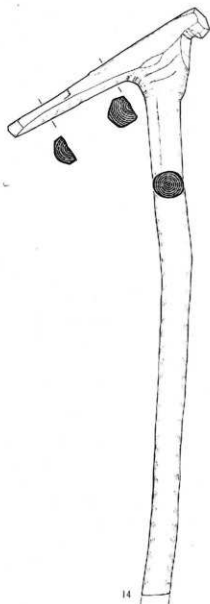
11



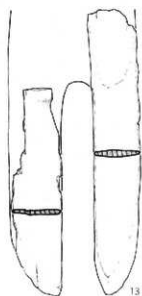
12



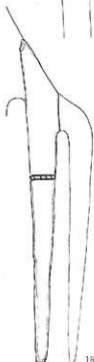
15



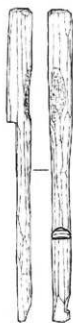
14



13



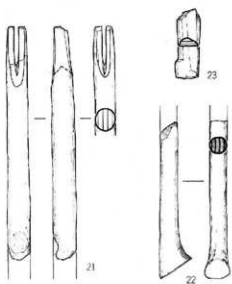
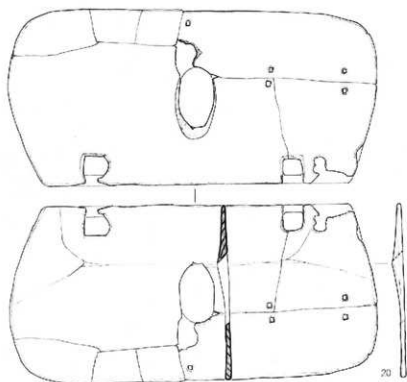
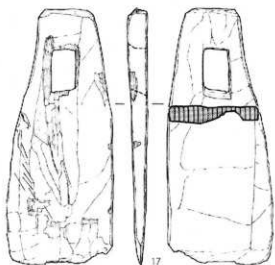
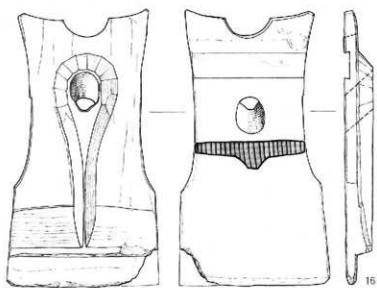
18



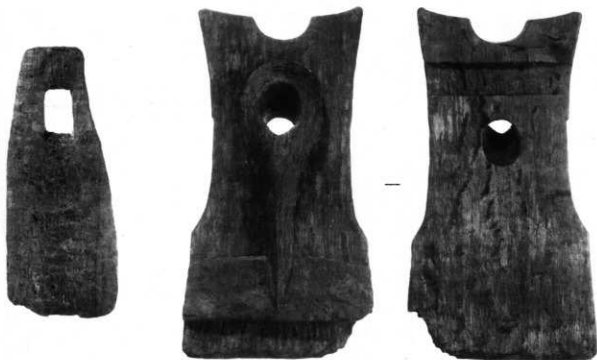
19

0 10 20cm



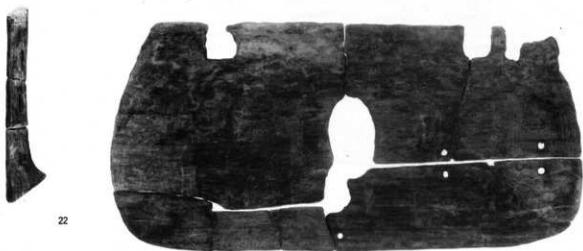


0 10 20cm



17

16

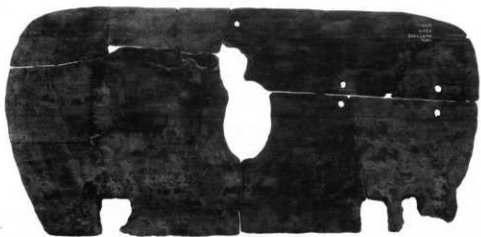


22

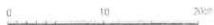
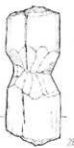
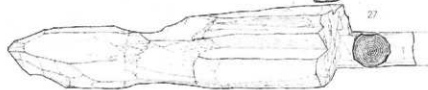
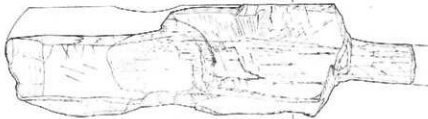
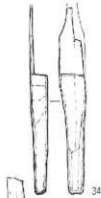
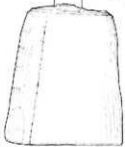
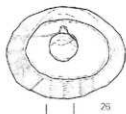
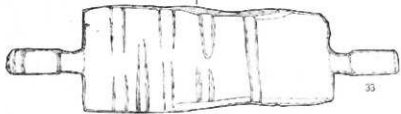
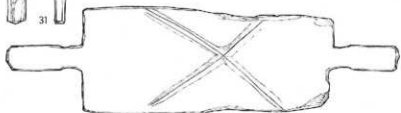
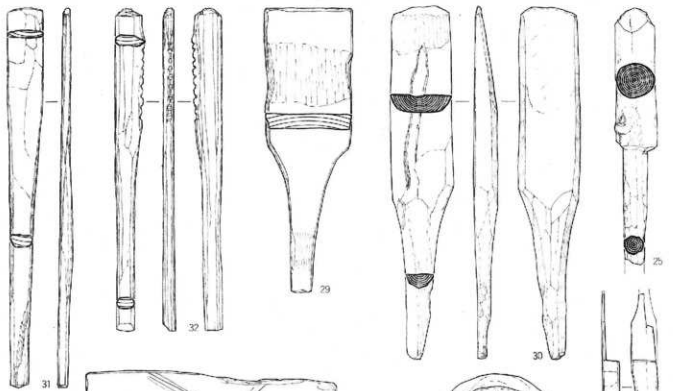


1:3

21



20







35



34



31



32



29



30



25



28



26



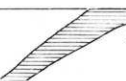
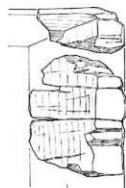
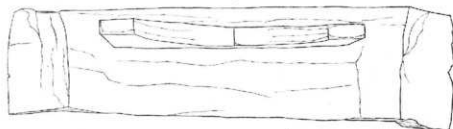
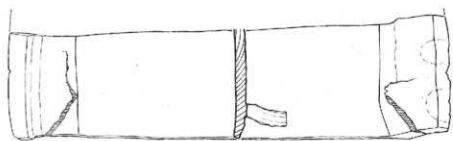
33



27



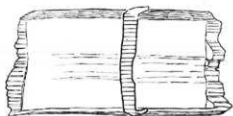
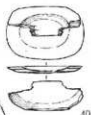
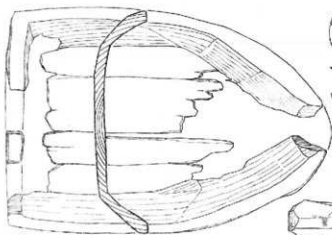
24



36

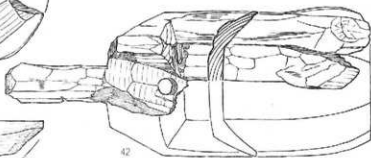
35

38

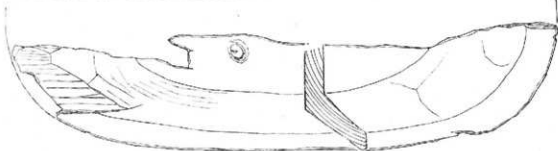


40

37



42



43

0 10 20cm



36



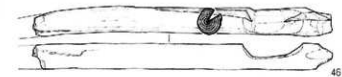
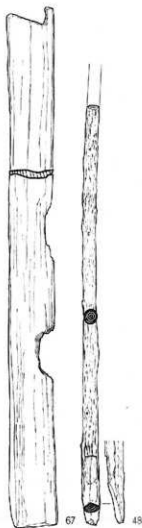
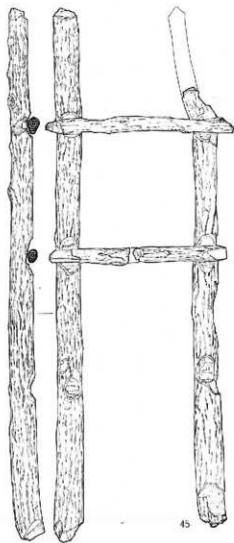
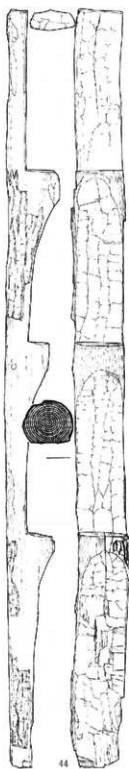
41



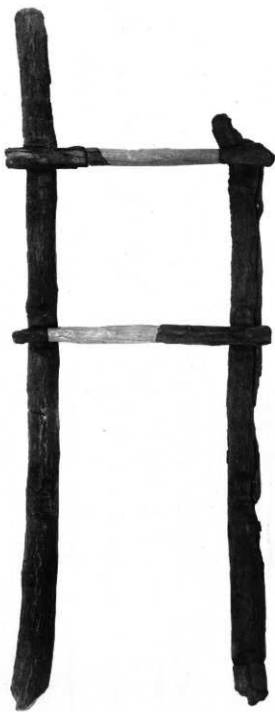
42



43



0 20 40cm



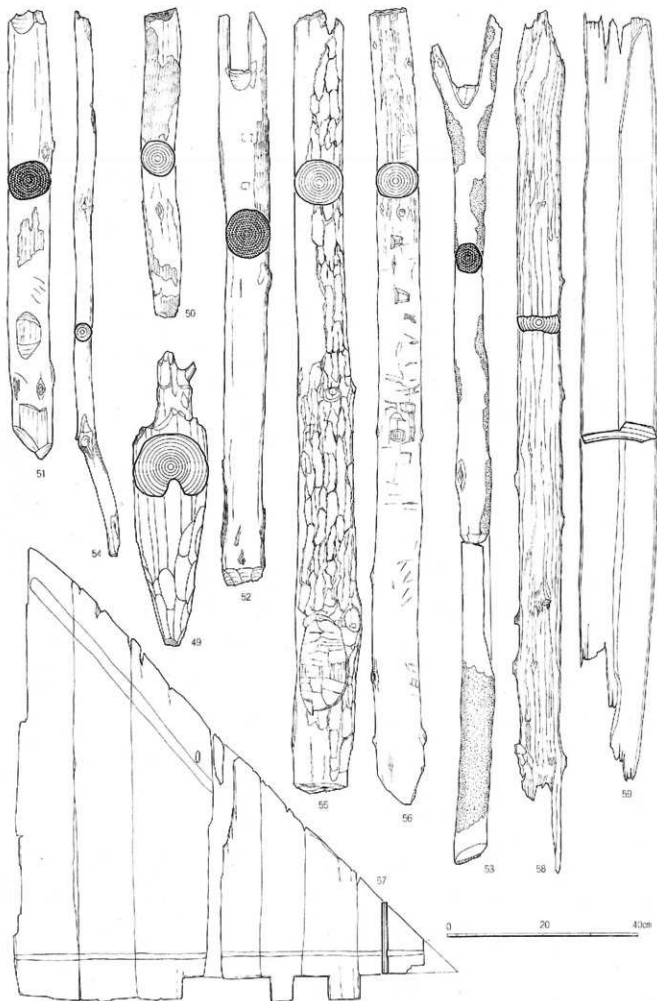
45

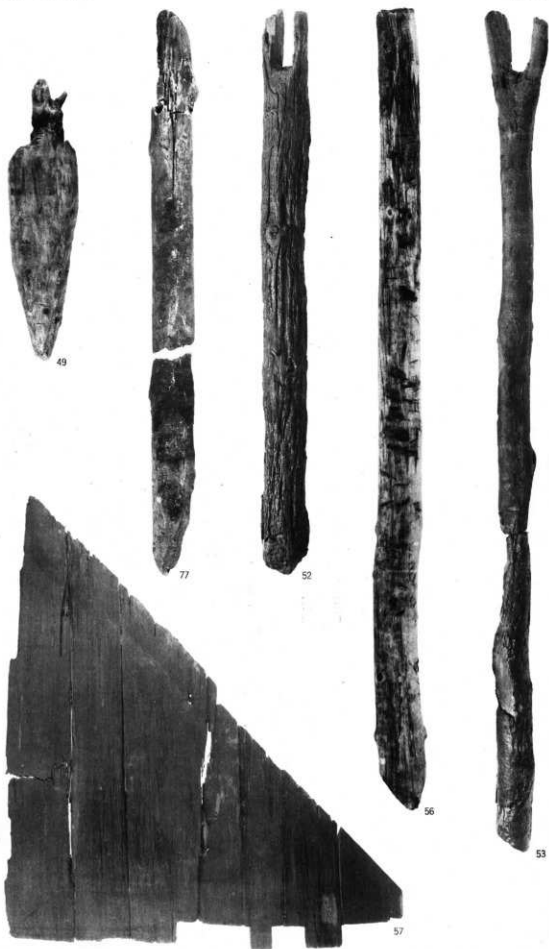


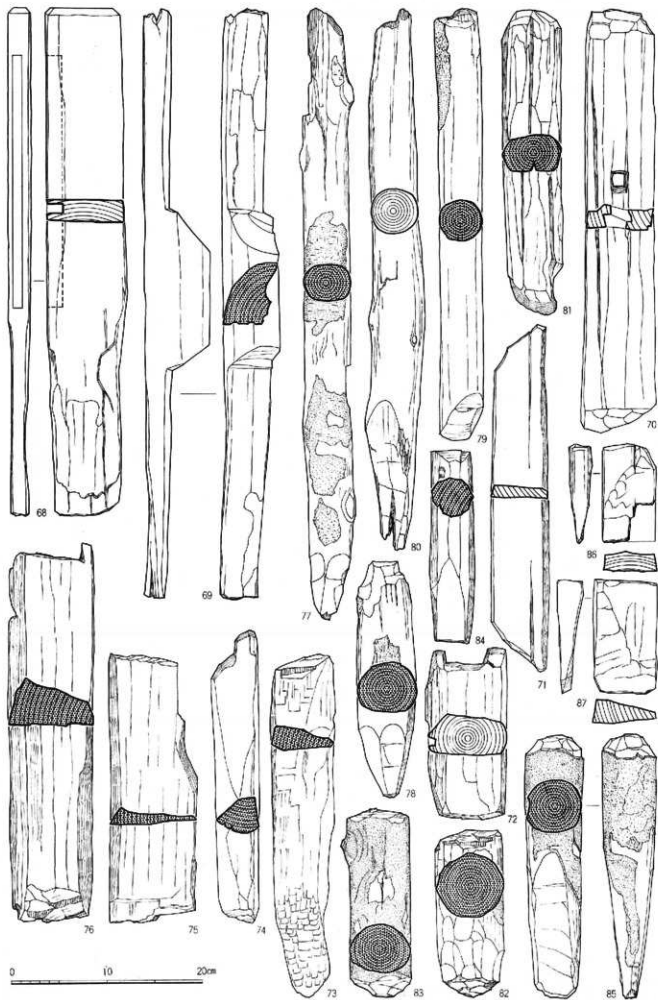
44



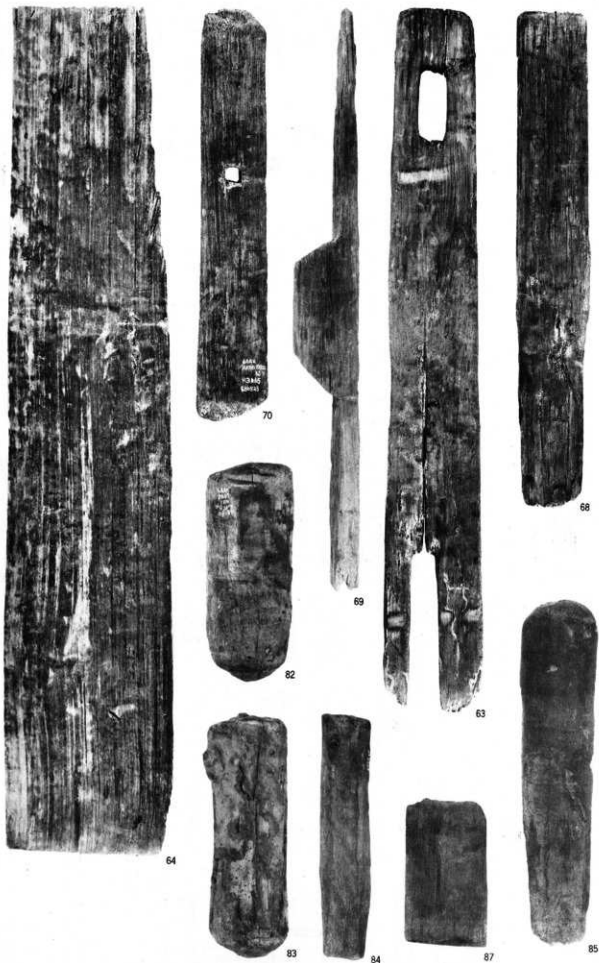
44'



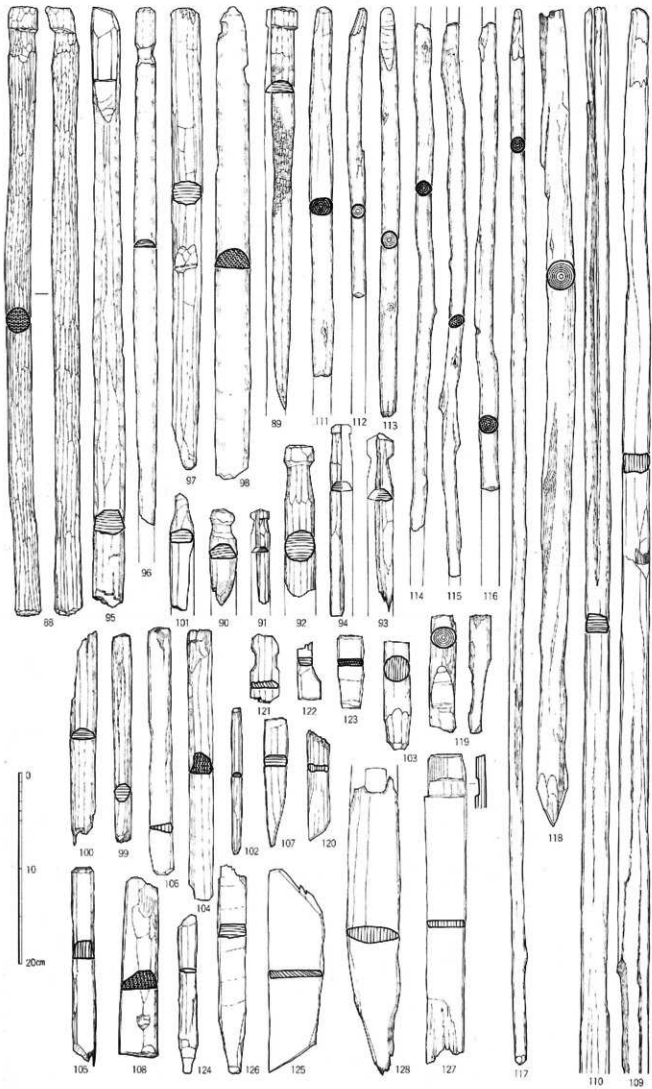




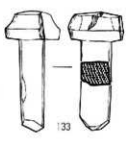
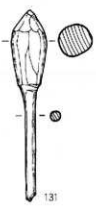
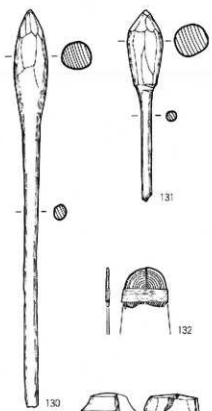
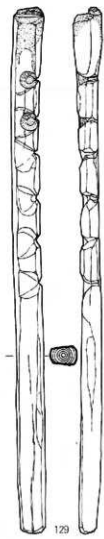


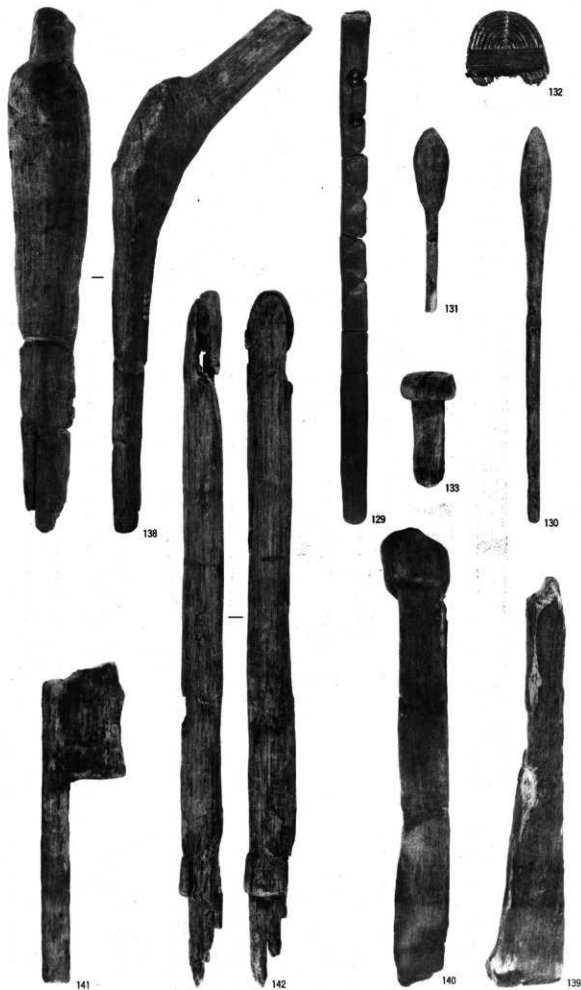


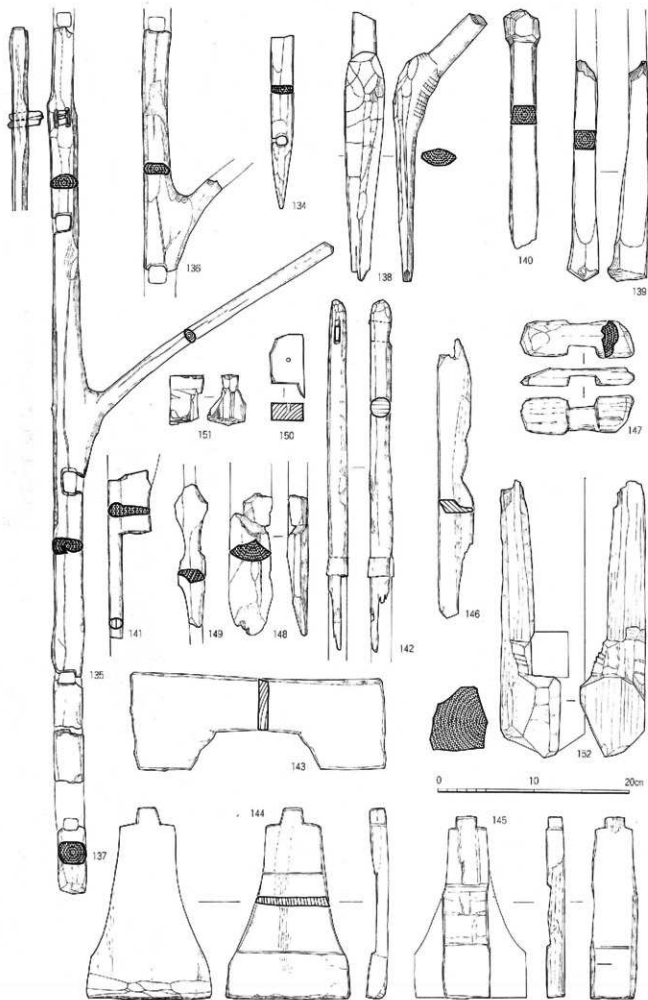
64 1:6, 63・68~70 1:4, 82~87 1:3

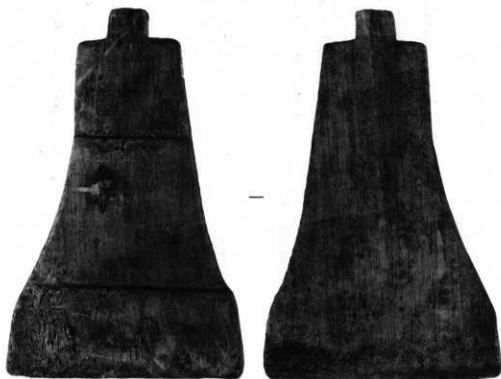
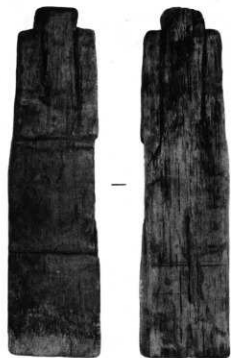
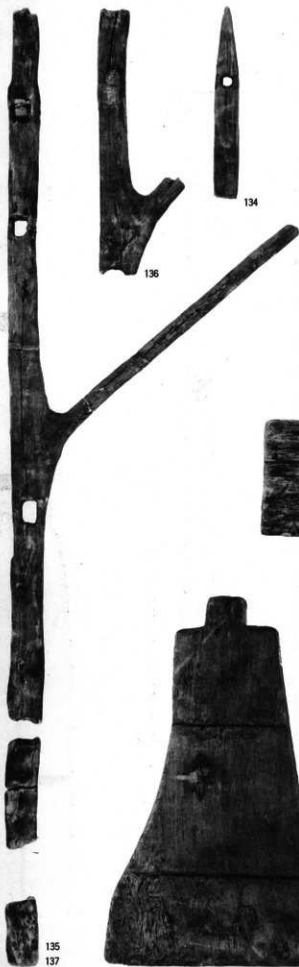


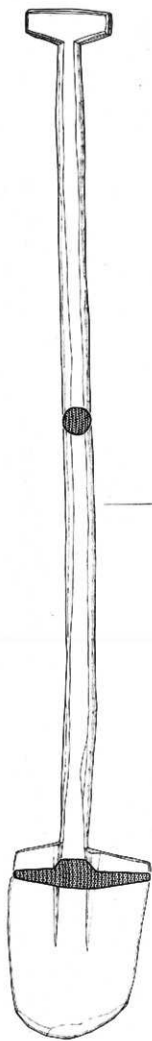




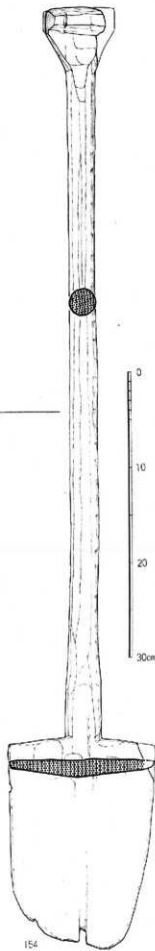




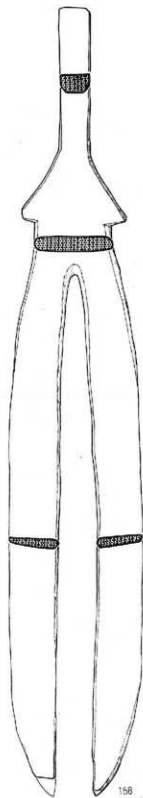




153



154



156





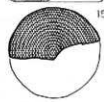
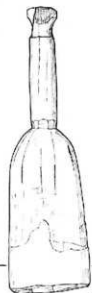
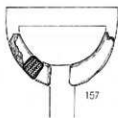
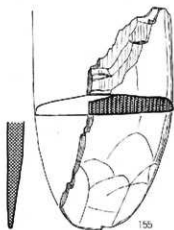
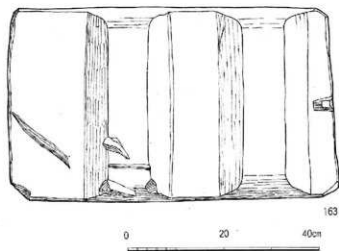
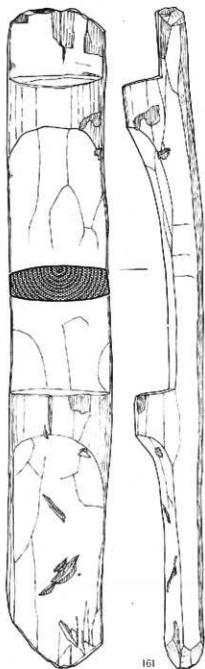
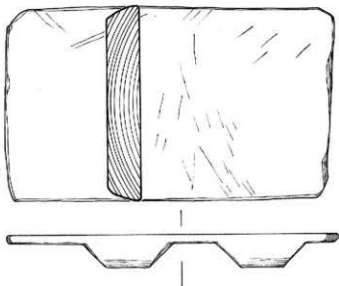
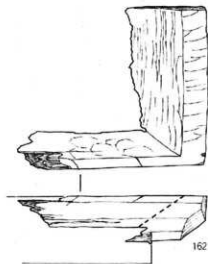
158



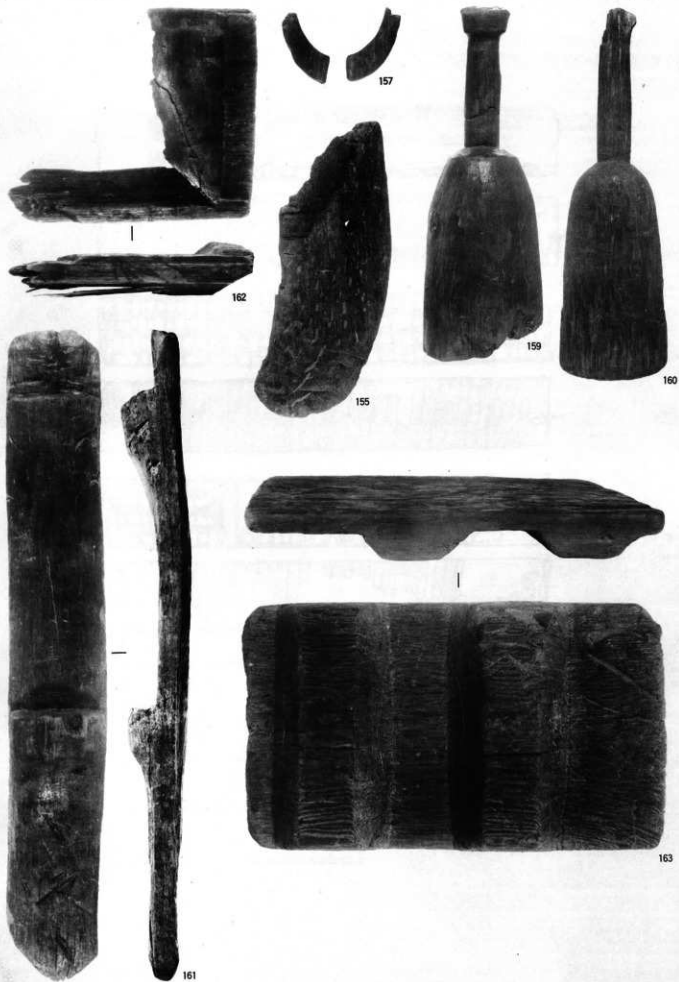
154



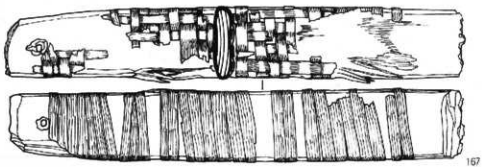
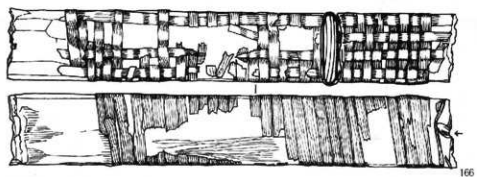
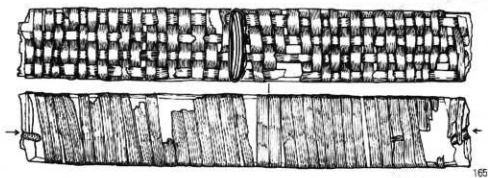
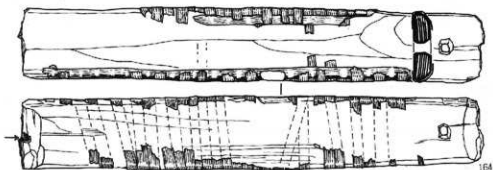
153



0 10 20cm



161 1:4, 163 1:6, その他 1:3





1:1

200



1:4

177

172



165



164



167



166



1:4

168

1:2

昭和 56 年 3 月 25 日 印刷  
昭和 56 年 3 月 31 日 発行

奈良国立文化財研究所年報 第39冊

平城宮発掘調査報告 X

古墳時代 I

著作権  
所有者 奈良国立文化財研究所

発行者 奈良国立文化財研究所

印刷者 真 陽 社

